

# 或る女

(後編)

有島武郎

青空文庫



どこかから菊の香がかすかに通<sup>かよ</sup>つて来たように思つて葉子<sup>ようこ</sup>は快  
い眠りから目をさました。自分のそばには、倉地<sup>くらち</sup>が頭からすつぽ  
りとふとんをかぶつて、いびきも立てずに熟睡していた。料理屋  
を兼ねた旅館のに似合<sup>あ</sup>わしい華手<sup>はで</sup>な縮緬<sup>ちりめん</sup>の夜具の上にはもうだ  
いぶ高くなつたらしい秋の日の光が障子<sup>しょうじ</sup>越しにさしていた。葉  
子は往復一か月の余を船に乗り続けていたので、船脚<sup>ふなあし</sup>の揺<sup>ゆ</sup>らめ  
きのなごりが残<sup>のこ</sup>っていて、からだ<sup>み</sup>がふらりふらりと揺れるような  
感じを失<sup>う</sup>つてはいなかつたが、広い畳<sup>たたみ</sup>の間に大きな軟<sup>やわ</sup>らかい夜具

をのべて、五体を思うまま延ばして、一晚ゆつくりと眠り通したその心地こころちよさは格別だった。仰向けになつて、寒からぬ程度に暖まつた空気の中に両手を二の腕までむき出しにして、軟らかい髪の毛に快い触覚を感じながら、何を思うともなく天井の木目もくめを見やつてゐるのも、珍しい事のように快かった。

やや小半時こはんときもそうしたままでいると、帳場でぼんぼん時計が九時を打った。三階にいるのだけれどもその音はほがらにかわいた空気を伝つて葉子の部屋へやまで響いて来た。と、倉地がいきなり夜具をはねのけて床の上に上体を立てて目をこすつた。

「九時だな今打つたのは」

と陸で聞くとおかしいほど大きな塩がれ声でいった。どれほど

熟睡していても、時間には鋭敏な船員らしい倉地の様子がなんの事もなく葉子をほほえました。

倉地が立つと、葉子も床を出た。そしてそのへんを片づけたり、煙草たばこを吸ったりしている間に（葉子は船の中で煙草を吸う事を覚えてしまったのだった）倉地は手早く顔を洗って部屋へやに帰って来た。そして制服に着かえ始めた。葉子はいそいそとそれを手伝った。倉地特有な西洋風ふうに甘ったるいような一種のにおいがそのからだにも服にもまつわっていた。それが不思議にいつでも葉子の心をときめかした。

「もう飯めしを食つとる暇はない。またしばらく忙せわしいで木こつ葉はみじんだ。今夜はおそいかもしれんよ。おれたちには天長節てんちようせつも何

もあつたもんじやない」

そういわれてみると葉子はきようが天長節なのを思い出した。葉子の心はなおなお寛潤かんかつになつた。

倉地が部屋を出ると葉子は縁側に出て手欄てすりから下をのぞいて見た。両側に桜並み木のずっとならんだ紅葉坂もみじがは急勾配こうばいをなして海岸のほうに傾いている、そこを倉地の紺羅紗こんらしやの姿が勢いよく歩いて行くのが見えた。半分がた散り尽くした桜の葉は真紅しんくに紅葉して、軒並みに掲げられた日章旗が、風のない空気の中にあざやかにならんでいた。その間に英国の国旗が一本まじってながめられるのも開港場らしい風情ふぜいを添えていた。

遠く海のほうを見ると税関の棧橋もやに繋がれた四艘そうほどの汽船の

中に、葉子が乗って帰った絵島丸えしまるもまじっていた。まつさおに澄みわたった海に対してきよようの祭日を祝賀するために檣マストから檣にかけてわたされた小旗こぼたがおもちやのようにながめられた。

葉子は長い航海の始終しじゆうを一場の夢のように思いやった。その長旅の間に、自分の一身に起こった大きな変化も自分の事のようにではなかった。葉子は何がなしに希望に燃えた活いきいき々した心で手て欄すりを離れた。部屋には小ぎつぱりと身じたくをした女じよちゆう中が来て寝床をあげていた。一間半の大床けん おおとこの間に飾られた大花活はなけには、菊の花が一抱ひとかかえ分もいけられていて、空気が動きたびごとせんに仙人にん人じみた香を漂わした。その香をかぐと、ともするとまだ外国にいるのではないかと思われよう旅心が一気にくだけで、

自分はもう確かに日本の土の上にいるのだという事がしつかり思わされた。

「いいお日和ひよりね。今夜あたりは忙しんでしよう」

と葉子は朝飯の膳ぜんに向かいながら女中にいつてみた。

「はい今夜は御宴会が二つばかりございましてね。でも浜かたの方でも外務省の夜会にいらつしやる方もございますから、たんと込み合あいはいたしますまいけれども」

そう応こたえながら女中は、昨晚おそく着いて来た、ちよつと得えたい体の知れないこの美しい婦人の素すじょう性を探ろうとするように注意深い目をやった。葉子は葉子で「浜」という言葉などから、横浜という土地を形にして見るような気持ちをした。

短くなつてはいても、なんにもする事なしに一日を暮らすかと思えば、その秋の一日の長さが葉子にはひどく気になり出した。

明後日東京に帰るまでの間に、買い物でも見て歩きたいのだけでも、みやげもの土産物は木村が例の銀行切手をくずしてあり余るほど買って持たしてよこしたし、手もとには哀れなほどより金は残つていなかった。ちよつとでもじつとしていられない葉子は、日本で着ようとは思わなかつたので、西洋向きに注文した華手はですぎるよ  
うな綿入れに手を通しながら、とつ追いつ考えた。

「そうだ古藤ことうに電話でもかけてみてやろう」

葉子はこれはいい思案だと思つた。東京のほうで親類たちがどんな心持ちで自分を迎えようとしているか、古藤のような男に今

度の事がどう響いているだろうか、これは単に慰みばかりではない、知っておかなければならない大事な事だった。そう葉子は思った。そして女中を呼んで東京に電話をつなぐように頼んだ。

祭日であつたせいか電話は思いのほか早くつながつた。葉子は少しいたずらしい微笑を笑窪えくぼのはいるその美しい顔に軽く浮か

べながら、階段を足早に降りて行つた。今ごろになつてようやく床を離れたらしい男女の客がしどけないふうをして廊下のここかしこで葉子とすれ違つた。葉子はそれらの人々には目もくれずに帳場に行つて電話室に飛び込むとぴつしりと戸をしめてしまった。そして受話器を手取るが早いか、電話に口を寄せて、

「あなた義一さん？ あゝそう。義一さんそれは滑稽こっけいなのよ」

とひとりでにすらすらと喋ってしまつてわれながら葉子ははつと思つた。その時の浮き浮きした軽い心持ちからいうと、葉子にはそういうより以上に自然な言葉はなかつたのだけれども、それではあまりに自分というものを明白にさらけ出していたのに気が付いたのだ。古藤は案のじよう答え渋っているらしかった。とみには返事もしないで、ちゃんと聞こえているらしいのに、ただ「なんです？」と聞き返して来た。葉子にはすぐ東京の様子を飲み込んだように思つた。

「そんな事どうでもよござんすわ。あなたお丈夫でしたの」といつてみると「えゝ」とだけすげない返事が、機械を通してであるだけにことさらすげなく響いて来た。そして今度は古藤の

ほうから、

「木村……木村君はどうしています。あなた会ったんですか」とはつきり聞こえて来た。葉子はすかさず、

「はあ会いましてよ。相変わらず丈夫でいます。ありがとうございます。けれどもほんとうにかわいそうでしたの。義一さん……聞こえますか。明後日私東京に帰りますわ。もう叔母おばの所には行けませんからね、あすこには行きたくありませんから……あのね、透矢町すきやちようのね、双鶴館そうかくかん……つがいの鶴つる……そう、おわかりになつて? ……双鶴館に行きますから……あなた来てくだされる? ……でもぜひ聞いていただかなければならない事があるんですから……よくつて? ……そうぜひどうぞ。明々後しあきつて日の朝? ありがとうございます

つとお待ち申していただきますからぜひですよ」

葉子がそういつている間、古藤の言葉はしまいまで奥歯に物のはさまったように重かった。そしてややともすると葉子との会見を拒もうとする様子が見えた。もし葉子の銀のように澄んだ涼しい声が、古藤を選んで哀訴するらしく響かなかつたら、古藤は葉子のいう事を聞いてはいなかつたかもしれないと思われるほどだった。

朝から何事も忘れたように快かつた葉子の気持ちはこの電話一つのために妙にこじれてしまった。東京に帰れば今度こそはなかなか容易ならざる反抗が待ちうけているとは十二分に覚悟して、その備えをしておいたつもりではいたけれども、古藤の口うらか

ら考えてみると面とぶつかった実際は空想していたよりも重大であるのを思わずにはいられなかつた。葉子は電話室を出るとけさ始めて顔を合わせた内儀おかみに帳場格子ごうしの中から挨拶あいさつされて、部屋へやにも伺いに来ないでなれなれしく言葉をかけるその仕打ちにまで不快を感じながら、匆々そうそう三階に引き上げた。

それからもうほんとうになんにもする事がなかつた。ただ倉地の帰つて来るのばかりがいらいらするほど待ちに待たれた。品し  
川ながわだ台場だいま沖あたりで打ち出す祝砲がかすかに腹にこたえるように響いて、子供らは往来でそのころしきりにはやった南京花火なんきんはなびをぱちぱちと鳴らしていた。天気がいいので女中たちははしやぎぎつた冗談などを言い言いあらゆる部屋へやを明け放して、仰山ぎょうさんら

しくはたきや箒ほうきの音を立てた。そしてただ一人ひとりこの旅館では居残っているらしい葉子の部屋を掃除そうじせずに、いきなり縁側にぞうきんをかけた。それが出て行けがしの仕打ちのように葉子には思えば思われた。

「どこか掃除の済んだ部屋があるんでしょう。しばらくそこを貸してくださいな。そしてここもきれいにしてちょうだい。部屋の掃除もしないでぞうきんがけなぞしたってなんにもなりはしないわ」

と少し剣けんを持たせて行ってやると、けさ来たのとは違う、横浜生まれらしい、悪わるずれのした中年の女中は、始めて縁側から立ち上がって小めんどろそうに葉子を畳廊下一つを隔てた隣の部屋に

案内した。

けさまで客がいたらしく、掃除は済んでいたけれども、火鉢だの、炭取りだの、古い新聞だのが、部屋のすみにはまだ置いたままになっていた。あけ放した障子からかわいた暖かい光線が畳の表三分ほどまでさしこんでいる、そこに膝を横くずしにすわりながら、葉子は目を細めてまぶしい光線を避けつつ、自分の部屋を片づけている女中の気配に用心の気を配った。どんな所においても大事な金目なものをくだらないものと一緒にほうり出しておくのが葉子の癖だった。葉子はそこにいかにも伊達で寛濶な心を見せているようだったが、同時に下らない女中ずれが出来心でも起こしはしないかと思うと、細心に監視するのも忘れはしなかった。

こうして隣の部屋に気を配っていないながらも、葉子は部屋のすみ  
きちようめに折りたたんである新聞を見ると、日本に帰ってか  
らまだ新聞というものに目を通さなかつたのを思い出して、手に  
取り上げて見た。テレビン油のような香においがぶんぶんするのでそ  
れがきょうの新聞である事がすぐ察せられた。はたして第一面に  
は「聖寿万歳」と肉にくぶと太たに書かれた見出しの下に貴顕の肖像が掲  
げられてあつた。葉子は一か月の余も遠のいていた新聞紙を物珍  
しいものに思つてぎつと目をとおし始めた。

一面にはその年の六月に伊藤内閣いとうとうと交送してできた桂内閣かつらうに対  
していろいろな注文を提出した論文が掲げられて、海外通信には  
シナ領土内における日露にちろの経済的關係を説いたチリコフ伯の演説

の梗概こうがいなどが見えていた。二面には富とみぐち口くちという文学博士が「最近日本におけるいわゆる婦人の覚醒かくせい」という続き物の論文を載せていた。福田ふくだという女の社会主義者の事や、歌人として知られた与謝野晶子女史よさのあきこの事などの名が現われているのを葉子は注意した。しかし今の葉子にはそれが不思議に自分とはかけ離れた事のように見えた。

三面に來ると四号活字で書かれた木部孤※と驚かされてしまった。

○某大汽船会社船中の大怪事

事務長と婦人船客との道ならぬ恋——

船客は木部孤 の先妻

こういう大<sup>おおぎ</sup>業<sup>ぎょう</sup>な標題がまず葉子の目を小痛<sup>こいた</sup>く射つけた。

「本邦にて最も重要な位置にある某汽船会社の所有船〇〇丸の事務長は、先ごろ米国航路に勤務中、かつて木部孤<sup>こ</sup>に嫁<sup>か</sup>してほどもなく姿を晦<sup>くら</sup>ましたる莫<sup>ぼく</sup>連<sup>れん</sup>女某が一等船客として乗り込みいたるをそそのかし、その女を米国に上陸せしめずひそかに連れ歸りたる怪事<sup>おつと</sup>あり。しかも某女といえるは米国に先行せる婚約<sup>おつと</sup>の夫<sup>おつと</sup>まである身分のものなり。船客に対して最も重き責任<sup>に</sup>を担<sup>にな</sup>うべき事務長にかかる不埒<sup>ふらち</sup>の挙動ありしは、事務長一個の失態のみならず、その汽船会社の体面にも影響する由<sup>ゆ</sup>々しき大事なり。事の仔細<sup>しさい</sup>はもれなく本紙の探知したる所なれども、改<sup>かい</sup>悛<sup>しゆん</sup>の余地を与えんため、しばらく発表を見合わせおくべ

し。もしある期間を過ぎても、兩人の醜行改まる模様なき時は、本紙は容赦なく詳細の記事を掲げて畜生道ちくしやうどうに陥りたる二人ふたりを懲戒し、併せて汽船会社の責任を問う事とすべし。読者請う刮目かつもくしてその時を待て」

葉子は下くちびるをかみしめながらこの記事を読んだ。いったい何新聞だろうと、その時まで気にも留めないでいた第一面を繰り戻もどして見ると、麗々れいれいと「報正新報」と書してあった。それを知ると葉子の全身は怒りのために爪つめの先まで青白くなって、抑おさえつけても抑えつけてもぶるぶると震え出した。「報正新報」といえば田川たがわ法学博士の機関新聞だ。その新聞にこんな記事が現われるのは意外でもあり当然でもあった。田川夫人という女はどこま

で執念しゅうねんく卑しい女なのだろう。田川夫人からの通信に違いないのだ。「報正新報」はこの通信を受けると、報道の先鞭せんべんをつけ、しておくためと、読者の好奇心をあおるためとに、いち早くあれだけの記事を書いて、田川夫人からさらにくわしい消息の来るのを待っているのだろう。葉子は鋭くもこう推すいした。もしこれがほかの新聞であつたら、倉地の一身上の危機でもあるのだから、葉子はどんな秘密な運動をしても、この上の記事の発表はもみ消さなければならぬと胸を定めたに相違なかつたけれども、田川夫人が悪意をこめてさせている仕事だとして見ると、どの道書みちかずにはおくまいと思われた。郵船会社のほうで高圧的な交渉でもすればとにかく、そのほかには道がない。くれぐれも憎い女は田川夫

人だ……こういちずに思いめぐらすと葉子は船の中での屈辱を今さらにまざまざと心に浮かべた。

「お掃除ができました」

そう襖ふすま越こしにいいながらさつきさつきの女中は顔も見せずにさつきと階下したに降りて行ってしまった。葉子は結局それを気安い事にして、その新聞を持ったまま、自分の部屋へやに帰った。どこを掃除したのだと思われるような掃除のしかたで、はたきまでが違いちが棚だなの下におき忘られていた。過敏にきちょうめんできれいな好きな葉子はもうたまらなかつた。自分でできばきとそこいらを片づけて置いて、パラソルと手携てさげを取り上げるが否やその宿を出た。

往來に出るとその旅館の女中が四五人早じまいをして昼間ひるまの中

を野毛山のげやまの大神宮のほうにでも散歩に行くらしい後ろ姿を見た。

そそくさと朝の掃除を急いだ女中たちの心も葉子には読めた。葉子はその女たちを見送るとなんとという事なしにさびしく思った。

帯の間にはさんだままにしておいた新聞の切り抜きが胸を焼くようだった。葉子は歩き歩きそれを引き出して手携てさげにしまいか

えた。旅館は出たがどこに行こうというあてもなかった葉子はう

つむいて紅葉坂もみじざかをおりながら、さしもしないパラソルの石突き

で霜解しもどけけになった土を一足ひとあし一足突きさして歩いて行った。い

つのまにかじめじめした薄うすぎたない狭い通りに来たと思うと、は

しくなくもいつか古藤と一緒に上がった相模屋さがみやの前を通っているの

だった。「相模屋」と古めかしい字体で書いた置き行燈おあんどんの紙ま

でがその時のままですすけていた。葉子は見覚えられているのを恐れるように足早にその前を通りぬけた。

停車場前はすぐそこだった。もう十二時近い秋の日ははなやかに照り満ちて、思ったより数多い群衆が運河にかけ渡したいくつかの橋をにぎやかに往来していた。葉子は自分一人ひとりがみんなから振り向いて見られるように思いなした。それがあたりまえの時ならば、どれほど多くの人にじろじろと見られようとも度を失うような葉子ではなかったけれども、たった今いまましい新聞の記事を見た葉子ではあり、いかにも西洋じみた野暮やぼくさい綿わた入れを着ている葉子であつた。服装に塵ちりほどでも批点の打ちどころがあると気がひけてならない葉子としては、旅館を出て来たのが悲し

いほど後悔された。

葉子はとうとう税関波止場はとばの入り口まで来てしまった。その入り口の小さな煉瓦造りれんがの事務所には、年の若い監視補たちが二重金ぼたんの背広に、海軍帽をかぶって事務を取っていたが、そこに近づく葉子の様子を見ると、きのう上陸した時から葉子を見知っているかのように、その飛び放れて華手造りはでな姿に目を定めるらしかった。物好きなその人たちは早くも新聞の記事を見て問題となつている女が自分に違いないと目星をつけているのではあるまいかと葉子は何事につけても愚痴つぽくひげ目になる自分を見いだした。葉子はしかしそうしたふうに見つめられながらもそこを立ち去る事ができなかつた。もしや倉地が昼飯でも食べにあの

大きな五体を重々しく動かしながら船のほうから出て来はしないかと心待ちがされたからだ。

葉子はそろそろと海洋通りをグラウンド・ホテルのほうに歩いてみた。倉地が出て来れば、倉地のほうでも自分を見つかるだろうし、自分のほうでも後ろに目はないながら、出て来たのを感じてみせるという自信を持ちながら、後ろも振り向かずだんだん波止場から遠ざかった。海ぞいに立て連ねた石杭いしくいをつなぐ頑がんじ丈ような鉄鎖には、西洋人の子供たちが犢ことうしほどな洋犬やあまに付き添われて事もなげに遊び戯れていた。そして葉子を見ると心安こころや立すだてに無邪気にほほえんで見せたりした。小さなかわいい子供を見るとどんな時どんな場合でも、葉子は定子さだこを思い出して、胸

がしめつけられるようになって、すぐ涙ぐむのだった。この場合はことさらそうだった。見ていられないほどそれらの子供たちは悲しい姿に葉子の目に映った。葉子はそこから避けるように足を返してまた税関のほうに歩み近づいた。監視課の事務所の前を来たり往いったりする人数は絡らく繹えきとして絶えなかったが、その中に事務長らしい姿はさらに見えなかった。葉子は絵島丸まで行つて見る勇氣もなく、そこを幾度もあちこちして監視補たちの目にかかるのもうるさかったので、すぐすごと税関の表門を県庁のほうに引き返した。

その夕方倉地がほこりにまぶれ汗にまぶれて紅葉坂をすたすたと登って帰って来るまでも葉子は旅館しきいの鬨しきいをまたがずに桜の並み木の下などを徘徊はいかいして待つていた。さすがに十一月となると夕暮れを催した空は見る見る薄寒くなつて風さえ吹き出している。一日の行樂に遊び疲れたらしい人の群れにまじつてふきげんそうに顔をしかめた倉地は真まっ向こうに坂の頂上を見つめながら近づいて来た。それを見やると葉子は一時に力を回復したようになって、すぐ跳おどり出して来るいたずら心のままに、一本の桜の木を楯たてに倉地をやり過ごしておいて、後ろから静かに近づいて手と手とが触れ合わんばかりに押しならんだ。倉地はさすがに不意をくつてま

じまじと寒さのために少し涙ぐんで見える大きな涼しい葉子の目を見やりながら、「どこからわいて出たんだ」といわんばかりの顔つきをした。一つ船の中に朝となく夜となく一緒になつて寝起きしていたものを、きよう始めて半日の余も顔を見合わずに過ごして来たのが思った以上に物さびしく、同時にこんな所で思いもかけず出あつたが予想のほか満足であつたらしい倉地の顔つきを見て取ると、葉子は何もかも忘れてただらうれしかった。そのままつ黒によごれた手をいきなり引つつかんで熱い口びるでかみしめて<sup>いたわ</sup>労つてやりたいほどだった。しかし思いのままに寄り添う事すらできない<sup>だ</sup>大道であるのをどうしよう。葉子はその切ない<sup>せつ</sup>心を拗ねて<sup>す</sup>見せるよりほかなかつた。

「わたしもうあの宿屋には泊まりませんわ。人をばかにしているんですもの。あなたお帰りになるなら勝手にひとりでいらつしやい」

「どうして……」

といいながら倉地は当惑したように往来に立ち止まってしげしげと葉子を見なおすようにした。

「これじゃ（といってほこりにまみれた両手をひろげ襟えりくび頸を抜き出すように延ばして見せて渋い顔をしながら）どこにも行けやせんわな」

「だからあなたはお帰りなさいましといってるじゃありませんか」  
 そう冒まえ頭あたまをして葉子は倉地と押し並んでそろそろ歩きながら、

おかみ  
女将の仕打ちから、女中のふしだらまで尾鰭おひれをつけて讒訴いいつけて、  
早く双鶴館そうかくかんに移つて行きたいとせがみにせがんだ。倉地は何か  
思案するらしくそつぽを見い見い耳を傾けていたが、やがて旅館  
に近くなつたころもう一度立ち止まつて、

「きよう双鶴館あそこから電話で部屋へやの都合を知らしてよこす事になつ  
ていたがお前聞いたか……（葉子はそういういつけられながら今ま  
ですつかり忘れていたのを思い出して、少しくてれたように首を  
振つた）……ええわ、じゃ電報を打つてから先に行くがいい。わ  
しは荷物をして今夜あとから行くで」

そういわれてみると葉子はまた一人ひとりだけ先に行くのがいやでも  
あつた。といつて荷物の始末には二人ふたりのうちどちらか一人居残ら

ねばならない。

「どうせ二人一緒に汽車に乗るわけにも行くまい」

倉地がこういい足した時葉子は危うく、ではきよの「報正新報」を見たかといおうとするとところだったが、はっと思ひ返して喉のどの所で抑おさえてしまった。

「なんだ」

倉地は見かけのわりに恐ろしいほど敏びんし捷しょうに働く心で、顔にも現わさない葉子の躡ちゆうちよ躡ちよを見て取つたらしくこうなじるように尋ねたが、葉子がなんでもないと応こたえると、少しも拘こうでい泥でいせず、それ以上問い詰めようとはしなかつた。

どうしても旅館に帰るのがいやだったので、非常な物足らなさ

を感じながら、葉子はそのままそこから倉地に別れる事にした。倉地は力のこもった目で葉子をじつと見てちよつとうなずくとあとをも見ないでどんと旅館のほうに濶歩かっぱして行つた。葉子は残り惜しくその後ろ姿を見送っていたが、それになんという事もない軽い誇りを感じてかすかにほほえみながら、倉地が登つて来た坂道を一人ひとりで降りて行つた。

停車場に着いたころにはもう瓦斯ガスの灯ひがそこらにともっていた。葉子は知つた人にあうのを極端に恐れ避けながら、汽車の出るすぐ前まで停車場前の茶店の一間ひとまに隠れていて一等室に飛び乗つた。だだひろっ広いその客車には外務省の夜会に行くらしい三人の外国人が銘々、デコルテーを着飾つた婦人を介抱して乗っているだけだ

つた。いつものとおりその人たちは不思議に人をひきつける葉子の姿に目をそばだてた。けれども葉子はもう左手の小指を器用に折り曲げて、左の鬢びんのほつれ毛を美しくかき上げるあの嬌態しなをして見せる気はなくなっていた。室へやのすみに腰かけて、手携てさげとパラソルとを膝ひざに引きつけながら、たった一人その部屋へやの中にいるもののように鷹揚おうように構えていた。偶然顔を見合わせても、葉子は張りのあるその目を無邪氣に（ほんとうにそれは罪を知らない十六七の乙女おとめの目のように無邪氣だった）大きく見開いて相手の視線をはにかみもせず迎えるばかりだった。先方の人たちの年齢がどのくらいで容貌ようぼうがどんなふうだなどという事も葉子は少しも注意してはいなかった。その心の中にはただ倉地の姿ばかりが

いろいろな描かれたり消されたりしていた。

列車が新橋しんぼしに着くと葉子はしとやかに車を出したが、ちようどそこに、唐棧とうざんに角帯かくおびを締めた、箱丁はこやとでもいえはいえそうな、気のきいた若い者が電報を片手に持つて、目ざとく葉子に近づいた。それが双鶴館そうかくかんからの出迎えだった。

横浜にも増して見るものにつけて連想の群がり起こる光景、それから来る強い刺激……葉子は宿から回された人力車じんりきしゃの上から銀座通りぎんざの夜のありさまを見やりながら、危うく幾度も泣き出そうとした。定子の住む同じ土地に帰つて来たと思うだけでももう胸はわくわくした。愛子あいこも貞世さだよもどんな恐ろしい期待に震えながら自分の帰るのを待ちわびているだろう。あの叔父叔母おじおばがどんな

激しい言葉で自分をこの二人ふたりの妹に描いて見せているか。構うも  
 のか。なんとでもいうがいい。自分はどうあつても二人を自分の  
 手に取り戻もどしてみせる。こうと思ひ定めた上は指もささせはしな  
 いから見ているがいい。……ふと人力車おわりちようが尾張町のかどを左に  
 曲がると暗い細い通りになつた。葉子は目ざす旅館が近づいたの  
 を知つた。その旅館というのは、倉地が色ざたでなくひいきにし  
 ていた芸者がある財産家に落籍ひかされて開いた店だというので、倉  
 地からあらかじめかけ合つておいたのだつた。人力車がその店に  
 近づくに従つて葉子はその女将おかみというのにふとした懸念てきがを持ち始  
 めた。未知の女同志が出あう前に感ずる一種の軽い敵愾てきが心いしんが葉  
 子の心をしばらくは余の事柄ことから切り放した。葉子は車の中で

衣紋えもんを気にしたり、束髪そくはつの形を直したりした。

昔むかしの煉瓦れんが建てをそのまま改造したと思われる漆喰しつくい塗りの頑がんじ

丈ような、角地面かどの一構えに来て、煌々こうこうと明るい入り口の前に車

夫おとこが梶棒かじぼうを降ろすと、そこにはもう二三人の女の人たちが走り

出て待ち構えていた。葉子は裾前すそまえをかばいながら車から降りて、

そこに立ちならんだ人たちの中からすぐ女将おかみを見分ける事ができ

た。背だけが思いきつて低く、顔形も整つてはいないが、三十女

らしく分別ぶんべつの備わつた、きかん気らしい、垢ぬけあかのした人がそ

れに違いないと思つた。葉子は思い設けた以上の好意をすぐその

人に対して持つ事ができたので、ことさら快い親しみを持ち前の

愛嬌あいきように添えながら、挨拶あいさつをしようとする、その人は事も

なげにそれをさえぎつて、

「いずれ御挨拶は後ほど、さぞお寒うございましてしよう。お二階へどうぞ」

と、いつて自分から先に立つた。居合わせた女中たちは目はしをきかしていろいろと世話に立つた。入り口の突き当たりの壁には大きなぼんぼん時計が一つかかっているだけでなんにもなかった。その右手の頑丈な踏み心地のいい階子段をのぼりつめると、他の部屋から廊下で切り放されて、十六畳と八畳と六畳との部屋が鍵形に続いていた。塵一つすえずにきちんと掃除が届いていて、三か所に置かれた鉄びんから立つ湯気で部屋の中は軟らかく暖まっていた。

「お座敷へと申すところですが、御氣ごきさくにこちらでおくつろぎ  
 くださいまし……三間みまともとつてはございませうが」

そういうながら女将おかみは長火鉢ながひばちの置いてある六畳の間まへと案内  
 した。

そこにすわってひととおりの挨拶を言葉少なに済ますと、女将  
 は葉子の心を知り抜いているように、女中を連れて階下に降りて  
 行ってしまった。葉子はほんとうにしばらくなくなりとも一人ひとりになっ  
 てみたかったのだった。軽い暖かさを感じるままに重い縮緬ちりめんの  
 羽織はおりを脱ぎ捨てて、ありたけの懐中物を帯の間から取り出して見  
 ると、凝りがちな肩も、重苦しく感じた胸もすがすがしくなつて、  
 かなり強い疲れを一時に感じながら、猫板ねこいたの上に肘ひじを持たせて

居ずまいをくずしてもたれかかった。古びを帯びた蘆屋釜あしやがまから鳴りを立てて白く湯気の立つのも、きれいにかきならされた灰の中に、堅そうな桜炭の火が白い被衣かつぎの下でほんのりと赤らんでい  
るのも、精巧な用筆筒ようだんすのはめ込まれた一間けんの壁に続いた器用な三尺床に、白菊をさした唐津焼からつやきの釣つり花活はないけがあるのも、かすかにたきこめられた沈香じんこうのにおいも、目のつんだ杉すぎ 杵まさの天井板も、細ほつそりと磨みがきのかかった皮付きの柱も、葉子に取つては——重い、硬こわい、堅い船室からようやく解放されて来た葉子に取つてはなつかしくばかりながめられた。こここそは屈強の避難所へんやだというように葉子をつくづくあたりを見回した。そして部屋へやのすみにある生漆きうるしを塗った桑の広蓋ひろぶたを引き寄せて、それに手携てさ

げや懐中物を入れ終わると、飽く事もなくその縁ふちから底にかけての円味まるみを持った微妙な手ざわりを愛めで慈いつくしんだ。

場所がらとてそこからこの界隈かいわいに特有な楽器の声が聞こえて来た。天長節であるだけにきようはことさらそれがにぎやかなのかもしれない。戸外にはほくりやあずま下駄げたの音が少し冴さえて絶えずしていた。着飾きかぎった芸者たちがみがき上げた顔をびりびりするような夜寒よさむに惜なしげもなく伝法でんぽうにさらして、さすがに寒か気に足んきを早めながら、招よばれた所に繰り出して行くその様子が、まざまざと履はき物の音ものを聞いたばかりで葉子の想像には描かれるのだった。合い乗りらしい人力車のわだちの音も威勢よく響いて来た。葉子はもう一度これは屈強な避難所に来たものだと思った。

この界限かいわいでは葉子は眈まなじりを反かえして人から見られる事はあるまい。

珍あたらしくあつさりした、魚の鮮あたらしい夕食を済たますと葉子は風呂ふろを

つかつて、思い存分髪を洗たつた。足たしない船の中の淡水では洗つ

ても洗つてもねちねちと垢あかの取り切れなかつたものが、さわれば

手が切れるほどさばさばと油が抜けて、葉子は頭の中まで軽くな

るように思つた。そこに女将おかみも食事を終えて話相手になりに来た。

「たいへんお遅おそうございますこと、今夜のうちにお帰りになるで

しょうか」

そう女将おかみは葉子の思っている事を魁さきげにいった。「さあ」と葉

子もはつきりしない返事をしたが、小寒こさむくなつて来たので浴衣ゆかたを

着そでかえようとする、そこに袖そでだたみにしてある自分の着物につ

くづく愛想あいそが尽きてしまった。このへんの女中に対してもそんなしつっこいけばけばしい柄がらの着物は二度と着る気にはなれなかった。そうなると葉子はしやにむにそれがたまらなくなつて来るのだ。葉子はうんざりした様子をして自分の着物から女将おかみに目をやりながら、

「見てくださいこれを。この冬は米国にいるのだとばかり決めていたので、あんなものを作つてみたんですけれども、我慢にももう着ていられなくなりましたわ。後生ごしょう。あなたの所に何かふだん着ぎのあいたのでもないでしょうか」

「どうしてあなた。わたしはこれでござんすもの」

と女将おかみは 剽ひょう 軽きんにも気軽くちやんと立ち上がって自分の背た

けの低さを見せた。そうして立ったままではしばらく考えていたが、踊りで仕込み抜いたような手つきではたと膝ひざの上をたたいて、

「ようございます。わたし一つ倉地さんをびつくらさして上げますわ。わたしの妹分ぶんに当たるのに柄ぐらといい年格好ねがうといい、失礼ながらあなた様とそっくりなのがいますから、それを取り寄せてみましょう。あなた様は洗い髪かみでいらつしやるなり……いかが、わたしがすっかり仕立てて差し上げますわ」

この思い付きは葉子には強い誘惑だった。葉子は一も二もなく勇み立って承知した。

その晚十一時を過ぎたころに、まとめた荷物を人力車四台に積み乗せて、倉地が双鶴館そうかくかんに着いて来た。葉子は女将おかみの入れ知恵

でわざと玄関には出迎えなかつた。葉子はいたずら者らしくひとり笑いをしながら立たて膝ひざをしてみたが、それには自分ながら気がひけたので、右足を左の腿ももの上に積み乗せるようにしてその足先をとんびにしてすわつてみた。ちようどそこにかなり酔つたらしい様子で、倉地が女将おかみの案内も待たずしんずしんという足どりではいつて来た。葉子と顔を見合わした瞬間には部屋へやを間違えたと思つたらしく、少しあわてて身を引こうとしたが、すぐ櫛くし巻まきにして黒襟くろえりをかけたその女が葉子だったのに気が付くと、いつもの渋いように顔をくずして笑いながら、

「なんだばかをしくさつて」

とほざくようにいって、長火鉢ながひばちの向かい座にどつかとあぐら

をかいた。ついて来た女将は立つたまましばらく二人を見くらべていたが、

「ようよう……変てこなお内裏雛様」

と陽気にかけて声をして笑いこけるようにぺちやんとそこにすり込んだ。三人は声を立てて笑った。

と、女将は急にまじめに返つて倉地に向かい、

「こちらはきよの報正新報を……」

といいかけるのを、葉子はすばやく目でさえぎった。女将はあぶない土端場で踏みとどまった。倉地は酔眼を女将に向けながら、

「何」

と尻上りに問い返した。

「そう早耳を走らすとつんぼと間違えられますとさ」

と女将おかみは事もなげに受け流した。三人はまた声を立てて笑った。

倉地と女将との間に一別以来のうわさ話がしばらくの間取りかわされてから、今度は倉地がまじめになった。そして葉子に向かってぶつきらぼうに、

「お前もう寝ろ」

といった。葉子は倉地と女将とをならべて一目見たばかりで、ふたり二人の間の潔白なを見て取っていたし、自分が寝てあとの相談ふたりというても、今度の事件を上手じょうずにまとめようというについての相談だという事がのみ込めていたので、素直すなおに立って座をはずした。

中の十畳を隔てた十六畳に二人の寢床は取つてあつたが、二人の会話はおりおりかなりはつきりもれて来た。葉子は別に疑いをかけるというのではなかつたが、やはりじつと耳を傾けないではいられなかつた。

何かの話のついでに入用な事が起こつたのだらう、倉地はしきりに身のまわりを探つて、何かを取り出そうとしている様子だつたが、「あいつの手携てさげに入れたかしらん」という声がしたので葉子ははつと思つた。あれには「報正新報」の切り抜きが入れてあるのだ。もう飛び出して行つてもおそいと思つて葉子は断念していた。やがてはたして二人は切り抜きを見つけ出した様子だつた。

「なんだあいつも知つとつたのか」

思わず少し高くなつた倉地の声がこう聞こえた。

「道理でさつき私がこの事をいいかけるとあの方が目かたで留めたんですよ。やはり先方あちらでもあなたに知らせまいとして。いじらしいじゃありませんか」

そういう女将の声もした。そして二人はしばらく黙っていた。

葉子は寢床を出てその場に行こうかとも思った。しかし今夜は二人に任せておくほうがいいと思ひ返してふとんを耳までかぶつた。そしてだいぶ夜がふけてから倉地が寝に来るまで快い安眠に前後を忘れていた。

## 二四

その次の朝女将と話をしたり、呉服屋を呼んだりしたので、日  
がかなり高くなるまで宿にいた葉子は、いやいやながら例のけば  
けばしい綿入れを着て、羽織はおりだけは女将が借りてくれた、妹分と  
いう人の烏羽黒うばくろの縮緬ちりめんの紋付きにして旅館を出た。倉地は昨夜  
の夜よふかしにも係わらずその朝早く横浜のほうに出かけたあとだ  
った。きょうも空は菊日きくひ和びよりとでもいう美しい晴れかたをしていた。  
葉子はわざと宿で車を頼んでもらわずに、煉瓦れんが通りに出てから  
きれいそうな辻つじ待まちちを傭やとつてそれに乗った。そして池いけの端はたのほう  
に車を急がせた。定子を目の前に置いて、その小さな手をなでた

り、絹糸のような髪の毛をもてあそぶ事を思うと葉子の胸はわれにもなくただわくわくとせき込んで来た。眼鏡橋めがねばしを渡つてから突き当たりの大時計は見えながらなかなかそこまで車が行かないのをもどかしく思った。膝ひざの上に乗せた土産みやげのおもちやや小さな帽子などをやきもきしながらひねり回したり、膝掛ひざかけの厚い地じをぎゅつと握り締めたりして、はやる心を押ししずめようとしてみるけれどもそれをどうする事もできなかつた。車がようやく池の端に出ると葉子は右、左、と細い道筋の角かどかど々々でさしずした。そして岩崎いわさきの屋敷裏にあたる小さな横町の曲がりかどで車くるまを乗り捨てた。

一か月の間あいだ来ないだけなのだけれども、葉子にはそれが一年に

も二年にも思われたので、その界限かいわいが少しも変化しないで元のとおりなのがかえつて不思議なようだった。じめじめした小溝こみぞに沿うて根ぎわの腐れた黒板塀くろいたべいの立つてる小さな寺の境内けいだいを突つ切つて裏に回ると、寺の貸し地面にぽつり立つた一戸建こだての小家が乳母うばの住む所だ。没義道もぎどうに頭を切り取られた高野槇こうやまきが二本旧もとの姿で台所前に立つている、その二本に干し竿ほざおを渡して小さな襦袢じゆばんや、まる洗いにした胴着どうぎが暖かい日の光を受けてぶら下がっているのを見ると葉子はもうたまらなくなった。涙がぼろぼろとたわいもなく流れ落ちた。家の中では定子の声がしなかった。葉子は気を落ち着けるために案内を求めずに入り口に立つたまま、そつと垣根かきねから庭をのぞいて見ると、日あたりのいい縁側に定子

がたつた一人、葉子にはしごき帯を長く結んだ後ろ姿を見せて、  
 一心不乱にせつせと少しばかりのこわれおもちやをいじくり回し  
 ていた。何事にまれ真剣な様子を見せつけられると、——わき目  
 もふらず畑を耕す農夫、踏み切りに立って子を背負ったまま旗を  
 かぎす女房、汗をしとどにたらしながら坂道に荷車を押す出<sup>と</sup>  
 稼ぎの夫婦——わけもなく涙につまされる葉子は、定子のそう  
 した姿を一目見たばかりで、人間力ではどうする事もできない悲  
 しい出来事にでも出あったように、しみじみとさびしい心持ちに  
 なってしまった。

「定ちゃん」

涙を声にしたように葉子は思わず呼んだ。定子がびっくりして

後ろを振り向いた時には、葉子は戸をあけて入り口を駆け上がった。定子のそばにすり寄っていた。父に似たのだろう痛々しいほどきやしや華車作りな定子は、どこにどうしてしまったのか、声も姿も消え果てた自分の母が突然そば近くに現われたのに気を奪われた様子で、とみには声も出さずに驚いて葉子を見守った。

「定さあちゃんママだよ。よく丈夫でしたね。そしてよく一人でおとなにして……」

もう声が続かなかった。

「ママちゃん」

そう突然大きな声でいって定子は立ち上がりざま台所のほうに駆け行って行った。

「婆ばあやママちゃんが来たのよ」

という声がした。

「え！」

と驚くらしい婆ばあやの声が裏庭から聞こえた。と、あわてたように台所を上がって、定子を横抱きにした婆ばあやが、かぶっていた手ぬぐいを頭つむりからはずしながらころがり込むようにして座敷にはいつて来た。二人は向き合ってすわると両方とも涙ぐみながら無言で頭を下げた。

「ちよつと定ちゃんをこっちにお貸し」

しばらくしてから葉子は定子を婆ばあやの膝ひざから受け取って自分の

ふところに抱きしめた。

「お嬢さま……私にはもう何がなんだかちつともわかりませんが、私はただもうくやしゆうございます。……どうしてこう早くお歸りになったんでございますか……皆様のおつしやる事を伺つているとあんまり業腹ごうはらでございますから……もう私は耳をふさいでおります。あなたから伺つたところがどうせこう年を取りますと腑ふに落ちる氣づかいはございません。でもまあおからだがどうかと思つてお案じ申しておりますが、御丈夫で何よりでございますました……何しろ定子様がおかわいそうで……」

葉子におぼれきつた婆やの口からさもくやしそうにこうした言葉がつぶやかれるのを、葉子はさびしい心持ちで聞かねばならなかつた。耄碌もうろくしたと自分ではいいながら、若い時に亭主ていしゆに死

に別れて立派に後家ごけを通して後ろ指一本さされなかつた昔むかし氣質かたぎのしつかり者だけに、親類たちの陰口やうわさで聞いた葉子の乱行にはあきれ果てていながら、この世でのただ一人ひとりの秘蔵物として葉子の頭から足の先までも自分の誇りにしている婆せつやの切ない心持ちは、ひしひしと葉子にも通じるのだった。婆やと定子……こんな純粋な愛情の中に取り囲まれて、落ち着いた、しとやかな、そして安穩な一生を過ごすのも、葉子は望ましいと思わないではなかつた。ことに婆やと定子とを目の前に置いて、つつまじやかな過不足のない生活をながめると、葉子の心は知らず知らずなじんで行くのを覚えた。

しかし同時に倉地の事をちよつとでも思うと葉子の血は一時に

わき立った。平穩な、その代わり死んだも同然な一生がなんだ。純粹な、その代わり冷えもせず熱しもしない愛情がなんだ。生きる以上は生きてるらしく生きないでどうしよう。愛する以上は命と取りかえっこをするくらいに愛せずにはいられない。そうした衝動が自分でもどうする事もできない強い感情になって、葉子の心を本能的に煽あおぎ立てるのだった。この奇怪な二つの矛盾が葉子の心の中には平気で両立しようとしていた。葉子は眼前の境界でその二つの矛盾を割合に困難もなく使い分ける不思議な心の広さを持つていた。ある時には極端に涙もろく、ある時には極端に残虐だった。まるで二人ふたりの人が一つの肉体に宿っているかと自分ながら疑うような事もあった。それが時にはいまいましかった、時

には誇らしくもあつた。

「定さだちやま。ようございましたね、ママちゃんが早くお帰りになつて。お立ちになつてからでもお聞き分けよくママのマの字もおつしやらなかつたんですけれども、どうかするとこうぼんやり考えてでもいらつしやるようなのがおかawaiiそうで、一時はおからだでも悪くなりはないかと思うほどでした。こんなでもなかなか心は働いていらつしやるんですからねえ」

と婆やは、葉子の膝ひざの上に巢食うように抱かれて、黙つたまま、澄んだひとみで母の顔を下からのぞくようにしている定子と葉子とを見くらべながら、述懐めいた事をいった。葉子は自分の頬ほおを、暖かい桃の膚のように生毛うぶげの生えた定子の頬ほおにすりつけながら、

それを聞いた。

「お前のその氣象でわからないとおいいなら、くどくどいったところかむだかもしれないから、今度の事については私なんにも話すまいが、家の親類たちのいう事なんぞはきつと気にしないでおくれよ。今度の船には飛んでもない一人の奥さんが乗り合わしていてね、その人がちよつとした気まぐれからある事ない事取りまぜてこつちにいつてよこしたので、事あれかしと待ち構えていた人たちの耳にはいったんだから、これから先だつてどんなひどい事をいわれるかしたもんじやないんだよ。お前も知つてのとおり私は生まれ落ちるとからつむじ曲がりじやあつたけれども、あんなに周囲まわりからこづき回されさえしなければこんなになりはしな

かったのだよ。それはだれよりもお前が知ってておくれだわね。これからだって私は私なりに押し通すよ。だれがなんといったって構うもんですか。そのつもりでお前も私を見ていておくれ。広い世の中に私がどんな失策しくじりをしでかしても、心から思いやってくれるのはほんとうにお前だけだわ。……今度からは私もちよいちよい来るだろうけれども、この上ともこの子を頼みますよ。ね、定ちゃんさあ。よく婆ばあやのいう事を聞いていい子になってちようだよ。ママちゃんはここにいる時でもない時でも、いつでもあなたを大事に大事に思ってるんだからね。……さ、もうこんなむずかしいお話はよしてお昼のおしたくでもしましょうね。きようはママちゃんさあがおいしいごちそうをこしらえて上げるから定ちゃん

も手伝いしてちようだいね」

そういつて葉子は気軽そうに立ち上がって台所のほうに定子と連れだった。婆やも立ち上がりはしたがその顔は妙に冴さえなかつた。そして台所で働きながらややともすると内ないしよ所で鼻をすすつていた。

そこには葉山で木部孤※喜んでしまつて、小さな手足をまめまめしく働かしながら、「はいはい」といつて庖ほうちよう丁をあつちに運んだり、皿さらをこつちに運んだりした。三人は楽しく昼飯の卓についた。そして夕方まで水入らずにゆつくり暮らした。

その夜は妹たちが学校から来るはずになつていたので葉子は婆ばあやの勧める晩飯も断わつて夕方その家を出た。入り口の所につく

ねんと立つて姿やに両肩をささえられながら姿の消えるまで葉子を見送った定子の姿がいつまでもいつまでも葉子の心から離れなかつた。夕闇ゆうやみにまぎれた幌ほろの中で葉子は幾度かハンケチを目にあてた。

宿に着くころには葉子の心持ちは変わっていた。玄関にはいつて見ると、女学校でなければ履はかれないような安下駄げたのきたなくなつたのが、お客や女中たちの気取つた履はき物ものの中にまじつて脱いであるのを見て、もう妹たちが来て待っているのを知つた。さつそくに出迎えに出た女将おかみに、今夜は倉地が帰つて来たたら他所よその部屋へやで寝るように用意をしておいてもらいたいと頼んで、静しず々しずと二階へ上がつて行つた。

ふすま

襖をあけて見ると二人の姉妹はびったりとくつつき合つて泣いていた。人の足音を姉のそれだとは充分に知りながら、愛子のほうは泣き顔を見せるのがあまりが悪いふうで、振り向きもせず

ひとしお

一 入うなだれてしまったが、貞世のほうは葉子の姿を一目見るなり、はねるように立ち上がつて激しく泣きながら葉子のふところ

ろに飛びこんで来た。葉子も思わず飛び立つように貞世を迎えて、

ながひばち

長火鉢のかたわらの自分の座にすわると、貞世はその膝ひざに突つ

伏してすすり上げすすり上げ可憐かれんな背中に波を打たした。これほ

どまでに自分の帰りを待ちわびてもい、喜んでくれるのかと思

うと、骨こつにく肉の愛着からも、妹だけは少なくとも自分の掌握の中

にあるとの満足からも、葉子はこの上なくうれしかった。しかし

火鉢ひばちからはるか離れた向こう側に、うやうやしく居ずまいを正ただして、愛子がひそひそと泣きながら、規則正しくおじぎをするのを見ると葉子はすぐ癩しやくにさわった。どうして自分はこの妹に対して優しくする事ができないのだろうとは思いつつも、葉子は愛子の所作しよさを見ると一々気にさわらないではいられないのだ。葉子の目は意地わるく剣けんを持って冷ややかに小柄で堅かたぶと肥りな愛子を激しく見すえた。

「会いたてからつけつけいうのもなんだけれども、なんですねえそのおじぎのしかたは、他人行儀らしい。もつと打ち解けてくれたっていいじゃないの」

というとき愛子は当惑したように黙ったまま目を上げて葉子を見

た。その目はしかし恐れても恨んでもいるらしくはなかった。小羊のような、まつ毛の長い、形のいい大きな目が、涙に美しくぬれて夕月のようにぼっかりとならんでいた。悲しい目つきのようだけれども、悲しいというのでもない。多恨な目だ。多情な目でさえあるかもしれない。そう皮肉な批評家らしく葉子は愛子の目を見て不快に思った。大多数の男はあんな目で見られると、この上なく詩的な靈的な一瞥いちべつを受け取ったようにも思うのだろう。そんな事さえ素早く考えの中につけ加えた。貞世が広い帯をして来ているのに、愛子が少し古びた袴はかまをはいているのさえさげすまされた。

「そんな事はどうでもようござんすわ。さ、お夕飯にしましょう

ね」

葉子はやがて自分の妄念もうねんをかき払うようにこういつて、女中を呼んだ。

貞世は寵児ペットらしくすつかりはしやぎきつていた。二人ふたりが古藤につれられて始めて田島たじまの塾じゆくに行った時の様子から、田島先生が非常に二人ふたりをかわいがつてくれる事から、部屋へやの事、食物の事、さすがに女の子らしく細かい事まで自分一人ひとりの興に乗じて談かたり続けた。愛子も言葉少なに要領を得た口をきいた。

「古藤さんが時々来てくださるの？」

と聞いてみると、貞世は不平らしく、

「いゝえ、ちつとも」

「ではお手紙は？」

「来てよ、ねえ愛ねえさま。二人の所に同じくらいずつ来ますわ」と、愛子は控え目らしくほほえみながら上目越うわめぐしに貞世を見て、

「貞さあちゃんのように余計来るくせに」

となんでもない事で争ったりした。愛子は姉に向かつて、

「塾じゅくに入れてくださると古藤さんが私たちに、もうこれ以上私の上で上げる事はないと思うから、用がなければ来ません。その代わり用があつたらいつでもそういうっておよこしなさいとおっしゃったきりいらつしやいませんのよ。そうしてこちらでも古藤さんにお願ねがいするような用はなんにもないんですもの」

といった。葉子はそれを聞いてほほえみながら古藤が二人を塾

につれて行った時の様子を想像してみた。例のようにどここの玄關番かと思われる風体ふうていをして、髪を刈る時のほか剃すらない顎あごひげを一二分ぶほども延ばして、頑がんじよう丈ようぼうな容貌ようぼうや体格に不似合いなはにかんだ口つきで、田島という、男のような女学者と話をしている様子が見えるようだった。

しばらくそんな表面的なうわさ話などに時を過ごしていたが、いつまでもそうはしていられない事を葉子は知っていた。この年齢しの違ふたりった二人の妹に、どっちにも堪たんねん念ねんの行くように今の自分の立場を話して聞かせて、悪い結果をその幼い心に残さないようにしむけるのはさすがに容易な事ではなかった。葉子は先刻からしきりにそれを案じていたのだ。

「これでも召し上がれ」

食事が済んでから葉子は米国から持って来たキャンデーを二人の前に置いて、自分は煙草たばこを吸った。貞世は目を丸くして姉のする事を見やっていた。

「ねえさまそんなもの吸っていいの？」

と会釈なく尋ねた。愛子も不思議そうな顔をしていた。

「えゝこんな悪い癖がついてしまったの。けれどもねえさんにはあなた方がたの考えてもみられないような心配な事や困る事があるものだから、つい憂うさ晴らしにこんな事も覚えてしまったの。今夜はあなた方がたにわかるようにねえさんが話して上げてみるから、よく聞いてちょうだいよ」

倉地の胸に抱かれながら、酔いしれたようにその頑がんじょう丈じょうな、

日に焼けた、男性的な顔を見やる葉子の、乙女おとめというよりももつ

と子供らしい様子は、二人ふたりの妹を前に置いてきちんと居すまいを

正した葉子のどこにも見いだされなかつた。その姿は三十前後の、

充分分別のある、しつかりした一人ひとりの女性を思わせた。貞世もそ

ういう時の姉に対する手て心こころを心得こころていて、葉子から離れてまじ

めにすわり直した。こんな時うっかりその威厳を冒すような事ことで

もすると、貞世にでもだれにでも葉子は少しの容赦ゆるみもしなかつた。

しかし見た所はいかにも慇いんぎん慇ぎんに口を開いた。

「わたしが木村さんの所にお嫁に行くようになったのはよく知っ

てますね。米国に出かけるようになったのもそのためだったのだ

けれどもね、もともと木村さんは私のように一度先にお嫁入りした人をもらうような方かたではなかったんだしするから、ほんとうはわたしどうしても心は進まなかったんですよ。でも約束だからちやんと守って行くには行つたの。けれどもね先方むこうに着いてみるとわたしのからだの具合がどうもよくなくって上陸はとでもできなかつたからしかたなしにまた同じ船で帰るようになったの。木村さんはどこまでもわたしをお嫁にしてくださるつもりだから、わたしもその気ではいるのだけれども、病気ではしかたがないでしょう。それに恥ずかしい事を打ち明けるようだけれども、木村さんにもわたしにも有り余るようなお金がないものだから、行きも帰りもその船の事務長という大切な役目の方かたにお世話にならなけ

ればならなかったのよ。その方が御親切にもわたしをここまで連れて帰ってくださったばかりで、もう一度あなた方にもあう事ができたんだから、わたしはその倉地という方——倉はお倉の倉で、地は地球の地と書くの。三吉というお名前は貞ちゃんにもわかるでしょう——その倉地さんにはほんとうにお礼の申しようもないくらいなんですよ。愛さんなんかはその方の事で叔母さんなんぞからいろいろな事を聞かされて、ねえさんを疑っていやしくないかと思うけれども、それにはまたそれでめんどろなわけのある事なのだから、夢にも人のいう事なんぞをそのまま受け取ってもらっちゃ困りますよ。ねえさんを信じておくれ、ね、よござんすか。わたしはお嫁なんぞに行かないでもいい、あなた方とこうしてい

るほどうれしい事はないと思いますよ。木村さんのほうにお金でもできて、わたしの病気がなおりさえすれば結婚するようになるかもしれないけれども、それはいつの事ともわからないし、それまではわたしはこうしたままで、あなた方がたと一緒にどこかにお家を持って楽しく暮らしましょうね。いいだろう貞ちゃんさあ。もう寄宿なんぞにいらなくってもようござんすよ」

「おねえさまわたし寄宿では夜になるとほんとうは泣いてばかりいたのよ。愛ねえさんはよくお寝になってもわたしは小さいから悲しかったんですもの」

そう貞世は白状するようにいった。さつきまではいかにも楽しそうにいつていたその可憐かれんな同じ口びるから、こんな哀れな告白

を聞くと葉子は「ひとしお入しんみりした心持ちになった。

「わたしだつてもよ。貞ちゃんさあは宵よいの口だけくすくす泣いてもあとはよく寝ていたわ。ねえ様、私は今まで貞ちゃんさあにもいわないでいましたけれども……みんなが聞こえよがしにねえ様の事をかれこれいいますのに、たまに悪いと思つて貞ちゃんさあと叔母おばさんの所に行つたりなんぞすると、それはほんとうにひどい……ひどい事をおつしやるので、どつちに行つてもくやしゆうございましたわ。古藤さんだつてこのごろはお手紙さえくくださらないし……田島先生だけはわたしたち二人ふたりをかわいそうがつてくさいましたけれども……」

葉子の思いは胸の中で煮え返るようだった。

「もういい堪かんにん忍にんしてくださいよ。ねえさんがやはり至らなかつたんだから。おとうさんがいらつしやればお互いにこないやな目にはあわないんだろうけれども（こういう場合葉子はおくびにも母の名は出さなかつた）親のないわたしたちは肩身が狭いわね。まああなたがた方はそんなに泣いちやだめ。愛さんなんです。ねえあなたから先に立つて。ねえさんが帰つた以上はねえさんになんでも任して安心して勉強してくださいよ。そして世間の人を見返してやり」

葉子は自分の心持ちを憤ろしくいい張っているのに気がついた。いつのまにか自分までが激しく興奮きんぷんしていた。

火鉢ひばちの火はいつか灰になって、夜寒よさむがひそやかに三人の姉妹に

はいよつていた。もう少し睡ねむけ気を催して来た貞世は、泣いたあとの渋い目を手の甲でこすりながら、不思議そうに興奮した青白い姉の顔を見やつていた。愛子は瓦斯がすの灯ひに顔をそむけながらしくしくと泣き始めた。

葉子はもうそれを止めようとはしなかった。自分ですら声を出して泣いてみたいような衝動をつき返しつき返し水みぞ落おちの所に感じながら、火鉢の中を見入ったまま細かく震えていた。

生まれかわらなければ回復しようのないような自分の越かたし方行く末が絶望的にはつきりと葉子の心を寒く引き締めていた。

それでも三人が十六畳に床を敷いて寝てだいぶたつてから、横浜から帰つて来た倉地が廊下を隔てた隣へやの部屋に行くのを聞き知

ると、葉子はすぐ起きかえつてしばらく妹たちの寢息ねいきをうかがつていたが、二人がいかに無心に赤々とした頬ほおをしてよく寝入っているのを見窮めると、そつとどてらを引っかけながらその部屋を脱け出した。

## 二五

それから一日置いて次の日に古藤から九時ごろに来るがいいかと電話がかかって来た。葉子は十時すぎにしてくれと返事をさせた。古藤に会うには倉地が横浜に行ったあとがいいと思つたからだ。

東京に帰ってから叔母おばと五十川女史いそがわの所へは帰った事だけを知らせては置いたが、どつちからも訪問は元よりの事一言半句いちごんはんくの挨拶あいさつもなかつた。責めて来るなり慰めて来るなり、なんとかしそうなものだ。あまりといえば人を踏みつけにしたしわざだとは思つたけれども、葉子としては結句それがめんどうがなくなつていとも思つた。そんな人たちに会つていさくさ口をきくよりも、古藤と話しさえすればその口裏くちうらから東京の人たちの心持ちも大体はわかる。積極的な自分の態度はその上で決めてもおそくはないと思案した。

そうかくかん 双鶴館おかみの女将はほんとうに目から鼻に抜けるように落ち度なく、葉子の影身かげみになつて葉子のために尽くしてくれた。その後ろ

には倉地がいて、あのいかにも疎大らしく見えながら、人の気もつかないような綿密な所にまで気を配って、采配を振っているのはわかつていた。新聞記者などがどこをどうして探り出したか、始めのうちは押し強く葉子に面会を求めて来たのを、女将おかみが手ぎわよく追い払ったので、近づきこそはしなかつたが遠巻きにして葉子の挙動に注意している事などを、女将は眉まゆをひそめながら話して聞かせたりした。木部の恋人であつたという事がひどく記者たちの興味をひいたように見えた。葉子は新聞記者と聞くと、震え上がるほどいやな感じを受けた。小さい時分に女記者になろうなどと人にも口外した覚えがあるくせに、探訪などに来る人たちの事を考えるといちばん賤いやしい種類の人間のように思わないでは

いられなかつた。仙<sup>せんだい</sup>台<sup>だい</sup>で、新聞社の社長と親<sup>おや</sup>佐<sup>さ</sup>と葉子との間に起こつた事として不倫な捏<sup>ねつぞう</sup>造<sup>ぞう</sup>記事（葉子はその記事のうち、母に関しては何のへんまでが捏<sup>ねつぞう</sup>造<sup>ぞう</sup>であるか知らなかつた。少なくとも葉子に関しては捏<sup>ねつぞう</sup>造<sup>ぞう</sup>だつた）が掲載されたばかりでなく、母のいわゆる冤<sup>えんざい</sup>罪<sup>ざい</sup>は堂々と新聞紙上で雪<sup>すす</sup>がれたが、自分のほうとうそのままになつてしまつた、あの苦い経験などがますます葉子の考えを頑<sup>かたく</sup>なににした。葉子が「報正新報」の記事を見た時も、それほど田川夫人が自分を迫害しようとするなら、こちらもどこかの新聞を手に入れて田川夫人に致命傷を与えてやろうかという（道徳を米の飯と同様に見て生きていけるような田川夫人に、その点に傷を与えて顔出しができないようにするのは容易な事だと葉

子は思った) 企みたくらを自分ひとりで考えた時でも、あの記者というものを手なずけるまでに自分を墮落させたくないばかりにその目くろみ論見を思いとどまったほどだった。

その朝も倉地と葉子とは女将おかみを話相手に朝飯を食いながら新聞に出たあの奇怪な記事の話をして、葉子がとうにそれをちやんと知っていた事などを談かたり合いながら笑ったりした。

「忙しいにかまけて、あれはあのままにしておったが……一つはあまり短兵急にこつちから出しやばると足もとを見やがるで、…あれはなんとかせんとめんどうだて」

と倉地はがらつと箸はしを膳ぜんに捨てながら、葉子から女将に目をや

「そうですねともさ。下らない、あなた、あれであなたのお職しよくし掌ようにでもけちが付いたらほんとうにばかばかしゆうごさんすわ。報正新報社にならわたし御懇意の方も二人ふたりや三人はいらっしやるから、なんならわたしからそれとなくお話ししてみてもようございますわ。わたしはまたお二人とも今まであんまり平気でいらっしやるんで、もうなんとかお話がついたのだとばかり思つてましたの」

と女将は怜さかしそうな目に真味な色を見せてこういった。倉地は無頓着むとんじやくに「そうさな」といったきりだったが、葉子ふたりは二人の意見がほぼ一致したらしいのを見ると、いくら女将おかみが巧みに立ち回つてもそれをもみ消す事はできないといい出した。なぜといえは

それは田川夫人が何か葉子を深く意趣に思つてさせた事で、「報正新報」にそれが現われたわけは、その新聞が田川博士の機関新聞だからだと説明した。倉地は田川と新聞との關係を始めて知つたらしい様子で意外な顔つきをした。

「おれはまた興録こうろくのやつ……あいつはべらべらしたやつで、右左のはつきりしない油断のならぬ男だから、あいつの仕事かとも思つてみたが、なるほどそれにしては記事の出かたが少し早すぎるて」

そういつてやおら立ち上がりながら次の間に着かえに行つた。

女中が膳部ぜんぶを片づけ終わらぬうちに古藤が来たという案内があつた。

葉子はちよつと当惑した。あつらえておいた衣類がまだできないのと、着具合がよくつて、倉地からもしつくり似合うとほめられるので、その朝も芸者のちよいちよいち着らしい、黒くろじゆす縷子の襟えりの着いた、伝でんぼう法な棒ぼうじま縞の身幅みはばの狭い着物に、黒縷子と水色つた匹ちゆうやおび田の昼夜帯をしめて、どてらを引っかけていたばかりでなく、髪までやはり櫛くしま巻きにしていたのだつた。えゝ、いい構うものか、どうせ鼻をあかさせるならのつけからあかさせてやろう、そう思つて葉子はそのままの姿で古藤を待ち構えた。

昔のままの姿で、古藤は旅館というよりも料理屋といったふうの家の様子に少し鼻じろみながらはいつて来た。そうして飛び離ふうていれて風体ふうていの変わった葉子を見ると、なおさら勝手が違つて、こ

れがあの子なのかというように、驚きの色を隠し立てもせず、顔に現わしながら、じつとその姿を見た。

「まあ義一さんしばらく。お寒いのね。どうぞ火鉢ひばちによつてくだ

さいましな。ちよつと御免くださいよ」そういつて、葉子はあで

やかに上体だけを後ろにひねつて、広蓋ひろぶたから紋付きの羽織はおりを引

き出して、すわつたままでとらと着直した。なまめかしいにおい

がその動作につれてひそやかに部屋へやの中に動いた。葉子は自分の

服装がどう古藤に印象しているかなどを考えてもみないようだつ

た。十年も着慣れたふだん着ぎできのうも会つたばかりの弟のよう

に親しい人に向かうようなとりなしをした。古藤はとみには口も

きけないように思い惑っているらしかった。多少垢あかになつた薩さつま

摩<sup>が</sup>縞<sup>すり</sup>の着物を着て、観<sup>かん</sup>世<sup>ぜ</sup>撚<sup>より</sup>の羽織<sup>ひも</sup>紐<sup>ひも</sup>にも、きちんとはいた袴<sup>はかま</sup>にも、その人の氣質が明らかに書き記<sup>しる</sup>してあるようだった。

「こんなでたいへん変な所ですけれどもどうか気<sup>き</sup>楽<sup>らく</sup>になさってくださいまし。それでないとなんだか改<sup>か</sup>ま<sup>ま</sup>ってしまってお話<sup>わ</sup>がしにくくついていけませんから」

心置<sup>こ</sup>き<sup>こ</sup>ない、そして古藤を信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>している様子を巧みにもそれとなく気取<sup>け</sup>ら<sup>ど</sup>せるような葉子の態度はだんだん古藤の心を静めて行くらしかった。古藤は自分の長所も短所も無自覚でいるような、そのくせどこかに鋭い光のある目をあげてまじまじと葉子を見始めた。

「何より先にお礼。ありがとうございますございました妹たちを。おととい

二人でここに来てたいへん喜んでいましたわ」

「なんにもしやしない、ただ塾じゆくに連れて行つて上げただけです。

お丈夫ですか」

古藤はありのままをありのままにいった。そんな序曲的な会話を少し続けてから葉子はおもむろに探り知っておかなければならないような事柄ことがらに話題を向けて行つた。

「今度こんなひよんな事でわたしアメリカに上陸もせず帰つて来る事になつたんですが、ほんとうをおっしゃってくださいよ、あなたはいつたいわたしをどうお思いになつて」

葉子は火鉢ひばちの縁ふちに両肘ひじをついて、両手の指先を鼻の先に集めて組んだりほどこいたりしながら、古藤の顔に浮かび出るすべての意

味を読もうとした。

「えゝ、ほんとうをいみましょう」

そう決心するもののように古藤はいつてからひと膝乗り<sup>ひざ</sup>り出した。「この十二月に兵隊に行かなければならないものだから、それまでに研究室の仕事を片づくものだけは片づけて置こうと思ったので、何もかも打ち捨てていましたから、このあいだ横浜からあなたの電話を受けるまでは、あなたの帰って来られたのを知らないでいたんです。もつとも帰って来られるような話はどこかで聞いたようでしたが。そして何かそれには重大なわけがあるに違いないとは思っていましたが。ところがあなたの電話を切るとまもなく木村君の手紙が届いて来たんです。それはたぶん絵島丸より一

日か二日早く大<sup>たいほく</sup>北汽船会社の船が着いたはずだから、それが持つて来たんでしよう。ここに持つて来ましたが、それを見て僕は驚いてしまったんです。ずいぶん長い手紙だからあとで御覧になるなら置いて行きましょう。簡単にいうと（そういつて古藤はその手紙の必要な要点を心の中で整頓<sup>せいとん</sup>するらしくしばらく黙っていたが）木村君はあなたが帰るようになったのを非常に悲しんでいるようです。そしてあなたほど不幸な運命にもてあそばれる人はない。またあなたほど誤解を受ける人はない。だれもあなたの複雑な性格を見窮めて、その底にある尊い点を拾い上げる人がないから、いろいろなふうにあなたは誤解されている。あなたが帰るについては日本でも種々さまざまな風説が起こる事だろうけれ

ども、君だけはそれを信じてくれちや困る。それから……あなたは今でも僕の妻だ……病気に苦しめられながら、世の中の迫害を存分に受けなければならぬあわれむべき女だ。他人がなんといおうと君だけは僕を信じて……もしあなたを信ずることができなければ僕を信じて、あなたを妹だと思つてあなたのために戦つてくれ……ほんとうはもつと最大級の言葉が使つてあるのだけれども大体そんな事が書いてあつたんです。それで……」

「それで？」

葉子は目の前で、こんがらがった糸が静かにほごれて行くのを見つめるように、不思議な興味を感じながら、顔だけは打ち沈んでこよう促した。

「それでですね。僕はその手紙に書いてある事とあなたの電話の『滑稽こっけいだった』という言葉とをどう結び付けてみたらいいかわからなくなってしまうたんです。木村の手紙を見ない前でもあなたのあの電話の口調には……電話だったせいかまるでのんきな冗談口のようにしか聞こえなかつたものだから……ほんとうをいとかかなり不快を感じていた所だったので。思ったとおりをいまずから怒おこらないで聞いてください」

「何を怒おこりましょう。ようこそはつきりおっしゃってくださいね。あれはわたしもあとでほんとうにすまなかつたと思いましたのよ。木村が思うようにわたしは他人の誤解なんぞそんなに気にしてはいないの。小さい時から慣れっこになつてるんですもの。」

だから皆さんが勝手なあと推ずいりよう量りょうなどをしているのが少しは癩しやくにさわったけれども、滑稽こっけいに見えてしかたがなかったんですよ。そこにもって来て電話であなたのお声が聞こえたもんだから、飛び立つようにうれしくって思わずしらずあんな軽はずみな事をいってしまいましたの。木村から頼まれて私の世話を見てくださった倉地という事務長の方もそれはきさくな親切な人じやありませんけれども、船で始めて知り合いになった方かただから、お心安立こころやすだてなんぞはできないでしょう。あなたのお声がした時にはほんとうに敵の中から救い出されたように思ったんですもの……まあしかしそんな事は弁解するにも及びませんわ。それからどうなさつて？」

古藤は例の厚い理想の被かつぎの下から、深く隠された感情が時々きらきらとひらめくような目を、少し物もの情たるげに大きく見開いて葉子の顔をつれづれと見やった。初対面の時には人並みはずれて遠慮がちだったくせに、少し慣れて来ると人を見徹みとおそうとするように凝視するその目は、いつでも葉子に一種の不安を与えた。古藤の凝視にはずうずうしいという所は少しもなかった。また故意にそうするらしい様子も見えなかった。少し鈍と思われるほど世事せじにうとく、事物のほんとうの姿を見て取る方法に暗いながら、まっ正直に悪意なくそれをなし遂げようとするらしい目つきだった。古藤なんぞに自分の秘密がなんであばかれてたまるものかと多寡たかをくくりつつも、その物もの軟やわらかながらどどん人の心の中には

いり込もうとするような目つきにあうと、いつか秘密のどん底を誤たずつかまれそうな気がしてならなかった。そうなるにしてもしかしそれまでには古藤は長い間忍耐して待たなければならぬだろう、そう思つて葉子は一面小気味よくも思つた。

こんな目で古藤は、明らかな疑いを示しつつ葉子を見ながら、さらに語り続けた所によれば、古藤は木村の手紙を読んでから思案に余つて、その足ですぐ、まだ釘店くぎだなの家の留守番をしていた葉子の叔母おばの所を尋ねてその考えを尋ねてみようとしたところが、叔母は古藤の立場がどちらに同情を持つてゐるか知れないので、うっかりした事はいわれなれないと思つたか、何事も打ち明けずに、五十川いそがわ女史に尋ねてもらいたいと逃げを張つたらしい。古藤はや

むなくまた五十川女史を訪問した。女史とは築地つぎじのある教会堂の執事の部屋へやで会った。女史のいう所によると、十日ほど前に田川夫人の所から船中における葉子の不埒ふらちを詳細に知らしてよこした手紙が来て、自分としては葉子のひとり旅を保護し監督する事はとても力に及ばないから、船から上陸する時もなんの挨拶あいさつもせず別れてしまった。なんでもうわさで聞くと病気だといってまだ船に残っているそうだが、万一そのまま帰国するようにでもなったら、葉子と事務長との関係は自分たちが想像する以上に深くなっていると断定してもさしつかえない。せつかく依頼を受けてその責めを果たさなかつたのは誠にすまないが、自分たちの力では手に余るのだから推恕すいじよしていただきたくて書いてあった。で、

五十川女史は田川夫人がいいかげんな捏造ねつぞうなどする人でないのをよく知っているから、その手紙を重おもだつた親類たちに示して相談した結果、もし葉子が絵島丸で帰つて来たら、回復のできない罪を犯したものととして、木村に手紙をやって破約を断行させ、一面には葉子に対して親類一同は絶縁する申し合わせをしたという事を聞かされた。そう古藤は語つた。

「僕はぼくこんな事を聞かされて途方に暮れてしまいました。あなたはさつきから倉地というその事務長の事を平気で口に行っているが、こつちではその人が問題になつてゐるんです。きょうでも僕はぼくあなたにお会いするのがいいのか悪いのかさんざん迷いました。しかし約束ではあるし、あなたから聞いたらもつと事柄もはつきり

するかと思つて、思いきつて伺う事にしたんです。……あつちにしたつた一人ひとりいて五十川いそがわさんから恐ろしい手紙を受け取らなければならぬ木村君を僕は心から氣の毒に思ふんです。もしあなたが誤解の中いっぽうぐちにいるんなら聞かせてください。僕はこんな重大な事を一方口で判断したくはありませんから」

と話を結んで古藤は悲しいような表情をして葉子を見つめた。

小癩こしやくな事をいうもんだと葉子は心の中で思ったけれども、指先でもてあそびながら少し振り仰いだ顔はそのままに、あわれむような、からかうような色をかすかに浮かべて、

「え、それはお聞きくださればどんなにでもお話はしましようにも。けれども天からわたしを信じてくださらないならどれほ

ど口をすっぱくしてお話をしたつてむだね」

「お話を伺つてから信じられるものなら信じようとしているので  
す僕は」

「それはあなた<sup>がた</sup>方のなさる学問ならそれでようござんしようよ。  
けれども人情ずくの事はそんなものじゃありませんわ。木村に対  
してやましいことはいたしませんといったつてあなたがわたしを  
信じていてくださらなければ、それまでのものですし、倉地さん  
とはお友だちというだけですと誓つた所が、あなたが疑つていら  
つしやればなんの役にも立ちはしませんからね。……そうしたも  
んじやなくつて？」

「それじゃ五十川さんの言葉だけで僕にあなたを判断しろとおつ

しやるんですか」

「そうね。……それでもようございましょうよ。とにかくそれはわたくしが御相談を受ける事柄じゃありませんわ」

そういつてる葉子の顔は、言葉に似合わずどこまでも優しく親しげだった。古藤はさすがに<sup>さか</sup>怜しく、こうもつれて来た言葉をどこまでも追おうとせず黙ってしまった。そして「何事も明らかにしてしまおうがほんとうはいいのだがな」といいたげな目つきで、格別<sup>しいた</sup>虐げようとするでもなく、葉子が鼻の先で組んだりほどいたりする手先を見入った。そうしたままでややしばらくの時間が過ぎた。

十一時近いこのへんの町並みはいちばん静かだった。葉子はふ

と雨樋あまどいを伝う雨だれの音を聞いた。日本に帰ってから始めて空はしぐれていたのだ。部屋へやの中は盛んな鉄びんの湯気ゆげでそう寒くはないけれども、戸外は薄ら寒い日和ひよりになっ  
ているらしかった。葉子はぎごちない二人ふたりの間の沈黙を破りたいばかりに、ひよつと首をもたげて腰窓のほうを見やりながら、

「おやいつのまにか雨になりましたのね」

といつてみた。古藤はそれには答えもせず、五分刈ぶりの地じぞう  
蔵頭あたまをうなだれて深々ふかぶかとため息をした。

「僕はあなたを信じきる事ができればどれほど幸いだか知れない  
と思うんです。五十川さんなぞより僕はあなたと話しているほう  
がずっと気持ちがいいんです。それはあなたが同じ年ごろで、――

—たいへん美しいというためばかりじゃないと（その時古藤はおぼこらしく顔を赤らめていた）思っています。五十川さんなどはなんでも物を僻目ひがめで見えるから僕はいやなんです。けれどもあなたは……どうしてあなたはそんな気象でいながらもっと大胆に物を打ち明けてくださらないんです。僕はほくなんといつてもあなたを信ずる事ができません。こんな冷淡な事をいうのを許してください。しかしこれにはあなたにも責めがあると僕は思いますよ。……しかたがない僕は木村君にきょうあなたと会ったこのままをいってやります。僕にはどう判断のしようもありませんもの……しかしお願いしますがねえ。木村君があなたから離れなければならぬものなら、一刻でも早くそれを知るようにしてやってください。

僕は木村君の心持ちを思うと苦しくなります」

「でも木村は、あなたに來たお手紙によるとわたしを信じきつてくれているのではないんですか」

そう葉子にいわれて、古藤はまた返す言葉もなく黙つてしまつた。葉子を見る見る非常に興奮して來たようだった。抑え<sup>おさ</sup>抑えている葉子の氣持ちが抑えきれなくなつて激しく働き出して來ると、それはいつでも<sup>そくそく</sup>惻々として人に迫り人を圧した。顔色一つ變えないで元のままに親しみを込めて相手を見やりながら、胸の奥底の心持ちを伝えて來るその声は、不思議な力を電氣のように感じて震えていた。

「それで結構。五十川<sup>いそがわ</sup>のおばさんは始めからいやだいやだという

わたしを無理に木村に添わせようとして置きながら、今になってわたしの口から一言の弁解も聞かずに、木村に離縁を勧めようという人なんですから、そりやわたし恨みもします。腹も立てます。え、わたしはそんな事をされて黙って引つ込んでいるような女じゃないつもりですわ。けれどもあなたは初手しよてからわたしに疑いをお持ちになつて、木村にもいろいろ御忠告なされた方かたですもの、木村にどんな事をいつておやりになろうともわたしにはねつから不服はありませんことよ。……けれどもね、あなたが木村のいちばん大切な親友でいらつしやると思えばこそ、わたしは人一倍あなたをたよりにしてきようもわざわざこんな所まで御迷惑を願つたりして、……でもおかしいものね、木村はあなたも信じ

わたしも信じ、わたしは木村も信じあなたも信じ、あなたは木村は信ずるけれどもわたしを疑つて……そ、まあ待つて……疑つてはいらつしやりません。そうです。けれども信ずる事ができないでいらつしやるんですわね……こうなるとわたしは倉地さんにもおすがりして相談相手になつていただくほかしようがありません。いくらわたし娘の時から周囲まわりから責められ通しに責められていても、今だに女手一つで二人の妹まで背負つて立つ事はできませんからね。……」

古藤は二重に折つていたような腰を立てて、少しせきこんで、「それはあなたに不似合いな言葉だと僕は思いますよ。もし倉地という人のためにあなたが誤解を受けているのなら……」

そういつてまだ言葉を切らないうちに、もうとうに横浜に行つたと思われていた倉地が、和服のまま突然六畳の間にはいつて来た。これは葉子にも意外だったので、葉子は鋭く倉地に目くばせしたが、倉地は無頓着むとんじやくだった。そして古藤のいるのなどは度外視した傍若無ぼうじゃくぶじん人さで、火鉢ひばちの向こう座にどつかとあぐらをかいた。

古藤は倉地を一目見るとすぐ倉地と悟つたらしかつた。いつもの癖で古藤はすぐ極度に固くなつた。中断された話の続きを持ち出しもしないで、黙つたまま少し伏ふし目になつてひかえていた。倉地は古藤から顔の見えないのをいい事に、早く古藤を返してしまえというような顔つきを葉子にして見せた。葉子はわけはわか

らないままにその注意に従おうとした。で、古藤の黙ってしまつたのをいい事に、倉地と古藤とを引き合わせる事もせず<sup>ふたり</sup>に自分も黙つたまま静かに鉄びんの湯を土<sup>ど</sup>びんに移して、茶を二人に勧めて自分も悠々<sup>ゆうゆう</sup>と飲んだりしていた。

突然古藤は居ずまいをなおして、

「もう僕は帰ります。お話は中途ですけれどもなんだか僕はきょうはこれでおいとまがしたくなりました。あとは必要があつたら手紙を書きます」

そういつて葉子にだけ挨拶<sup>あいさつ</sup>して座を立つた。葉子は例の芸者のような姿のまま古藤を玄関まで送り出した。

「失礼しましてね、ほんとうにきょうは。もう一度でようござい

ますからぜひお会いになつてくださいましたな。一生のお願いですから、ね」

と耳打ちするようにささやいたが古藤はなんとも答えず、雨の降り出したのに傘も借りずに出て行つた。

「あなたたつたらまずいじゃありませんか、なんだつてあんな幕に顔をお出しなさるの」

こうなじるようにいつて葉子が座につくと、倉地は飲み終わった茶ちやわんを猫板ねこいたの上にとんと音をたてて伏せながら、

「あの男はお前、ばかにしてかかっているが、話を聞いていると妙に粘り強い所があるぞ。ばかもあのくらいまつすぐにばかだと油断のできないものなのだ。もう少し話を続けていてみる、お前の

やり繰りでは間に合わなくなるから。いったいなんでお前はあんな男をかまいつける必要があるんか、わからないじゃないか。木村にでも未練があれば知らない事」

こういつて不敵に笑いながら押し付けるように葉子を見た。葉子はぎくりと釘くぎを打たれたように思った。倉地をしつかり握るまでは木村を離してはいけな**い**と思つてゐる胸算用を倉地に偶然にいい当てられたように思つたからだ。しかし倉地がほんとうに葉子を安心させるためには、しなねばならない大事な事が少なくとも一つ残つてゐる。それは倉地が葉子と表おもてむ向き結婚のできるだけの始末をして見せる事だ。手っ取り早くいへばその妻を離縁する事だ。それまではどうしても木村をのがしてはならない。そ

ればかりではない、もし新聞の記事などが問題になって、倉地が事務長の位置を失うような事にでもなれば、少し気の毒だけれども木村を自分の鎖から解き放さずにおくのが何かにつけて便宜でもある。葉子はしかし前の理由はおくびにも出さずにあとの理由を巧みに倉地に告げようと思った。

「きようは雨になったで出かけるのが大儀たいぎだ。昼には湯豆腐でもやって寝てくれようか」

そういつて早くも倉地がそこに横になろうとするのを葉子はしいて起き返らした。

「水戸みととかでお座敷に出ていた人だそうですが、倉地さんに落籍ひかされてからもう七八年にもなりましょうか、それは穏当ない奥さんで、とても商売をしていた人のようではありません。もつとも水戸の士族のお娘むすめご御ごで出るが早いか倉地さんの所にいらつしやるようになったんだそうですからそのはずでもありませんが、ちつともすれていらつしやらないでいて、気もおつきにはなるし、しとやかでもあり、……」

ある晩そうかくかん双鶴館おかみの女将が話に来て四方山よもやまのうわさのついでに倉地の妻の様子を語ったその言葉は、はつきりと葉子の心に焼きついていた。葉子はそれが優すぐれた人であると聞かされれば聞かされ

るほど妬ねたましさを増すのだった。自分の目の前には大きな障害物がまっ暗に立ちふさがっているのを感じた。嫌悪けんおの情にかきむしられて前後の事も考えずに別れてしまったのではあつたけれども、仮にも恋らしいものを感じた木部に対して葉子がいだく不思議な情緒、——ふだんは何事もなかつたように忘れ果ててはいるものの、思いも寄らないきっかけにふと胸を引き締めて巻き起こつて来る不思議な情緒、——一種の絶望的なノスタルジア——それを葉子は倉地にも倉地の妻にも寄せて考えてみる事のできる不幸を持つていた。また自分の生んだ子供に対する執着。それを男も女も同じ程度にきびしく感ずるものかどうかは知らない。しかしながら葉子自身の実感からいうと、なんといいてもたとえようもな

くその愛着は深かった。葉子は定子を見ると知らぬ間まに木部に対して恋に等しいような強い感情を動かしているのに気がつく事がしばしばだった。木部との愛着の結果定子が生まれるようになったのではなく、定子というものがこの世に生まれ出るために、木部と葉子とは愛着のきずなにつながれたのだとさえ考えられもした。葉子はまた自分の父がどれほど葉子を溺できあい愛してくれたかをも思ってみた。葉子の経験からいうと、両親共いなくなってしまうた今、慕わしきなつかしさを余計感じさせるものは、格別これといって情愛の徴しるしを見せはしなかったが、始終軟やわらかい目色で自分たちを見守ってくれていた父のほうだった。それから思うと男というものも自分の生ませた子供に対しては女に譲らぬ執着を持

ちうるものに相違ない。こんな過去の甘い回想までが今は葉子の心をむちうつ答しもととなつた。しかも倉地の妻と子とはこの東京にちやんと住んでゐる。倉地は毎日のようにその人たちにあつてゐるのに相違ないのだ。

思う男をどこからどこまで自分のものにして、自分のものにしたという証拠を握るまでは、心が責めて責めて責めぬかれるような恋愛の残酷な力に葉子は昼となく夜となく打ちのめされた。船の中での何事も打ち任せきつたような心やすい気分は他人事ひとごとのように、遠い昔の事のように悲しく思いやられるばかりだった。どうしてこれほどまでに自分というものの落ちつき所を見失つてしまつたのだろう。そう思う下から、こうしては一刻もいられない。

早く早くする事だけをしてしまわなければ、取り返しがつかなくなる。どこからどう手をつければいいのか。敵を斃たおさなければ、敵は自分を斃たおすのだ。なんの躊躇ちゆうちよ。なんの思案。倉地が去つた人たちに未練を残すようならば自分の恋は石や瓦かわらと同様だ。自分の心で何もかも過去はいっさい焼き尽くして見せる。木部もない、定子もない。まして木村もない。みんな捨てる、みんな忘れる。その代わり倉地にも過去という過去をすっかり忘れさせずにおくものか。それほどの蠱惑こわくの力と情熱の炎とが自分にあるのか見ているがいい。そうしたいちずの熱意が身をこがすように燃え立った。葉子は新聞記者の来襲を恐れて宿にとじこもつたまま、火鉢ひばちの前にすわって、倉地の不在の時はこんな妄想もうそうに身も

心もかきむしられていた。だんだん募つて来るような腰の痛み、肩の凝り。そんなものさえ葉子の心をますますいらだたせた。

ことに倉地の帰りのおそい晩などは、葉子は座にも居<sup>い</sup>たまれなかつた。倉地の居間<sup>いま</sup>になつてゐる十畳の間<sup>ま</sup>に行つて、そこに倉地の面影<sup>おもかげ</sup>を少しでも忍ぼうとした。船の中での倉地との楽しい思い出は少しも浮かんで来ずに、どんな構えとも想像はできないが、とにかく倉地の住居<sup>すまい</sup>のある部屋<sup>へや</sup>に、三人の娘たちに取り巻かれて、美しい妻にかしずかれて杯を干している倉地ばかりが想像に浮かんだ。そこに脱ぎ捨ててある倉地のふだん着はますます葉子の想像をほしいままにさせた。いつでも葉子の情熱を引つつかんでゆすぶり立てるような倉地特有の膚<sup>に</sup>の香<sup>にお</sup>い、芳醇<sup>ほうじゆん</sup>な酒や、

煙草たばこからにおい出るようなその香においを葉子は衣類をかき寄せて、それに顔を埋うずめながら、痲痺まひして行くような気持ちでかぎにかいだ。その香においのいちばん奥に、中年の男に特有なふけのような不快におな香におい、他人のものであつたなら葉子はひとたまりもなく鼻をおおうような不快におな香においをかぎつけると、葉子は肉体的にも一種の陶酔を感じて来るのだつた。その倉地が妻や娘たちに取り巻かれて楽しく一夕せきを過ごしている。そう思うとあり合わせるものを取つて打ちこわすか、つかんで引き裂きたいような衝動がわけもなく嵩こじて来るのだつた。

それでも倉地が帰つて来ると、それは夜おそくなつてからであつても葉子はただ子供のように幸福だつた。それまでの不安や焦

躁はどこにか行つてしまつて、悪夢から幸福な世界に目ざめたように幸福だった。葉子はすぐ走つて行つて倉地の胸にたわいなく抱かれた。倉地も葉子を自分の胸に引き締めた。葉子は広い厚い胸に抱かれながら、单调な宿屋の生活の一日中に起こつた些細な事までを、その表情のゆたかな、鈴のような涼しい声で、自分を樂しませているもののごとく語つた。倉地は倉地でその声に酔いしれて見えた。二人の幸福はどこに絶頂があるのかわからなかつた。二人だけで世界は完全だった。葉子のする事は一つ一つ倉地の心がするように見えた。倉地のこうありたいと思う事は葉子があらかじめそうあらせていた。倉地のしたいと思う事は、葉子がちゃんとし遂げていた。茶わんの置き場所まで、着物のしまい所

まで、倉地は自分の手でしたとおりを葉子がしているのを見いだしているようだった。

「しかし倉地は妻や娘たちをどうするのだろうか」

こんな事をそんな幸福の最中にも葉子は考えない事もなかった。しかし倉地の顔を見ると、そんな事は思うも恥ずかしいような些さい細な事に思われた。葉子は倉地の中にすっかりとけ込んだ自分を見いだすのみだった。定子までも犠牲にして倉地をその妻子から切り放そうなどいうたくらみはあまりにばからしい取り越し苦労であるのを思わせられた。

「そうだ生まれてからこのかたわたしは求めていたものはとうとう来こようとしている。しかしこんな事がこう手近にあらうとはほ

んとうに思いもよらなかつた。わたしみたいなばかはない。この幸福の頂上が今だとだれか教えてくれる人があつたら、わたしはその瞬間に喜んで死ぬ。こんな幸福を見てから下り坂にまで生きているのはいやだ。それにしてもこんな幸福でさえがいつかは下り坂になる時があるのだろうか」

そんな事を葉子は幸福に浸りきつた夢心地の中に考えた。

葉子が東京に着いてから一週間目に、宿の女将おかみの周旋で、芝しばの紅葉館こうようかんと道一つ隔てた苔香園たいこうえんという薔薇専門ばらの植木屋の裏に

あたる二階建ての家を借りる事になった。それは元紅葉館の女中だった人がある豪商めかけの妾めかけになつたについて、その豪商という人が建ててあてがった一構ひとかまえだった。双鶴館そうかくかんの女将おかみはその女と懇

意の間だったが、女に子供が幾人かできて少し手ぜま過ぎるので他所よそに移転しようかといっていたのを聞き知っていたので、女将のほうで適当な家をさがし出してその女を移らせ、そのあとを葉子が借りる事に取り計らってくれたのだった。倉地が先に行つて中の様子を見て来て、杉すぎ林はやしのために少し日当たりはよくないが、自分の隠れ家がとしては屈強だといつたので、すぐさまそこに移る事に決めたのだった。だれにも知れないように引つ越さねばならぬといふので、荷物を小わけして持ち出すのにも、女将おかみは自分の女中たちにまで、それが倉地の本宅に運ばれるものだといつて知らせた。運搬人はすべて芝しばのほうから頼んで来た。そして荷物ががあらかた片づいた所で、ある夜おそく、しかもびしよびしよ

と吹き降りのする寒い雨風のおりを選んで葉子は幌ほろぐるま車に乗った。葉子としてはそれほどの警戒をするには当たらないと思つたけれども、女将おかみがどうしてもきかなかつた。安全な所に送り込むまではいったんお引き受けした手まえ、気がすまないといひ張つた。

葉子があつらえておいた仕立ておろしの衣類を着かえているとそこに女将おかみも来合せて脱ぎ返しの世話を見た。襟えりの合わせ目をピンで留めながら葉子が着がえを終えて座につくのを見て、女将はうれしそうにもみ手をしながら、

「これであるに大丈夫着いてくださりさえすればわたしは重荷ごたいてが一つ降りると申すものです。しかしこれからがあなたは御大

抵<sup>い</sup>じゃございませぬね。あちらの奥様の事など思いますと、どちらにどうお仕向けをしていいやらわたしにはわからなくなりま<sup>す</sup>。あなたのお心持ちもわたしは身にしみてお察し申しますが、どこから見ても批点の打ちどころのない奥様のお身の上もわたしには御不憫<sup>ごくびん</sup>で涙がこぼれてしまうんでございますよ。でね、これからの事についてちやわたしはこう決めました。なんでもできます事ならと申し上げたいんでございますけれども、わたしには心<sup>しんそ</sup>底<sup>こ</sup>をお打ち明け申しました所、どちら様にも義理が立ちませんから、薄情でもきょうかぎりこのお話には手をひかせていただきます。……どうか悪くお取りになりませんようにね……どうもわたしはこんなでいながら甲斐性<sup>かいしょう</sup>がございませんで……」

そういいながら女将は口をきつた時のうれしげな様子にも似ず、  
 襦袢じゆばんの袖そでを引き出すひまもなく目に涙をいっぱいためてしまつ  
 ていた。葉子にはそれが恨めしくも憎くもなかった。ただ何とな  
 く親身しんみな切なさせつが自分の胸にもこみ上げて来た。

「悪く取るどころですか。世の中の人ひとりが一人でもあなたのような  
 心持ちで見てくださいたら、わたしはその前に泣きながら頭を下げ  
 ありがとうございますとございますという事でしょうよ。これまでのあなたの  
 お心尽くしでわたしはもう充分。またいつか御恩返しのできる事  
 もあります。……それではこれで御免くださいまし。お妹いもうと  
とご御にもどうか着物のお礼をくれぐれもよろしく」

少し泣き声になって素晴らしいながら、葉子は女将おかみとその妹分ぶんに

あたるといふ人に れいごころ 礼心れいごころ に置いて行こうとする米国製の二つの手携てきげをしまいこんだ違ちがい棚だなをちよつと見やつてそのまま座を立つた。

雨風のために夜はにぎやかな往来もさすがに人通りが絶え絶えだだった。車に乗ろうとして空を見上げると、雲はそう濃くはかかっているかないと見えて、新月の光がおぼろに空を明るくしている中をあらし模様へやの雲が恐ろしい勢いで走っていた。部屋へやの中の暖かさに引きかえて、湿気を充分に含んだ風は裾すそ前まえをあおつてぞくぞくと膚せまに逼せまつた。ばたばたと風になぶられる前まえ幌ほろを車夫がかかけようとしているすきから、女将おかみがみずみずしい丸まる髻まげを雨にも風にも思ふまま打たせながら、女中のさしかぎそうとする雨傘あまがさ

の陰に隠れようともせず、何か車夫にいい聞かせているのが大事らしく見やられた。車夫が梶棒かじぼうをあげようとする時女将おかみが祝儀袋をその手に渡すのが見えた。

「さようなら」

「お大事に」

はばかりのように車の内外うちそとから声がかわされた。幌ほろにのしかか  
つて来る風に抵抗しながら車は闇やみの中を動き出した。

向かい風がうなりを立てて吹きつけて来ると、車夫は思わず車をあおらせて足を止めるほどだった。この四五日火鉢ひばちの前ばかりにいた葉子に取っては身を切るかと思われるような寒さが、厚い膝ひざかけの目まで通して襲って来た。葉子は先ほど女将おかみの言葉を聞

いた時にはさほどとも思っていなかったが、少しほどたった今になってみると、それがひしひしと身にこたえるのを感じ出した。

自分はひよつとするとあざむかれている、もてあそびものにされている。倉地はやはりどこまでもあの妻子と別れる気はないのだ。ただ長い航海中の気まぐれから、出来心に自分を征服してみようと企てたばかりなのだ。この恋のいきさつが葉子から持ち出されたものであるだけに、こんな心持ちになって来ると、葉子は矢もたてもたまらず自分にひけ目を覚えた。幸福——自分が夢想していた幸福がとうとう来たと誇りがに喜んだその喜びはさもしいぬか喜びに過ぎなかったらしい。倉地は船の中でと同様の喜びでまだ葉子を喜んではいる。それに疑いを入れよう余地はない。けれ

ども美しい貞節な妻と可憐かれんな娘を三人まで持つている倉地の心がいつまで葉子にひかされているか、それをだれが語り得よう、葉子の心は幌ほろの中に吹きこむ風の寒さと共に冷えて行つた。世の中からきれいに離れてしまつた孤独な魂がたつた一つそこには見いだされるようにも思えた。どこにうれしさがある、楽しさがある。自分はまた一つの今までに味わわなかつたような苦惱の中に身を投げ込もうとしているのだ。またうまうまといたずら者の運命にしてやられたのだ。それにしてももうこの瀬戸ぎわから引く事はできない。死ぬまで……そうだ死んでもこの苦しみに浸りきらずに置くものか。葉子には楽しさが苦しきなのか、苦しさが楽しきなのか、全く見さかひがなくなつてしまつていた。魂を締め

木にかけてその油でもしぼりあげるようなもだえの中にやむにやまれぬ執着を見いだしてわれながら驚くばかりだった。

ふと車が停とまって梶かじ棒ぼうがおろされたので葉子ははつと夢心べごち地からわれに返った。恐ろしい吹き降りになっていた。車夫が片足で梶棒を踏まえて、風で車のよろめくのを防ぎながら、前まえ幌ほろをはずしにかかる、まっ暗だった前方からかすかに光がもれて来た。頭の上ではざあざあど降りしきる雨の中に、荒海の潮騒しおざいのような物すごい響きが何か変事でもわいて起こりそうに聞こえていた。葉子は車を出ると風に吹き飛ばされそうになりながら、髪や新調の着物のぬれるのもかまわず空を仰いで見た。漆うるしを流したような雲で固くとざされた雲の中に、漆うるしよりも色濃くむらむらと

立ち騒いでいるのは古い杉すぎの木立こだちだった。花壇らしい竹垣たけがきの  
 中の灌木かんぼくの類は枝先を地につけんばかりに吹きなびいて、枯れ  
 葉うずが渦うずのようにばらばらと飛び回っていた。葉子はわれにもなく  
 そこにべったりすわり込んでしまいたくなくなった。

「おい早くはいらんかよ、ぬれてしまうじゃないか」

倉地がランプの灯ひをかばいつつ家の中からどなるのが風に吹き  
 ちぎられながら聞こえて来た。倉地がそこにいるという事さえ葉  
 子には意外のようだった。だいぶ離れた所でどたん戸か何かは  
 ずれたような音がしたと思うと、風はまた一しきりうなりを立て  
 て杉すぎ叢むらをこそいで通りぬけた。車夫は葉子を助けようにも梶かじ  
 棒ぼうを離れば車をけし飛ばされるので、提ちよう灯ちんの尻しりを風かざ上かみ

のほうに斜しやに向けて目八分ぶに上げながら何か大声に後ろから声をかけていた。葉子はすごすごととして玄関口に近づいた。一杯きげんで待ちあぐんだらしい倉地の顔の酒ほてりに似ず、葉子の顔は透き通るほど青ざめていた。なよなよとまず敷き台に腰をおろして、十歩ばかり歩くだけで泥どろになってしまった下駄げたを、足先で手伝いながら脱ぎ捨てて、ようやく板の間まに立ち上がってから、うつろな目で倉地の顔をじつと見入った。

「どうだった寒かったろう。まあこっちにお上がり」

そう倉地はいつて、そこに出合わしていた女中らしい人に手ランプを渡すと華車きやしゃな少し急な階子段はしごだんをのぼって行つた。葉子は吾妻あずまコートも脱がずにいいかげんぬれたままで黙つてそのあと

からついて行つた。

二階の間は電燈で昼間より明るく葉子には思われた。戸という戸ががたぴしと鳴りはためいていた。板葺きらしい屋根に一寸釘でもたたきつけるように雨が降りつけていた。座敷の中は暖かくいきれて、飲み食いする物が散らかっているようだった。葉子の注意の中にはそれだけの事がかろうじてはいつて来た。そこに立つたままの倉地に葉子は吸いつけられるように身を投げかけて行つた。倉地も迎え取るように葉子を抱いたと思うとそのままそこにどつかとあぐらをかいた。そして自分のほてつた頬を葉子のにすり付けるとさすがに驚いたように、

「こりやどうだ冷えたにも氷のようだ」

といいながらその顔を見入ろうとした。しかし葉子は無性むしように自分の顔を倉地の広い暖かい胸に埋めてしまった。なつかしみと憎しみとのもつれ合った、かつて経験しない激しい情緒がすぐに葉子の涙を誘い出した。ヒステリーのように間歇かんけつてき的にひき起さるすすり泣きの声をかみしめてもかみしめてもとめる事ができなかった。葉子はそうしたまま倉地の胸で息いき気を引き取る事ができたらと思った。それとも自分のなめているような魂のもだえの中に倉地を巻き込む事ができたらばとも思った。

いそいそと世話女房らしく喜び勇んで二階に上がって来る葉子を見いだすだろうとばかり思っていたらしい倉地は、この理由も知れぬ葉子の狂体に驚いたらしかった。

「どうしたというんだな、え」

と低く力をこめていいながら、葉子を自分の胸から引き離そうとするけれども、葉子はただ無性にかぶりを振るばかりで、駄々<sup>だだっこ</sup>児のように、倉地の胸にしがみついた。できるならその肉の厚い男らしい胸をかみ破つて、血みどろになりながらその胸の中に顔を埋めこみたい——そういうように葉子は倉地の着物をかんだ。

徐<sup>しず</sup>かにではあるけれども倉地の心はだんだん葉子の心持ちに染められて行くようだった。葉子をかき抱<sup>いだ</sup>く倉地の腕の力は静かに加わって行つた。その息<sup>いき</sup>気づかいは荒くなつて来た。葉子は気が遠くなるように思いながら、締め殺すほど引きしめてくれと念じていた。そして顔を伏せたまま涙のひまから切れ切れに叫ぶよう

に声を放った。

「捨てないでちようだいとはいいません……捨てるなら捨ててくださいでもようござんす……その代わり……その代わり……はつきりおっしゃってください、ね……わたしはただ引きずられて行くのがいやなんです……」

「何をいつてるんだお前は……」

倉地のかんでふくめるような声が耳もと近く葉子にこうささやいた。

「それだけは……それだけは誓ってください……ごまかすのはわたしはいや……いやです」

「何を……何をごまかすかい」

「そんな言葉がわたしはきらいです」

「葉子！」

倉地はもう熱情に燃えていた。しかしそれはいつでも葉子を抱いた時に倉地に起こる野獣のような熱情とは少し違っていた。そこにはやさしく女の心をいたわるような影が見えた。葉子はそれをうれしくも思い、物足らなくも思った。

葉子の心の中は倉地の妻の事をいい出そうとする熱意でいっぱいになっていた。その妻が貞淑な美しい女であると思えば思うほど、その人が二人の間にはさまっているのが呪わのろしかった。たとい捨てられるまでも一度は倉地の心をその女から根こそぎ奪い取らなければ堪たんねん念ねんができないようなひたむきに狂暴な欲念が胸の

中でははち切れそうに煮えくり返っていた。けれども葉子はどうしてもそれを口の端はに上のせる事はできなかつた。その瞬間に自分に対する誇りが塵ちりあくた芥かいのように踏みにじられるのを感じたからだ。葉子は自分ながら自分の心がじれつたかつた。倉地のほうから一ひと言もそれをいわないのが恨めしかつた。倉地はそんな事はいうにも足らないと思つているのかもしれないが……いゝえそんな事は無い、そんな事のあるはずはない。倉地はやはり一ふたまた股かけて自分を愛しているのだ。男の心にはそんなみだらな未練があるはずだ。男の心とはいうまい、自分も倉地に出あうまでは、異性に対する自分の愛を勝手に三つにも四つにも裂いてみる事ができたのだ。……葉子はここにも自分の暗い過去の経験のために

責めさいなまれた。進んで恋のとりことなつたものが当然陥らなければならぬ。たとえばえようのないほど深く深い疑惑はあとからあとから口実を作つて葉子を襲うのだった。葉子の胸は言葉どおりに張り裂けようとしていた。

しかし葉子の心が傷めば傷むほど倉地の心は熱して見えた。倉地はどうして葉子があんなにきげんを悪くしているのかを思い迷つている様子だった。倉地はやがてしいて葉子を自分の胸から引き放してその顔を強く見守つた。

「何をそう理屈もなく泣いているのだ……お前はおれを疑つてい  
るな」

葉子は「疑わないでいられますか」と答えようとしたが、どう

してもそれは自分の面目めんぼくにかけて口には出せなかった。葉子は涙に解けて漂うような目を恨めしげに大きく開いて黙って倉地を見返した。

「きようおれはどうとう本店から呼び出されたんだった。船の中の事をそれとなく聞きただそうとしおったから、おれは残らずいつてのけたよ。新聞におれたちの事が出た時でもが、あわてるがものはないと思つとつたんだ。どうせいつかは知れる事だ。知れるほどなら、大つぴらで早いがいいくらいのものだ。近いうちに会社のほうは首つらになろうが、おれは、葉子、それが満足なんだぞ。自分で自分の面つらに泥どろを塗ぬって喜んでるおれがばかに見えような」

そういつてから倉地は激しい力で再び葉子を自分の胸に引き寄せようとした。

葉子はしかしそうはさせなかつた。素早く倉地の膝から飛びのいて畳の上に頬を伏せた。倉地の言葉をそのまま信じて、素直にうれしがって、心を涙に溶いて泣きたかつた。しかし万一倉地の言葉がその場のがれの勝手な造り事だつたら……なぜ倉地は自分の妻や子供たちの事をいつては聞かせてくれないのだ。葉子はわけのわからない涙を泣くより術がなかつた。葉子は突つ伏したままでさめざめと泣き出した。

戸外のあらしは氣勢を加えて、物すさまじくふけて行く夜を荒れ狂つた。

「おれのいうた事がわからんならまあ見とるがいいき。おれはくどい事は好すかんからな」

そういいながら倉地は自分を抑制しようとするようにしいて落ち着いて、葉巻を取り上げて煙草たばこぼん盆を引き寄せた。

葉子は心の中で自分の態度が倉地の気をまずくしているのをはらはらしながら思いやった。気をまずくするだけでもそれだけ倉地から離れそうなのがこの上なくつらかった。しかし自分で自分をどうする事もできなかつた。

葉子はあらしの中にわれとわが身をさいなみながらさめざめと泣き続けた。

## 二七

「何をわたしは考えていたんだろう。どうかして心が狂ってしまったんだ。こんな事はない事なのに」

葉子はその夜倉地と部屋へやを別にして床についた。倉地は階上に、葉子は階下に。絵島丸以来二人ふたりが離れて寝たのはその夜が始めた。倉地が真心まごころをこめた様子でかれこれいうのを、葉子はすげなくはねつけて、せつかくとつてあつた二階の寢床を、女中に下に運ばしてしまった。横になりはしたがいつまでも寝つかれないで二時近くまで言葉どおりに輾てんでん転反側しつつ、繰り返し繰り返し倉地の夫婦関係を種々に妄想もうそうしたり、自分にまくしかか

つて来る将来の運命をひたすらに黒く塗つてみたりしていた。それでも果ては頭もからだも疲れ果てて夢ばかりな眠りに陥つてしまった。

うつらうつらとした眠りから、突然たえようのないさびしさにひしひしと襲われて、——それはその時見た夢がそんな暗示になつたのか、それとも感覚的な不満が目をさましたのかわからなかった——葉子は暗闇くらやみの中に目を開いた。あらしのために電線に故障ができたと見えて、眠る時にはつけ放しにしておいた灯ひがどこもここも消えているらしかった。あらしはしかしいつのまにか風なぎてしまつて、あらしのあとの晩秋の夜はことさら静かだつた。山内さんないいちめんの杉森すぎもりからは深山のような鬼気ききがしんしん

と吐き出されるように思えた。こおろぎが隣の部屋のすみでかすれがすれに声を立てていた。わずかなしかも浅い睡眠には過ぎなかつたけれども葉子の頭は暁前まえの冷えを感じて冴さえ冴さえと澄ぎんでいた。葉子はまず自分がたつた一人ひとりで寝ていた事を思った。倉地と関係がなかつたころはいつでも一人で寝ていたのだが、よくもそんな事が長年にわたつてできたものだったと自分ながら不思議に思われるくらい、それは今の葉子を物足らなく心さびしくさせていた。こうして静かな心になつて考えると倉地の葉子に対する愛情が誠実であるのを疑うべき余地はさらになかつた。日本に帰つてから幾日にもならないけれども、今まではとにかく倉地の熱意に少しも変わりが起こつた所は見えなかつた。いかに恋に目が

ふさがつても、葉子はそれを見きわめるくらいの冷静な眼力がんにりきは持つていた。そんな事は充分に知り抜いているくせに、おぞましくも昨夜のようなばかなまねをしてしまった自分が自分ながら不思議なくらいだった。どんなに情に激した時でもたいていは自分を見失うような事はしないで通して来た葉子にはそれがひどく恥ずかしかつた。船の中にいる時にヒステリーになつたのではないかと疑つた事が二三度ある——それがほんとうだつたのではないかしらんとも思われた。そして夜着にかけた洗い立てのキャリコおとがいの裏の冷え冷えするのをふくよかな頤おとがいに感じながら心の中で独ひとり語ごとちた。

「何をわたしは考えていたんだろう。どうかして心が狂つてしま

ったんだ。こんな事はいぞない事だのに」

　　そういいながら葉子は肩だけ起き直つて、枕まくらもとの水を手さぐりでしたたか飲みほした。氷のように冷えきつた水が喉のどもとを静かに流れ下つて胃の腑ふに広がるまではつきりと感じられた。酒も飲まないのだけれども、酔後の水と同様に、胃の腑に味覚ができて舌の知らない味を味わい得たと思うほど快く感じた。それほど胸の中は熱を持っていたに違いない。けれども足のほうは反対に恐ろしく冷えを感じた。少しその位置を動かすと白さをそのままな寒い感じがシーツから逼せまつて来るのだった。葉子はまたきびしく倉地の胸を思った。それは寒さと愛着とから葉子を追い立てて二階に走らせようとするほどだった。しかし葉子はすでにそれを

じつところらえるだけの冷静さを回復していた。倉地の妻に対する処置は昨夜のようであつては手ぎわよくは成し遂げられぬ。もつと冷たい知恵に力を借りなければならぬ——こう思い定めながら暁しらの白むのを知らずにまた眠りに誘われて行つた。

翌日葉子はそれでも倉地より先に目をさまして手早く着がえをした。自分で板戸を繰りあけて見ると、縁先には、枯れた花壇の草や灌かんぼく木が風のために吹き乱された小庭があつて、その先は、杉すぎ、松、その他の喬きようぼく木の茂みを隔てて苔たい香園かうえんの手広い庭が見やられていた。きのうまでいた双鶴館そうかくかんの周囲とは全く違つた、同じ東京の内とは思われなひなような静かな鄙びびた自然の姿が葉子の目の前には見渡された。まだ晴れきらない狭霧さぎりをこめた空気を

通して、杉の葉越しにさしこむ朝の日の光が、雨にしつとりと潤った庭の黒土の上に、まつすぐな杉の幹を棒ぼうじま縞ひなたのような影にして落としていた。色さまざまな桜の落ち葉が、日向では黄くれないに紅くれないに、日影では樺かばに紫に庭をいろどっていた。いろどっているといえは菊の花もあちこちにしつけられていた。しかし一帯の趣味は葉子の喜ぶようなものではなかった。塵ちり一つさえないほど、貧しく見える瀟しょうしや洒しょうしやな趣味か、どこにでも金銀がそのまま捨ててあるような驕きようしや奢しやな趣味でなければ満足がでなかつた。残ったのを捨てるのが惜しいとかもつたいたないとかいうような心持ちで、余計な石や植木などを入れ込んだらしい庭の造りかたを見たりすると、すぐさまむしり取って目にかからない所に投げ捨てたく思う

のだった。その小庭を見ると葉子の心の中にはそれを自分の思うように造り変える計画がうずうずするほどわき上がって来た。

それから葉子は家の中をすみからすみまで見て回った。きのう玄関口に葉子を出迎えた女中が、戸を繰る音を聞きつけて、いち早く葉子の所に飛んで来たのを案内に立てた。十八九の小ぎれいな娘で、きびきびした気象らしいのに、いかにも蓮はすつ葉はでない、主人を持てば主人思いに違いないのを葉子は一目で見ぬいて、これはいい人だと思った。それはやはり双鶴館おかみの女将おかみが周旋してよこした、宿に出入りの豆腐屋の娘だった。つや（彼女の名はつやといった）は階はしご子だん段下の玄関に続く六畳の茶の間から始めて、その隣の床の間付きの十二畳、それから十二畳と廊下を隔てて玄

関とならぶ茶席風の六畳を案内し、廊下を通つた突き当たりにある思いのほか手広い台所、風呂場を経て張り出しになっている六畳と四畳半（そこがこの家を建てた主人の居間となつていたらしく、すべての造作に特別な数寄が凝らしてあつた）に行つて、その雨戸を繰り明けて庭を見せた。その前栽は割合に荒れずにいて、ながめが美しかったが、葉子は垣根越しに苔香園の母屋の下の便所らしいきたない建て物の屋根を見つけて困つたものがあると思つた。そのほかには台所のそばにつやの四畳半の部屋が西向きについていた。女中部屋を除いた五つの部屋はいずれもなげし付きになつて、三つまでは床の間さえあるのに、どうして集めたものかとかく掛け物なり置き物なりがちやんと飾られていた。

家の造りや庭の様子などにはかなりの注文も相当の眼識も持つてはいたが、絵画や書の事になると葉子はおぞましくも鑑識の力がなかつた。生まれつき機敏に働く才気のお陰で、見たり聞いたりした所から、美術を愛好する人々と膝ひざをならべても、とにかくあまりぼろらしいぼろは出さなかつたが、若い美術家などがほめる作品を見てもどこが優すぐれてどこに美しさがあるのか葉子には少しも見当のつかない事があつた。絵といわず字といわず、文学的の作物などに対しても葉子の頭はあわれなほど通俗的であるのを葉子は自分で知っていた。しかし葉子は自分の負けじ魂から自分の見方が凡俗だとは思いたくなかつた。芸術家などいう連中には、骨こつとう董などをいじくつて古味ふるみというようなものをありがたがる風

流人と共通したような気取りがある。その似而非えせ気取りを葉子は幸いにも持ち合わせていないのだと決めていた。葉子はこの家に持ち込まれている幅物ふくものを見て回つても、ほんとうの値打ちがどれほどのものだかさらに見当がつかなかった。ただあるべき所にそういう物のあることを満足に思った。

つやの部屋のきちんと手ぎわよく片づいているのや、二三日空あ家きやになつていたのにも係わらず、台所がきれいにふき掃除そうじがされていて、布巾ふきんなどが清すがすが々々しくからからにかわかしてかけてあつたりするのは一々葉子の目を快く刺激した。思ったより住まい勝手てのいい家と、はきはきした清潔せいせつずきな女中とを得た事がまず葉子の寝起きの心持ちをすがすがしくさせた。

葉子はつやのくんで出したちようどいいかげんの湯で顔を洗つて、軽く化粧をした。昨夜の事などは気にもかからないほど心は軽かった。葉子はその軽い心を抱きながら静かに二階に上がって行つた。何とはなしに倉地に甘えたいような、わびたいような気持ちでそつと襖を明けて見ると、あの強烈な倉地の膚の香においが暖かい空気に満たされて鼻をかすめて来た。葉子はわれにもなく駆けよつて、仰向けに熟睡している倉地の上に羽はがいにのしかかつた。

暗い中で倉地は目ざめたらしかつた。そして黙つたまま葉子の髪や着物から花かべんのかのようにこぼれ落ちるなまめかしい香かりを夢心地ごこちでかいでいるようだったが、やがて物たるげに、

「もう起きたんか。何時なんじだな」

といった。まるで大きな子供のようなその無邪気さ。葉子は思わず自分の頬ほおを倉地のにすりつけると、寝起きの倉地の頬は火のように熱く感ぜられた。

「もう八時。……お起きにならないと横浜のほうがおそくなるわ」  
倉地はやはり物たるげに、袖そでぐち口からよきんと現われ出た太い腕を延べて、短い散切り頭ざんぎぎをごしごしとかき回しながら、

「横浜?……横浜にはもう用はないわい。いつ首になるか知れないおれがこの上の御奉公をしてたまるか。これもみんなお前のお陰かげだぞ。業ごうつくばりめ」

と行っていきなり葉子の首筋を腕にまいて自分の胸に押しつけ

た。

しばらくして倉地は寢床を出たが、昨夜の事などはけろりと忘れてしまったように平気でいた。二人ふたりが始めて離れ離ればなに寢たのにも一ひとこと言もいわないのがかすかに葉子を物足らなく思わせただれども、葉子は胸が広々としてなんとなんという事もなく喜ばしくつてたまらなかつた。で、倉地を残して台所だいしよにおりた。自分で自分の食べるものを料理するという事にもかつてない物珍しさとうれしさを感じた。

畳じよう一畳がた日のさしこむ茶の間の六畳で二人は朝餉あさげの膳ぜんに向かった。かつては葉山はやまで木部と二人でこうした楽しい膳ぜんに向かった事もあつたが、その時の心持ちと今の心持ちとを比較する事もで

きないと葉子は思った。木部は自分でこのこと台所まで出かけて来て、長い自炊の経験などを得意げに話して聞かせながら、自分で米をといだり、火をたきつけたりした。その当座は葉子もそれを楽しいと思わないではなかった。しかししばらくのうちにそんな事をする木部の心持ちがさもしかとも思われて来た。おまけに木部は一日一日ともものぐさになって、自分では手を下しもせず、邪魔になる所に突つ立つたままさしずがましい事をいったり、葉子には何らの感興も起こさせない長詩を例の御自慢の美しい声で朗々と吟じたりした。葉子はそんな目にあうと軽蔑けいべつしきつた冷ややかなひとみでじろりと見返してやりたいような気になった。倉地は始めからそんな事はてんでしなかつた。大きな駄々だだ児このよ

うに、顔を洗うといきなり膳ぜんの前にあぐらをかいて、葉子が作つて出したものを片端からむしやむしやときれいに片づけて行つた。これが木部だったら、出す物の一つ一つに知つたかぶりの講釈をつけて、葉子の腕まえを感傷的にほめちぎつて、かなりたくさんを食わずに残してしまふだろう。そう思いながら葉子は目でなでさするようにして倉地が一心に箸はしを動かすのを見守らずにはいられなかつた。

やがて箸と茶わんとをからりとなげ捨てる、倉地は所在なさそうに葉巻をふかしてしばらくそこらをながめ回していたが、いきなり立ち上がつて尻しりつぱしよりをしながら裸足はだしのまま庭に飛んで降りた。そしてハーキュリーズが針仕事でもするようなぶきつ

ちような様子で、狭い庭を歩き回りながら片すみから片づけ出した。まだびしやびしやするような土の上に大きな足跡が縦横にされるされた。まだ枯れ果てない菊や萩はぎなどが雑草と一緒に情けも容赦もなく根こぎにされるのを見るとさすがの葉子もはらはらした。そして縁ぎわにしゃがんで柱にもたれながら、時にはあまりのおかしさに高く声をあげて笑いこけずにはいられなかった。

倉地は少し働き疲れると苔香園のほうをうかがったり、台所のほうに気を配どろったりしておいて、大急ぎで葉子のいる所に寄つて来た。そして泥どろになつた手を後ろに回して、上体を前に折り曲げて、葉子の鼻の先に自分の顔を突き出してお壺つぼぐち口をした。葉子もいたずららしく周囲に目を配つてその顔を両手にはさみながら

自分の口びるを与えてやった。倉地は勇み立つようにしてまた土の上にしやがみこんだ。

倉地はこうして一日働き続けた。日がかげるところになつて葉子も一緒に庭に出てみた。ただ乱暴な、しよう事なしのいたずら仕事とのみ思われたものが、片づいてみるとどこからどこまで要領を得ているのを発見するのだった。葉子が気にしていた便所の屋根の前には、庭のすみにあつた椎しいの木が移してあつたりした。玄関前の両側の花壇の牡丹ぼたんには、藁わらで器用に霜がこいさえしつらえてあつた。

こんなさびしい杉森の中の家にも、時々紅葉館のほうから音曲の音がくぐもるように聞こえて来たり、苔香園たいこうえんから薔薇ばらの香りかお

が風の具合でほんのりとおつて来たりした。ここにこうして倉地と住み続ける喜ばしい期待はひと向きに葉子の心を奪つてしまつた。

平凡な人妻となり、子を生み、葉子の姿を魔物か何かのように冷笑あざわらおうとする、葉子の旧友たちに対して、かつて葉子がいだいていた火のような憤りの心、腐つても死んでもあんなまねはして見せるものかと誓うように心であざけたその葉子は、洋行前の自分というものをどこかに置き忘れたように、そんな事は思いも出さないで、旧友たちの通とおつて来た道筋にひた走りに走り込もうとしていた。

## 二八

こんな夢のような楽しさがたわいもなく一週間ほどはなんの故障もひき起こさずに続いた。歓楽に耽溺たんできしやすい、従っていつでも現在をいちばん楽しく過ごすのを生まれながら本能としている葉子は、こんな有頂天うちようてんな境界きょうがいから一步でも踏み出す事を極端に憎んだ。葉子が帰ってから一度しか会う事のできない妹たち、休日にかけてしきりに遊びに来たいと訴え来るのを、病氣だとか、家の中が片づかないとか、口実を設けて拒んでしまった。木村からも古藤の所か五十川いそがわ女史の所かいそがわ五十川女史の所かいそがわにあててたよりが来ているには相違ないと思つたけれども、五十川女史はもとより古藤の

所にさえ住所が知らしてないので、それを回送してよこす事もできないのを葉子は知っていた。定子——この名は時々葉子の心を未練がましくさせないではなかった。しかし葉子はいつでも思い捨てるようにその名を心の中から振り落とそうと努めた。倉地の妻の事は何かの拍子ひょうしにつけて心を打った。この瞬間だけは葉子の胸は呼吸もできないくらい引き締められた。それでも葉子は現在目の前の歓楽をそんな心痛で破らせまいとした。そしてそのためには倉地にあらん限りの媚こびと親切とをささげて、倉地から同じ程度の愛撫あいぶをむさぼろうとした。そうする事が自然にこの難題に解決をつける導火線みちびにもなると思った。

倉地も葉子に譲らないほどの執着をもって葉子がささげる杯か

ら歡樂を飲み飽きようとするらしかった。不休の活動を命いのちとして  
いるような倉地ではあつたけれども、この家に移つて来てから、  
家を明けるような事は一度もなかつた。それは倉地自身が告白す  
るように破天荒はてんこうな事だつたらしい。二人は、初めて恋を知つた  
少年少女が世間せけんも義理も忘れ果てて、生命いのちさえ忘れ果てて肉体を  
破つてまでも魂を一つに溶かしたいとあせる、それと同じ熱情を  
ささげ合つて互い互いを楽しんだ。楽しんだというよりも苦しん  
だ。その苦しみを楽しんだ。倉地はこの家に移つて以来新聞も配  
達させなかつた。郵便だけは移転通知をして置いたので倉地の手  
もとに届いたけれども、倉地はその表書きさえ目を通そうとはし  
なかつた。毎日の郵便はつやの手によつて束たばにされて、葉子が自

分の部屋へやに定めた玄関わきの六畳ちがの違だい棚なにむなしく積み重ねられた。葉子の手もとには妹たちからのほかには一枚のはがきさえ来なかつた。それほど世間から自分たちを切り放しているのを二人たりとも苦痛とは思わなかつた。苦痛どころではない、それが幸いであり誇りであつた。門には「木村」とだけ書いた小さい門もん札さつが出してあつた。木村という平凡な姓は二人の楽しい巢を世間にあばくような事はないと倉地がいい出したのだった。

しかしこんな生活を倉地に長い間要求するのは無理だということとを葉子はずいに感づかねばならなかつた。ある夕食のちの後倉地は二階まの間で葉子を力強く膝ひざの上に抱き取つて、甘い私ささ語やきを取りかわしていた時、葉子が情に激して倉地に与えた熱い接せつ吻ぶんの

後にすぐ、倉地が思わず出たあくびをじつとかみ殺したのをいち早く見て取ると、葉子はこの種の歡樂がすでに峠を越した事を知った。その夜は葉子には不幸な一夜だった。かろうじて築き上げた永遠の城塞じょうさいが、はかなくも瞬時の蜃気楼しんきろうのように見る見るくずれて行くのを感じて、倉地の胸に抱かれながらほとんど一夜を眠らずに通してしまった。

それでも翌日になると葉子は快活になっていた。ことさら快活に振る舞おうとしていたには違いないけれども、葉子の倉地に対する溺愛できあいは葉子をしてほとんど自然に近い容易さをもつてそれをさせるに充分だった。

「きょうはわたしの部屋へやでおもしろい事して遊びましょう。いら

「つしやいな」

そういつて少女が少女を誘うように牡牛おうしのように大きな倉地を誘った。倉地は煙けむつたい顔をしながら、それでもそのあとからついて来た。

部屋はさすがに葉子のものであるだけ、どこことなく女性的な軟やわらか味を持つていた。東向きの腰高窓こしだかまどには、もう冬といつていい十一月末の日が熱のない強い光を射いつけて、アメリカから買って帰った上等の香水をふりかけた匂におい玉たまからかすかながらきわめて上品な芳芬ほうふんを静かに部屋の中にまき散らしていた。葉子はその匂い玉の下がつている壁ぎわの柱の下に、自分にあてがわれたきらびやかな縮緬ちりめんの座ぶとんを移して、それに倉地をすわらせ

ておいて、ちが違だいない柵だから郵便の束をいくつとなく取りおろして来た。「さあけさは岩戸のすきから世の中をのぞいて見るのよ。それもおもしろいでしょう」

といいながら倉地に寄り添った。倉地は幾十通とある郵便物を見たばかりでいいかげんげんなりした様子だったが、だんだんと興味を催して来たらしく、日の順に一つの束からほどき始めた。

いかにつまらない事務用の通信でも、交通遮しやだん断だんの孤島か、障壁で高く囲まれた美しい牢ろうご獄ごくに閉じこもっていたような二人に取っては予想以上の気散きさんじだった。倉地も葉子もありふれた文句にまで思い存分の批評を加えた。こういう時の葉子はそのほとばしるような暖かい才気のために世にすぐれておもしろ味の多い女

になつた。口をついて出る言葉言葉がどれもこれも絢爛けんらんな色彩に包まれていた。二日目の所には岡おかから来た手紙が現われ出た。船の中での札を述べて、とうとう葉子と同じ船で帰つて来てしまつたために、家いえもと元では相変わらずの薄志弱行と人毎ごとに思われるのが彼を深く責める事や、葉子に手紙を出したいと思つてあらゆる手がかりを尋ねたけれども、どうしてもわからないので会社で聞き合わせて事務長の住所を知り得たからこの手紙を出すという事や、自分はただただ葉子を姉と思つて尊敬もし慕いもしているのだから、せめてその心を通わすだけの自由が与えてもらいたいという事だのが、思い入つた調子で、下手へたな字体で書いてあつた。葉子は忘ぼうきやく却はの廢址はいしの中から、生なまなま々とした少年の大理石像を

掘りあてた人のようにおもしろがった。

「わたしが愛子の年ごろだったらこの人と心しんじゆう中ぐらいしているかもしれないですね。あんな心を持った人でも少しとし齡を取ると男はあなたみたいになっちまうのね」

「あなたとはなんだ」

「あなたみたいな悪党に」

「それはお門かどが違うだろう」

「違いますとも……御同様にといい方がいわ。私は心だけあなたに来て、からだはあの人にやるとほんとはよかつたんだが……」

「ばか！ おれは心なんぞに用はないわい」

「じゃ心のほうをあの人にやろうかしらん」

「そうしてくれ。お前にはいくつも心があるはずだから、ありつたけくれてしまえ」

「でもかわいそうだからいちばん小さそうなのを一つだけあなたの分に残して置きましょうよ」

そういつて二人は笑つた。倉地は返事を出すほうに岡のその手紙を仕分けた。葉子はそれを見て軽い好奇心がわくのを覚えた。

たくさんの中からは古藤のも出て来た。あて名は倉地だったけれども、その中からは木村から葉子に送られた分厚な手紙だけが封じられていた。それと同時に木村の手紙があとから二本まで現われ出た。葉子は倉地の見ている前で、そのすべてを読まないう

ちにずたずたに引き裂いてしまった。

「ばかな事をするじゃない。読んで見るとおもしろかったに」

葉子を占領しきった自信を誇りがな微笑に見せながら倉地はこういった。

「読むとせつかくの昼御飯がおいしくなくなりますもの」

そういつて葉子は胸むなくその悪いような顔つきをして見せた。二人はまたたわいなく笑った。

報正新報社からのもあつた。それを見ると倉地は、一時はもみ消しをしようと思つてわたりをつけたりしたのでこんなものが来ているのだがもう用はなくなつたので見るには及ばないといつて、今度は倉地が封のままに引き裂いてしまった。葉子はふと自分が

木村の手紙を裂いた心持ちを倉地のそれにあてはめてみたりした。しかしその疑問もすぐ過ぎ去ってしまった。

やがて郵船会社からあてられた江戸川紙の大きな封書が現われ

出た。倉地はちよつと眉まゆに皺しわをよせて少し躊躇ちゆうちよしたふうだつ

たが、それを葉子の手に渡して葉子に開封させようとした。何の気なしにそれを受け取った葉子は魔がさしたようにはつと思つた。とうとう倉地は自分のために……葉子は少し顔色を変えながら封を切つて中から卒業証書のような紙を二枚と、書記が丁寧に書いたらしい書簡一封とを探り出した。

はたしてそれは免職と、退職慰労との会社の辞令だつた。手紙には退職慰労金の受け取り方かたに関する注意が事々しい行書ぎようしょで

書いてあるのだった。葉子はなんといいていいかわからなかった。こんな恋の戯れの中からかほどな打撃を受けようとは夢にも思つてはいなかったのだ。倉地がここに着いた翌日葉子にいつて聞かせた言葉はほんとうの事だったのか。これほどまでに倉地は眞身しんみになつてくれていたのか。葉子は辞令を膝ひざの上に置いたまま下を向いて黙つてしまった。目がしらの所が非常に熱い感じを得たと思つた、鼻の奥が暖かくふさがつて来た。泣いている場合ではないと思ひながらも、葉子は泣かずにはいられないのを知り抜いていた。

「ほんとうに私が変わるうございました……許してくださいまし……  
：（そういううちに葉子はもう泣き始めていた）……私はもう日

陰の妾めかけとしても困い者としてもそれで充分に満足します。え、それでほんとうにようござんす。わたしはうれしい……」

倉地は今さら何をいうというような平気な顔で葉子の泣くのを見守っていたが、

「妾めかけも困い者もあるかな、おれには女はお前ひとり一人よりないんだからな。離縁状は横浜の土を踏むと一緒にかかあ嬢かかあに向けてぶっ飛ばしてあるんだ」

といててあぐらの膝ひざで貧乏ゆすりをし始めた。さすがの葉子も息気いきをつめて、泣きやんで、あきれて倉地の顔を見た。

「葉子、おれが木村以上にお前に深惚ふかぼれしているといつか船の中でいって聞かせた事があつたな。おれはこれでいぎとなると心に

もない事はいわないつもりだよ。双鶴館そうかくかんにいる間もおれは幾日も浜には行きはしなんだのだ。たいていは家内かないの親類たちとの談判で頭を悩ませられていたんだ。だがたいていいけりがついたからおれは少しばかり手回りの荷物だけ持って一足先ひとあしにここに越して来たのだ。……もうこれでええや。気がすつぱりしたわ。これには双鶴館のお内儀かみも驚きくさるだろうて……」

会社の辞令ですつかり倉地の心持ちをどん底ぞこから感じ得た葉子は、この上倉地の妻の事を疑うべき力は消え果てていた。葉子の顔は涙にぬれひたりながらそれをふき取りもせず、倉地にすり寄って、その両肩に手をかけて、ぴつたりと横顔を胸にあてた。夜となく昼となく思い悩みぬいた事がすでに解決されたので、葉子

は喜んで喜んで喜び足りないように思った。自分も倉地と同様に胸の中がすつきりすべきはずだった。けれどもそうは行かなかった。葉子はいつのまにか去られた倉地の妻その人のようなさびしい悲しい自分になっているのを発見した。

倉地はいとしくつてならぬようにエボニー色の雲のようにまっ黒にふつくりと乱れた葉子の髪の毛をやさしくなで回した。そしていつもに似ずしんみりした調子になって、

「とうとうおれも埋れ木うもぎになってしまった。これから地面の下で湿気を食いながら生きて行くよりほかにはない。——おれは負け惜しみをいうはきらいだ。こうしている今でもおれは家内や娘たちの事を思うと不憫ふびんに思うさ。それが無い事ならおれは人間じゃ

ないからな。……だがおれはこれでいい。満足この上なしだ。……自分ながらおれはばかになり腐ったらしいて」

そういつて葉子の首を固くかきいだいた。葉子は倉地の言葉を酒のように酔い心地ごこちにのみ込みながら「あなただけにそうはさせておきませんよ。わたしだって定子をみごとに捨てて見せますからね」と心の中で頭を下げつつ幾度もわびるように繰り返していた。それがまた自分で自分を泣かせる暗示となった。倉地の胸に横たえられた葉子の顔は、綿入れと襦袢じゅばんとを通して倉地の胸を暖かく侵すほど熱していた。倉地の目も珍しく曇っていた。そうして泣き入る葉子を大事そうにかかえたまま、倉地は上体を前後に揺すぶって、赤子あかごでも寝かしつけるようにした。戸外ではまた

東京の初冬に特有な風が吹き出たらしく、杉すぎもり森がごうごうと鳴りを立てて、枯れ葉が明るい障子に飛鳥のような影を見せながら、からからと音を立ててかわいた紙にぶつかつた。それは埃ほこり立だつた、寒い東京の街路を思わせた。けれども部屋へやの中は暖かだった。葉子は部屋の中が暖かなのか寒いのかさえわからなかつた。ただ自分の心が幸福にさびしさに燃えただれているのを知っていた。ただこのままで永遠は過ぎよかし。ただこのままで眠りのような死の淵ふちに陥れよかし。とうとう倉地の心と全く融とけ合つた自分の心を見いだした時、葉子の魂の願いは生きようという事よりも死のうという事だった。葉子はその悲しい願いの中に勇み甘んじておぼれて行つた。

## 二九

この事があつてからまたしばらくの間、倉地は葉子とただ二人ふたりの孤独に没頭する興味を新しくしたように見えた。そして葉子が家の中をいやが上にも整頓せいとんして、倉地のために住み心地ぐこちのいい巢を造る間に、倉地は天気さえよければ庭に出て、葉子の遣しやうよ遙うを楽しませるために精魂を尽くした。いつ苔香園たいこうえんとの話をつけたものか、庭のすみに小さな木戸を作つて、その花園の母屋おもやからずつと離れた小逕こみちに通いうる仕掛けをしたりした。二人は時々その木戸をぬけて目立たないように、広々とした苔香園の庭の

中をさまよつた。店の人たちは二人の心を察するようになり、なるべく二人から遠ざかるようにつとめてくれた。十二月の薔薇ばらの花園はさびしい廃園の姿を目の前に広げていた。可憐かれんな花を開いて可憐にな匂においを放つくせにこの灌かんぼく木はどこか強い執着を持つ植木だつた。寒さにも霜にもめげず、その枝の先にはまだ裏咲きの小さな花を咲かせようともがいているらしかつた。種々な色のつぼみがおおかた葉の散り尽くしたこずえにまで残っていた。しかしその花べんは存分に霜にしいたげられて、黄色に変色して互いに膠こ  
うちやく着して、恵み深い日の目にあつても開きようがなくなつていた。そんな間を二人は静かな豊かな心でさまよつた。風のない夕暮れなどには苔香園の表門を抜けて、紅葉館前のだらだら坂を東と

うしょうぐう

照宮のほうまで散歩するような事もあった。冬の夕方の事として人通りはまれで二人がさまよう道としてはこの上もなかった。葉子はたまたま行きあう女の人たちの衣装を物珍しくながめやうた。それがどんなに粗末な不格好な、いでたちであろうとも、女は自分以外の女の服装をながめなければ満足できないものだ。葉子は思いながらそれを倉地にいつてみたりした。つやの髪から衣服までを毎日のように変えて装わしていた自分の心持ちにも葉子は新しい発見をしたように思った。ほんとうは二人だけの孤独に苦しみ始めたのは倉地だけではなかったのか。ある時にはそのさびしい坂道の上下から、立派な馬車や抱え車かかぐるまが続々坂の中段を目ざして集まるのにあう事があった。坂の中段から紅葉館の下に当

たる辺に導かれた広い道の奥からは、能樂のうがくのはやしの音がゆかしげにもれて来た。二人は能樂堂での能の催しが終わりに近づいているのを知った。同時にそんな事を見たのでその日が日曜日である事にも気がついたくらい二人の生活は世間からかけ離れていた。

こうした楽しい孤独もしかしながら永遠には続き得ない事を、続かしてはならない事を鋭い葉子の神経は目ざとくさとつて行つた。ある日倉地が例のように庭に出て土いじりに精を出している間に、葉子は悪事でも働くような心持ちで、つやにいいつけてほごがみ復古紙を集めた箱を自分の部屋へやに持って来こさして、いつか読みもしないで破ってしまった木村からの手紙えを選び出すとする自

分を見いだしていた。いろいろな形に寸断された厚い西洋紙の断片が木村の書いた文句の断片をいくつもいくつも葉子の目にさらし出した。しばらくの間<sup>あいだ</sup>葉子は引きつけられるようにそういう紙片を手当たり次第に手に取り上げて読みふけた。半成の画<sup>え</sup>が美しいように断簡にはいい知れぬ情緒が見いだされた。その中に正しく織り込まれた葉子の過去が多少の力を集めて葉子に<sup>せま</sup>逼つて来るようにさえ思え出した。葉子はわれにもなくその思い出に浸つて行つた。しかしそれは長い時が過ぎる前にくずれてしまった。葉子はすぐ現実に取り返っていた。そしてすべての過去に<sup>は</sup>嘔き<sup>け</sup>気のような不快を感じて箱ごと台所に持つて行くとつやに命じて裏庭でその全部を焼き捨てさせてしまった。

しかしこの時も葉子は自分の心で倉地の心を思いやった。そしてそれがどうしてもいい徴候でない事を知った。そればかりではない。二人は霞を食ふたりかすみつて生きる仙せん人のようにしては生きていられないのだ。職業を失った倉地には、口にこそ出さないが、この問題は遠からず大きな問題として胸に忍ばせてあるのに違いない。事務長ぐらゐの給料で余財ができていたとは考えられない。まして倉地のように身分不相応な金づかいをしていた男にはなおの事だ。その点だけから見てもこの孤独は破られなければならぬ。そしてそれは結局二人のためにいい事であるに相違ない。葉子はそう思った。

ある晩それは倉地のほうから切り出された。長い夜を所在なさ

そうに読みもしない書物などをいじくっていたが、ふと思い出したように、

「葉子。一つお前の妹たちを家に呼ぼうじゃないか……それからお前の子供っていうのもぜひここで育てたいもんだな。おれも急に三人まで子を失くしたらさびしくってならんから……」

飛び立つような思いを葉子はいち早くもみごとに胸の中で押ししずめてしまった。そうして、

「そうですね」

といかにも興味なげにいつてゆつくりと倉地の顔を見た。

「それよりあなたのお子さんを一人なり二人なり来てもらったらいかが。……わたし奥さんの事を思うといつでも泣きます（葉子ひとり）」

はそういういながらも涙をいっばいに目にためていた)。けれどわたしは生きてる間は奥さんと呼び戻して上げてくださいななんて……そんな偽善者じみた事はいけません。わたしにはそんな心持ちのみじんもありませんもの。お気の毒なという事と、二人がこうなってしまったという事とは別物ですものねえ。せめては奥さんがわたしを誚のろい殺そうとでもしてくだされば少しは気持ちがいんだけれども、しとやかにしてお里に帰っていらつしやると思ふとつい身につまされてしまいます。だからといってわたしは自分が命をなげ出して築き上げた幸福を人に上げる気にはなれませぬ。あなたがわたしをお捨てになるまではね、喜んでわたしはわたしを通すんです。……けれどもお子さんならわたしほんとうに

ちつとも構いはしない事よ。どうお呼び寄せになつては？」

「ばかな。今さらそんな事ができてたまるか」倉地はかんで捨てるようにそういつて横を向いてしまった。ほんとうをいうと倉地の妻の事をいつた時には葉子は心の中をそのままいつていたのだ。その娘たちの事をいつた時にはまざまざとした虚言うそをついていたのだ。葉子の熱意は倉地の妻をおわせるものはすべて憎かつた。倉地の家のほうから持ち運ばれた調度すら憎かつた。ましてその子が呪のろわしくなくつてどうしよう。葉子は単に倉地の心を引いてみたいばかりに怖こわ々わながら心にもない事をいつてみたのだつた。倉地のかんで捨てるような言葉は葉子を満足させた。同時に少し強すぎるような語調が懸念でもあつた。倉地の心底をすっかり見

て取ったという自信を得たつもりでいながら、葉子の心は何か機おりにつけてこうぐらついた。

「わたしがぜびというんだから構わないじゃありませんか」

「そんな負け惜しみをいわんで、妹たちなり定子なりを呼び寄せようや」

そういつて倉地は葉子の心をすみずみまで見抜いてるように、大きく葉子を包みこむように見やりながら、いつもの少し渋いような顔をしてほほえんだ。

葉子はいい潮時を見計らって巧みにも不承不承ふしようぶしようそうに倉地の言葉に折れた。そして田島の塾じゆくからいよいよ妹たち二人ふたりを呼び寄せる事にした。同時に倉地はその近所に下宿するのを余儀なく

された。それは葉子が倉地との関係をまだ妹たちに打ち明けてなかつたからだ。それはもう少し先に適当な時機を見計らつて知らせるほうがいいという葉子の意見だつた。倉地にもそれに不服はなかつた。そして朝から晩まで一緒に寝起きをするよりは、離れた所に住んでいて、氣の向いた時にあうほうがどれほど二人の間の戯れの心を満足させるかしのれないのを、二人はしばらくの間の言葉どおりの同棲どうせいの結果として認めていた。倉地は生活をささえて行く上にも必要であるし、不休の活動力を放射するにも必要なので解職になつて以来何か事業の事を時々思いふけていた。うだつたが、いよいよ計画が立つたのでそれに着手するためには、当座の所、人々の出入りに葉子の顔を見られない所で事務を取る

のを便宜としたらしかつた。そのためにも倉地がしばらくなりとも別居する必要があつた。

葉子の立場はだんだんと固まつて来た。十二月の末に試験が済むと、妹たちは田島の塾じゆくから少しばかりの荷物を持つて帰つて来た。ことに貞世の喜びといつてはなかつた。二人は葉子の部屋へやだつた六畳の腰窓こしまどの前に小さな二つの机を並べた。今までなんとなく遠慮がちだつたつやも生まれ代わつたように快活なはきはきした少女になつた。ただ愛子だけは少しもうれしきを見せないで、ただ慎み深く素直すなおだつた。

「愛ねえさんうれしいわねえ」

貞世は勝ち誇るもののごとく、縁側の柱によりかかつてじつと

冬枯れの庭を見つめてゐる姉の肩に手をかけながらより添った。

愛子は ひとところ 一 所 をまたたきもしないで見つめながら、

「えゝ」

と齒切れ悪く答えるのだった。貞世はじれったそうに愛子の肩をゆすりながら、

「でもちつともうれしそうじゃないわ」

と責めるようにいった。

「でもうれしいんですもの」

愛子の答えは冷然としていた。十畳の座敷に持ち込まれた こくり 行李を明けて、よごれ物などを選び分けていた葉子はその様子をちらと見たばかりで腹が立った。しかし来たばかりのものをたしなめ

るでもないと思つて虫を殺した。

「なんて静かな所でしよう。塾じゆくよりもきつと静かよ。でもこんな  
に森があつちや夜になつたらさびしいわねえ。わたしひとりでお  
便はばかり所しよに行けるかしらん。……愛ねえさん、そら、あすこに木戸  
があるわ。きつと隣のお庭うちに行けるのよ。あの庭に行つてもいい  
のおねえ様。だれのお家うちむこうは？……」

貞世は目にはいるものはどれも珍しいというようにひとりでし  
やべつては、葉子にも愛子にもなく質問を連発した。そこが  
薔薇ばらの花園であるのを葉子から聞かされると、貞世は愛子を誘つ  
て庭下駄げたをつつかけた。愛子も貞世に続いてそつちのほうに出か  
ける様子だった。

その物音を聞くと葉子はもう我慢ができなかつた。

「愛さんお待ち。お前さん方がたのものがまだ片づいてはいませんよ。遊び回るのは始末をしてからになさいな」

愛子は従順に姉の言葉に従つて、その美しい目を伏せながら座敷の中にはいつて来た。

それでもその夜の夕食は珍しくにぎやかだつた。貞世がはしやぎきつて、胸いっぱいのものを前後も連絡もなくしやべり立てるので愛子さえも思わずにやりと笑つたり、自分の事を容赦なくいわれたりすると恥ずかしそうに顔を赤らめたりした。

貞世はうれしさに疲れ果てて夜の浅いうちに寢床にはいつた。

明るい電燈の下に葉子と愛子と向かい合つと、久しくあわないで

いた骨こつ肉の人々の間にのみ感ぜられる淡い心置きを感じた。葉子は愛子にだけは倉地の事を少し具体的に知らしておくほうがいいと思つて、話のきっかけに少し言葉を改めた。

「まだあなた方がたにお引き合わせがしてないけれども倉地つていう方かたね、絵島丸の事務長の……（愛子は従順に落ち着いてうなずいて見せた）……あの方が今木村さんに成りかわつてわたしの世話をを見てくださるのよ。木村さんから頼まれになったものだから、迷惑そうにもなく、こない家まで見つけてくださつたの。木村さんは米国でいろいろ事業を企てていらつしやるんだけど、どうもお仕事がうまく行かないで、お金が注つぎ込みにはばかりなつていて、とてもこつちには送つてくたされないので、わた

しの家はあなたも知つてのとおりでしょう。どうしてもしばらくの間は御迷惑でも倉地さんに万事を見ていただかなければならぬのだから、あなたもそのつもりでいてちようだいよ。ちよくちよくここにも来てくださるからね。それにつけて世間では何かくだらないうわさをしているに違いないが、愛さんの塾じゆくなんかではなんにもお聞きではなかつたかい」

「いゝえ、わたしたちに面と向かつて何かおっしゃる方かたは一人もありませんわ。でも」

と愛子は例の多恨らしい美しい目を上目うわめに使つて葉子をぬすみ見るようにしながら、

「でも何しろあんな新聞が出たもんですから」

「どんな新聞？」

「あらおねえ様御存じなしなの。報正新報に続き物でおねえ様とその倉地という方の事が長く出ていましたのよ」

「へーえ」

葉子は自分の無知にあきれるような声を出してしまった。それは実際思いもかけぬというよりは、ありそうな事ではあるが今の今まで知らずにいた、それに葉子はあきれたのだった。しかしそれは愛子の目に自分を非常に無辜むこらしく見せただけの利益はあった。さすがの愛子も驚いたらしい目をして姉の驚いた顔を見やっ

「いつ？」

「今月の始めごろでしたかしらん。だもんですから皆さん方がたの間ではたいへんな評判らしいんですの。今度も塾じゆくを出て来年から姉の所から通いますと田島先生に申し上げたら、先生も家の親類たちに手紙やなんかでだいぶお聞き合わせになったようですのよ。そしてきょうわたしたちを自分のお部屋へやにお呼びになって『わたしはお前さん方がたを塾から出したくはないけれども、塾に居続ける気はないか』とおっしゃるのよ。でもわたしたちはなんだか塾にいるのが肩身が……どうしてもやになつたもんですから、無理にお願いして帰つて来てしまいましたの」

愛子はふだんの無口に似ずこういう事を話す時にはちゃんと筋目が立っていた。葉子には愛子の沈んだような態度がすっかり読

めた。葉子の憤怒は見る見るその血相を変えさせた。田川夫人という人はどこまで自分に対して執念を寄せようとするのだろうか。それにしても夫人の友だちには五十川いそがわという人もあるはずだ。もし五十川のおばさんがほんとうに自分の改かいしゆん悛おつとを望んでいくれるなら、その記事の中止なり訂正なりを、夫田川の手を経てさせる事はできるはずなのだ。田島さんもなんとかしてくれようがありそうなものだ。そんな事を妹たちにいうくらいならなぜ自分に一ひとこと言忠告でもしてはくれないのだ（ここで葉子は帰朝以来妹たちを預かってもらった礼をしに行っていないなかつた自分を顧みた。しかし事情がそれを許さないのだろうぐらいは察してくれてもよさそうなものだと思つた）それほど自分はもう世間から見くびら

れ除け者にされているのだ。葉子は何かたたきつけるものでもあれば、そして世間というものが何か形を備えたものであれば、力の限り得物えものをたたきつけてやりたかった。葉子は小刻みに震えながら、言葉だけはしとやかに、

「古藤さんは」

「たまにおたよりをくださいます」

「あなた方がたも上げるの」

「えゝたまに」

「新聞の事を何かいって来たかい」

「なんにも」

「この番地は知らせて上げて」

「いゝえ」

「なぜ」

「おねえ様の御迷惑になりはしないかと思つて」

この小娘はもうみんな知つてゐる、と葉子は一種のおそれと警戒をもつて考へた。何事も心得ながら白々しらじらしく無邪氣を装つてゐるらしいこの妹が敵の間かんちよう諜しのようにも思へた。

「今夜はもうお休み。疲れたでしょう」

葉子は冷然として、灯ひの下にうつむいてきちんとすわつてゐる妹を尻目しりめにかけた。愛子はしとやかに頭を下げて従順に座を立つて行つた。

その夜十一時ごろ倉地が下宿のほうから通かよつて来た。裏庭をぐ

るつと回って、毎夜戸じまりをせずにおく張り出しの六畳の間まから上がって来る音が、じれながら鉄びんの湯ゆげ気を見ている葉子の神経にすぐ通じた。葉子はすぐ立ち上がって猫ねこのように足音を盗みながら急いでそつちに行つた。ちようど敷居を上がろうとしていた倉地は暗い中に葉子の近づく気配を知つて、いつものとおり、立ち上がりざまに葉子を抱擁しようとした。しかし葉子はそうはさせなかつた。そして急いで戸を締めきつてから、電灯のスイッチをひねつた。火の気けのない部屋へやの中は急に明るくなつたけれど、も身を刺すように寒かつた。倉地の顔は酒に酔っているように赤かつた。

「どうした顔色がよくないぞ」

倉地はいぶかるように葉子の顔をまじまじと見やりながらそう  
いった。

「待つてください、今わたしここに火鉢ひばちを持って来ますから。妹  
たちが寝ばなだからあすこでは起こすといけませんから」

「そういいながら葉子は手あぶりに火をついで持つて来た。そし  
て酒肴しゅこうもそこにととのえた。

「色が悪いはず……今夜はまたすっかり向かつ腹が立ったんです  
もの。わたしたちの事が報正新報にみんな出てしまったのを御存  
じ？」

「知つとるとも」

倉地は不思議でもないという顔をして目をしばだいた。

「田川の奥さんという人はほんとうにひどい人ね」

葉子は齒をかみくたくように鳴らしながらいった。

「全くあれは方図ほうずのない利口ばかだ」

そう吐き捨てるようにいいながら倉地の語る所によると、倉地は葉子に、きつとそのうち掲載される「報正新報」の記事を見せまいために引越して来た当座わざと新聞はどれも購読しなかつたが、倉地だけの耳へはある男（それは絵島丸の中で葉子の身上を相談した時、甲斐絹かいきのどてらを着て寢床の中に二つに折れ込んでいたその男であるのがあとで知れた。その男は名を正井まさいといった）からつやの取り次ぎで内秘ないひに知らされていたのだそうだ。郵船会社はこの記事が出る前から倉地のためにまた会社自身のた

めに、極力もみ消しをしたのだけれども、新聞社ではいつこう応ずる色がなかった。それから考えるとそれは当時新聞社の慣用手段のふところ金がねをむさぼろうという目論見もくろみばかりから来たのでない事だけは明らかになった。あんな記事が現われてはもう会社としても黙つてはいられなくなつて、大急ぎで詮議せんぎをした結果、倉地と船医の興録こうろくとが処分される事になつたというのだ。

「田川の嬢かかあのいたずらに決まつとる。ばかにくやしかつたと見えて。……が、こうなりや結局パツとなつたほうがいいわい。みんな知つとるだけ一々申し訳をいわずと済む。お前はまたまだそれしきの事にくよくよしとるんか。ばかな。……それより妹たちは来とるんか。寝顔にでもお目にかかつておこうよ。写真——船

の中にあつたね——で見てもかわいらしい子たちだったが……」

ふたり

二人はやおらその部屋を出た。そして十畳と茶の間との隔ての襖ふすまをそつと明けると、二人の姉妹は向かい合つて別々の寢床にすやすやと眠っていた。緑色の笠かさのかかった、電灯の光は海の底のように部屋の中を思わせた。

「あつちは」

「愛子」

「こつちは」

「貞世」

葉子は心ひそかに、世にも艶つややかなこの少女ふたり二人を妹に持つ事に誇りを感じて暖かい心になっていた。そして静かに膝ひざをついて、

切り下げにした貞世の前髪をそつとなであげて倉地に見せた。倉地は声を殺すのに少なからず難儀なふうで、

「そうやるとこつちは、貞世は、お前によく似とるわい。……愛子は、ふむ、これはまたすてきな美人じゃないか。おれはこんなのは見た事がない……お前の二の舞いでもせにや結構だが……」

そういいながら倉地は愛子の顔ほどもあるような大きな手をさし出して、そうしたい誘惑を退けかねるようになり、  
紅べにつばき椿のような紅あかいその口びるに触れてみた。

その瞬間に葉子はぎよつとした。倉地の手が愛子の口びるに触れた時の様子から、葉子は明らかに愛子がまだ目ざめていて、寝たふりをしているのを感じていたと思ったからだ。葉子は大急ぎで

倉地に目くばせしてそつとその部屋を出た。

## 三〇

「僕ぼくが毎日——毎日とはいわず毎時間あなたに筆を執らないのは執りたくないから執らないのではありません。僕は一日あなたに書き続けていてもなお飽き足りないのです。それは今の僕の境きょうがい界では許されない事です。僕は朝から晩まで機械のごとく働かねばなりませんから。

あなたが米国を離れてからこの手紙はたぶん七回目の手紙としてあなたに受け取られると思います。しかし僕の手紙はいつ

までも暇をぬすんで少しづつ書いていますので、僕からいうと日に二度も三度もあなたにあてて書いてるわけになるので。しかしあなたはあの後の一回の音信も恵んでくださらない。

僕は繰り返し繰り返しあります。たといあなたにどんな過失  
どんな誤謬ごびゆうがあろうとも、それを耐え忍び、それを許す事において  
は主キリスト以上の忍耐力を持つているのを僕は自ら信じています。誤解しては困ります。僕がいかなる人に対しても  
かかる力を持つているというのではないのです。ただあなたに  
対してです。あなたはいつでも僕の品性を尊とうとく導いてくれます。  
僕はあなたによって人がどれほど愛しうるかを学びました。あなた  
によって世間という墮落とか罪悪とかいう者がどれほどま

で寛容の余裕があるかを学びました。そうしてその寛容によって、寛容する人自身がどれほど品性を陶冶とうやされるかを学びました。僕はまた自分の愛を成就するためにはどれほどの勇者になりうるかを学びました。これほどまでに僕を神の目に高めてくださったあなたが、僕から万一にも失われるというのは想像ができません。神がそんな試練を人の子に下される残虐はなさらないのを僕は信じています。そんな試練に堪たえるのは人力以上ですから。今の僕からあなたが奪われるというのは神が奪われるのと同じ事です。あなたは神だとはいいません。しかしあなたを通してのみ僕は神を拝む事ができるのです。

時々僕は自分で自分をあわれんでしまう事があります。自分

自身だけの力と信仰とですべてのものを見る事ができたらどれほど幸福で自由だろうと考えると、あなたをわずらわさなければ一步を踏み出す力をも感じ得ない自分の束縛を呪のろいたくもありません。同時にそれほど慕わしい束縛は他にない事を知るのです。束縛のない所に自由はないといった意味でああなたの束縛は僕の自由です。

あなたは——いったん僕に手を与えてくださると約束なさつたあなたは、ついに僕を見捨てようとしておられるのですか。どうして一回の音信も恵んでくださらないのです。しかし僕は信じて疑いません。世にもし真理があるならば、そして真理が最後の勝利者ならばあなたは必ず僕に還かえつてくださるに違い

ないと。なぜなれば、僕は誓います。——主よこの僕を見守りたまえ——僕はあなたを愛して以来断じて他の異性に心を動かさなかつた事を。この誠意があなたによつて認められないわけではないと思います。

あなたは従来暗いいくつかの過去を持っています。それが知らず知らずあなたの向上心を躓ちゆうちよ躓ちよさせ、あなたをやや絶望的にしているのではないのですか。もしそうならあなたは全然誤ごびゆう謬ゆうに陥おちつていないと思います。すべての救いは思いきつてその中から飛び出すほかにはないのでしよう。そこに停滞しているのはそれだけあなたの暗い過去を暗くするばかりです。あなたは僕に信頼を置いてくださる事はできないのでしようか。人

類の中に少なくとも一人、<sup>ひとり</sup>あなたのすべての罪を喜んで忘れようと両手を広げて待ち設けているもののあるのを信じてくださる事はできないでしょうか。

こんな下らない理屈はもうやめましょう。

昨夜書いた手紙に続けて書きます。けさハミルトン氏の所から至急に来いという電話がかかりました。シカゴの冬は予期以上に寒いのです。仙台どころの比ではありません。雪は少しもないけれども、イリー湖を多湖地方から渡つて来る風は身を切るようでした。僕は外套<sup>がいとう</sup>の上にまた大外套<sup>かさぎ</sup>を重ね着していながら、風に向いた皮膚にしみとおる風の寒さを感じました。ハミルトン氏の用というのは来年セントルイスに開催される大規

模な博覧会の協議のため急にそこに赴く<sup>おもむ</sup>ようになったから同行しろというのでした。僕は旅行の用意はなんらしていなかったが、ここにアメリカニズムがあるのだと思つてそのまま同行する事にしました。自分の部屋<sup>へや</sup>の戸に鍵<sup>かぎ</sup>もかけずに飛び出したのですからバビコック博士<sup>はかせ</sup>の奥さんは驚いているでしょう。しかしさすがに米国です。着のみ着のまままでここまで来ても何一つ不自由を感じません。鎌倉<sup>かまくら</sup>あたりまで行くのにも膝<sup>ひざ</sup>かけから旅カバンまで用意しなければならぬのですから、日本の文明はまだなかなかのものです。僕たちはこの地に着くと、停車場内の化粧室<sup>ひげ</sup>で髭<sup>ひげ</sup>をそり、靴<sup>くつ</sup>をみがかせ、夜会に出ても恥ずかしくないしたくができてしまいました。そしてすぐ協議会に出席

しました。あなたも知っておられるとおりでドイツ人のあのへんにおける勢力は偉いものです。博覧会が開けたら、われわれは米国に対してよりもむしろこれらのドイツ人に対して禪裸きんこん一番する必要がありません。ランチの時僕はハミルトン氏に例の日本に買い占めてあるキモノその他の話をもう一度しました。博覧会を前に控えているのでハミルトン氏も今度は乗り気になつてくれました、高島屋たかしまやと連絡をつけておくためにとにかく品物を取り寄せて自分の店でさばかしてみようといつてくれました。これで僕の財政は非常に余裕ができるわけです。今まで店がなかったばかりに、取り寄せても荷厄にやつかい介だつたものですが、ハミルトン氏の店で取り扱つてくれれば相当に売れるのはわか

っています。そうなたら今までと違つてあなたのほうにも足りないながら仕送りをして上げる事ができましよう。さつそく電報を打つていちばん早い船便で取り寄せる事にしましたから不日ふじつちやくに着荷する事と思つています。

今は夜もだいぶふけました。ハミルトン氏は今夜もきようおう饗応

に呼ばれて出かけました。大きらいなテーブル・スピーチになやまされているのでしよう。ハミルトン氏は実にシャープなビジネススマンライキな人です。そして熱心な正統派の信仰を持つた慈善家です。僕はことのほか信頼されちようほう重宝じゆうほうがられています。そこから僕のライフ・キャリアアを踏み出すのは大なる利益です。僕の前途には確かに光明が見え出して来ました。

あなたに書く事は底止ていしなく書く事です。しかしあすの奮闘的生活（これは大統領ルーズベルトの著書の“Strenuous Life”を訳してみた言葉です。今この言葉は当地の流行語になっていきます）に備えるために筆を止めねばなりません。この手紙はあなたにも喜びを分けていただく事ができるかと思えます。

きのうセントルイスから帰つて来たら、手紙がかなり多数届いていました。郵便局の前を通るにつけ、郵便箱を見るにつけ、きやくふ脚夫に行きあうにつけ、僕はあなたを連想しない事はありません。自分の机の上に来信を見いだした時はなおさらの事です。僕は手紙の束の間あいだをかき分けてあなたの手跡を見いだそうとつとめました。しかし僕はまた絶望に近い失望に打たれなければ

なりませんでした。僕は失望はしましょう。しかし絶望はしません。できません葉子さん、信じてください。僕はロングフェローのエヴァンジェリンの忍耐と謙遜けんそんとをもってあなたが僕の心をほんとうに汲くみ取ってくださいる時を待っています。しかし手紙の束の中からはわずかに僕を失望から救うために古藤君と岡君との手紙が見いだされました。古藤君の手紙は兵営に行く五日前に書かれたものでした。いまだにあなたの居所を知ることができないので、僕の手紙はやはり倉地氏にあてて回送して」と書いてあります。古藤君はそうした手続きを取るのをはなはだしく不快に思っているようです。岡君は人にもらし得ない家庭内の紛ぶん擾じょうや周囲から受ける誤解を、岡君らしく過敏

に考え過ぎて弱い體質をますます弱くしているようです。書いてある事にはところどころ僕の持つ常識では判断しかねるような所があります。あなたからいつか必ず消息が来るのを信じきって、その時をただ一つの救いとして待つています。その時の感謝と喜悦きえつとを想像で描き出して、小説でも読むように書いてあります。僕は岡君の手紙を読むと、いつでも僕自身の心がそのまま書き現わされているように思つて涙を感じます。

なぜあなたは自分をそれほどまで韜晦とうかいしておられるのか、それには深いわけがある事と思ひますけれども、僕にはどちらの方面から考えても想像がつきません。

日本からの消息はどんな消息も待ち遠しい。しかしそれを見

終わった僕はきつと憂鬱ゆううつに襲われます。僕にもし信仰が与えられていなかったら、僕は今どうなっていたかを知りません。

前の手紙との間に三日がたちました。僕はバビコック博士夫はかせ婦と今夜ライシウム座にウエルシ嬢の演じたトルストイの「復活」を見物しました。そこにはキリスト教徒として目をそむけなければならぬような場面がないではなかったけれども、終わりのほうに近づいて行つての莊嚴さは見物人のすべてを捕捉ほそくしてしまいました。ウエルシ嬢の演じた女主人公は真に迫りすぎていくくらいでした。あなたがもしまだ「復活」を読んでいられないのなら僕はぜひそれをお勧めします。僕はトルストイの「懺悔ざんげ」をK氏の邦文訳で日本にいる時読んだだけですが、

あの芝居しばいを見てから、暇ひまがあったらもつと深くいろいろ研究したいと思うようになりました。日本ではトルストイの著書はまだまだ多くの人に知られていないと思いますが、少なくとも「復活」だけは丸善まるぜんからでも取り寄せて読んでいただきたい、あなたを啓発する事が必ず多いのは請け合いますから。僕らは等しく神の前に罪人つみびとです。しかしその罪を悔い改める事によつて等しく選ばれた神の僕しもべとなりうるのです。この道のほかには人の子の生活を天国に結び付ける道は考えられません。神を敬い人を愛する心の萎なえてしまわないうちにお互いに光を仰あやごうではありませんか。

葉子さん、あなたの心に空虚なり汚点どたんなりがあつても万望どうぞ絶

望しないでくださいよ。あなたをそのままに喜んで受け入れて、——苦しみがあればあなたと共に苦しみ、あなたに悲しみがあればあなたと共に悲しむものがここに一人ひとりいる事を忘れないでください。僕は戦って見せます。どんなにあなたが傷ついていても、僕はあなたをかばって勇ましくこの人生を戦って見せます。僕の前に事業が、そして後ろにあなたがあれば、僕は神の最も小さい僕しもべとして人類の祝福のために一生をささげます。

あゝ、筆も言語もついに無益です。火と熱する誠意と祈りとをこめて僕はここにこの手紙を封じます。この手紙が倉地氏の手からあなたに届いたら、倉地氏にもよろしく伝えてください。倉地氏に迷惑をおかけした金銭上の事については前便に書いて

おきましたから見てくださつたと思います。願わくは神われらと共に在おわしたまわん事を。

明治三十四年十二月十三日」

倉地は事業のために奔走しているのでその夜は年越しに來こないと下宿から知らせて來た。妹たちは除夜の鐘を聞くまでは寝ないなどといつていたがいつのまにかねむくなつたと見えて、あまり静かなので二階に行つて見ると、二人ふたりとも寢床にはいつていた。つやには暇が出してあつた。葉子に内ないしよ所で「報正新報」を倉地に取り次いだのは、たとい葉子に無益な心配をさせないためだという倉地の注意があつたためであるにもせよ、葉子の心持ちを損じもし不安にもした。つやが葉子に対しても素直な敬愛の情をい

だいていたのは葉子もよく心得ていた。前にも書いたように葉子は一目見た時からつやが好きだった。台所などをさせずに、小間使いとして手回りの用事でもさせたら顔かたちといい、性質といい、取り回しといいこれほど理想的な少女はないと思うほどだった。つやにも葉子の心持ちはすぐ通じたらしく、つやはこの家のために陰日向かげひなた向なくせつせと働いたのだった。けれども新聞の小さな出来事一つが葉子を不安にってしまった。倉地が双鶴館そうかくかんの女将おかみに対しても気の毒がるのを構わず、妹たちに働かせるのがかえっていいからとの口実のもとに暇をやってしまったのだった。で勝手のほうにも人気ひとけはなかった。

葉子は何を原因ともなくそのころ気分がいらいらしがちで寝付

きも悪かつたので、ぞくぞくしみ込んで来るような寒さにも係わらず、火鉢ひばちのそばにいた。そして所在ないままにその日倉地の下宿から届けて来た木村の手紙を読んで見る気になったのだ。

葉子は猫板ねこいたに片肘ひじを持たせながら、必要もないほど高価だと思われる厚い書牋紙しよせんしに大きな字で書きつづつてある木村の手紙を一枚一枚読み進んだ。おとなびたようで子供っぽい、そうかと思うと感情の高潮を示したと思われる所も妙に打算的な所が離れ切らないと葉子に思わせるような内容だった。葉子は一々精読するのがめんどろなぎょうので行から行に飛び越えながら読んで行つた。そして日付けの所まで来ても格別な情緒を誘われはしなかった。しかし葉子はこの以前倉地の見ている前でしたようにずたずたに

引き裂いて捨ててしまう事はしなかった。しなかったどころではない、その中には葉子を考えさせるものが含まれていた。木村は遠からずハミルトンとかいう日本の名誉領事をしている人の手から、日本を去る前に思いきってして行った放資の回収をしてもらえるのだ。不即不離の関係を破らずに別れた自分のやりかたはやはり凶にあたっていたと思つた。「宿屋きめずに草鞋わらじを脱ぐばかをしない必要はもうない、倉地の愛は確かに自分の手に握り得たから。しかし口にこそ出しはしないが、倉地は金の上ではなかりに苦しんでいるに違いない。倉地の事業というのは日本じゅうの開港場にいる水みず先さき案内業者の組合を作つて、その実権を自分の手に握ろうとするのらしかつたが、それが仕上がるのは短い日

月にはできる事ではなさそうだった。ことに時節が時節がら正月にかかっているから、そういうものの設立にはいちばん不便な時らしくも思われた。木村を利用してやろう。

しかし葉子の心の底にはどこかに痛みを覚えた。さんざん木村を苦しめ抜いたあげくに、なおあの根の正直な人間をたぶらかしてなけなしの金をしぼり取るのは俗にいう「つつもたせ」の所業と違つてはいない。そう思うと葉子は自分の墮落を痛く感ぜずにはいられなかった。けれども現在の葉子にいちばん大事なものは倉地という情人のほかにはなかった。心の痛みを感じながらも倉地の事を思うとなお心が痛かった。彼は妻子を犠牲に供し、自分の職業を犠牲に供し、社会上の名誉を犠牲に供してまで葉子の愛

におぼれ、葉子の存在に生きようとしてくれているのだ。それ  
思うと葉子は倉地のためになんでもして見せてやりたかった。時  
によるとわれにもなく侵して来る涙ぐましい感じをじつところえ  
て、定子に会いに行かずにいるのも、そうする事が何か宗教上の  
願がけで、倉地の愛をつなぎとめる禁<sup>まじない</sup>厭<sup>い</sup>のように思えるからし  
ている事だった。木村にだつていつかは物質上の償い目に対して  
物質上の返礼だけはする事ができるだろう。自分のする事は「つ  
つもたせ」とは形が似ているだけだ。やってやれ。そう葉子は決  
心した。読むでもなく読まぬでもなく手に持ってながめていた手  
紙の最後の一枚を葉子は無意識のようにほたりと膝<sup>ひざ</sup>の上に落とし  
た。そしてそのままじつと鉄びんから立つ湯気<sup>ゆげ</sup>が電燈の光の中に

多様な渦紋かもんを描いては消え描いては消えするのを見つめていた。

しばらくしてから葉子は物うげに深い吐息を一つして、上体をひねって柵たなの上から手文庫を取りおろした。そして筆をかみながらまた上目でじつと何か考えるらしかった。と、急に生きかえつたようにはきはきなつて、上等のシナ墨を眼がんの三つまではいったまんまるい硯すずりにすりおろした。そして軽く麝じゃ香こうの漂うなかで男の字のような健筆で、精巧な雁皮紙がんびしの巻紙に、一気に、次のようにしたためた。

「書けばきりがございません。伺えばきりがございません。だから書きもいたしませんでした。あなたのお手紙もきよういただいたものまでは拝見せずにはずたずたに破って捨ててしまいま

した。その心をお察しく下さいまし。

うわさにもお聞きとは存じますが、わたしはみごとに社会的に殺されてしまいました。どうしてわたしがこの上あなたの妻と名乗れましょう。自業自得と世の中では申します。わたしも確かにそう存じています。けれども親類、縁者、友だちにまで突き放されて、二人の妹をかかえてみますと、わたしは目もくらんでしまいます。倉地さんだけがどういう御縁かお見捨てなくわたしども三人をお世話くださっています。こうしてわたしはどこまで沈んで行く事でございますよう。ほんとうに自業自得でございます。

きよう拝見したお手紙もほんとうは読まずに裂いてしまうの

でございましたけれども……わたしの居所をどなたにもお知らせしないわけなどは申し上げるまでもございますまい。

この手紙はあなたに差し上げる最後のものかと思われます。

お大事にお過ごし遊ばしませ。陰ながら御成功を祈り上げます。  
ただいま除夜の鐘が鳴ります。

おおみそか  
大晦日の夜

木村様

葉より」

葉子はそれを日本風のふう状じょう袋ぶくろに収めて、毛筆で器用に表記を書いた。書き終わると急にいらいらし出して、いきなり両手に握ってひと思いに引き裂こうとしたが、思い返して捨てるようにそ

れを畳の上になげ出すと、われにもなく冷やややかな微笑が口じりをかすかに引きつらした。

葉子の胸をどきんとさせるほど高く、すぐ最寄りもよにある増上ぞうじよ寺うじの除夜の鐘が鳴り出した。遠くからどこの寺のともしれない鐘の音がそれに応ずるように聞こえて来た。その音に引き入れられて耳を澄ますと夜の沈黙しじまの中にも声はあつた。十二時を打つばんぼん時計、「かるた」を読み上げるらしいはしやいだ声、何に驚いてか夜なきをする鶏……葉子はそんな響きを探り出すと、人の生きているというのが恐ろしいほど不思議に思われ出した。

急に寒さを覚えて葉子は寝じたくに立ち上がった。

## 三一

寒い明治三十五年の正月が来て、愛子たちの冬期休暇も終わりに近づいた。葉子は妹たちを再び田島塾じゆくのほうに帰してやる気にはなれなかった。田島という人に対して反感をいだいたばかりではない。妹たちを再び預かってもらう事になれば葉子は当然あいさ挨拶あいさつに行つて来くべき義務を感じたけれども、どういうものかそれがはばかられてできなかつた。横浜の支店長の永井ながいとか、この田島とか、葉子には自分ながらわけのわからない苦手にがての人があつた。その人たちが格別偉い人だとも、恐ろしい人だとも思うのではなかつたけれども、どういうものかその前に出る事に気が引けた。

葉子はまた妹たちが言わず語らずのうちに生徒たちから受けねばならぬ迫害を思うと不憫ふびんでもあった。で、毎日通学するには遠すぎるという理由のもとにそこをやめて、飯倉いいくらにある幽蘭ゆうらん女学校というのに通わせる事にした。

ふたり二人が学校に通い出すようになる、倉地は朝から葉子の所で退校時間まで過ごすようになった。倉地の腹心の仲間たちもちよいちよい出入りした。ことに正井という男は倉地の影のように倉地のいる所には必ずいた。例の水先案内業者組合の設立について正井がいちばん働いているらしかった。正井という男は、一見放漫なように見えていて、剃刀かみそりのように目はしのきく人だった。その人が玄関からはいったら、そのあとに行つて見ると履き物はものは

一つ残らずそろえてあつて、傘は傘でかさ一隅いちぐうにちやんと集めてあつた。葉子も及ばない素早すばやさで花びんの花のしおれかけたのや、茶や菓子たの足しなくなつたのを見て取つて、翌日は忘れずにそれを買いととのえて来た。無口のくせにどこかに愛あいきよう嬌があるかと思つと、ばか笑いをしてる最中に不思議に陰険な目つきをちらつかせたりした。葉子はその人を観察すればするほどその正体がわからないように思つた。それは葉子をもどかしくさせるほどだった。時々葉子は倉地がこの男と組合設立の相談以外の秘密らしい話合はなあひいをしてるのに感づいたが、それはどうしても明確に知る事ができなかつた。倉地に聞いてみても、倉地は例ののんきな態度で事もなげに話題をそらしてしまつた。

葉子はしかしなんといつても自分が望みうる幸福の絶頂に近い所にいた。倉地を喜ばせる事が自分を喜ばせる事であり、自分を喜ばせる事が倉地を喜ばせる事である、そうした作為のない調和は葉子の心をしとやかに快活にした。何にでも自分がしようとさえ思えば適応しうる葉子に取っては、抜け目のない世話女房になるくらいの事はなんでもなかつた。妹たちもこの姉を無二のものとして、姉のしてくれる事は一も二もなく正しいものと思うらしかつた。始終葉子から継子ままこあつかいにされてゐる愛子さえ、葉子の前にはただ従順なしとやかな少女だった。愛子としても少なくとも一つはどうしてもその姉に感謝しなければならぬ事があつた。それは年齢のお陰もある。愛子はことしで十六になっていた。

しかし葉子がいなかったら、愛子はこれほど美しくはなれなかったに違いない。二三週間のうちに愛子は山から掘り出されたばかりのルビーと磨きみがをかけたルビーとほどに変わっていた。小肥ぶとりで背だけは姉よりもはるかに低いが、ぴちぴちと締まった肉づきと、抜け上がるほど白い艶つやのある皮膚とはいい均整を保つて、短くはあるが類のないほど肉感的な手足の指の先さき細ほそな所に利点を見せていた。むつくりと牛乳色の皮膚に包まれた地蔵じぞう肩がたの上に据すえられたその顔はまた葉子の苦心に十二分ふんに酬むくいるものだった。葉子がいりぎわを剃そってやるとそこに新しい美が生まれ出た。髪を自分の意匠どおりに束ねてやるとそこに新しい蠱惑こわくがわき上がった。葉子は愛子を美しくする事に、成功した作品に対する芸

術家と同様の誇りと喜びとを感じた。暗い所にいて明るいほうに振り向いた時などの愛子の卵形の顔形は美の神ビーナスをさええ妬ます事ができたろう。顔の輪郭と、やや額ぎわを狭くするまでに厚く生えそろうた黒漆の髪とは闇の中に溶けこむようにぼかされて、前からのみ来る光線のために鼻筋は、ギリシヤ人のそれに見えるような、規則正しく細長い前面の平面をきわ立たせ、潤いきつた大きな二つのひとみと、締まって厚い上下の口びるとは、皮膚を切り破って現われ出た二対の魂のようになまなましい感じで見える人を打った。愛子はそうした時にいちばん美しいように、闇の中<sup>やみ</sup>にさびしくひとり<sup>やみ</sup>でいて、その多恨な目でじつと明るみを見つめているような少女だった。

葉子は倉地が葉子のためにして見せた大きな英断に酬<sup>むく</sup>いるために、定子を自分の愛撫<sup>あいぶ</sup>の胸から裂いて捨てようと思いきわめながらも、どうしてもそれができないでいた。あれから一度も訪れこそしないが、時おり金を送つてやる事と、乳母<sup>うぼ</sup>から安否を知らさせる事だけは続けていた。乳母の手紙はいつでも恨みつらみで満たされていた。日本に帰つて来てくださったかいがどこにある。親がなくて子が子らしく育つものか育たぬものかちよつとでも考えてみてもらいたい。乳母もだんだん年を取つて行く身だ。麻疹<sup>はしか</sup>にかかつて定子は毎日毎日ママの名を呼び続けている、その声が葉子の耳に聞こえないのが不思議だ。こんな事が消息のたびごとにたどたどしく書き連ねてあった。葉子はいても立つてもたまたま

ないような事があつた。けれどもそんな時には倉地の事を思つた。ちよつと倉地の事を思つただけで、齒をくいしばりながらも、苔たいこうえん香園の表門からそつと家を抜け出る誘惑に打ち勝つた。

倉地のほうから手紙を出すのは忘れたと見えて、岡はまだ訪れては来なかつた。木村にあれほど切せつな心持ちを書き送つたくらいだから、葉子の住所さえわかれば尋ねて来ないはずはないのだが、倉地にはそんな事はもう念頭になくなつてしまつたらしい。だれも来るなと願つていた葉子もこのごろになつてみると、ふと岡の事などを思い出す事があつた。横浜を立つ時に葉子にかじり付いて離れなかつた青年を思い出す事などもあつた。しかしこういう事があるたびごとに倉地の心の動きかたをもきつと推察した。そ

してはいつでも願がんをかけるようにそんな事は夢にも思い出すまいと心に誓った。

倉地がいつこうに無頓着むとんじやくなので、葉子はまだ籍を移してはいなかった。もつとも倉地の先妻がはたして籍を抜いているかどうかとも知らなかった。それを知ろうと求めるのは葉子の誇りが許さなかった。すべてそういう習慣を天てんから考えの中に入れていない倉地に対して今さらそんな形式事を迫るのは、自分の度胸を見すかされるという上からもつらかった。その誇りという心持ちも、度胸を見すかされるという恐れも、ほんとうをいうと葉子がどこまでも倉地に対してひげ目になっているのを語るに過ぎないとは葉子自身存分に知りきっているくせに、それを勝手に踏みにしつ

て、自分の思うとおりを倉地にしてのけさす不敵さを持つ事はどうしてもできなかつた。それなのに葉子はややともすると倉地の先妻の事が気になった。倉地の下宿のほうに遊びに行く時でも、その近所で人妻らしい人の往来するのを見かけると葉子の目は知らず知らず熟視のためにかがやいた。一度も顔を合わせないが、わずかな時間の写真の記憶から、きつとその人を見分けてみせると葉子は自信していた。葉子はどこを歩いてもかつてそんな人を見かけた事はなかつた。それがまた妙に裏切られているような感じを与える事もあつた。

航海の初期における批点の打ちどころのないような健康の意識はその後葉子にはもう帰って来なかつた。寒気が募るにつれて下

腹部が鈍痛を覚えるばかりでなく、腰の後ろのほうに冷たい石でも釣<sup>つ</sup>り下げたてあるような、重苦しい気分を感じずるようになった。日本に帰つてから足の冷え出すのも知つた。血管の中には血の代わりに文火<sup>とろび</sup>でも流れているのではないかと思うくらい寒氣に對して平氣だつた葉子が、床の中で倉地に足のひどく冷えるのを注意されたりすると不思議に思つた。肩の凝るのは幼少の時から<sup>こ</sup>痼疾<sup>しつ</sup>だつたがそれが近ごろになつてことさら激しくなつた。葉子はちよいちよい按摩<sup>あんま</sup>を呼んだりした。腹部の痛みが月経と關係があるのを氣づいて、葉子は婦人病であるに相違ないとは思つた。しかし、さうでもないと思うような事が葉子の胸の中にはあつた。もしや懐妊では……葉子は喜びに胸をおどらせてそう思つてもみた。

牝豚めぶたのように幾人も子を生むのはとても耐えられない。しかし一人ひとりはどうあつても生みたいものだ。葉子は祈るように願っていたのだ。定子の事から考えると自分には案外子運があるのかもしれないとも思った。しかし前の懐妊の経験と今度の徴候とはいろいろな点で全く違つたものだった。

一月の末になつて木村からははたして金を送つて来た。葉子は倉地が潤沢につけ届けする金よりもこの金を使う事にむしろ心安さを覚えた。葉子はすぐ思いきつた散財を試してみたい誘惑に駆り立てられた。

ある日当たりのいい日に倉地とさし向かいで酒を飲んでいとたいこうえん苔香園のほうから藪やぶうぐいすのなく声が聞こえた。葉子は軽く

酒ほてりのした顔をあげて倉地を見やりながら、耳ではうぐいすのなき続けるのを注意した。

「春が来ますわ」

「早いもんだな」

「どこかへ行きましょうか」

「まだ寒いよ」

「そうねえ……組合のほうは」

「うむあれが片づいたら出かけようわい。いいかげんくさくさしおった」

そういつて倉地はさもめんどろそうに杯の酒をひとあお一煽りにあおりつけた。

葉子はすぐその仕事がうまく運んでいないのを感じいた。それにしてはあの毎月の多額な金はどこから来るのだろう。そうちらつと思ひながら素早く話を他にそらした。

## 三二一

それは二月初旬のある日の昼ごろだった。からつと晴れた朝の天気引きかえて、朝日がしばらく東向きの窓にさす間もなく、空は薄曇りに曇つて西風がゴウゴウと杉森すぎもりにあたつて物すごい音を立て始めた。どこにか春をほのめかすような日が来たりしたあとなので、ことさら世の中が暗澹あんたんと見えた。雪でもまくしか

けて来そうに底冷えがするので、葉子は茶の間に置きごたつを持ち出して、倉地の着がえをそれにかれたりした。土曜だから妹たちは早びけどと知りつつも倉地はものぐさそうに外出のしたくにかからないで、どてらを引っかけたまま火鉢ひばちのそばにうずくまっていた。葉子は食器を台所のほうに運びながら、来たり行ったりするついでに倉地と物をいった。台所に行つた葉子に茶の間から大きな声で倉地がいいかけた。

「おいお葉（倉地はいつものまにか葉子をこう呼ぶようになつていた）おれはきようは二人ふたりにふたり対面して、これから勝手に出はいりのできるようにするぞ」

葉子は布巾ふきんを持って台所のほうからいそいそと茶の間に帰って

来た。

「なんだってまたきよう……」

そういつてつき膝ひざをしながらちやぶ台をぬぐった。

「いつまでもこうしているが気づまりでようないからよ」

「そうねえ」

葉子はそのままそこにすわり込んで布巾ふきんをちやぶ台にあてがったまま考えた。ほんとうはこれはとうに葉子のほうからいい出すべき事だったのだ。妹たちのいないすきか、寝てからの暇をうかがって、倉地と会うのは、始めのうちこそあいびきのような興味を起こさせないでもないと思つたのと、葉子は自分の通つて来たような道はどうしても妹たちには通らせたくないところから、自

分の裏面をうかがわせまいという心持ちとで、今までついずるに妹たちを倉地に近づかせないで置いたのだったが、倉地の言葉聞いてみると、そうしておくのが少し延び過ぎたと気がついた。また新しい局面を二人の間に開いて行くにもこれは悪い事ではない。葉子は決心した。

「じやきようにしましょう。……それにしても着物だけは着かえていてくださいましな」

「よし来た」

と倉地はにこにこしながらすぐ立ち上がった。葉子は倉地の後ろから着物を羽織はおつておいて羽がいに抱きながら、今さらに倉地の頑がんじょう丈ぢょうな雄々しい体格を自分の胸に感じつつ、

「それは二人ともいい子よ。かわいがってやってくださいましよ。……けれどもね、木村とのあの事だけはまだ内証よ。いいおりを見つけて、わたしから上手じょうずにいつて聞かせるまでは知らんふりをしてね……よくつて……あなたはうっかりするとあけすけに物をいったりなさるから……今度だけは用心してちようだい」

「ばかだなどうせ知れる事を」

「でもそれはいけません……ぜび」

葉子は後ろから背延びをしてそつと倉地の後ろ首を吸った。そして二人は顔を見合わせてほほえみかわした。

その瞬間に勢いよく玄関こうしどの格子戸こうしどがらつとあいて「おゝ寒い」という貞世の声かんだかが痾かんだか高く聞こえた。時間でもないので葉子は思

わずぎよつとして倉地から飛び離れた。次いで玄関口の障しょうじ子があいた。貞世は茶の間に駆け込んで来るらしかった。

「おねえ様雪が降って来てよ」

そういつていきなり茶の間の襖ふすまをあけたのは貞世だった。

「おやそう……寒かったでしょう」

とでもいつて迎えてくれる姉を期待していたらしい貞世は、置きごたつにはいつてあぐらをかいている途方もなく大きな男を姉のほかに見つけたので、驚いたように大きな目を見張ったが、そのまますぐに玄関に取って返した。

「愛ねえさんお客様よ」

と声をつぶすようにいうのが聞こえた。倉地と葉子とは顔を見

合わしてまたほほえみかわした。

「ここにお下駄げたがあるじやありませんか」

そう落ち付いていう愛子の声が聞こえて、やがて二人は静かにはいって来た。そして愛子はしとやかに貞世はぺちゃんとするわつて、声をそろえて「ただいま」といいながら辞儀をした。愛子の年ごろの時、厳格な宗教学校で無理じいに男の子のような無趣味な服装をさせられた、それに復讐ふくしゅうするような気で葉子の装わした愛子の身なりはすぐ人の目をひいた。お下げをやめさせて、束髪そくはつにさせた項うなじとたぼの所には、そのころ米国での流行そのままに、蝶結びちようむすの大きな黒いリボンがとめられていた。古代紫の紬つ地の着物むぎじに、カシミヤの袴はかまを裾すそみじかにはいて、その袴は以前

葉子が発明した例の尾錠びじょうどめになっていた。貞世の髪はまた思いきつて短くおかつぱに切りつめて、横のほうに深紅しんくのリボンが結んであった。それがこの才はじけた童女を、膝ひざまでぐらいな、わざと短く仕立てた袴と共に可憐かれんにもいたずらいたずらしく見せた。二人は寒さのために頬ほおをまっ紅かにして、目を少し涙ぐましていた。それがことさら二人に別々な可憐おもむきな趣を添えていた。

葉子は少し改まって二人を火鉢ひばちの座から見やりながら、

「お帰りなさい。きようはいつもより早かったのね。……お部屋へやに行つてお包みをおいて袴はかまを取つていらつしやい、その上でゆつくりお話しする事があるから……」

二人の部屋からは貞世がひとりではしやいでいる声がしばらく

していたが、やがて愛子は広い帯をふだん着と着かえた上にしめて、貞世は袴をぬいだけで帰つて来た。

「さあここにいらつしやい。（そういつて葉子は妹たちを自分の身近にすわらせた）このお方がいつか双鶴館そうかくかんでおうわさした倉地さんなのよ。今まででも時々いらしつたんだけれどもついにお目にかかるおりがなかつたわね。これが愛子これが貞世です」

そういいながら葉子は倉地のほうを向くともうくすぐつたいよ  
うな顔つきをせずにはいられなかつた。倉地は渋い笑いを笑いながら案外まじめに、

「お初に（といつてちよつと頭を下げた）二人とも美しいねえ」

そういつて貞世の顔をちよつと見てからじつと目を愛子にさだ

めた。愛子は格別恥じる様子もなくその柔和な多恨な目を大きく見開いてまんじりと倉地を見やっていた。それは男女の区別を知らぬ無邪気な目とも見えた。先天的に男というものを知りぬいてその心を試みようとする淫婦いんぶの目とも見られない事はなかつた。それほどその目は奇怪な無表情の表情を持っていた。

「始めてお目にかかるが、愛子さんおいくつ」

倉地はなお愛子を見やりながらこう尋ねた。

「わたし始めてではございません。……いつぞやお目にかかりました」

愛子は静かに目を伏せてはつきりと無表情な声でこういった。

愛子がああ年ごろで男の前にはつきりああ受け答えができるのは葉子にも意外だった。葉子は思わず愛子を見た。

「はて、どこでね」

倉地もいぶかしげにこう問い返した。愛子は下を向いたまま口をつぐんでしまった。そこにはかすかながら憎悪ぞうおの影がひらめいて過ぎたようだった。葉子はそれを見のがさなかつた。

「寝顔を見せた時にやはり彼女あれは目をさましていたのだな。それをいうのかしらん」

とも思った。倉地の顔にも思いかけずちよつとどぎまぎしたらしい表情が浮かんだのを葉子は見た。

「なあに……」 激しく葉子は自分で自分を打ち消した。

貞世は無邪気にも、この熊くまのような大きな男が親しみやすい遊  
び相手と見て取つたらしい。貞世がその日学校で見聞きして来た  
事などを例のとおり残らず姉に報告しようと、なんでも構わず、  
なんでも隠さず、いつてのけるのに倉地が興きょうに入つて合あいづち槌づちを打  
つので、ここに移つて来てから客の味を全く忘れていた貞世はう  
れしがつて倉地を相手にしようとした。倉地はさんざん貞世と戯  
れて、昼近く立つて行つた。

葉子は朝食がおそかつたからといって、妹たちだけが昼食ぜんの膳ぜん  
についた。

「倉地さんは今、ある会社をお立てになるのでいろいろ御相談事  
があるのだけれども、下宿ではまわりがやかましくつて困るとお

つしやるから、これからいつでもここで御用をなさるようになつたから、きつとこれからもちよくちよくいらつしやるだろうが、貞さあちゃん、きょうのように遊びのお相手にばかりしてはだめよ。その代わり英語なんぞでわからない事があつたらなんでもお聞きするといひ、ねえさんよりいろいろの事をよく知つていらつしやるから……それから愛さんは、これから倉地さんのお客様も見えるだろうから、そんな時には一々ねえさんのさしずを待たないではきはきお世話をして上げるのよ」

と葉子はあらかじめ二人ふたりに釘くぎをさした。

妹たちが食事を終わつて二人であと始末をしているとまた玄関の格子こうしが静かにあく音がした。

貞世は葉子の所に飛んで来た。

「おねえ様またお客様よ。きようはずいぶんたくさんいらつしやるわね。だれでしょう」

と物珍しそうに玄関のほうに注意の耳をそばだてた。葉子もだれだろうといぶかった。ややしばらくして静かに案内を求めめる男の声が出た。それを聞くと貞世は姉から離れて駆け出して行つた。愛子が襷たすきをはずしながら台所から出て来た時分には、貞世はもう一枚の名刺を持って葉子の所に取って返していた。金縁きんぶちのついた高価らしい名刺の表には岡おか一はじめと記しるしてあつた。

「まあ珍しい」

葉子は思わず声を立てて貞世と共に玄関に走り出た。そこには

処女のように美しく小柄な岡が雪のかかった傘をつぼめて、外がいと套うのしたたりを紅べにをさしたように赤らんだ指の先ではじきながら、女のようににはにかんで立っていた。

「いい所でしょう。おいでは少しお寒かったかももしれないけれども、きようはほんとにいいおりからでしたわ。隣に見えるのが有名な苔香園たいこうえん、あすこの森の中が紅葉館、この杉すぎの森がわたし大好きですの。きようは雪が積もってなおさらきれいですわ」

葉子は岡を二階に案内して、そこのガラス戸越しにあちこちの雪景色を誇りがに指呼しこして見せた。岡は言葉すく少なながら、ちかちかともまぶしい印象を目に残して、降り下り降りあおる雪の向こうに隠見する山内さんないの木立こだちの姿を嘆賞した。

「それにしてもどうしてあなたはここを……倉地から手紙でも行きましたか」

岡は神秘的にほほえんで葉子を顧みながら「いゝえ」といった。

「そりやおかしい事……それではどうして」

縁側から座敷へ戻りながらおもむろに、

「お知らせがないもので上がってはきつといけないとは思いましたけれども、こんな雪の日ならお客もなからうからひよつとかすると会つてくださるかとも思つて……」

そういういい出しで岡が語るところによれば、岡の従妹いとこに当た

る人が幽蘭女学校に通学していて、正月の学期から早月さつきという姉妹の美しい生徒が来て、それは芝山内の裏坂に美人屋敷といつて

界限かいわいで有名な家の三人姉妹の中の二人であるという事や、一番の姉に当たる人が「報正新報」でうわさを立てられた優れた美貌すくびぼうの持ち主だという事やが、早くも口さがない生徒間の評判になっているのを何かのおりに話したのですぐ思い当たったけれども、一日一日と訪問を躑ちゆう躑ちよしていたのだとの事だった。葉子は今さらに世間の案外に狭いのを思った。愛子といわず貞世の上にも、自分の行跡がどんな影響を与えるかも考えずにはいられなかった。そこに貞世が、愛子がととのえた茶器をあぶなつかしい手つきで、目八分ぶに持つて来た。貞世はこの日さびしい家の内に幾人も客を迎える物珍しさに有頂天うちようてんになっていたようだった。満面に偽りのない愛嬌あいきようを見せながら、丁寧にぺっちゃんとおじぎをした。

そして顔にたれかかる黒髪を振り仰いで頭を振って後ろにさばきながら、岡を無邪気に見やつて、姉のほうに寄り添うと大きな声で「どなた」と聞いた。

「一緒にお引き合わせしますからね、愛さんにもおいでなさいといつていらつしやい」

二人だけふたりが座に落ち付くと岡は涙ぐましいような顔をしてじつと手あぶりのの中を見込んでいた。葉子の思いなしかその顔にも少しやつれが見えるようだった。普通の男ならばたぶんさほどにも思わないに違いない家の中のいさくさなどに繊細すぎる神経をなやまして、それにつけても葉子の慰撫いぶをことさらにあこがれていたらしい様子は、そんな事についてはひとこと一言もいわないが、岡の

顔にははつきりと描かれているようだった。

「そんなにせいたつていやよ貞ちゃんさあは。せつかちな人ねえ」

そう穏かにたしなめるらしい愛子の声が階下でした。

「でもそんなにおしやれしなくつたつていいわ。おねえ様が早くつておつしやつてよ」

無遠慮にこういう貞世の声もはつきり聞こえた。葉子はほほえみながら岡を暖かく見やった。岡もさすがに笑いを宿した顔やどを上げたが、葉子と見かわすと急に頬ほおをぽつと赤くして目を障しょうじ子のほうにそらしてしまった。手あぶりの縁ふちに置かれた手の先がかすかに震うのを葉子は見のがさなかった。

やがて妹たち二人が葉子の後ろに現われた。葉子はすわったま

ま手を後ろに回して、

「そんな人のお尻しりの所にすわって、もつとこつちにお出なさいな。……これが妹たちですの。どうかお友だちにしてくださいまし。お船で御一緒はじめだった岡一様。……愛さんあなたお知り申してないの……あの失礼ですがなんとおっしゃいますの、お従妹いとこご御さんのお名前は」

と岡に尋ねた。岡は言葉どおりに神経を転倒させていた。それはこの青年を非常に醜くかつ美しくして見せた。急いですわり直した居ますまいをすぐ意味もなくくずして、それをまた非常に後悔したらしい顔つきを見せたりした。

「は？」

「あのわたしどものうわさをなさったそのお嬢様のお名前は」

「あのやはり岡といひます」

「岡さんならお顔は存じ上げておりますわ。一つ上の級にいらつしやいます」

愛子は少しも騒がずに、倉地に対した時と同じ調子でじつと岡を見やりながら即座にこう答えた。その目は相変わらず淫蕩いんとうと見えるほど極端に純潔だった。純潔と見えるほど極端に淫蕩だった。岡は怖おじながらもその目から自分の目をそらす事ができないようにまともに愛子を見て見る見る耳たぶまでをまっ赤かにしていた。葉子はそれを気取けどると愛子に対していちだんの憎しみを感じずにはいられなかつた。

「倉地さんは……」

岡は一路の逃げ道をようやく求め出したように葉子に目を転じた。

「倉地さん？ たった今お帰りになったばかり惜しい事をしましてねえ。でもあなたこれからはちよくちよくいらしってくださいますわね。倉地さんもすぐお近所にお住まいですからいつかごいつしよに御飯でもいただきましょう。わたし日本に帰ってからこの家にお客様をお上げするのはきょうが始めてですのよ。ねえ貞ちゃん。……ほんとうによく来てくださいました事。わたしとうから来ていただきたくつてしようがなかつたんですけれども、倉地さんからなんとかいつて上げてくださるだろうと、そればかり

を待っていたのですよ。わたしからお手紙を上げるのはいけませんもの（そこで葉子はわかってくださるでしょうというような優しい目つきを強い表情を添えて岡に送った）。木村からの手紙であなたの事はくわしく伺っていましたわ。いろいろお苦しい事がおありになるんですってね」

岡はそのころになってようやく自分を回復したようだった。しどろもどろになった考えや言葉もやや整って見えた。愛子は一度しげしげと岡を見てしまっただけからは、決して二度とはそのほうを向かずに、目を畳の上に伏せてじつと千里も離れた事でも考えている様子だった。

「わたしの意気地いくじのないのが何よりもいけないんです。親類の者

たちはなんといつてもわたしを実業の方面に入れて父の事業を嗣がせようとするんです。それはたぶんほんとうにいい事なんでしょう。けれどもわたしにはどうしてもそういう事がわからないから困ります。少しでもわかれば、どうせこんなに病身で何もできませんから、母はじめみんなのいうことをききたいんですけれども……わたしは時々乞食こじきにでもなつてしまいたいような気がします。みんなの主人思いな目で見つめられていると、わたしはみんなに済まなくなつて、なぜ自分みたいな屑くずな人間を惜しんでいてくれるのだろうとよくそう思います……こんな事今までだれにもいいはしませんけれども。突然日本に帰つて来たりなぞしてからわたしは内々監視までされるようになりました。……わたしのよ

うな家に生まれると友だちというものは一人もできませんし、みんなとは表面だけで物をいつていなければならぬんですから：  
：心がさびしくつてしかたがありません」

そういつて岡はさすがるように葉子を見やった。岡が少し震えを帯びた、よごれつけ気の塵ちりほどもない声の調子を落としてしんみりと物をいう様子にはおのずからなけだか気高いさびしみがあつた。戸障子をきしませながら雪を吹きまく戸外の荒々しい自然の姿に比べてはことさらそれが目立った。葉子には岡のような消極的な心持ちは少しもわからなかつた。しかしあれでいて、米国くんだけりから乗つて行つた船で帰つて来る所なぞには、粘り強い意力が潜んでいるようにも思えた。平凡な青年ならできててもできなくとも周

困のものにおだてあげられれば疑いもせず父の遺業を嗣ぐまね  
 をして喜んでゐるだろう。それがどうしてもできないという所  
 もどこか違つた所があるのではないか。葉子はそう思うと何の理  
 解もなくこの青年を取り巻いてただわいわい騒ぎ立てている人  
 ちがばかばかしくも見えた。それにしてもなぜもつとはきはきと  
 そんな下らない障害ぐらい打ち破つてしまわないのだろう。自  
 ならその財産を使つてから、「こうすればいいのかい」とでもい  
 つて、まわりで世話を焼いた人間たちを胸のすき切るまで思い存  
 分笑つてやるのに。そう思うと岡の煮え切らないような態度が歯  
 がゆくもあつた。しかしなんといつても抱きしめたいほど可憐な  
 のは岡の織美なさびしそうな姿だつた。岡は上手じょうずに入れられた

甘露かんろをすすり終わった茶ちやわんを手の先に据すえて綿密にその作りを賞しょう翫がんしていた。

「お覚えになるようなものじゃございません事よ」

岡は悪い事でもしていたように顔を赤くしてそれを下においた。彼はいいかげんな世辞はいえないらしかつた。

岡は始めて来た家に長居ながいするのは失礼だと来た時から思っていて、機会あるごとに座を立とうとするらしかつたが、葉子はそういう岡の遠慮に感づけば感づくほど巧みにもすべての機会を岡に与えなかつた。

「もう少しお待ちになると雪が小降りになりますわ。今、こないだインドから来た紅茶を入れてみますから召し上がってみてちよ

うだい。ふだんいいものを召し上がりつけていらつしやるんだから、鑑定をしていただきますわ。ちよつと、……ほんのちよつと待っていらしつてちよつとだよ」

そういうふうについて岡を引き止めた。始めの間こそ倉地に対してのようにはなつかなかつた貞世もだんだんと岡と口をきくようになって、しまいには岡の穏やかな問いに対して思いのままをかわいらしく語つて聞かせたり、話題に窮して岡が黙つてしまふと貞世のほうから無邪気な事を聞きただして、岡をほほえませました。なんととっても岡は美しい三人の姉妹が（そのうち愛子だけは他の二人とは全く違つた態度で）心をこめて親しんで来るその好意には敵し兼ねて見えた。盛んに火を起こした暖かい部屋へや

の中の空気にこもる若い女たちの髪からとも、ふところからとも、膚からとも知れぬ柔軟な香りかおだけでも去りがたい思いをさせたに違ひなかつた。いつのまにか岡はすっかり腰を落ち着けて、いいようなく快く胸の中のわだかまりを一掃したように見えた。

それからというもの、岡は美人屋敷とうわさされる葉子の隠れ家がにおりおり出入りするようになった。倉地とも顔を合わせて、

互いに快く船の中での思い出し話などをした。岡の目の上には葉子の目が義眼いれめされていた。葉子のよしと見るものは岡もよしと見た。葉子の憎むものは岡も無条件で憎んだ。ただ一つその例外となつてゐるのは愛子というものらしかつた。もちろん葉子とて性格的にはどうしても愛子といれ合わなかつたが、骨肉の情として

やはり互いにいいいようのない執着を感じあっていた。しかし岡は愛子に対しては心からの愛着を持ち出すようになっていた。事が知れた。

とにかく岡の加わった事が美人屋敷のいろどりを多様にした。

三人の姉妹は時おり倉地、岡に伴われて苔香園の表門のほうから三田みたの通りなどに散歩に出た。人々はそのきらびやかな群れに物好きな目をかがやかした。

## 三三二

岡に住所を知らせてから、すぐそれが古藤ことうに通じたと見えて、

二月にはいつてからの木村の消息は、倉地の手を経ずに直接葉子にあてて古藤から回送されるようになった。古藤はしかし頑固がんこにもその中に一ひとこと言も自分の消息を封じ込んでよこすような事はしなかつた。古藤を近づかせる事は一面木村と葉子との関係を断絶さす機会を早める恐れがないでもなかつたが、あの古藤の単純な心をうまくあやつりさえすれば、古藤を自分のほうになずけてしまい、従つて木村に不安を起こさせない方便になると思つた。葉子は例のいたずら心から古藤を手なずける興味をそそられないでもなかつた。しかしそれを実行に移すまでにその興味は嵩こもじては来なかつたのでそのままにしておいた。

木村の仕事は思ひのほか都合よく運んで行くらしかつた。「日

本における未来の「ピーボデー」という標題に木村の肖像まで入れて、ハミルトン氏配下の敏腕家の一人ひとりとして、また品性の高潔な公共心の厚い好個の青年実業家として、やがては日本において、米国における「ピーボデー」と同様の名声をかちうべき約束にあるものと賞賛したシカゴ・トリビューンの「青年実業家評判記」の切り抜きなどを封入して来た。思いのほか巨額のかわせ為替をちよいちよい送ってよこして、倉地氏に支払うべき金額の全体を知らせてくれたら、どう工面くめんしても必ず送付するから、一日も早く倉地氏の保護から独立して世評の誤ごびゆう謬を実行的に訂正し、あわせて自分に対する葉子の真情を証明してほしいなどといってよこした。葉子は——倉地におぼれきっている葉子は鼻の先でせせら笑った。

それに反して倉地の仕事のほうはいつまでも目鼻がつかないらしかった。倉地のいう所によれば日本だけの水先案内業者の組合といつても、東洋の諸港や西部米国の沿岸にあるそれらの組合とも交渉をつけて連絡を取る必要があるのに、日本の移民問題が米国の西部諸州でやかましくなり、排日熱が過度に煽せんどう動され出したので、何事も米国人との交渉は思うように行かずにその点で行きなやんでいるとの事だった。そういえば米国人らしい外国人がしばしば倉地の下宿に出入りするのを葉子は気がついていた。ある時はそれが公使館の館員でもあるかと思うような、礼装をしてみごとな馬車に乗った紳士である事もあり、ある時はズボンの折り目もつけないほどだらしないふうをした人相のよくない男

でもあった。

とにかく二月にはいつてから倉地の様子が少しずつすさんで来たらしいのが目立つようになった。酒の量も著しく増して来た。

正井がかみつくようにどなられている事もあった。しかし葉子に対しては倉地は前にもまさって溺<sup>できあい</sup>愛の度を加え、あらゆる愛情の証拠をつかむまでは執<sup>しつよう</sup>拗に葉子をしいたげるようになった。

葉子は目もくらむ火酒をあおりつけるようにそのしいたげを喜んで迎えた。

ある夜葉子は妹たちが就寝してから倉地の下宿を訪れた。倉地はたった一人でさびしそうにソウダ・ビスケットを肴<sup>さかな</sup>にウイスキーを飲んでいた。チャブ台の周囲には書類や港湾の地図やが乱暴

に散らけてあつて、台の上のからのコップから察すると正井かだ  
れか、今客が帰った所らしかった。ふすま襖を明けて葉子のはいつて来  
たのを見ると倉地はいつもになくちよつとけわしい目つきをして  
書類に目をやったが、そこにあるものを猿臂えんぴを延ばして引き寄せ  
てせわしく一まとめにして床の間に移すと、自分の隣に座ぶとん  
を敷いて、それにすわれと顎あごを突き出して相図した。そして激し  
く手を鳴らした。

「コップと炭酸水を持って来い」

用を聞きに来た女中にこういいつけておいて、激しく葉子をま  
ともに見た。

「葉ちゃん（これはそのころ倉地が葉子を呼ぶ名前だった。妹た

ちの前で葉子と呼び捨てにもできないので倉地はしばらくの間お葉さんお葉さんと呼んでいたが、葉子が貞世を貞ちゃんと呼ぶのから思いついたと見えて、三人を葉ちゃん、愛ちゃん、貞ちゃんと呼ぶようになった。そして差し向かいの時にも葉子をそう呼ぶのだった）は木村に貢がれているな。白状しつちまえ」

「それがどうして？」

葉子は左の片肘をちやぶ台について、その指先で鬢のほつれをかき上げながら、平気な顔で正面から倉地を見返した。

「どうしてがあるか。おれは赤の他人におれの女を養わすほど腑抜けではないんだ」

「まあ気の小さい」

葉子はなおも動どうじなかつた。そこに婢おんながはいって来たので話の腰が折られた。二人ふたりはしばらく黙もくっていた。

「おれはこれから竹柴たけしばへ行く。な、行こう」

「だって明朝困こまりますわ。わたしは留守だと妹たちが学校に行けないもの」

「一筆書いて学校なんざあ休んで留守をしろといつてやれい」

葉子はもちろんちよつとそんな事をいつて見ただけだった。妹たちの学校に行ったあとでも、苔香園たいこうえんの婆ばあさんに言葉をかけておいて家を明ける事は常始つね終つねだった。ことにその夜は木村の事について倉地に合点させておくのが必要だと思つたのでいい出された時から一緒する下したごころ心こころではあつたのだ。葉子はそこにあつた

ペンを取り上げて紙切れに走り書きをした。倉地が急病になつたので介抱のために今夜はここで泊まる。あすの朝学校の時刻までに帰つて来なかつたら、戸締まりをして出かけていい。そういう意味を書いた。その間に倉地は手早く着がえをして、書類を大きなシナ鞆かばんに突っ込んで錠じょうをおろしてから、綿密にあくかあかないかを調べた。そして考えこむようにうつむいて上目をしながら、両手をふところにさし込んで鍵かぎを腹帯はらおびらしい所にしまい込んだ。九時すぎ十時近くなつてから二人は連れ立つて下宿を出た。増ぞ上寺前うじょうじに来てから車を傭やとつた。満月に近い月がもうだいぶ寒さむぞ空ら高くこうこうとかかつていた。

二人を迎えた竹柴館の女中は倉地を心得ていて、すぐ庭先に離

れになつてゐる二間ふたまばかりの一軒に案内した。風はないけれども月の白さでひどく冷え込んだような晩だった。葉子は足の先が氷で包まれたほど感覚を失つてゐるのを覚えた。倉地の浴したあとで、熱めな塩湯にゆつくり浸つたのでようやく人心地ひとごころがついて戻もどつて来た時には、素早すばやい女中の働しゅこうきで酒肴しゅこうがととのえられていた。葉子が倉地と遠出らしい事をしたのはこれが始めてなので、旅先にいるような気分が妙に二人を親しみ合わせた。ましてや座敷しげふに続く芝生いしがきのはずれの石垣いしがきには海の波が来て静かに音を立てていた。空には月がさえていた。妹たちに取り巻かれたり、下宿人の目をかねたりしていなければならなかつた二人はくつろいだ姿と心とで火鉢ひばちにより添ひつた。世の中は二人きりのようだった。

いつのまにか良人おっととばかり倉地を考え慣れてしまった葉子は、ここに再び情人を見いだしたように思った。そして何とはなく倉地をじらしてじらしてじらし抜いたあげくに、その反動から来る蜜みつのような歓語を思いきり味わいたい衝動に駆られていた。そしてそれがまた倉地の要求でもある事を本能的に感じていた。

「いいわねえ。なぜもつと早くこんな所に来なかつたでしょう。すっかり苦勞も何も忘れてしまいましたわ」

葉子はすべすべとほてつて少しこわばるような頬ほおをなでながら、とろけるように倉地を見た。もうだいぶ酒の気のまわつた倉地は、女の肉感をそそり立てるようなにおいを部屋へやじゆうにまき散らす葉巻をふかしながら、葉子を尻目しりめにかけた。

「それは結構。だがおれにはきつきの話が喉のどにつかえて残つとるて。胸むなくそが悪いぞ」

葉子はあきれたように倉地を見た。

「木村の事？」

「お前はおれの金を心まかせに使う気にはなれないんか」

「足りませんもの」

「足りなきやなぜいわん」

「いわなくつたつて木村がよこすんだからいいじゃありませんか」

「ばか！」

倉地は右の肩を小山のようにそびやかして、上体を斜しやに構えながら葉子をにらみつけた。葉子はその目の前で海から出る夏の月

のようにほほえんで見せた。

「木村は葉ちゃんに惚れとるんだよ」

「そして葉ちゃんはきららつてるんですわね」

「冗談は措おいてくれ。……おりや真劍でいっとなるんだ。おれたちは木村に用はないはずだ。おれは用のないものは片ぽっ端しから捨てるのが立てまえだ。嬢かかあだろうが子だろうが……見ろおれを……よく見ろ。お前はまだこのおれを疑つとるんだな。あとがまには木村をいつでもなおせるように食い残しをしとるんだな」

「そんな事はありませんわ」

「ではなんで手紙のやり取りなどしおるんだ」

「お金がほしいからなの」

葉子は平気な顔をしてまた話をあとに戻した。そして独酌どくしやくで杯を傾けた。倉地は少しもるほど怒りが募っていた。

「それが悪いといつとるのがわからないか……おれの面つらに泥どろを塗りこくつとる……こつちに来い（そういいながら倉地は葉子の手を取って自分の膝ひざの上に葉子の上体をたくし込んだ）。いえ、隠さずに。今になって木村に未練が出て来おつたんだろう。女というはそうしたもんだ。木村に行きたくば行け、今行け。おれのよくなやくぎを構つとると芽は出やせんから。……お前にはふて腐れがいつちよく似合つとるよ……ただしおれをだましにかかると見当違いだぞ」

そういいながら倉地は葉子を突き放すようにした。葉子はそれ

でも少しも平静を失つてはいなかった。あでやかにほほえみながら、

「あなたもあんまりわからない……」

といいながら今度は葉子のほうから倉地の膝ひざに後ろ向きにもたれかかった。倉地はそれを退けようとはしなかった。

「何がわからんかい」

しばらくしてから、倉地は葉子の肩越しに杯を取り上げながらこう尋ねた。葉子には返事がなかった。またしばらくの沈黙の間が過ぎた。倉地がもう一度何かいおうとした時、葉子はいつのまにかしくしくと泣いていた。倉地はこの不意打ちに思わずはつとしたようだった。

「なぜ木村から送らせるのが悪いんです」

葉子は涙を気取らせまいとするように、しかし打ち沈んだ調子でこういい出した。

「あなたの御様子でお心持ちが読めないわたしだとお思いになって？ わたしゆえに会社をお引きになってから、どれほど暮らし向きに苦しんでいらつしやるか……そのくらいはほかでもわたしにはちゃんと響いています。それでもしみつたれた事をするのはあなたもおきらい、わたしもきらい……わたしは思うようにお金をつかってはいました。いましたけれども……心では泣いてたんです。あなたのためならどんな事でも喜んでしよう……そうこのごろ思ったんです。それから木村にとうとう手紙を書きました。

わたしが木村をなんと思ってるか、今さらそんな事をお疑いになるのあなたは。そんな水臭い回し気をなさるからついくやしくなつちまいます。……そんなわたしだかわたしではないか……（そこで葉子は倉地から離れてきちんとすわり直して袂たもとで顔をおおうてしまった）泥どろぼう棒をしろとおっしゃるほうがまだ増しです……あなたお一人ひとりでくよくよなさつて……お金の出所を……暮らし向きが張り過ぎるなら張り過ぎると……なぜ相談に乗らせてはくたさらないの……やはりあなたはわたしを真身しんみには思っていないらつしやらないのね……」

倉地は一度は目を張って驚いたようだったが、やがて事もなげに笑い出した。

「そんな事を思つとつたのか。ばかだなあお前は。御好意は感謝します……全く。しかしなんぼやせても枯れても、おれは女の子ふたりの二人や三人養うに事は欠かんよ。月に三百や四百の金が手回らんようなら首をくくつて死んで見せる。お前をまで相談に乗せるような事はいらんのだよ。そんな陰にまわつた心配事はせん事にしようや。こののんき坊のおれまでがいらん気をもませられるで……」

「そりやうそです」

葉子は顔をおおうたままきつぱりと矢継ぎ早にいい放つた。倉地は黙ってしまった。葉子もそのまましばらくはなんとも言い出でなかつた。

母屋おもやのほうで十二を打つ柱時計の聲がかすかに聞こえて来た。

寒さもしんしんと募っていたには相違なかった。しかし葉子はそのいづれをも心の戸の中までは感じなかった。始めは一種のたくらみから狂言でもするような気でかかったのだったけれども、こうなると葉子はいつのまにか自分で自分の情におぼれてしまっていた。木村を犠牲にしてまでも倉地におぼれ込んで行く自分があわれまれもした。倉地が費用の出所をついぞ打ち明けて相談してくれないのが恨みがましく思われもした。知らず知らずのうちにどれほど葉子は倉地に食い込み、倉地に食い込まれていたかをしみじみと今さらに思い知った。どうなろうとどうあろうと倉地から離れる事はもうできない。倉地から離れるくらいなら自分はき

つと死んで見せる。倉地の胸に齒を立ててその心臓をかみ破つてしまいたいような狂暴な執念が葉子を底知れぬ悲しみへ誘い込んだ。

心の不思議な作用として倉地も葉子の心持ちは刺いれずみ青をされるように自分の胸に感じて行くらしかった。やや程ほど経つてから倉地は無感情のような鈍い声でいい出した。

「全くはおれが悪かったのかもしれない。一時は全く金には弱り込んだ。しかしおれは早や世の中の底そこしお潮にもぐり込んだ人間だと思つと度胸がすわつてしまいおつた。毒も皿さらも食つてくれよう、そう思つて（倉地はあたりをはばかりるようにさらに声を落とした）やり出した仕事があゝの組合の事よ。水先案内のやつらはくわしい

海図を自分で作つて持つとる。要塞地ようさいちの様子も玄人くろうと以上ださ。それを集めにかかつてみた。思うようには行かんが、食うだけの金は余るほど出る」

葉子は思わすぎよつとして息気いきがつまった。近ごろ怪しげな外国人が倉地の所に入入りするのも心当たりになった。倉地は葉子が倉地の言葉を理解して驚いた様子を見ると、ほとほと悪魔のような顔をしてにやりと笑つた。捨てばちな不敵さと力とがみなぎつて見えた。

「愛想あいそが尽きたか……」

愛想が尽きた。葉子は自分自身に愛想が尽きようとしていた。

葉子は自分の乗つた船はいつでも相客あいきやくもろともに転覆して沈

んで底知れぬ泥土ていどの中に深々ともぐり込んで行く事を知った。売国奴ど、国賊、——あるいはそういう名が倉地の名に加えられるかもしれない……と思っただけで葉子は怖毛おぞけをふるって、倉地から飛びのこうとする衝動を感じた。ぎよつとした瞬間にただ瞬間だけ感じた。次にどうかしてそんな恐ろしいはめから倉地を救い出さなければならぬという殊勝な心にもなった。しかし最後に落ち着いたのは、その深みに倉地をことさら突き落としてみたい悪魔的な誘惑だった。それほどまでの葉子に対する倉地の心尽くしを、臆おくびよう病びような驚きと躊躇ちゆうちよとで迎える事によつて、倉地に自分の心持ちの不徹底なのを見下げられはしないかという危惧きぐよりも、倉地が自分のためにどれほどの墮落でも汚辱でも甘んじて犯

すか、それをさせてみて、満足しても満足しても満足しきらない自分の心の不足を満たしたかった。そこまで倉地を突き落とすことは、それだけ二人ふたりの執着を強める事だとも思った。葉子は何事を犠牲に供しても灼しやく熱ねつした二人の間の執着を続けるばかりでなくさらに強める術すべを見いだそうとした。倉地の告白を聞いて驚いた次の瞬間には、葉子は意識こそせねこれだけの心持ちに働かれていた。「そんな事で愛想が尽きてたまるものか」と鼻であしらうような心持ちに素早すばやくも自分を落ち着けてしまった。驚きの表情はすぐ葉子の顔から消えて、妖婦ようふにのみ見る極端に肉的な蠢こ惑わくの微笑がそれに代わって浮かみ出した。

「ちよつと驚かされはしましたわ。……いいわ、わたしだってな

んでもしますわ」

倉地は葉子が言わず語らずのうちに感激しているのを感じ得していた。

「よしそれで話はわかった。木村……木村からもしぼり上げろ、構うものかい。人間並みに見られないおれたちが人間並みに振る舞っていてたまるかい。葉ちゃん……命」

「命……命!! 命※」

葉子は自分の激しい言葉に目もくるめくような酔いを覚えながら、あらん限りの力をこめて倉地を引き寄せた。膳ぜんの上のものが音を立ててくつがえるのを聞いたようだったが、そのあとは色も音もない焰ほのおの天地だった。すさまじく焼けただれた肉の欲念が葉

子の心を全く暗くらましてしまった。天国か地獄じごくかそれは知らない。

しかも何もかもみじんにつきくだいて、びりびりと震動する炎々

たる焰ほのおに燃や上げたこの有頂うちようてん天の歡樂のほかには世に何者があ

ろう。葉子は倉地を引き寄せた。倉地において今まで自分から離れていた葉子自身を引き寄せた。そして切るような痛みと、痛みからのみ来る奇怪な快感とを自分自身に感じて陶然と酔いしれながら、倉地の二の腕に齒を立てて、思いきり弾力性に富んだ熱したその肉をかんだ。

その翌日十一時すぎに葉子は地の底から掘り起こされたように地球の上に目を開いた。倉地はまだ死んだもの同然にいぎたなく眠っていた。戸板すぎの杉すぎの赤みが鰹かつおぶし節しんの心しんのように半透明にま

つ赤かに光っているので、日が高いのも天気が美しく晴れているのも察せられた。甘ずっぱく立てこもった酒と煙草たばこの余燻よくんの中に、すき間もる光線が、透明に輝く餡色あめいろの板となつて縦に薄暗さの中を区切っていた。いつもならばまっ赤かに充血して、精力に充ちみ満ちて眠りながら働いているように見える倉地も、その朝は目の周囲に死色をさえ注さしていた。むき出しにした腕には青筋が病的に思われるほど高く飛び出てはいずっていた。泳ぎ回る者でもないように頭の中がぐらぐらする葉子には、殺人者が凶行から目ざめて行った時のような底の知れない気味わるさが感ぜられた。葉子は密ひそやかにその部屋を抜け出して戸外に出た。

降るような真昼まひるの光線にあうと、両眼は脳心のほうにしやにむ

に引きつけられてたまらない痛さを感じた。かわいた空気は息氣いきをとめるほど喉のどを干ひからばした。葉子は思わずよろけて入り口の下見板したみいたに寄りかかつて、打撲を避けるように両手で顔を隠してうつむいてしまった。

やがて葉子は人を避けながら芝生しげいふの先の海ぎわに出てみた。満月に近いころの事とて潮は遠くひいていた。蘆あしの枯れ葉が日を浴びて立つ沮洳地そじよちのような平地が目の前に広がっていた。しかし自然は少しも昔の姿を変えてはいなかった。自然も人もきのうのままの営みをしていた。葉子は不思議なものを見せつけられたように茫然ぼうぜんとして潮干潟しおひがたの泥どろを見、うろこ雲で飾られた青空を仰いだ。ゆうべの事が真実ならこの景色は夢であらねばならぬ。こ

の景色が真実ならゆうべの事は夢であらねばならぬ。二つが両立しようはずはない。……葉子は茫然ぼうぜんとしてなお目にはいつて来るものをながめ続けた。

麻痺まひしきつたような葉子の感覚はだんだん回復して来た。それと共に瞑眩めまいを感じずるほどの頭痛をまず覚えた。次いで後腰部に鈍重な疼いたみがむくむくと頭をもたげるのを覚えた。肩は石のように凝こっていた。足は氷のように冷えていた。

ゆうべの事は夢ではなかったのだ……そして今見るこの景色も夢ではあり得ない……それはあまりに残酷だ、残酷だ。なぜゆうべをさかいにして、世の中はかるたを裏返したように変わってはいくれなかったのだ。

この景色のどこに自分は身をおく事ができよう。葉子は痛切に自分が落ち込んで行つた深淵しんえんの深みを知つた。そしてそこにしやがんでしまつて、苦にがい涙を泣き始めた。

懺悔ざんげの門の堅く閉ざされた暗い道がただ一筋、葉子の心の目には行く手に見やられるばかりだつた。

### 三四

ともかくも一家の主となり、妹たちを呼び迎えて、その教育に興味と責任とを持ち始めた葉子は、自然自然に妻らしくまた母らしい本能に立ち歸つて、倉地に対する情念にもどこか肉から精神

に移ろうとする傾きができて来るのを感じた。それは楽しい無事とも考えれば考えられぬ事はなかった。しかし葉子は明らかに倉地の心がそういう状態の下には少しづつ硬こわばって行き冷えて行くのを感じずにはいられなかった。それが葉子には何よりも不満だった。倉地を選んだ葉子であつてみれば、日がたつに従つて葉子にも倉地が感じ始めたと同様な物足らなさが感ぜられて行つた。落ち着くのか冷えるのか、とにかく倉地の感情が白熱して働かないのを見せつけられる瞬間は深いさびしみを誘い起こした。こんな事で自分の全我を投げ入れた恋の花を散つてしまわせてなるものか。自分の恋には絶頂があつてはならない。自分にはまだどんな難路でも舞い狂いながら登つて行く熱と力とがある。その熱と

力とが続く限り、ぼんやり腰を据<sup>す</sup>えて周囲の平凡な景色などをながめて満足してはいられない。自分の目には絶<sup>ぜつてん</sup>巔のない絶巔ばかりが見えていたい。そうした衝動は小休<sup>おや</sup>みなく葉子の胸にわだかまっていた。絵島丸の船室で倉地が見せてくれたような、何もかも無視した、神のように狂暴な熱心——それを繰り返して行きたかった。

竹柴館<sup>たけしばかん</sup>の一夜はまさしくそれだった。その夜葉子は、次の朝になって自分が死んで見いだされようとも満足だと思った。しかし次の朝生きたままで目を開くと、その場で死ぬ心持ちにはもうなれなかった。もつと嵩<sup>こう</sup>じた歓楽を追い試みようという欲念、そしてそれができそうな期待が葉子を未練にした。それからという

もの葉子は忘我渾沌ぼうがこんとんの歓喜に浸るためには、すべてを犠牲としても惜しまない心になっていた。そして倉地と葉子とは互い互いを楽しませそしてひき寄せるためにあらん限りの手段を試みた。葉子は自分の不可犯性（女が男に対して持ついちばん強大な蠱惑こわく物）のすべてまで惜しみなく投げ出して、自分を倉地の目に娼しょう婦ふ以下のものに見せるとも悔いようとはしなくなつた。二人は、はた目には酸鼻さんびだとさえ思わせるような肉欲の腐敗の末遠く、互いに淫樂いんらくの実を互い互いから奪い合いながらずるずると壊れこわれこゝろで行くのだつた。

しかし倉地は知らず、葉子に取つてはこのいまわしい腐敗の中にも一縷いちるの期待が潜んでいた。一度ぎゅつとつかみ得たらもう動

かないある物がその中に横たわっているに違いない、そういう期待を心のすみからぬぐい去る事ができなかったのだ。それは倉地が葉子の蠱惑こわくに全く迷わされてしまつて再び自分を回復し得ない時期があるだろうというそれだった。恋をしかけたもののひきめとして葉子は今まで、自分が倉地を愛するほど倉地が自分を愛してはいないとばかり思つた。それがいつでも葉子の心を不安にし、自分というものの居すわり所までぐらつかせた。どうかして倉地を痴呆ちほうのようにしてしまいたい。葉子はそれがためにはある限りの手段を取つて悔いなかつたのだ。妻子を離縁させても、社会的に死なしてしまつても、まだまだ物足らなかつた。竹柴館の夜に葉子は倉地を極印付きの凶状持ちにまでした事を知つた。

外界から切り離されるだけそれだけ倉地が自分の手に落ちるよう  
に思っていた葉子はそれを知つて有頂天うちようてんになつた。そして倉地  
が忍ばねばならぬ屈辱を埋め合わせるために葉子は倉地が欲する  
と思わしい激しい情欲を提供しようとしたのだ。そしてそうする  
事によつて、葉子自身が結局自己を銷しょうじん尽じんして倉地の興味から  
離れつつある事には気づかなかつたのだ。

とにもかくにも二人の關係は竹柴館の一夜から面目を改めた。  
葉子は再び妻から情熱の若々しい情人になつて見えた。そういう  
心の変化が葉子の肉体に及ぼす変化は驚くばかりだつた。葉子は  
急に三つも四つも若やいだ。二十六の春を迎えた葉子はそのころ  
の女としてはそろそろ老いの徴候をも見せるはずなのに、葉子は

一つだけ年を若く取ったようだった。

ある天気の良い午後——それは梅のつぼみがもう少しずつふくらみかかった午後の事だったが——葉子が縁側に倉地の肩に手をかけて立ち並びながら、うつとりと上気して雀すずめの交わるのを見ていた時、玄関に訪れた人の気配がした。

「だれでしょう」

倉地は物惰うさそうに、

「岡だろう」

といった。

「いゝえきつと正井さんよ」

「なあに岡だ」

「じゃ賭<sup>か</sup>けよ」

葉子はまるで少女のように甘ったれた口調でいつて玄関に出て見た。倉地がいったように岡だった。葉子は挨拶<sup>あいさつ</sup>もろくろくしないのでいきなり岡の手をしつかりと取った。そして小さな声で、

「よくいらしつてね。その間着<sup>あいぎ</sup>のよくお似合いになる事。春らしいいい色地ですわ。今倉地と賭<sup>か</sup>けをしていた所。早くお上がり遊ばせ」

葉子は倉地にしていたように岡のやさ肩に手を回してならびながら座敷にはいつて来た。

「やはりあなたの勝ちよ。あなたはあて事がお上手<sup>じょうず</sup>だから岡さんを譲つて上げたらうまくあつたわ。今御褒美<sup>ごほうび</sup>を上げるからそ

こで見ていらつしやいよ」

そう倉地にいうかと思うと、いきなり岡を抱きすくめてその頬ほおに強い接吻せつぶんを与えた。岡は少女のように恥じらつてしいて葉子から離れようともがいた。倉地は例の渋いように口もとをねじつてほほえみながら、

「ばか！……このごろこの女は少しどうかしますよ。岡さん、あなた一つ背中でもどやしてやってください。……まだ勉強か」といいながら葉子に天井を指さして見せた。葉子は岡に背中を向けて「さあどやしてちようだい」といいながら、今度は天井を向いて、

「愛さん、貞さあちゃん、岡さんがいらしつてよ。お勉強が済んだら

早くおりておいで」

と澄んだ美しい声で蓮葉はすはに叫んだ。

「そうお」

という声がしてすぐ貞世が飛んでおりて来た。

「貞さあちゃんは今勉強が済んだのか」

と倉地が聞くと貞世は平気な顔で、

「ええ今済んでよ」

といった。そこにはすぐはなやかな笑いが破裂した。愛子はなかなか下に降りて来ようとはしなかった。それでも三人は親しくチャブ台を囲んで茶を飲んだ。その日岡は特別に何かいい出したそうにしている様子だったが、やがて、

「きようはわたし少しお願いがあるんですが皆様きいてくださる  
でしょうか」

重苦しくいい出した。

「えゝえゝあなたのおっしゃる事ならなんでも……ねえ貞ちゃんさあ  
(とここまでは冗談らしくいったが急にまじめになつて) ……な  
んでもおっしゃつてくださいましたな、そんな他人行儀をしてくだ  
さると変ですわ」

と葉子がいった。

「倉地さんもいてくださるのでかえつていいよいと思いますこが古  
藤さんとうをここにお連れしちやいけないでしょうか。……木村さん  
から古藤さんの事は前から伺っていたんですが、わたしは初めて

のお方にお会いするのがなんだか億劫おつくうな質たちなもので二つ前の日曜日までとうとうお手紙も上げないでいたら、その日突然古藤さんのほうから尋ねて来てくださったんです。古藤さんも一度お尋ねしなければいけないんだがといつていなさいました。でわたし、きようは水曜日だから、用便ようべん外出の日だから、これから迎えに行つて来たいと思うんです。いけないでしょうか」

葉子は倉地だけに顔が見えるように向き直つて「自分に任せろ」という目つきをしながら、

「いいわね」

と念を押した。倉地は秘密を伝える人のように顔色だけで「よし」と答えた。葉子はくるりと岡のほうに向き直つた。

「ようございますとも（葉子はそのようにアクセントを付けた）あなたにお迎いに行つてはほんどにすみませんけれども、そうしてくださるとほんとうに結構。貞ちゃんもいいでしょう。またもう一人お友だちがふえて……しかも珍しい兵隊さんのお友だち……」

「愛ねさんが岡さんに連れていらつしやいつてこの間そういつたのよ」

と貞世は遠慮なくいつた。

「そうそう愛子さんもそうおつしやつてでしたね」

と岡はどこまでも上品な丁寧な言葉で事のついでのようにいつた。

岡が家を出るとしばらくして倉地も座を立った。

「いいでしょう。うまくやって見せるわ。かえって出入りさせるほうがいいわ」

玄関に送り出してそう葉子はいった。

「どうかなあいつ、古藤のやつは少し骨張り過ぎてる……が悪かつたら元々もともとだ……とにかくきようおれのいないほうがよからう」

そういつて倉地は出て行った。葉子は張り出しになっている六畳の部屋へやをきれいに片づけて、火鉢ひばちの中に香こうをたきこめて、心静かに目論見もくろみをめぐらしながら古藤の来るのを待った。しばらく会わないうちに古藤はだいぶ手ごわくなっているようにも思えた。

そこを自分の才力で丸めるのが時に取っての興味のようにも思え

た。もし古藤を軟化すれば、木村との関係は今よりもつなぎがよくなる……。

三十分ほどたったころ一つ木の兵營ぎから古藤は岡に伴われてやって来た。葉子は六畳むすむすにいて、貞世を取り次ぎに出した。

「貞世さんだね。大きくなったね」

まるで前の古藤の声とは思われぬようなおとなびた黒ずんだ声  
がして、がちやがちやと佩はいけん剣を取るらしい音も聞こえた。やが  
て岡の先に立って格好の悪いきたない黒の軍服を着た古藤が、皮  
類の腐ったような香においをぶんぶんさせながら葉子のいる所にはい  
って来た。

葉子は他意なく好意をこめた目つきで、少女のように晴れやか

に驚きながら古藤を見た。

「まあこれが古藤さん？　なんてこわい方かたになつておしまいなすつたんでしよう。元の古藤さんはお額ひたいのお白しろい所ところだけにしか残つちやいませんわ。がみがみとしかつたりなすつちやいやです事よ。ほんとうにしばらく。もう金輪際こんりんさい来てはくださらぬものとあきらめていましたのに、よく……よくいらしつてくださいました。岡さんのお手柄てがまですわ……ありがとうございました」

　　といつて葉子はそこにならぬですわつた二人ふたりの青年をかたみがわりに見やりながら軽く挨拶あいさつした。

「さぞおつらいでしょうねえ。お湯は？　お召しにならない？　ちやうど沸ふいていますわ」

「だいぶ臭くってお気の毒ですが、一度や二度湯につかったってなおりはしませんから……まあはいりません」

古藤ははいって来た時のしかつめらしい様子に引きかえて顔色を軟<sup>やわ</sup>らがせられていた。葉子は心の中で相変わらずの simpleton だと思った。

「そうねえ何時<sup>なんじ</sup>まで門限は？……え、六時？ それじゃもういくらもありませんわね。じやお湯はよしていただいとお話のほうをたんとしましようねえ。いかが軍隊生活は、お気に入って？」

「はいらなかつた前以上にきれいになりました」

「岡さんはどうなさつたの」

「わたしまだ猶予中ですが検査を受けたってきつとだめです。不

合格のような健康を持つと、わたし軍隊生活のできるような人がうらやましくつてなりません。……からだでも強くなったらわたし、もう少し心も強くなるんでしようけれども……」

「そんな事はありませんねえ」

古藤は自分の経験から岡を説伏するようにそういった。

「僕もその一人ひとりだが、鬼のような体格を持っていて、女のような弱虫が隊にいて見るとたくさんいますよ。僕はこんな心でこんな体格を持っているのが先天的の二重生活をしいられるようで苦しいんです。これからも僕はこの矛盾のためにきつと苦しむに違いない」

「なんですお二人とも、妙な所で謙遜けんそんのしつこをなさるのね。

岡さんだつてそうお弱くはないし、古藤さんときたらそれは意志  
堅固……」

「そうなら僕はきょうもここなんかには来やしません。木村君に  
もとうに決心をさせているはずなんです」

葉子の言葉を中途から奪つて、古藤はしたたか自分自身をむち  
うつように激しくこういった。葉子は何もかもわかつているくせ  
にしらを切つて不思議そうな目つきをして見せた。

「そうだ、思いきつていうだけの事はいつてしましましょう。：  
岡君立たないでください。君がいてくださるとかえつていいん  
です」

そういつて古藤は葉子をしばらく熟視してからいい出す事をま

とめようとするように下を向いた。岡もちよつと形を改めて葉子のほうをぬすみ見るようにした。葉子は眉まゆ一つ動かさなかつた。そしてそばにいる貞世に耳うちして、愛子を手伝つて五時に夕食の食べられる用意をするように、そして三縁亭さんえんていから三皿みさらほどの料理を取り寄せるようにいつけて座をはずさした。古藤はおどるようにして部屋へやを出て行く貞世をそつと目のはずれで見送つていたが、やがておもむろに顔をあげた。日に焼けた顔がさらに赤くなつていた。

「僕はね……（そういつておいて古藤はまた考えた）……あなたが、そんな事はないとあなたはいうでしょうが、あなたが倉地というその事務長の人の奥さんになられるというのなら、それが悪

いつて思ってるわけじゃないんです。そんな事があるとすりやそりやしかたのない事なんだ。……そしてですね、僕にもそりやわかるようです。……わかるっていうのは、あなたがそうなればなりそうな事だと、それがわかるっていうんです。しかしそれならそれでいいから、それを木村にはつきりといってやってください。そこなんだ僕のいわんとするのは。あなたは怒るおこかもしれませんが、僕は木村に幾度も葉子さんとはもう縁を切れって勧告しました。これまで僕があなたに黙ってそんな事をしていたのはわかるからお断わりをします（そういつて古藤はちよつと誠実に頭を下げた。葉子も黙ったままじめにうなずいて見せた）。けれども木村からの返事は、それに対する返事はいつでも同一なんで

す。葉子から破約の事を申し出て来るか、倉地という人との結婚を申し出て来るまでは、自分はだれの言葉よりも葉子の言葉と心とに信用をおく。親友であつてもこの問題については、君の勧告だけでは心は動かない。こうなんです。木村つてのはそんな男なんですよ（古藤の言葉はちよつと曇つたがすぐ元のようになつた）。それをあなたは黙つておくのは少し変だと思ひます」

「それで……」

葉子は少し座を乗り出して古藤を励ますように言葉が続けさせ  
た。

「木村からは前からあなたの所に行つてよく事情を見てやつてくれ、病気の事も心配でならないからといつて来てはいるんですが、

僕は自分ながらどうしようもない妙な潔癖があるもんだからつい伺いおくれてしまったのです。なるほどあなたは先せんよりはやせましたね。そうして顔の色もよくありませんね」

そういいながら古藤はじつと葉子の顔を見やった。葉子は姉のように一段の高みから古藤の目を迎えて鷹揚おうようにほほえんでいた。うだけいわせてみよう、そう思つて今度は岡のほうに目をやった。

「岡さん。あなた今古藤さんのおつしやる事をすっかりお聞きになつていてくださいましたわね。あなたはこのごろ失礼ながら家族ひとりの一人のようにこちらに遊びにおいでくださるんですが、わたしをどうお思いになつていらつしやるか、御遠慮なく古藤さんに

お話しなすってくださいいな。決して御遠慮なく……わたしどんな事を伺っても決して決してなんとも思いはいたしませんから」

それを聞くと岡はひどく当惑して顔をまっ赤かにして処女のように羞恥はにかんだ。古藤のそばに岡を置いて見るのは、青銅の花びんのそばに咲きかけの桜を置いて見るようだった。葉子はふと心に浮かんだその対比を自分ながらおもしろいと思った。そんな余裕を葉子は失わないでいた。

「わたしこういう事こと柄がらには物をいう力はないように思いますから……」

「そういわないでほんとうに思った事をいつてみてください。僕は一徹ですからひどい思い間違いをしていないとも限りませんか

ら。どうか聞かしてく下さい」

そういつて古藤も けんしょう肩 章越しに岡を顧みた。

「ほんとうに何もいう事はないんですけれども……木村さんにはわたし口にいえないほど御同情しています。木村さんのようない かた方が今ごろどんなにひとりでさびしく思っているかと思いやっただけでわたしさびしくなってしまう。けれども世の中にはいろいろな運命があるので不是吗？ ようか。そうして銘々 は黙ってそれを耐えて行くよりしかたがないようにわたし思います。そこで無理をしようとするすべての事が悪くなるばかり……それはわたしだけの考えですけれども。わたしそう考えないと一刻も生きていられないような気がしてなりません。葉子さんと

木村さんと倉地さんとの関係はわたし少しは知ってるようにも思  
いますけれども、よく考えてみるとかえってちつとも知らないの  
かもしれないねえ。わたしは自分自身が少しもわからないんで  
すからお三人の事なども、わからない自分の、わからない想像だ  
けの事だと思いたいです。……古藤さんにはそこまではお話し  
しませんでしたけれども、わたし自分の家の事情がたいへん苦し  
いので心を打ちあけるような人を持っていませんでしたが……、  
ことに母とか姉妹とかいう女の人に……葉子さんにお目にかかっ  
たら、なんでもなくそれができたんです。それでわたしはうれし  
かったんです。そうして葉子さんが木村さんとどうしても気がお  
合いにならない、その事も失礼ですけども今の所ではわたし想

像が違っていないようにも思います。けれどもそのほかの事はわたしなんとも自信をもつていう事ができません。そんな所まで他人が想像をしたり口を出したりしていいものかどうかもわたしわかりません。たいへん独善的に聞こえるかもしれませんが、そんな気はなく、運命にできるだけ従順にしたいと思うと、わたし進んで物をいったりしたりするのが恐ろしいと思います。……なんだか少しも役に立たない事をいってしまいました……わたしやはり力がありませんから、何もいわなかったほうがよかつたんですけれども……」

そう絶え入るように声を細めて岡は言葉を結ばぬうちに口をつぐんでしまった。そのあとには沈黙だけがふさわしいように口を

つぐんでしまった。

実際そのあとには不思議なほどしめやかな沈黙が続いた。たき込めた香のこけうにおいがかすかに動くだけだった。

「あんなに謙遜けんそんな岡君も（岡はあわててその賛辞らしい古藤の言葉を打ち消そうとしそうにしたが、古藤がどんどん言葉を続けるのでそのまま顔を赤くして黙ってしまった）あなたと木村とがどうしても折り合わない事だけは少なくとも認めているんです。そうでしょう」

葉子は美しい沈黙をがさつな手でかき乱された不快をかすかに物足らなく思うらしい表情をして、

「それは洋行する前、いつぞや横浜に一緒に行っていたいた時

くわしくお話ししたじやありませんか。それはわたしどなたにでも申し上げていた事ですわ」

「そんならなせ……その時は木村のほかには保護者はいなかったから、あなたとしてはお妹さんたちを育てて行く上にも自分を犠牲にして木村に行く気でおいでだったかもしれないがなせ……なぜ今になつても木村との関係をそのままにしておく必要があるんです」

岡は激しい言葉で自分が責められるかのようにはらはらしながら首を下げたり、葉子と古藤の顔とをかたみがりに見やつたりしていたが、とうとう居たたまれなくなつたと見えて、静かに座を立てて人のいない二階のほうに行つてしまった。葉子は岡の心

持ちを思いやって引き止めなかつたし、古藤は、いてもらつた所がなんの役にも立たないと思つたらしくこれも引き止めはしなかつた。さす花もない青銅の花びん一つ……葉子は心の中で皮肉にほほえんだ。

「それより先に伺わしてちようだいな、倉地さんはどのくらいの程度でわたしたちを保護していらつしやるか御存じ？」

古藤はすぐぐつと詰まつてしまった。しかしすぐ盛り返して来た。

「僕は岡君と違つてブルジョアの家に生まれなかつたものですかほくらデリカシーというような美德をあまりたくさん持つていないよ  
うだから、失礼な事をいつたら許してください。倉地つて人は妻

子まで離縁した……しかも非常に貞節らしい奥さんまで離縁したと新聞に出ていました」

「そうね新聞には出ていましたわね。……ようございますわ、仮にそうだとしたらそれが何かわたしと関係のある事だともおつしやるの」

そういいながら葉子は少し気に障さえたらしく、炭取りを引き寄せて火鉢ひばちに火をつぎ足した。桜炭の火花が激しく飛んで二人の間にはじけた。

「まあひどいこの炭は、水をかけずに持つて来たに見えるのね。女ばかりの世帯だと思つて出入りの御用聞きまで人をばかにするんですのよ」

葉子はそう言い言い眉をまゆひそめた。古藤は胸をつかれたようだった。

「僕は乱暴なもんだから……いい過ぎがあつたらほんとうに許してください。僕は実際いかに親友だからといって木村ばかりをいようと思ってるわけじゃないんですけれども、全くあの境遇には同情してしまうもんだから……僕はあなたも自分の立場さえはつきりいってくださればあなたの立場も理解ができると思うんだけどもなあ。……僕はあまり直線的すぎるんでしようか。僕は世の中をsun-clearに見たいと思いますよ。できないもんでしようか」

葉子はなでるような好意のほほえみを見せた。

「あなたがわたしほんとうにうらやましゅうござんすわ。平和な家庭にお育ちになつて素直すなおになんでも御覧になれるのはありがたい事なんですわ。そんな方かたばかりが世の中にいらつしやるとめんどうがなくなつてそれはいいんですけれども、岡さんなんかはそれから見るとほんとうにお気の毒なんですの。わたしみたいなものをさえああしてたよりにしていらつしやるのを見るといじらしくつてきようは倉地さんの見ている前でキスして上げつちまつたの。……他人事ひとごとじゃありませんわね（葉子の顔はすぐ曇つた）。あなたと同様はきはきした事の好きなわたしがこんなに意地いじをこじらしたり、人の気をかねたり、好んで誤解を買つて出たりするようになつてしまった、それを考えてごらんになつてちようだい。

あなたには今はおわかりにならないかもしれないかもしれませんが……  
それにしてももう五時。愛子に手料理を作らせておきましたから  
久しぶりで妹たちにも会ってやってくださいまし、ね、いいでし  
よう」

古藤は急に固くなった。

「僕はぼく帰ります。僕は木村にはつきりした報告もできないうちに、  
こちらで御飯をいただいたりするのとはなんだか気がとがめます。  
葉子さん頼みます、木村を救ってください。そしてあなた自身を  
救ってください。僕はほんとうをいうと遠くに離れてあなたを見  
ているとどうしてもきらいになつちまうんですが、こうやってお  
話しているのと失礼な事をいったり自分で怒おこつたりしながらも、

あなたは自分でもあざむけないようなものを持っておられるのを感ずるように思うんです。境遇が悪いんだきつと。僕は一生が大事だと思えますよ。来世らいせがあらうが過去かこせ世があらうがこの一生が大事だと思えますよ。生きがいがあつたと思うように生きて行きたいと思えますよ。ころんだつて倒れたつてそんな事を世間のようにかれこれくよくよせず、ころんだら立つて、倒れたら起き上がつて行きたいと思えます。僕は少し人並みはずれてばかりのようだけれども、ばか者でさえがそうして行きたいと思ってるんです」

古藤は目に涙をためて痛ましげに葉子を見やった。その時電灯が急に部屋へやを明るくした。

「あなたはほんとうにどこが悪いようですね。早くなおってください。それじゃ僕はこれできようは御免をこうむります。さようなら」

牝鹿めじかのように敏感な岡さえがいつこう注意しない葉子の健康状態を、鈍重らしい古藤がいち早く見て取って案じてくれるのを見ると、葉子はこの素朴そぼくな青年になつかし味を感ずるのだった。葉子は立って行く古藤の後ろから、

「愛さん貞さあちゃん古藤さんがお帰りになるといけないから早く来ておとめ申しておくれ」

と叫んだ。玄関に出た古藤の所に台所口から貞世が飛んで来た。飛んで来はしたが、倉地に対してのようによくおどりかかる事は

得しないで、口もきかずに、少し恥ずかしげにそこに立ちすくんだ。そのあとから愛子が手ぬぐいを頭から取りながら急ぎ足で現われた。玄関のなげしの所に照り返しをつけて置いてあるランプの光をまともに受けた愛子の顔を見ると、古藤は魅いられたようにその美に打たれたらしく、目礼もせずとその立ち姿にながめ入った。愛子にはこりと左の口じりに笑くえぼの出る微笑を見せて、右手の指先が廊下の板にやつとさわるほど膝ひざを折って軽く頭を下げた。愛子の顔には羞恥しゆうちらしいものは少しも現われなかった。

「いけません、古藤さん。妹たちが御恩返しのつもりで一生懸命にしたんですから、おいしくはありませんが、ぜひ、ね。貞さあちやんお前さんその帽子と剣とを持ってお逃げ」

葉子にそういわれて貞世はすばしこく帽子だけ取り上げてしまつた。古藤はおめおめと居残る事になつた。

葉子は倉地をも呼び迎えさせた。

十二畳の座敷にはこの家に珍しくにぎやかな食卓がしつらえられた。五人がおのおの座について箸はしを取ろうとする所に倉地がはいって来た。

「さあいらつしやいまし、今夜はにぎやかですよ。ここへどうぞ（そう云つて古藤の隣の座を目で示した）。倉地さん、この方かたがいつもおうわさをする木村の親友の古藤義一さんです。きょう珍しくいらしつてくださいましたの。これが事務長をしていらしつた倉地三吉さんです」

紹介された倉地は心置きない態度で古藤のそばにすわりながら、「わたしはたしか双鶴館そうかくかんでちよつとお目にかかったように思うが御挨拶ごあいさつもせず失敬しました。こちらには始終お世話になります。以後よろしく」

といった。古藤は正面から倉地をじつと見やりながらちよつと頭を下げたきり物もいわなかつた。倉地は軽々しく出した自分の今の言葉を不快に思つたらしく、苦にがりきつて顔を正面に直したが、しいて努力するように笑顔えがおを作つてもう一度古藤を顧みた。

「あの時からすると見違えるように変わられましたな。わたしも日にっしん清戦争の時は半分軍人のような生活をしたが、なかなかおもしろかつたですよ。しかし苦しい事もたまにはおありだろうな」

古藤は食卓を見やつたまま、

「えゝ」

とだけ答えた。倉地の我慢はそれまでだった。一座はその気分を感じてなんとなく白け渡しらった。葉子の手慣れたゴゴでもそれはなかなか一掃されなかった。岡はその気まずさを強烈な電気のように感じているらしかった。ひとり貞世だけはしやぎ返った。

「このサラダは愛ねえさんがお醋すとオリーブ油を間違つて油をたくさんかけたからきつと油っこくつてよ」

愛子はおだやかに貞世をにらむようにして、

「貞さあちゃんはひどい」

といった。貞世は平気だった。

「その代わりわたしがまたお醋すをあとから入れたからすすつぱすぎる所があるかもしれないなくつてよ。も少しいでにお葉はも入れればよかつてねえ、愛ねえさん」

みんなは思わず笑った。古藤も笑うには笑った。しかしその笑い声はすぐしずまってしまった。

やがて古藤が突然箸はしをおいた。

「僕が悪いためにせつかくの食卓をたいへん不愉快にしたようです。すみませんでした。僕はこれで失礼します」

葉子はあわてて、

「まあそんな事はちつともありません事よ。古藤さんそんな事をおっしやらずにしまいまでいらしってちようだいどうぞ。みんな

で途中までお送りしますから」

ととめたが古藤はどうしてもきかなかつた。人々は食事なかばで立ち上がらねばならなかつた。古藤は靴をはいてから、帯皮を取り上げて剣をつると、洋服のしわを延ばしながら、ちらつと愛子に鋭く目をやった。始めからほとんど物をいわなかつた愛子は、この時も黙つたまま、多恨な柔和な目を大きく見開いて、中座をして行く古藤を美しくたしなめるようにじつと見返していた、それを葉子の鋭い視覚は見のがさなかつた。

「古藤さん、あなたこれからきつとたびたびいらしててくださいましよ。まだまだ申し上げる事がたくさん残っていますし、妹たちもお待ち申していますから、きつとですことよ」

そういつて葉子も親しみを込めたひとみを送った。古藤はしやちこ張ばった軍隊式の立礼をして、さくさくと砂利じやりの上に靴くつの音を立てながら、夕闇ゆうやみの催した杉森すぎもりの下道のほうへと消えて行つた。

見送りに立たなかつた倉地が座敷のほうでひとり言のようにだれに向かつてともなく「ばか！」というのが聞こえた。

### 三五

葉子と倉地とは竹柴館たけしばかん以来たびたび家を明けて小さな恋の冒険を楽しみ合うようになった。そういう時に倉地の家に入ります

る外国人や正井などが同伴する事もあつた。外国人はおもに米国の  
人だったが、葉子は倉地がそういう人たちを同座させる意味を  
知つて、そのなめらかな英語と、だれでも——ことに顔や手の表  
情に本能的な興味を持つ外国人を——こわく 蠱惑しないでは置かないは  
なやかな応接ぶりとで、彼らをとりこにする事に成功した。それ  
は倉地の仕事を少なからず助けたに違いなかつた。倉地の金まわ  
りはますます潤沢になつて行くらしかつた。葉子一家は倉地と木  
村とから貢みつがれる金で中流階級にはあり得ないほど余裕のある生  
活ができたのみならず、葉子は充分の仕送りを定子にして、なお  
余る金を女らしく毎月銀行に預け入れるまでになつた。

しかしそれとともに倉地はますますすすさんで行つた。目の光に

さえもとのように大海にのみ見る寛濶かんかつな無頓着むとんじやくなそして恐ろしく力強い表情はなくなつて、いらいらとあてもなく燃えさかる石炭の火のような熱と不安とが見られるようになった。ややともすると倉地は突然わけもない事にきびしく腹を立てた。正井などは木こつ葉はみじんにしかり飛ばされたりした。そういう時の倉地はあらしのような狂暴な威力を示した。

葉子も自分の健康がだんだん悪いほうに向いて行くのを意識しないではいられなくなつた。倉地の心がすさめばすさむほど葉子に対して要求するものは燃えただれる情熱の肉体だったが、葉子もまた知らず知らず自分をそれに適応させ、かつは自分が倉地から同様な狂暴な愛撫あいぶを受けたい欲念から、先の事もあとの事も考

えずに、現在の可能のすべてを尽くして倉地の要求に応じて行った。脳も心臓も振り回して、ゆすぶって、たたきつけて、一気に猛火であぶり立てるような激情、魂ばかりになったような、肉ばかりになったような極端な神経の混乱、そしてそのあとに続く死滅と同然の倦怠<sup>けんたい</sup>疲労。人間が有する生命力をどん底からためし試みるそういう虐待が日に二度も三度も繰り返された。そうしてそのあとでは倉地の心はきつと野獣のようにさらにすすんでいた。葉子は不快きわまる病理的の憂鬱<sup>ゆううつ</sup>に襲われた。静かに鈍く生命を脅かす腰部の痛み、二匹の小魔<sup>しょうま</sup>が肉と骨との間にはいり込んで、肉を肩にあてて骨を踏んばって、うんと力任せに反り上がるかと思われるほどの肩の凝り、だんだん鼓動を低めて行って、呼

吸を苦しくして、今働きを止めるかとあやぶむと、一時に耳にまで音が聞こえるくらい激しく動き出す不規則な心臓の動作、もやもやと火の霧で包まれたり、透明な氷の水で満たされるような頭脳の狂い、……こういう現象は日一日と生命に対する、そして人生に対する葉子の猜疑さいぎを激しくした。

有頂天うちようてんの溺楽できらくのあとに襲つて来るさびしいとも、悲しいとも、

はかないとも形容のできないその空虚さは何よりも葉子につらかった。たといその場で命を絶たつてもその空虚さは永遠に葉子を襲うもののようにも思われた。ただこれからのがれるただ一つの道は捨てばちになつて、一時的のものだとは知り抜きながら、そしてそのあとにはさらに苦しい空虚さが待ち伏せしているとは

覚悟しながら、次の<sup>できごと</sup>溺<sup>お</sup>樂<sup>お</sup>を逐うほかはなかつた。気分のおすさんだ倉地も同じ葉子と同じ心で同じ事を求めていた。こうして二人<sup>ふたり</sup>は底止<sup>ていし</sup>する所のないはずこかへ手をつないで迷い込んで行つた。

ある朝葉子は朝湯を使つてから、例の六畳で鏡台に向かつたが一日一日に変わつて行くような自分の顔にはただ驚くばかりだつた。少し縦に長く見える鏡ではあるけれども、そこに映る姿はあまりに細つていた。その代わり目は前にも増して大きく鈴を張つて、化粧焼けとも思われぬ薄い紫色の色素がそのまわりに現われて来ていた。それが葉子の目にたとえば森林に囲まれた澄んだ湖のような深みと神秘とを添えるようにも見えた。鼻筋はやせ細つて精神的な敏感さをきわ立たしていた。頬<sup>ほお</sup>の傷<sup>いたいた</sup>々しくこけたた

めに、葉子の顔にいうべからざる暖かみを与える笑くぼを失おうとしてはいたが、その代わりにそこには悩ましく物思わしい張りを加えていた。ただ葉子がどうしても弁護のできないのはますます目立って来た固い顎したあごの輪郭だった。しかしとにもかくにも肉情の興奮の結果が顔に妖ようせい凄せいな精神美を付け加えているのは不思議だった。葉子はこれまでの化粧法を全然改める必要をその朝になってしみじみと感じた。そして今まで着ていた衣類までが残らず気に食わなくなつた。そうなるに葉子は矢もたてもたまらなかつた。

葉子は紅べにのまじつた紅粉おしろいをほとんど使わずに化粧をした。顎あごの両側と目のまわりとの紅粉をわざと薄くふき取つた。枕まくらを入れ

ずに前髪を取って、束髪そくはつの鬘まげを思いきり下げて結つてみた。鬘びんだけを少しふくらましたので顎あごの張つたのも目立たず、顔の細くなつたのもいくらか調節されて、そこには葉子自身が期待もしなかつたような廃頹はいたいてき的な同時に神経質的なすごくも美しい一つの顔面が創造されていた。有り合わせのものの中からできるだけ地味みな一そろいを選んでそれを着ると葉子はすぐ越後屋えちごやに車を走らせた。

昼すぎまで葉子は越後屋にいて注文や買い物に時を過ごした。衣服や身のまわりのものの見立てについては葉子は天才といつてよかつた。自分でもその才能には自信を持っていた。従つて思い存分の金をふところに入れていて買い物をするくらい興の多いも

のは葉子に取つては他になかった。越後屋を出る時には、感興と興奮とに自分を傷めちぎつた芸術家のようにへとへとに疲れきつていた。

帰りついた玄関の靴脱ぎ石の上には岡の細長い華車な半靴が脱ぎ捨てられていた。葉子は自分の部屋に行つて懷中物などをしまつて、湯飲みでなみなみと一杯の白湯を飲むと、すぐ二階に上がつて行つた。自分の新しい化粧法がどんなふうにも岡の目を刺激するか、葉子は子供らしくそれを試みてみたのだ。彼女は不意に岡の前に現われようために裏階子からそつと登つて行つた。そして襖をあけるとそこに岡と愛子だけがいた。貞世は苔香園にでも行つて遊んでいるのかそこには姿を見せなかつた。

岡は詩集らしいものを開いて見ていた。そこにはなお二三冊の書物が散らばっていた。愛子は縁側に出ててすり手欄から庭を見おろしていた。しかし葉子は不思議な本能から、はしごだん階子段に足をかけたころには、二人は決して今のような位置に、今のような態度でいたのではないという事を直覺していた。二人が一人は本を読み、一人が縁に出ているのは、いかにも自然でありながら非常に不自然だった。

突然——それはほんとうに突然どこから飛び込んで来たのか知れない不快の念のために葉子の胸はかきむしられた。岡は葉子の姿を見ると、わざと寛くつろがせていたような姿勢を急に正して、読みふけていたらしく見せた詩集をあまりに惜しげもなく閉じて

しまった。そしていつもより少しなれなく、挨拶あいさつした。愛子は縁側から静かにこつちを振り向いて平生ふだんと少しも変わらない態度で、柔順に無表情に縁板の上にちよつと膝ひざをついて挨拶した。しかしその沈着にも係わらず、葉子は愛子が今まで涙を目にためていたのをつきとめた。岡も愛子も明らかに葉子の顔や髪の様子の変わったのに気づいていないくらい心に余裕のないのが明らかだった。

「貞さあちゃんは」

と葉子は立ったままで尋ねてみた。二人は思わずあわてて答ふたりえようとしたが、岡は愛子をぬすみ見るようにして控えた。

「隣の庭に花を買いに行ってもらいましたの」

そう愛子が少し下を向いて鬚まげだけを葉子に見えるようにして素す直なおに答えた。「ふゝん」と葉子は腹の中でせせら笑った。そして始めてそこにすわって、じつと岡の目を見つめながら、

「何？ 読んでいらしたのほ」

といつて、そこにある四六しろうくほそがた細型の美しい表装の書物を取り上げて見た。黒髪を乱した妖ようえん艶な女の頭、矢で貫かれた心臓、その心臓からぽたぽた落ちる血のしたたりがおのずから字になったように凶案された「乱れ髪」という標題——文字に親しむ事の大きらいな葉子もうわさで聞いていた有名な鳳おおとりあきこ晶子の詩集だった。そこには「明みょう星じょう」という文芸雑誌だの、春しゅん雨うの「無い花ち果く」だの、兆ちやう民みん居こ士しの「一ねん年ゆう有はん」だのという新刊の書物も

散らばっていた。

「まあ岡さんもなかなかのロマンティストね、こんなものを愛読なさるの」

と葉子は少し皮肉なものを口じりに見せながら尋ねてみた。岡は静かな調子で訂正するように、

「それは愛子さんのです。わたし今ちよつと拝見しただけです」  
「これは」

といって葉子は今度は「一年有半」を取り上げた。

「それは岡さんがきょう貸してくださいましたの。わたしわかり  
そうもありませんわ」

愛子は姉の毒舌をあらかじめ防ごうとするように。

「へえ、それじゃ岡さん、あなたはまたたいしたリアリストね」

葉子は愛子を眼中にもおかないふうでこういった。去年の下半期の思想界を震憾しんかんしたようなこの書物と続編とは倉地の貧しい書架の中にもあったのだ。そして葉子はおもしろく思いながらその中を時々拾い読みしていたのだった。

「なんだかわたしとはすっかり違った世界を見るようでないながら、自分の心持ちが残らずいつてあるようでもあるんで……わたしそれが好きなんです。リアリストというわけではありませんけれど……」

「でもこの本の皮肉は少しやせ我慢ね。あなたのような方かたにはちよつと不似合いですわ」

「そうでしうか」

岡は何とはなく今にでも腫れ物はものにさわられるかのようにそわそわしていた。会話は少しもいつものようにははずまなかつた。葉子はいらいらしながらもそれを顔には見せないで今度は愛子のほうに槍先やりさきを向けた。

「愛さんお前こんな本をいつお買いだったの」

といつてみると、愛子は少しためらっている様子だったが、すぐに素直な落ち着きを見せて、

「買ったんじゃないんですの。古藤さんが送ってくださいましたの」

といった。葉子はさすがに驚いた。古藤はあの会食の晩、中座

したつきり、この家には足踏みもしなかつたのに……。葉子は少し激しい言葉になつた。

「なんだつてまたこんな本を送つておよこしなさつたんだろう。あなたお手紙でも上げたのね」

「えゝ、……くださいましたから」

「どんなお手紙を」

愛子は少しうつむきかげんに黙つてしまった、こういう態度を取つた時の愛子のしぶとさを葉子はよく知つていた。葉子の神経はびりびりと緊張して来た。

「持つて来てお見せ」

そう厳格にいいながら、葉子はそこに岡のいる事も意識の中に

加えていた。愛子は執拗しつように黙ったまますわっていた。しかし葉子がもう一度催促の言葉を出そうとすると、その瞬間に愛子はつと立ち上がって部屋へやを出て行つた。

葉子はそのすきに岡の顔を見た。それはまた無垢童貞むくの青年が不思議な戦慄せんりつを胸の中に感じて、反感を催すか、ひき付けられるかしないではいられないような目で岡を見た。岡は少女のように顔を赤めて、葉子の視線を受けきれないでひとみをたじろがしつつ目を伏せてしまった。葉子はいつまでもそのデリケートな横顔を注視みつめつづけた。岡は唾つばを飲みこむのものはばかるような様子をしていた。

「岡さん」

そう葉子に呼ばれて、岡はやむを得ずおずおず頭を上げた。葉子は今度はなじるようにその若々しい上品な岡を見つめていた。

そこに愛子が白い西洋封筒を持って帰って来た。葉子は岡にそれを見せつけるように取り上げて、取るにも足らぬ軽いものでも扱うように飛び飛びに読んでみた。それにはただあたりまえなことだけが書いてあった。しばらく目で見た二人の大きくなつて変わったのには驚いたとか、せつかく寄つて作つてくれたごちそうをすっかり賞味しないうちに帰つたのは残念だが、自分の性分しょうぶんとしてはあの上我慢ができなかったのだから許してくれとか、人間は他人の見よう見まねで育つて行つたのではだめだから、たといどんな境遇にいても自分の見識を失つてはいけないとか、二人ふたり

には倉地という人間だけはどうかして近づけさせたくないと思うとか、そして最後に、愛子さんは詠歌がなかなか上手じょうずだったがこのごろでできるか、できるならそれを見せてほしい、軍隊生活の乾燥無味なものには堪たえられないからとしてあつた。そしてあて名は愛子、貞世の二人になつていた。

「ばかじやないの愛さん、あなたこのお手紙でいい気になつて、下手へたくそなぬたでもお見せ申したんでしよう……いい気なものね……この御本と一緒にもお手紙が来たはずね」

愛子はすぐまた立とうとした。しかし葉子はそうはさせなかつた。

「一本一本お手紙を取りに行つたり帰つたりしたんじや日が暮れ

ますわ。……日が暮れるといえどももう暗くなつたわ。貞ちゃんさあはまた何をしているだろう……あなた早く呼びに行つて一緒にお夕飯のしたくをしてちょうだい」

愛子はそのところにある書物をひとかかえに胸に抱いて、うつむくと愛らしく二重ふたえになる頤おとがで押えて座を立つて行つた。それがいかにもしおしおと、細かい挙動の一つ一つで岡に哀訴するように見れば見なされた。「互ふたりに見かわすような事をしてみるがいい」そう葉子は心の中で二人をたしなめながら、二人に気を配つた。岡も愛子も申し合わせたように瞥視べっしもし合わなかつた。けれども葉子は二人がせめては目だけでも慰め合いたい願いに胸を震わしているのはつきりと感ずるように思った。葉子の心はおぞましく

も苦にが々にがしい猜疑さいぎのために苦しんだ。若さと若さとが互いにきびしく求め合つて、葉子などをやすやすと袖そでにするまでにその情炎は嵩こうじていると思うと耐えられなかつた。葉子はしいて自分を押ししずめるために、帯の間から煙草たばこ入れを取り出してゆっくり煙を吹いた。煙管きせるの先が端はしなく火鉢ひばちにかざした岡の指先に触れると電気のようなものが葉子に伝わるのを覚えた。若さ……若さ……。

そこには二人の間にしばらくぎごちない沈黙が続いた。岡が何をいえば愛子は泣いたんだろう。愛子は何を泣いて岡に訴えていたのだろう。葉子が数えきれぬほど経験した幾多の恋の場面の中から、激情的ないろいろの光景がつぎつぎに頭の中に描かれるのだった。もうそうした年齢が岡にも愛子にも来ているのだ。それ

に不思議はない。しかしあれほど葉子にあこがれおぼれて、いわば恋以上の恋ともいふべきものを崇拜的にささげていた岡が、あの純直な上品なそしてきわめて内気な岡が、見る見る葉子の把持はじから離れて、人もあろうに愛子——妹の愛子のほうに移つて行くうとしてゐるらしいのを見なければならぬのはなんとこの事だろ。愛子の涙——それは察する事ができる。愛子はきつと涙ながらに葉子と倉地との間にこのごろ募つて行く奔放な放埒ほうらつな醜行を訴へたに違ひない。葉子の愛子と貞世とに対する偏頗へんぱな愛憎と、愛子の上に加えられる御殿女中風ふうな圧迫とを嘆いたに違ひない。しかもそれをあの女に特有な多恨らしい、冷ややかな、さびしい表現法で、そして息いききづまるような若さと若さとの共鳴の中

に……。

勃ぼつぜん然として焼くような嫉妬しつとが葉子の胸の中に堅く凝りこごついて来た。葉子はすり寄っておどおどしている岡の手を力強く握りしめた。葉子の手は氷のように冷たかった。岡の手は火鉢ひばちにかざしてあつたせいにか、珍しくほてって臆おくびよう病らしい油汗が手のひらにしとどににじみ出ていた。

「あなたはわたしがおこわいの」

葉子はさりげなく岡の顔をのぞき込むようにしてこういった。

「そんな事……」

岡はしよう事なしに腹を据すえたように割合にしやんとした声で  
 こういうながら、葉子の目をゆっくり見やって、握られた手には

少しも力をこめようとはしなかった。葉子は裏切られたと思う不満のためにもうそれ以上冷静を装つてはいられなかった。昔のようにとどこまでも自分を失わない、粘り気けの強い、鋭い神経はもう葉子にはなかった。

「あなたは愛子を愛していてくださるのね。そうでしょう。わたしがここに来る前愛子はあんなに泣いて何を申し上げていたの？ ……おっしゃってくださいな。愛子があなたのような方に愛していただけるのはもったいないくらいですから、わたし喜ぶともとがめ立てなどはしません、きつと。だからおっしゃってちようだい。 ……いゝえ、そんな事をおっしゃってそりやだめ、わたしの目はまだこれでも黒うござんすから。 ……あなたそんな水臭いお

仕向けをわたしになさろうというの？ まさかとは思いますがあなたわたしにおっしゃった事を忘れなさっちゃ困りますよ。わたしはこれでも真剣な事には真剣になるくらいの誠実はあるつもりです事よ。わたしあなたのお言葉は忘れてはおりませんわ。姉だと今でも思っていてくださるならほんとうの事をおっしゃってください。愛子に対してはわたしはわたしだけの事をして御覧に入れますから……さ」

そう瘡かんぼし走った声でいいながら葉子は時々握っている岡の手をヒステリックに激しく振り動かした。泣いてはならぬと思えば思うほど葉子の目からは涙が流れた。さながら恋人に不実を責めるような熱意が思うざまわき立って来た。しまいには岡にもその心

持ちが移って行ったようだった。そして右手を握った葉子の手の上に左の手を添えながら、上下からはさむように押えて、岡は震え声で静かにいい出した。

「御存じじやありませんか、わたし、恋のできるような人間ではないのを。年こそ若うございますけれども心は妙にいじけて老いてしまっているんです。どうしても恋の遂げられないような女の方かたにでなければわたしの恋は動きません。わたしを恋してくれる人があるとしたら、わたし、心が即座とうとに冷えてしまうのです。一度自分の手に入れたら、どれほど尊とうといものでも大事なもので、もうわたしには尊とうとくも大事でもなくなってしまうんです。だからわたし、さびしいんです。なんにも持っていない、なんにもむな

しい……そのくせそう知り抜きながらわたし、何かどこかにあるように思つてつかむ事のできないものにあこがれます。この心さえなくなればさびしくつてもそれでいいのだがなと思うほど苦しくもあります。何にでも自分の理想をすぐあてはめて熱するような、そんな若い心がほしくもありますけれども、そんなものはわたしには来はしません……春にでもなつて来るとよけい世の中はむなしく見えてたまりません。それをさつきふと愛子さんに申し上げたんです。そうしたら愛子さんがお泣きになつたんです。わたし、あとですぐ悪いと思ひました、人にいうような事じゃなかつたのを……」

　　こういう事をいう時の岡はという言葉にも似ず冷酷とも思われる

ほどたださびしい顔になった。葉子には岡の言葉がわかるようでもあり、妙にからんでも聞こえた。そしてちよつとすかさされたように氣勢をそがれたが、どんどんわき上がるように内部から襲い立てる力はすぐ葉子を理不<sup>りふじん</sup>尽にした。

「愛子がそんなお言葉で泣きましたって？　不思議ですわねえ。

……それならそれでようござんす。……（ここで葉子は自分にも堪<sup>た</sup>え切れずにさめざめと泣き出した）岡さんわたしもさびしい……さびしくって、さびしくって……」

「お察し申します」

岡は案外しんみりした言葉でそういった。

「おわかりになって？」

と葉子は泣きながら取りすぎるようにした。

「わかります。……あなたは墮落した天使のような方です。御免ください。船の中で始めてお目にかかってからわたし、ちつとも心持ちが変わってはいないんです。あなたがいらつしやるんでわたし、ようやくさびしさからのがれます」

「うそ！……あなたはもうわたしに愛想あいそをおつかしなのよ。わたしのように墮落したものは……」

葉子は岡の手を放して、とうとうハンケチを顔にあてた。

「そういう意味でいったわけじゃないんですけれども……」

「ややしばらく沈黙した後、当惑しきったようにさびしく岡はひとりごと独語ちてまた黙ってしまった。岡はどんなにさびしそうな時で

もなかなか泣かなかつた。それが彼をいつそうさびしく見せた。

三月末の夕方の空はなごやかだつた。庭先の一重桜ひとえのこずえには南に向いたほうに白い花かべんがどこからか飛んで来てくつついたようにちらほら見え出していた、その先には赤く霜枯れた杉すぎも森もりがゆるやかに暮れ初そめて、光を含んだ青空が静かに流れるように漂っていた。苔たい香園こうえんのほうから園丁が間遠まとおに鋏はさみをならす音が聞こえるばかりだつた。

若さから置いて行かれる……そうしたさびしみが嫉妬しつとにかわつてひしひしと葉子を襲つて来た。葉子はふと母の親佐おやさを思った。葉子が木部きべとの恋に深入りして行つた時、それを見守つていた時の親佐を思った。親佐のその心を思った。自分の番が来た……そ

の心持ちはたまらないものだった。と、突然定子の姿が何よりもなつかしいものとなって胸に逼せまつて来た。葉子は自分にもその突然の連想の経路はわからなかった。突然もあまりに突然——しかし葉子に逼せまるその心持ちは、さらに葉子を畳に突ぶつ伏して泣かせるほど強いものだった。

玄関から人のはいつて来る気配がした。葉子はすぐそれが倉地である事を感じた。葉子は倉地と思っただけで、不思議な憎悪ぞうおを感じながらその動静に耳をすました。倉地は台所のほうに行つて愛子を呼んだようだった。二人の足音ふたりが玄関の隣の六畳のほうに行つた。そしてしばらく静かだった。と思うと、

「いや」

と小さく退けるようにいう愛子の声が確かに聞こえた。抱きすくめられて、もがきながら放たれた声らしかったが、その声の中には憎悪ぞうおの影は明らかに薄かった。

葉子は雷に撃たれたように突然泣きやんで頭をあげた。

すぐ倉地が階はしご子段をのぼって来る音が聞こえた。

「わたし台所に参りますからね」

何も知らなかったらしい岡に、葉子はわずかにそれだけをいつて、突然座を立って裏階うらぼしご子に急いだ。と、かけ違いに倉地は座敷にはいつて来た。強い酒の香がすぐ部屋へやの空気をよごした。

「やあ春になりおった。桜が咲いたぜ。おい葉子」

いかにも気さくらしく塩がれた声でこう叫んだ倉地に対して、

葉子は返事もできないほど興奮していた。葉子は手に持ったハンケチを口に押し込むようにくわえて、震える手で壁を細かくたたくようにしながら階子段はしごだんを降りた。

葉子は頭の中に天地の壊れ落ちるような音を聞きながら、そのまま縁に出て庭下駄げたをはこうとあせつたけれどもどうしてもはけないので、はだしのまま庭に出た。そして次の瞬間に自分を見いだした時にはいつ戸をあけたとも知らず物置き小屋の中にはいなかった。

底のない悒鬱ゆううつがともするとはげしく葉子を襲うようになった。いわれのない激怒がつまらない事にもふと頭をもたげて、葉子はそれを押ししずめる事ができなくなった。春が来て、木の芽から畳とこの床に至るまですべてのものが膨ふくらんで来た。愛子も貞世も見違えるように美しくなった。その肉体は細胞の一つ一つまで素早すばやく春をかぎつけ、吸収し、飽満するように見えた。愛子はその圧迫に堪たえないで春の来たのを恨むようなけだるさとさびしさとを見せた。貞世は生命そのものだった。秋から冬にかけてによきによきと延び上がった細々したからだには、春の精のような豊麗な脂肪がしめやかにしみわたって行くのが目に見えた。葉子だけは春が来てもやせた。来るにつけてやせた。ゴム毬まりの弧線のような

肩は骨ばった輪郭を、薄着になつた着物の下からのぞかせて、潤沢な髪の毛の重みに堪たえないように首筋も細々となつた。やせてゆゆうつつ悒鬱ゆううつになつた事から生じた別種の美——そう思つて葉子がたよりにしていた美もそれはだんだん冴さえ増さつて行く種類の美ではない事を気づかねばならなくなつた。その美はその行く手には夏がなかつた。寒い冬のみが待ち構えていた。

歡樂ももう歡樂自身の歡樂は持たなくなつた。歡樂の後には必ず病理的な苦痛が伴うようになつた。ある時にはそれを思う事すらが失望だつた。それでも葉子はすべての不自然な方法によつて、今は振り返つて見る過去にばかりながめられる歡樂の絶頂を幻影としてでも現在に描こうとした。そして倉地を自分の力の支配の

もと  
下につなごうとした。健康が衰えて行けば行くほどこの焦躁のた  
めに葉子の心は休まなかつた。全盛期を過ぎた伎芸ぎげいの女にのみ見  
られるような、いたましく廃はいたい頽たいした、腐菌ふきんの燐りん光こうを思わせる  
凄せい惨さんな蠱惑こわくり力をわずかな力として葉子はどこまでも倉地をと  
りこにしようとおせりにあせつた。

しかしそれは葉子のいたましい自覚だつた。美と健康とのすべ  
てを備えていた葉子には今の自分がそう自覚されたのだけれども、  
始めて葉子を見る第三者は、物すごいほど冴さえきつて見える女盛  
りの葉子の惑力に、日本には見られないようなコケツトの典型を  
見いだしたろう。おまけに葉子は肉体の不足を極端に人目をひく  
衣服で補うようになっていた。その当時は日露にちろの關係も日米の關

係もあらしの前のような暗い徴候を現わし出して、国人全体は一種の圧迫を感じ出していた。臥薪嘗胆がしんしようたんというような合い言葉がしきりと言論界には説かれていた。しかしそれと同時に日清戦争を相当に遠い過去としてながめうるまでに、その戦役の重い負担から気のゆるんだ人々は、ようやく調整され始めた経済状態の下でもと、生活の美装という事に傾いていた。自然主義は思想生活の根底となり、当時病天才の名をほしのままにした高山樗牛たかやまちよぎゆうらの一団はニイチエの思想を標榜ひょうぼうして「美的生活」とか「清きよもりろん盛論」というような大胆奔放な言説をもつて思想の維新を叫んでいた。風俗問題とか女子の服装問題とかいう議論が守旧派の人々の間にはかまびすしく持ち出されている間に、その反対の傾向

は、殻<sup>から</sup>を破った芥子<sup>けし</sup>の種<sup>たね</sup>のように四方八方に飛び散った。こうして何か今までの日本にはなかったようなものの出現を待ち設け見守っていた若い人々の目には、葉子の姿は一つの天啓<sup>てんけい</sup>のように映つたに違いない。女優らしい女優を持たず、カフエーらしいカフエーを持たない当時の路上に葉子の姿はまぶしいものの一つだ。葉子を見た人は男女を問わず目をそばだてた。

ある朝葉子は装いを凝らして倉地の下宿に出かけた。倉地は寝ごみを襲われて目をさました。座敷のすみには夜をふかして楽しんでらしい酒肴<sup>しゅこう</sup>の残りが敗<sup>す</sup>えたようにかためて置いてあった。例のシナ鞆<sup>かばん</sup>だけはちゃんと錠<sup>じょう</sup>がおりて床の間のすみに片づけられていた。葉子はいつものとおり知らんふりをしながら、そこらに

散らばっている手紙の差し出し人の名前に鋭い観察を与えるのだ  
つた。倉地は宿酔しゆくすいを不快がつて頭をたたきながら寢床から半  
身を起こすと、

「なんでけさはまたそんなにしやれ込んで早くからやって来おつ  
たんだ」

とそつぽに向いて、あくびでもしながらのように入った。これ  
が一月前だったら、少なくとも三か月前だったら、一夜の安眠  
に、あのたくましい精力の全部を回復した倉地は、いきなり寢床  
の中から飛び出して来て、そうはさせまいとする葉子を否いやおう応おうな  
しに床の上にねじ伏せていたに違ちがいなのだ。葉子はわき目にも  
こせこせとうるさく見えるような敏捷すばしこさでそのへんに散らばつて

いる物を、手紙は手紙、懐中物は懐中物、茶道具は茶道具とどん  
どん片づけながら、倉地のほうも見ずに、

「きのうの約束じゃありませんか」

と無愛想ぶあいそにつぶやいた。倉地はその言葉で始めて何かいったの  
をかすかに思い出したふうで、

「何しろおれはきようは忙しいでだめだよ」

といて、ようやく伸びをしながら立ち上がった。葉子はもう  
腹すに据すえかねるほど怒りを発していた。

「怒おこってしまつてはいけない。これが倉地を冷淡にさせるのだ」

——そう心の中には思いつながらも、葉子の心にはどうしてもその  
いう事を聞かぬいたずら好きな小悪魔がいるようだった。即座に

その場を一人ひとりだけで飛び出してしまいたい衝動と、もつと巧みな手練てくだでどうしても倉地をおびき出さなければいけないという冷静な思慮とが激しく戦い合った。葉子はしばらくの後にかろうじてその二つの心持ちをまぜ合わせる事ができた。

「それではだめね……またにしましょうか。でもくやしいわ、このいいお天氣に……いけない、あなたの忙しいはうそですわ。忙しい忙しいっていつときながらお酒ばかり飲んでいらつしやるんだもの。ね、行きましようよ。こら見てちようだい」

そういいながら葉子は立ち上がって、両手を左右に広く開いて、袂たもとが延びたまま両腕からすらりとたれるようにして、やや剣けんを持った笑いを笑いながら倉地のほうに近寄って行った。倉地もさす

がに、今さらその美しさに見惚れるように葉子を見やった。天才  
 が持つと称せられるあの青色をさえ帯びた乳白色の皮膚、それが  
 やや浅黒くなつて、目の縁ふちに憂いの雲をかけたような薄紫の暈かざ、  
 霞かすんで見えるだけにそつと刷はいた白粉おしろい、きわ立つて赤くいろど  
 られた口びる、黒い焰ほのおを上げて燃えるようなひとみ、後ろにさば  
 いて束ねられた黒漆こくしつの髪、大きなスペイン風ふうの玳瑁たいまいの飾り櫛くし、  
 くつきりと白く細い喉のどを攻めるようにきりつと重ね合わされた藤ふ  
じいろ色の襟えり、胸のくぼみにちよつとのぞかせた、燃えるような緋ひの  
 带上げのほかは、ぬれたかとはかりからだにそぐつて底光りのす  
 る紫紺色の袷あわせ、その下につつましく潜んで消えるほど薄い紫色の  
 足袋たび（こういう色足袋は葉子がくふうし出した新しい試みの一つ

だった。そういうものが互い互いに溶け合つて、のどやかな朝の空気の中にぽっかりと、葉子という世にもまれなほど<sup>せいえん</sup>凄艶な一つの存在を浮き出さしていた。その存在の中から黒い<sup>ほのお</sup>焰を上げて燃えるような二つのひとみが生きて動いて倉地をじつと見やっていた。

倉地が物をいうか、身を動かすか、とにかく次の動作に移ろうとするその前に、葉子は気味の悪いほどなめらかな足どりで、倉地の目の先に立つてその胸の所に、両手をかけていた。

「もうわたしに愛想が尽きたら尽きたとはつきりいつてくださいね。あなたは確かに冷淡におなりね。わたしは自分が憎うござんす、自分に愛想を尽かしています。さあいつってください、……今

……この場で、はつきり……でも死ねとおっしゃい、殺すとおっしゃい。わたしは喜んで……わたしはどんなにうれしいかしれないのに。……ようござんすわ、なんでもわたしほんとうが知りたいですから。さ、いってください。わたしどんなきつい言葉でも覚悟していますから。悪<sup>わる</sup>びれなんかはしませんから……あなたにはほんとうにひどい……」

葉子はそのまま倉地の胸に顔をあてた。そして始めのうちはしめやかにしめやかに泣いていたが、急に激しいヒステリー風<sup>ふう</sup>なすすり泣きに変わって、きたないものにも触れていたように倉地の熱気の強い胸もとから飛びしぎると、寢床の上にながと突っ伏して激しく声を立てて泣き出した。

このとつきの激しい威脅に、近ごろそういう動作には慣れていた倉地だったけれども、あわてて葉子に近づいてその肩に手をかけた。葉子はおびえるようにその手から飛びのいた。そこには獣けものに見るような野性のままの取り乱しかたが美しい衣装にまとわれ、演ぜられた。葉子の齒も爪もつめとがって見えた。からだは激しい痙攣けいれんに襲われたように痛ましく震えおののいていた。憤怒と恐怖と嫌悪けんおとがもつれ合いがみ合つてのた打ち回るようだった。葉子は自分の五体が青空遠くかきさらわれて行くのを懸命に食い止めるためにふとんでも畳でも爪の立ち齒の立つものにしがみついた。倉地は何よりもその激しい泣き声が隣近所の耳にはいるのを恥じるように背に手をやってなだめようとしてみたけれども、

そのたびごとに葉子はさらに泣き募つてのがれようとばかりあせつた。

「何を思い違いをしとる、これ」

倉地は喉のどぐえ笛をあげつ放ばなした低い声で葉子の耳もとにこういつてみたが、葉子は理不尽にも激しく頭を振るばかりだった。倉地は決心したように力任せにあらがう葉子を抱きすくめて、その口に手をあてた。

「えゝ、殺すなら殺してください……くださいとも」

という狂気じみた声をしつと制しながら、その耳もとにささやこうとすると、葉子はわれながら夢中であてがった倉地の手を骨もくだけよとかんだ。

「痛い……何しやがる」

倉地はいきなり一方の手で葉子の細首を取って自分の膝ひざの上に乗せて締めつけた。葉子は呼吸がだんだん苦しくなつて行くのをこの狂乱の中にも意識して快く思った。倉地の手で死んで行くのだなと思うとそれがなんともいえず美しく心安かった。葉子の五体からはひとりでに力が抜けて行つて、震えを立ててかみ合つていた歯がゆるんだ。その瞬間をすかさず倉地はかまれていた手を振りほどくと、いきなり葉子の頬ほおげたをひしひしと五六度続けさまに平手ひらてで打った。葉子はそれがまた快かった。そのびりびりと神経まっしょうの末梢しょうに答えて来る感覚のためにからだじゆうに一種の陶酔を感じるようにさえ思った。「もつとお打ちなさい」といつ

てやりたかつたけれども声は出なかつた。そのくせ葉子の手は本能的に自分の頬をかばうように倉地の手の下るのをささえようとしていた。倉地は両肘ひじまで使つて、ばたばたと裾すそを蹴け乱してあばれる両足のほかには葉子を身動きもできないようにしてしまつた。酒で心臓の興奮しやすくなつた倉地の呼吸は霰あられのようにせわしく葉子の顔にかかつた。

「ばかが……静かに物をいえばわかる事だに……おれがお前を見捨てるか見捨てないか……静かに考えてもみろ、ばかが……恥さらしなまねをしやがつて……顔を洗つて出直して来い」

そういつて倉地は捨てるように葉子を寢床の上にどんとほうり投げた。

葉子の力は使い尽くされて泣き続ける氣力さえないようだった。そしてそのまま昏々こんこんとして眠るように仰向いたまま目を閉じていた。倉地は肩で激しく息氣いきをつきながらいたましく取り乱した葉子の姿をまんじりとながめていた。

一時間ほどの後には葉子はしかしたった今ひき起こされた乱脈騒ぎをけろりと忘れたもののように快活で無邪気になつていた。

そして二人はふたり楽しげに下宿から新橋しんばし駅に車を走らした。葉子が薄暗い婦人待合室の色のはげたモロッコ皮のデイバンに腰かけて、倉地が切符きつぷを買って来るのを待つてる間、そこに居合わせた貴婦人というような四五人の人たちは、すぐ今までの話を捨ててしまつて、こそこそと葉子について私語ささやきかわすらしかった。高慢と

いうのでもなく謙遜けんそんというのでもなく、きわめて自然に落ち着いてまつすぐに腰かけたまま、柄えの長い白の琥珀こはくのパラソルの握りに手を乗せていながら、葉子にはその貴婦人たちの中ひとりの一人がどうも見知り越しの人らしく感ぜられた。あるいは女学校にいた時に葉子を崇拜してその風俗をすまねた連中の一人であるかとも思われた。葉子がどんな事をうわさされているかは、その婦人に耳打ちされて、見るように見ないように葉子をぬすみ見る他の婦人たちの目色で想像された。

「お前たちはあきれ返りながら心の中のどこかでわたしをうらやんでいるのだろう。お前たちの、その物おじしながらも金目をかけた派手はで作りな衣装や化粧は、社会上の位置に恥じないだけの作

りなのか、良人の目に快く見えようためなのか。そればかりなのか。お前たちを見る路傍の男たちの目は勘定に入れていないのか。……臆病卑怯な偽善者どもめ！」

葉子はそんな人間からは一段も二段も高い所にいるような氣位を感じた。自分の扮粧がその人たちのどれよりも立ちまわっている自信を十二分に持っていた。葉子は女王のように誇りの必要もないという自らの鷹揚を見せてすわっていた。

そこに一人の夫人がはいつて来た。田川夫人——葉子はその影を見るか見ないかに見て取った。しかし顔色一つ動かさなかつた（倉地以外の人に対しては葉子はその時でもかなりすぐれた自制力の持ち主だった）田川夫人は元よりそこに葉子がいようなどと

は思いもかけないので、葉子のほうにちよつと目をやりながらも  
いつこうに気づかずに、

「お待たせいたしましたすみません」

といいながら貴婦人らのほうに近寄つて行つた。互いの挨拶あいさつ  
が済むか済まないうちに、一同は田川夫人によりそつてひそひそ  
と私語ささやいた。葉子は静かに機会を待つていた。ぎよつとしたふう  
で、葉子に後ろを向けていた田川夫人は、肩越しに葉子のほうを  
振り返つた。待ち設けていた葉子は今まで正面に向けていた顔を  
しとやかに向けかえて田川夫人と目を見合わした。葉子の目は憎  
むように笑つていた。田川夫人の目は笑うように憎んでいた。

「生意気な」……葉子は田川夫人が目をそらさないうちに、すつ

くと立って田川夫人のほうに寄って行つた。この不意打ちに度を失つた夫人は（明らかに葉子がまつ紅かになつて顔を伏せるとばかり思つていたらしく、居合わせた婦人たちもそのさまを見て、容よ貌うぼうでも服装でも自分らを蹴落けとそうとする葉子に対して溜りゆうい飲んをおろそうとしているらしかつた）少し色を失つて、そつぽを向こうとしたけれどもうおそかつた。葉子は夫人の前に軽く頭を下げていた。夫人もやむを得ず挨拶あいさつのまねをして、高飛たかびし車やに出るつもりらしく、

「あなたはどなた？」

いかにも横柄おうへいにさきがけて口をきつた。

「早月葉さつきようでございます」

葉子是对等の態度で悪<sup>わる</sup>びれもせずこう受けた。

「絵島丸ではいろいろお世話様になつてありがとう存じました。

あのう……報正新報も拝見させていただきました。（夫人の顔色が葉子の言葉一つごとに変わるのを葉子は珍しいものでも見るようにまじまじとながめながら）たいそうおもしろうございました事。よくあんなにくわしく御通信になりましたねえ、お忙しくいらつしやいましたらうに。……倉地さんもおりよくここに来合わせていらつしやいますから……今ちよつと切符を買いに……お連れ申しましょうか」

田川夫人は見る見るまっさおになつてしまつていた。折り返しというべき言葉に窮してしまつて、拙<sup>つたな</sup>くも、

「わたしはこんな所であなたとお話するのは存じがけません。御用でしたら宅へおいでを願ひましょう」

といいつつ今にも倉地がそこに現われて来るかとひたすらそれを怖れるふうだった。葉子はわざと夫人の言葉を取り違えたように、

「いゝえどういたしましてわたしこそ……ちよつとお待ちください  
いすぐ倉地さんをお呼び申して参りますから」

そういつてどんだん待合所を出てしまった。あとに残った田川夫人がその貴婦人たちの前でどんな顔をして当惑したか、それを葉子は目に見るように想像しながらいたずら者らしくほくそ笑んだ。ちようどそこに倉地が切符を買って来かかっていた。

一等の客室には他に二三人の客がいるばかりだった。田川夫人以下の人たちはだれかの見送りが出迎えにでも来たのだと見えて、汽車が出るまで影も見せなかった。葉子はさっそく倉地に事の始終を話して聞かせた。そして二人は思ふたりい存分胸をすかして笑った。

「田川の奥さんかわいいそうにまだあすこで今にもあなたが来るかともじもじしているでしょうよ、ほかの人たちの手前ああいわれでこそそそと逃げ出すわけにも行かないし」

「おれが一つ顔を出して見せればまたおもしろかったにな」

「きようは妙な人にあつてしまつたからまたきつとだれかにあいますよ。奇妙ねえ、お客様が来たとなると不思議にたて続けし：

…」

「不仕合わせなんぞも来出すと束たばになつて来くさるて」

倉地は何か心ありげにこういつて渋い顔をしながらこの笑い話を結んだ。

葉子はけさの発作ほっさの反動のように、田川夫人の事があつてからただ何となく心が浮き浮きしてしようがなかつた。もしそこに客がいなかつたら、葉子は子供のように単純な愛嬌あいぎようもの者になつて、倉地に渋い顔ばかりはさせておかなかつたらう。「どうして世の中にはどこにでも他人の邪魔に來ましたといわんばかりにこうたくさん人がいるんだらう」と思つたりした。それすらが葉子には笑いの種たねとなつた。自分たちの向こう座にしかつめらしい顔をして老年の夫婦者がすわっているのを、葉子はしばらくまじまじと

見やっていたが、その人たちのしかつめらしいのが無むし性しょうにグロテスクな不思議なものに見え出して、とうとう我慢がしきれずに、ハンケチを口にあててきゅつきゅつとふき出してしまった。

### 三七

天心に近くぽつりと一つ白くわき出た雲の色にも形にもそれと知られるようなたけなわな春が、ところどころの別荘の建て物のほかには見渡すかぎり古く寂さびれた鎌倉かまくらの谷や々やとにまであふれていた。重い砂土の白ばんだ道の上には落ち椿つばきが一重ひとえ桜の花とまじって無残に落ち散っていた。桜のこずえには紅味あかみを持った若葉

がきらきらと日に輝いて、浅い影を地に落とした。名もない雑木ぞうき  
 までが美しかった。蛙かわずの声こゑが眠く田圃たんぼのほうから聞こえて来た。  
 休暇でないせいか、思いのほかに人の雑ざつ鬧とうもなく、時おり、同  
 じ花かんざしを、女は髪に男は襟えりにさして先せん達だつらしいのが紫の  
 小旗こぼたを持った、遠い所から春を逐おつて経へめぐつて来たらしい田舎いなか  
 の人たちの群れが、酒の気も借らずにしめやかに話し合いながら  
 通るのに行きあうくらいのものであった。

倉地も汽車の中から自然に気分が晴れたと見えて、いかにも屈  
 託あなくなつて見えた。二人は停車場の付近にある或る小ぎれいな  
 旅館を兼ねた料理屋で中ちゆう食じきをしたためた。日にち朝ちよう様ようともど  
 んぶく様ともいう寺の屋根が庭先に見えて、そこから眼病の祈禱きとう

だという団扇うちわ太鼓の音がどんぶくとどんぶくと単調に聞こえるような所だった。東のほうはその名さながらの屏風山びょうぶやまが若葉で花よりも美しく装われて霞かすんでいた。短く美しく刈り込まれた芝生しばふの芝はまだ萌もえていなかったが、所まばらに立ち連なつた小松は緑をふきかけて、八重桜やえはのぼせたように花でうなだれていた。もうあわせ拾一枚になつて、そこに食べ物を選んで来る女中は襟えり前まえをくつろげながら夏が来たようだといつて笑つたりした。

「ここはいいわ。きょうはここで宿とまりましょう」

葉子は計画から計画で頭をいっぱいにしていて。そしてそこに用いらないものを預けて、江えの島しまのほうまで車を走らした。

帰りには極楽寺坂ごくらくじの下で二人とも車を捨てて海岸に出た。も

う日は稲村いなむらが崎さきのほうに傾いて砂浜はやや暮れ初そめていた。小坪つぼの鼻がけの岨がけの上に若葉に包まれてたつた一軒建てられた西洋人の白ペンキ塗りの別荘が、夕日を受けて緑色に染めたコケツトの、髪の中のダイヤモンドのように輝いていた。その岨がけ下の民家からは炊煙が夕霽ゆうもやと一緒に海うみのほうにたなびいていた。波打ちぎわの砂はいいほどに湿ぬって葉子の吾妻下駄あづまげたの齒はを吸すった。二人ふたりは別荘から散歩に出て来たらしい幾組かの上品な男女の群れと出あったが、葉子は自分の容貌ようぼうなり服装なりが、そのどの群れのどの人にも立ちまさっているのを意識して、軽い誇りと落ち付きを感じていた。倉地もそういう女を自分の伴は侶りよとするのをあながち無頓着むとんじやくには思わぬらしかった。

「だれかひよんな人にあうだろうと思つていましたがうまくだれにもあわなかつてね。向こうの小坪の人家の見える所まで行きましようね。そうしてこうみょうじ光明寺の桜を見て帰りましょう。そうするとちようどお腹なかがいい空すき具合になるわ」

倉地はなんと答えなかつたが、無論承知でいるらしかつた。

葉子はふと海のほうを見て倉地にまた口をきつた。

「あれは海ね」

「仰せのとおり」

倉地は葉子が時々途轍とてつもなくわかりきつた事を少女みたいな無

邪気さでいう、またそれが始まつたというように渋しぶそうな笑いを

片頬かたほに浮かべて見せた。

「わたしもう一度あのまっただなかに乗り出してみたい」

「してどうするのだい」

倉地もさすが長かった海の上の生活を遠く思いやるような顔をしながらいった。

「ただ乗り出してみたいの。どーつと見さかいてもなく吹きまく風の中を、大波に思い存分揺られながら、ひっくりかえりそうになつては立て直つて切り抜けて行くあの船の上の事を思うと、胸がどきどきするほどもう一度乗つてみたくなりますわ。こんな所いやねえ、住んでみると」

そういつて葉子はパラソルを開いたまま柄えの先で白い砂をぎくぎくと刺し通した。

「あの寒い晩の事、わたしが甲板かんばんの上で考え込んでいた時、あなたが灯ひをぶら下げて岡さんを連れて、やっていらしたあの時の事などをわたしはわけもなく思い出しますわ。あの時わたしは海でなければ聞けないような音楽を聞いていましたわ。陸おかの上にはあんな音楽は聞こうといったってありやしない。おーい、おーい、おい、おい、おい、おーい……あれは何？」

「なんだそれは」

倉地は怪訝けげんな顔をして葉子を振り返った。

「あの声」

「どの」

「海の声……人を呼ぶような……お互いで呼び合うような」

「なんにも聞こえやせんじやないか」

「その時間いたのよ……こんな浅い所では何が聞こえますものか」  
「おれは長年海の上で暮らしたが、そんな声は一度だつて聞いた事はないわ」

「そうお。不思議ね。音楽の耳のない人には聞こえないのかしら。  
……確かに聞こえましたよ、あの晩に……それは気味の悪いよう  
な物すごいような……いわばね、一緒になるべきはずなのに一緒  
になれなかった……その人たちが幾億万と海の底に集まっ  
ていて、銘々死にかけてような低い音で、おーい、おーいと呼び立  
てる、それが一緒になつてあんなぼんやりした大きな声になるか  
と思うようなそんな気味の悪い声なの……どこかで今でもその  
声が聞こ

えるようよ」

「木村がやっているのだらう」

そういつて倉地は高々たかだかと笑った。葉子は妙に笑えなかつた。

そしてもう一度海のほうをながめやつた。目も届かないような遠くのほうに、大島おおしまが山の腰から下は夕靄ゆうもやにぼかされてなくなつて、上のほうだけがへの字を描いてぼんやりと空に浮かんでいった。

ふたりふたり二人はいつか滑川なめりがわの川口の所まで来着いていた。稲瀬川いなせがわ

を渡る時、倉地は、横浜埠頭ふとうで葉子にまつわる若者にしたように、葉子の上体を右手に軽々とかかえて、苦もなく細い流れを跳り越おとしてしまつたが、滑川のほうはそうは行かなかつた。二人は川幅

の狭そうな所を尋ねてだんだん上流のほうに流れに沿うてのぼつて行つたが、川幅は広くなつて行くばかりだつた。

「めんどろくさい、帰りましようか」

大きな事をいいながら、光明寺までには半分道も来ないうちに、下駄げた全体がめいりこむような砂道で疲れ果ててしまった葉子はこういい出した。

「あすこに橋が見える。とにかくあすこまで行つてみようや」

倉地はそういつて海岸線に沿うてむつくり盛もれ上がった砂丘さきゆうのほうに続く砂道をのぼり始めた。葉子は倉地に手を引かれて息い気をせいせいいわせながら、筋肉が強きょう直ちよくするようきに疲れた足を運んだ。自分の健康の衰退が今さらにはつきり思わせられるよ

うなそれは疲れかただった。今にも破裂するように心臓が鼓動した。

「ちよつと待つて弁慶蟹べんけいがにを踏みつけそうそうで歩けやしませんわ」

そう葉子は申しわけらしくいつて幾度か足をとめた。實際その

へんには紅いあか甲良こうらを背負った小さな蟹かにがいかめしい鋏はさみを上げて、

ざわざわと音を立てるほどおびただしく横行していた。それがい

かにも晩春の夕暮れらしかった。

砂丘さきゆうをのぼりきると材木座ざいもくざのほうに続く道路に出た。葉子

はどうも不思議な心持ちで、浜から見えていた乱橋みだればしのほうに

行く気になれなかった。しかし倉地がどんどんそつちに向いて歩

き出すので、少しすねたようにその手に取りすがりながらもつれ

合つて人氣ひとけのないその橋の上まで来てしまった。

橋の手前の小さな掛け茶屋には主人の婆ばあさんが葭よしで囲つた薄暗い小部屋こべやの中で、こそこそと店をたたむしたくでもしているだけだつた。

橋の上から見ると、滑なめり川がわの水は軽く薄濁つて、まだ芽を吹かない兩岸の枯れ葦あしの根を静かに洗いながら音も立てずに流れていた。それが向こうに行くと吸い込まれたように砂の盛もれ上がった後ろに隠れて、またその先に光つて現われて、穏やかなリズムを立てて寄せ返す海への波の中に溶けこむように注いでいた。

ふと葉子は目の下の枯れ葦あしの中に動くものがあるのに気が付いて見ると、大きな麦むぎ桿わらの海水帽をかぶつて、杭くいに腰かけて、釣つ

り竿ざおを握った男が、帽子ぼうしの庇ひさしの下から目を光らして葉子をじつと見つめているのだった。葉子は何の気なしにその男の顔をながめた。

木部孤きべこぎょう だった。

帽子の下に隠れているせいか、その顔はちよつと見忘れるくらい年がいつていた。そして服装からも、様子からも、落魄らくはくというような一種の気分が漂っていた。木部の顔は仮面のように冷然としていたが、釣り竿つざおの先は不注意にも水に浸つて、釣り糸が女の髪の毛を流したように水に浮いて軽く震えていた。

さすがの葉子も胸をどきんとさせて思わず身を退しげらせた。「おい、おい、おい、おい、おい、おーい」……それがその瞬間に耳の底

をすーつと通つてすーつと行くえも知らず過ぎ去つた。怯おず怯おずと倉地をうかがうと、倉地は何事も知らぬげに、暖かに暮れて行く青空を振り仰いで目いっぱいにながめていた。

「帰りましょう」

葉子の声は震えていた。倉地はなんの気なしに葉子を顧みだが、寒くでもなつたか、口びるが白いぞ」

といいながら欄干を離れた。二人ふたりがその男に後ろを見せて五六歩歩み出すと、

「ちよつとお待ちください」

という声が橋の下から聞こえた。倉地は始めてそこに人のいたのに気が付いて、眉まゆをひそめながら振り返った。ざわざわと葦あしを

分けながら小道を登って来る足音がして、ひよっこり目の前に木部の姿が現われ出た。葉子はその時はしかしすべてに対する身構えを充分にしてしまっていた。

木部は少しばかり丁寧なくらいに倉地に対して帽子を取ると、すぐ葉子に向いて、

「不思議な所でお目にかかりましたね、しばらく」

といった。一年前の木部から想像してどんな激情的な口調で呼びかけられるかもしれないとあやぶんでいた葉子は、案外冷淡な木部の態度に安心もし、不安も感じた。木部はどうかすると居直るような事をしかねない男だと葉子は兼ねて思っていたからだ。しかし木部という事を先方からいい出すまでは包めるだけ倉地に

は事実を包んでみようと思つて、ただにこやかに、

「こんな所でお目にかかるうとは……わたしもほんとうに驚いてしまいました。でもまあほんとうにお珍しい……ただいまこちらのほうにお住まいでございますの？」

「住まうというほどもない……くすぶりこんでいますよハハハハ」

と木部はうつろに笑つて、鍰つばの広い帽子を書生つぽらしく阿弥あみ陀だにかぶつた。と思うとまた急いで取つて、

「あんな所からいきなり飛び出して来てこうなれなれしく早月さつきさんにお話をしかけて変にお思いでしょうが、僕は下らんやくざ者で、それでも元は早月家にはいろいろ御厄ごやつかい介になつた男です。申し上げるほどの名もありませんから、まあ御覽のとおりをやつ

です。……どちらにおいでです」

と倉地に向いていった。その小さな目には勝れた才氣と、敗けまぎらいらしい気象とがほとばしってはいたけれども、じじむさい顎あごひげと、伸びるままに伸ばした髪の毛とで、葉子でなければその特長は見えないらしかった。倉地はどここの馬の骨かと思うような調子で、自分の名を名乗る事はもとよりせず、軽く帽子を取って見せただけだった。そして、

「光明寺のほうへでも行ってみようかと思っただが、川が渡れんで……この橋を行っても行かれますだろう」

三人は橋のほうを振り返った。まっすぐな土堤道どてみちが白く山のきわまで続いていた。

「行けませんがね、それは浜伝いのほうが趣がありますよ。防風草ぼうふうくさでも摘みながらいらつしやい。川も渡れます、御案内しましょう」といった。葉子は一時いつときも早く木部からのがれたくもあつたが、同時にしんみりと一別以来の事などを語り合つてみたい氣もした。いつか汽車の中であつてこれが最後の対面だろうと思つた、あの時からすると木部はずつとさばけた男らしくなつていた。その服装がいかに生活の不規則なものと窮迫しているのを思わせると、葉子は親身しんみな同情にそそられるのを拒む事ができなかつた。

倉地は四五歩先立さきだつて、そのあとから葉子と木部とは間を隔てて並びながら、また弁慶蟹べんけいかにのうぎうぎいる砂道を浜のほうに降りて行つた。

「あなたの事はたいていうわさや新聞で知っていましたよ……人間でものはおかしなもんですね。……わたしはあれから落伍者らくごしやです。何をしてみても成り立った事はありません。妻も子供も里さとに返してしまつて今は一人ひとりでここに放浪しています。毎日釣つりをやつてね……ああやつて水の流れを見ていると、それでも晩飯の酒の肴さかなぐらいなもの釣れて来ますよハ、ハ、ハ、ハ」

木部はまたうつろに笑つたが、その笑いの響きが傷口にでも答えたように急に黙つてしまった。砂に食い込む二人ふたりの下駄げたの音だけが聞こえた。

「しかしこれでいて全くの孤独でもありませんよ。ついこの間から知り合いになつた男だが、砂山の砂の中に酒を埋うづめておいて、

ぶらりとやって来てそれを飲んで酔うのを楽しみにしているの  
 知り合いになりましたね……そいつの ライフ・フィロソフィー 人 生 観 がばかに  
 おもしろいんです。徹底した運命論者ですよ。酒をのんで運命論  
 を吐くんです。まるで せんじん 仙人ですよ」

倉地はどどん歩いて二人の話し声が入らぬくらい遠ざか  
 った。葉子は木部の口から例の感傷的な言葉が今出るか今出るか  
 と思つて待つていたけれども、木部にはいささかもそんなふうは  
 なかった。笑いばかりでなく、すべてにうつろな感じがするほど  
 無感情に見えた。

「あなたはほんとうに今何をなさつていらつしやいますの」

と葉子は少し木部に近よつて尋ねた。木部は近寄られただけ葉

子から遠のいてまたうつろに笑った。

「何をするもんですか。人間に何ができるもんですか。……もう春も末になりましたね」

途轍とてつもない言葉をしいてくっ付けて木部はそのよく光る目で葉子を見た。そしてすぐその目を返して、遠ざかった倉地をこめて遠く海と空との境目にながめ入った。

「わたしあなたとゆっくりお話がしてみたいと思いますが……」  
こう葉子はしんみりぬすむようにいってみた。木部は少しもそれに心を動かされないように見えた。

「そう……それもおもしろいかな。……わたしはこれでも時おりはあなたの幸福を祈ったりしていますよ、おかしなもんですね、

ハハハハ、（葉子がその言葉につけ入って何かいおうとするのを木部は悠々<sup>ゆうゆう</sup>とおつかぶせて）あれが、あすこに見えるのが大島<sup>おおしま</sup>です。ぽつんと一つ雲か何かのように見えるでしょう空に浮いて……大島<sup>おほしま</sup>って伊豆<sup>いず</sup>の先の離れ島です、あれがわたしの釣りをする所から正面に見えるんです。あれでいて、日によつて色がさまざまに変わります。どうかすると噴煙がぽーつと見える事もありますよ」

また言葉がぽつんと切れて沈黙が続いた。下駄<sup>げた</sup>の音のほかに波の音もだんだんと近く聞こえ出した。葉子はただただ胸<sup>せつ</sup>が切なくなるのを覚えた。もう一度どうしてもゆっくり木部にあいたい気になっていた。

「木部さん……あなたさぞわたしを恨んでいらつしやいましょうね。……けれどもわたしあなたにどうしても申し上げておきたい事がありますの。なんとかして一度わたしに会ってくださいません？ そのうちに。わたしの番地は……」

「お会いしましょう『そのうちに』……そのうちにはいい言葉ですね……そのうちに……。話があるからと女にいわれた時には、話を期待しないで抱擁か虚無かを覚悟しろって名言がありませんぜ、ハハハハ」

「それはあんまりなおつしやりかたですわ」

葉子はきわめて冗談のようにまたきわめてまじめのようにならう  
いってみた。

「あんまりかあんまりでないか……とにかく名言には相違ありません、ハ、ハ、ハ、ハ、」

木部はまたうつろに笑ったが、また痛い所にでも触れたように突然笑いやんだ。

倉地は波打ちぎわ近くまで来て、も渡れそうもないので遠くからこつちを振り向いて、むずかしい顔をして立っていた。

「どれお二人ふたりに橋渡しをして上げましょうかな」

そういつて木部は川べの葦あしを分けてしばらく姿を隠していたが、やがて小さな田舟たぶねに乗って竿さおをさして現われて来た。その時葉子は木部が釣り道具つりぐちを持っていないのに気がついた。

「あなた釣り竿さおは」

「釣り竿ですか……釣り竿は水の上に浮いてるでしょう。いまにここまで流れて来るか……来ないか……」

そう<sup>こた</sup>応えて案外<sup>じょうず</sup>上手に舟を漕<sup>こ</sup>いだ。倉地は行き過ぎただけを忙<sup>いそ</sup>いで取つて返して来た。そして三人はあぶなかく立ったまま舟に乗った。倉地は木部の前も構わずわきの下に手を入れて葉子をかかえた。木部は冷然として竿を取った。三突きほどでたわいなく舟は向こう岸に着いた。倉地がいちはやく岸に飛び上がって、手を延ばして葉子を助けようとした時、木部が葉子に手を貸していたので、葉子はすぐにそれをつかんだ。思いきり力をこめたためか、木部の手が舟を漕<sup>こ</sup>いだためだったか、とにかく二人の手は握り合わされたまま小刻みにはげしく震えた。

「やつ、どうもありがとう」

倉地は葉子の上陸を助けてくれた木部にこう礼をいった。

木部は舟からは上がらなかつた。そして鑢つばびろ広の帽子を取つて、  
「それじゃこれでお別れします」

といった。

「暗くなりましたから、お二人とも足もとに気をおつけなさい。

さようなら」

と付け加えた。

三人は相当の挨拶あいさつを取りかわして別れた。一町ちやうほど来てから

急に行く手が明るくなつたので、見ると光明寺裏の山の端はに、夕

月が濃い雲の切れ目から姿を見せたのだつた。葉子は後ろを振り

返つて見た。紫色に暮れた砂の上に木部が舟を葦間あしまに漕ぎ返して行く姿が影絵のように黒くながめられた。葉子は白琥珀こはくのパラソルをぱつと開いて、倉地にはいたずらに見えるように振り動かし  
た。

三四町ちよう来てから倉地が今度は後ろを振り返つた。もうそこには木部の姿はなかった。葉子はパラソルを畳もうとして思わず涙ぐんでしまつていた。

「あれはいつたいだれだ」

「だれだつていいじゃありませんか」

暗さにまぎれて倉地に涙は見せなかつたが、葉子の言葉は痛ましくかんばし疝走かんばしつていた。

「ローマンズのたくさんある女はちがったものだな」

「えゝ、そのとおり……あんな乞食こじきみたいな見つともない恋人を  
持った事があるのよ」

「さすがはお前だよ」

「だから愛想あいそが尽きたでしょう」

突如としてまたいいようのないさびしさ、哀かなしさ、くやしさが  
暴風のように襲つて来た。また来たと思つてもそれはもうおそか  
つた。砂の上に突つ伏して、今にも絶え入りそうに身もだえする  
葉子を、倉地は聞こえぬ程度に舌打ちしながら介抱せねばならな  
かった。

その夜旅館に帰つてからも葉子はいつまでも眠らなかつた。そ

こに来て働く女中たちを一人一人突慳貪つっけんどんにきびしくたしなめた。しまいには一人として寄りつくものがなくなつてしまふくらい。

倉地も始めのうちはしぶしぶつき合つていたが、ついには勝手にするがいいといわんばかりに座敷を代えてひとりで寝てしまった。

春の夜はただ、事もなくしめやかにふけて行つた。遠くから聞

こえて来る蛙かわずの鳴き声のほかには、日勝にっしょう様の森あたりでなく

らしい鼻ふくろうの音がするばかりだった。葉子とはなんの関係もない夜

鳥でありながら、その声には人をばかにしきつたような、それでいて聞くに堪たえないほどさびしい響きが潜ひそんでいた。ほう、ほう

……ほう、ほうほうと間遠まどおに単調に同じ木の枝と思わしい所から

聞こえていた。人々が寝しずまってみると、憤怒ふんぬの情はいつか消

え果てて、いいよのない寂せきぼく寞がそのあとに残った。

葉子のする事いう事は一つ一つ葉子を倉地から引き離そうとするばかりだった。今夜も倉地が葉子から待ち望んでいたものを葉子は明らかに知っていた。しかも葉子はわけのわからない怒りに任せて自分の思うままに振る舞った結果、倉地には不快きわまる失望を与えたに違いない。こうしたままで日がたつに従って、倉地は否いやおう応なしにさらに新しい性的興味の対象を求めるようになるのは目の前の事だ。現に愛子はその候補者の一人として倉地の目には映り始めているのではないか。葉子は倉地との関係を始めから考えたどつてみるにつれて、どうしても間違つた方向に深入りしたのを悔いしないではいられなかった。しかし倉地を手なずける

ためにはあの道をえらぶよりしかたがなかったようにも思える。倉地の性格に欠点があるのだ。そうではない。倉地に愛を求めて行った自分の性格に欠点があるのだ。……そこまで理屈らしく理屈をたどつて来てみると、葉子は自分というものが踏みにじつても飽き足りないほどいやな者に見えた。

「なぜわたしは木部を捨て木村を苦しめなければならぬのだろう。なぜ木部を捨てた時にわたしは心に望んでいるような道をまっしぐらに進んで行く事ができなかつたのだらう。わたしを木村にしいて押し付けた五十川いそがわのおばさんは悪い……わたしの恨みはどうしても消えるものか。……といつておめおめとその策略に乗ってしまったわたしはなんといいふがない女だったのだらう。

倉地にだけはわたしは失望したくないと思つた。今までのすべての失望をあの人で全部取り返してまだ余りきるような喜びを持つとうとしたのだつた。わたしは倉地とは離れてはいられない人間だと確かに信じていた。そしてわたしの持つてゐるすべてを……醜いものすべてをも倉地に与えて悲しいとも思わなかつたのだ。わたしは自分の命を倉地の胸にたたきつけた。それなのに今は何が残つてゐる……何が残つてゐる……。今夜かぎりわたしは倉地に見放されるのだ。この部屋へやを出て行つてしまつた時の冷淡な倉地の顔……わたしは行こう。これから行つて倉地にわびよう、奴ど隷れいのように畳に頭をこすり付けてわびよう……そうだ。……しかし倉地が冷刻な顔をしてわたしの心を見も返らなかつたら……わ

たしは生きてる間にそんな倉地の顔を見る勇氣はない。……木部にわびようか……木部は居所さえ知らそうとはしないのだもの……」

葉子はやせた肩を痛ましく震わして、倉地から絶縁されてしまったもののように、さびしく哀しく涙の枯れるかと思うまで泣くのだった。静まりきった夜の空気の中に、時々鼻をかみながらすすり上げすすり上げ泣き伏す痛ましい声だけが聞こえた。葉子は自分の声につまされてなおさら悲哀から悲哀のどん底に沈んで行った。

ややしばらくしてから葉子は決心するように、手近にあった硯す箱ずりばこと料紙りょうしとを引き寄せた。そして震える手先をしいて繰り

ながら簡単な手紙を乳母うばにあてて書いた。それには乳母とも定子とも断然縁を切るから以後他人と思つてくれ。もし自分が死んだらここに同封する手紙を木部の所に持つて行くがいい。木部はきつとどうしてでも定子を養つてくれるだろうからという意味だけを書いた。そして木部あての手紙には、

「定子はあなたの子です。その顔を一目御覧ひとめになったらすぐおわかりになります。わたしは今まで意地いじからも定子はわたしひとり一人の子でわたし一人のものとするつもりでいました。けれどもわたしが世にないものとなった今は、あなたはもうわたしの罪を許してくださいるかとも思います。せめては定子を受け入れてくださいましょう。

## 葉子の死んだ後

あわれなる定子のママより

定子のおとう様へ」

と書いた。涙は巻紙の上にとめどなく落ちて字をにじました。東京に帰ったらためて置いた預金の全部を引き出してそれを為替かわせにして同封するために封を閉じなかつた。

最後の犠牲……今までとつおいつ捨て兼ねていた最愛のものを最後の犠牲にしてみたら、たぶんは倉地の心がもう一度自分に戻もどつて来るかもしれない。葉子は荒神に最愛のものを生いけにえ犠牲として願いをきいてもらおうとする太古たいこの人のような必死な心になつていた。それは胸を張り裂くような犠牲だった。葉子は自分の目か

らも英雄的に見えるこの決心に感激してまた新しく泣きくずれた。「どうか、どうか、……どうか」

葉子はだれにともなく手を合わして、一心に念じておいて、雄お々おしく涙を押しぬぐうと、そつと座を立って、倉地の寝ているほうへと忍びよった。廊下の明りは大半消されているので、ガラス窓からおぼろにさし込む月の光がたよりになった。廊下の半分がた燐りんの燃えたようなその光の中を、やせ細っていつそう背たけの伸びて見える葉子は、影が歩むように音もなく静かに歩みながら、そつと倉地の部屋の襖ふすまを開いて中にはいった。薄暗くともつた有あ明けりあの下に倉地は何事も知らぬげに快く眠っていた。葉子はそつとその枕まくらもとに座を占めた。そして倉地の寝顔を見守った。

葉子の目にはひとりでに涙がわくようにあふれ出て、厚ぼったいような感じになった口びるはわれにもなくわなわなと震えて来た。葉子はそうしたまま黙ってなおも倉地を見続けていた。葉子の目にたまった涙のために倉地の姿は見る見るにじんだように輪郭がぼやけてしまった。葉子は今さら人が違つたように心が弱つて、受け身にばかりならずにはいられなくなつた自分が悲しかった。なんとという情けないかわいそうな事だろう。そう葉子はしみじみと思つた。

だんだん葉子の涙はすすり泣きにかわつて行つた。倉地が眠りの中でそれを感じたらしく、うるさそうにうめき声を小さく立てて寝返りを打つた。葉子はぎよつとして息いき気をつめた。

しかしすぐすすり泣きはまた帰つて来た。葉子は何事も忘れ果てて、倉地の床のそばにきちんとすわつたままいつまでもいつまでも泣き続けていた。

## 三八

「何をそう怯おず怯おずしているのかい。そのボタンを後ろにはめてくれさえすればそれでいいのだに」

倉地は倉地にしては特にやさしい声でこういった、ワイシャツを着ようとしたまま葉子に背を向けて立ちながら。葉子は飛んでもない失策でもしたように、シャツの背部につけるカラーボタン

を手に持ったままおろおろしていた。

「ついシャツを仕替しかえる時それだけ忘れてしまつて……」

「いいわけなんぞはいいいわい。早く頼む」

「はい」

葉子はしとやかにそういつて寄り添うように倉地に近寄つてそのボタンをボタン孔あなに入れようとしたが、糊のりが硬こわいのと、気おくれがしているのでちよつとははいりそうになかった。

「すみませんがちよつと脱いでくださいましな」

「めんどろうだな、このままでできようが」

葉子はもう一度試みた。しかし思うようには行かなかつた。倉地はもう明らかにいらいらし出していた。

「だめか」

「まあちよつと」

「出せ、貸せおれに。なんでもない事だに」

そういつてくるりと振り返つてちよつと葉子をにらみつけながら、ひつたくくるようにボタンを受け取った。そしてまた葉子に後ろを向けて自分でそれをはめようとかかった。しかしなかなかうまく行かなかつた。見る見る倉地の手ははげしく震え出した。

「おい、手伝つてくれてもよかろうが」

葉子があわてて手を出すとはずみにボタンは畳の上に落ちてしまった。葉子がそれを拾おうとする間もなく、頭の上から倉地の声が雷のように鳴り響いた。

「ばか！ 邪魔をしるといいやせんぞ」

葉子はそれでもどこまでも優しく出ようとした。

「御免くださいね、わたしお邪魔なんぞ……」

「邪魔よ。これで邪魔でなくてなんだ……え、そこじゃありませんよ。そこに見えとるじゃないか」

倉地は口をとがらして顎あごを突き出しながら、どしんと足をあげて畳を踏み鳴らした。

葉子はそれでも我慢した。そしてボタンを拾って立ち上がると倉地はもうワイシャツを脱ぎ捨てている所だった。

「胸むなくその悪い……おい日本服を出せ」

「襦じゆばん袷えりの襟えりがかけずにありますから……洋服で我慢してください

いましね」

葉子は自分が持っていると思うほどの媚こびをある限り目に集めて嘆願するようにこういった。

「お前には頼まんまでよ……愛ちゃん」

倉地は大きな声で愛子を呼びながら階下のほうに耳を澄ました。葉子はそれでも根こんかぎり我慢しようとした。階はしご子段をしとやかにのぼって愛子がいつものように柔順に部へ屋にはいつて来た。倉地は急に相そうごう好をくずしてにこやかになっていた。

「愛ちゃん頼む、シャツにそのボタンをつけておくれ」

愛子は何事の起こったかを露知らぬような顔をして、男の肉感をそそるような堅かたじし肉の肉体を美しく折り曲げて、雪せつ白ぱくのシャ

ツを手に取り上げるのだった。葉子がちやんと倉地にかしずいてそこにいるのを全く無視したようなずうずうしい態度が、ひがんでしまった葉子の目には憎々しく映った。

「よけいな事をおしでない」

葉子はとうとうかっとなつて愛子をたしなめながらいきなり手にあるシャツをひつたくつてしまった。

「きさまは……おれが愛ちゃんに頼んだになぜよけいな事をしくさるんだ」

とそういつて威丈高いたけだかになつた倉地には葉子はもう目もくれなかつた。愛子ばかりが葉子の目には見えていた。

「お前は下にいればそれでいい人間なんだよ。おさんどんの仕事

もろくろくできはしないでよけいな所に出しやばるもんじやない事よ。……下に行つておいで」

愛子はこうまで姉にたしなめられても、さからうでもなく怒るおこでもなく、黙つたまま柔順に、多恨な目で姉をじつと見て静しずしず々とその座をはずしてしまつた。

こんなもつれ合つたいさかいがともすると葉子の家で繰り返されるようになった。ひとりになつて気がしずまると葉子は心の底から自分の狂暴な振る舞いを悔いた。そして気を取り直したつもりでどこまでも愛子をいたわつてやろうとした。愛子に愛情を見せるためには義理にも貞世につらく当たるのが当然だと思つた。そして愛子の見ている前で、愛するものが愛する者を憎んだ時は

かりに見せる残酷な呵責かしやくを貞世に与えたりした。葉子はそれが理不尽きわまる事だとは知っていないながら、そう偏頗へんぱに傾いて来る自分の心持ちをどうする事もできなかつた。それのみならず葉子には自分の鬱憤うつぶんをもらすための対象がぜひ一つ必要になつて来た。人でなければ動物、動物でなければ草木、草木でなければ自分自身に何かなしに傷害を与えていなければ気が休まなくなつた。庭の草などをつかんでいる時でも、ふと気が付くと葉子はしやがんだまま一茎の名もない草をたつた一本摘みとつて、目に涙をいっぴいためながら爪つめの先で寸すたすた々に切りさいなんである自分を見いだしたりした。

同じ衝動は葉子を駆つて倉地の抱擁に自分自身を思う存分しい

たげようとした。そこには倉地の愛を少しでも多く自分につなぎたい欲求も手伝つてはいたけれども、倉地の手で極度の苦痛を感じる事に不満足きわまる満足を見いだそうとしていたのだ。精神も肉体もはなはだしく病に虫ばまれた葉子は抱擁によつての有頂<sup>うてん</sup>天な歡樂を味わう資格を失つてからかなり久しかった。そこにはただ地獄<sup>じごく</sup>のような呵<sup>か</sup>責<sup>しやく</sup>があるばかりだった。すべてが終わつてから葉子に残るものは、嘔吐<sup>おうと</sup>を催すような肉体の苦痛と、そして自分を忘我に誘おうともがきながら、それが裏切られて無益に終わった、その後<sup>のち</sup>に襲つて来る唾棄<sup>たき</sup>すべき倦怠<sup>けんたい</sup>ばかりだった。倉地が葉子のその悲惨な無感覚を分け前してたとえようもない憎<sup>ぞ</sup>悪<sup>うお</sup>を感じるのはもちろんだった。葉子はそれを知るとさらにいい

知れないたよりなさを感じてまたはげしく倉地にいどみかかるのだった。倉地は見る見る一步一步葉子から離れて行つた。そしてますますその気分はすさんで行つた。

「きさまはおれに厭あきたな。男でも作りおつたんだらう」

そう唾つばでも吐き捨てるようにいまいましげに倉地があらわにいうような日も来た。

「どうすればいいんだらう」

そういつて額ひたいの所に手をやって頭痛を忍びながら葉子はひとり苦しまねばならなかつた。

ある日葉子は思いきつてひそかに医師を訪れた。医師は手もななく、葉子のすべての悩みの原因は子宮後こうくつ屈症と子宮内膜炎とを

併発しているからだといつて聞かせた。葉子はあまりにわかりきった事を医師がさも知ったかぶりにいつて聞かせるようにも、またそののつぺりした白い顔が、恐ろしい運命が葉子に対して装うた仮面で、葉子はその言葉によつてまっ暗な行く手を明らかに示されたようにも思つた。そして怒りと失望とをいだきながらその家を出た。帰途葉子は本屋に立ち寄つて婦人病に関する大部な医書を買ひ求めた。それは自分の病症へやに関する徹底的な知識を得ようためだった。家に帰ると自分の部屋へやに閉じこもつてすぐ大体を読んで見た。後屈症は外科手術を施して位置きようせい矯正せいをする事によつて、内膜炎は内膜炎を抉けつ搔そうする事によつて、それが器械的の発病である限り全治の見込みはあるが、位置矯正の場合などに

施術者しじゆつしやの不注し意じから子宮底しに穿せん孔こうを生じた時などには、往々にして激烈な腹膜炎を結果する危険が伴わないでもないなどと書いてあつた。葉子は倉地に事情を打ち明けて手術を受けようかとも思つた。ふだんならば常識がすぐそれを葉子にさせたに違いない。しかし今はもう葉子の神経は極度に脆ぜい弱じやくになつて、あらぬ方向にばかりわれにもなく鋭く働くようになっていた。倉地は疑いもなく自分の病気に愛想を尽かすだろう。たといそんな事はないとしても入院の期間に倉地の肉の要求が倉地を思わぬほうに連れて行かないとはだれが保証できよう。それは葉子の僻へき見けんであるかもしれない、しかしもし愛子が倉地の注意をひいていゝとすれば、自分の留守の間に倉地が彼女に近づくのはただ一歩の事

だ。愛子がああの年であの無経験で、倉地のような野性と暴力とに興味を持たぬのはもちろん、一種の厭悪けんおをさえ感じているのは察せられないではない。愛子はきつと倉地を退けるだろう。しかし倉地には恐ろしい無恥がある。そして一度倉地が女をおのれの力の下に取りひしいだら、いかなる女も二度と倉地からのがれる事のできないような奇怪の麻醉ますいの力を持っている。思想とか礼儀とかにわずらわされない、無尽蔵に強烈で征服的な生きのままな男性の力はいかなる女をもその本能に立ち帰らせる魔術を持っている。しかもあの柔順らしく見える愛子は葉子に対して生まれるとからの敵意さしはさを挟んでいるのだ。どんな可能でも描いて見る事ができる。そう思うと葉子はわが身でわが身を焼くような未練と嫉妬しつとのため

に前後も忘れてしまった。なんとかして倉地を縛り上げるまでは葉子は甘んじて今の苦痛に堪<sup>た</sup>え忍ぼうとした。

そのころからあの正井という男が倉地の留守をうかがっては葉子に会いに来るようになった。

「あいつは犬だった。危うく手をかませる所だった。どんな事があつても寄せ付けるではないぞ」

と倉地が葉子にいい聞かせてから一週間もたたない後に、ひよっこり正井が顔を見せた。なかなかのしやれ者で、寸分のすきもない身なりをしていた男が、どこかに貧窮をにおわすようになっていた。カラーにはうつつり汗じみができて、ズボンの膝<sup>ひざ</sup>には焼けこげの小さな孔<sup>あな</sup>が明いたりしていた。葉子が上げる上げないも

いわないうちに、懇意ずくらしくどんどん玄関から上がりこんで座敷に通った。そして高価らしい西洋菓子の美しい箱を葉子の目の前に風呂敷ふろしきから取り出した。

「せっかくおいでくださいましたのに倉地さんは留守ですから、はばかりですが出直してお遊びにいらしってくださいまし。これはそれまでお預かりおきを願いますわ」

そういつて葉子は顔にはいかにも懇意を見せながら、言葉には二の句がつけないほどの冷淡さと強さを示してやった。しかし正井はしやあしやあととして平気なものだった。ゆつくり內衣囊うちがくしから巻煙草まきたばこ入れを取り出して、金口きんぐちを一本つまみ取ると、炭の上にたまった灰を静かにかきのけるようにして火をつけて、の

どかに香りのいい煙を座敷に漂わした。

「お留守ですか……それはかえつて好都合でした……もう夏らしくなつて来ましたね、隣の薔薇も咲き出すでしょう……遠いようだがまだ去年の事ですなえ、お互い様に太平洋を往つたり来たりしたのは……あのころがおもしろい盛りでしたよ。わたしたちの仕事もまだにらまれずにいたんでしたから……時に奥さん」

そういつて折り返り入つて相談でもするように正井は煙草盆を押しつけて膝を乗り出すのだった。人を侮つてかかつて来ると思うと葉子はぐつと癩にさわつた。しかし以前のよな葉子はそこにはいなかった。もしそれが以前であつたら、自分の才氣と力量と美<sup>び</sup>貌<sup>ぼう</sup>とに充分の自信を持つ葉子であつたら、毛の末ほども自分を失

う事なく、優婉ゆうえんに円滑に男を自分のかけた陥穽わなの中におとしいれて、自縄自縛じじょうじばくの苦にがい目にあわせているに違ちがいない。しかし現在の葉子はたわいもなく敵を手もとまでもぐりこませてしまつてただいらいらとあせるだけだつた。そういう破目はめになると葉子は存外力のない自分であることを知らねばならなかつた。

正井は膝ひざを乗り出してから、しばらく黙もくつて敏捷びんしょうに葉子の顔色をうかがつていたが、これなら大丈夫と見きわめをつけたらしく、

「少しばかりでいいんです、一つ融通ゆうづうしてください」

と切り出した。

「そんな事をおつしやつたつて、わたしにどうしようもないくら

いは御存じじやありませんか。そりや余人じやなし、できるのならなんとかいたしますけれども、姉妹三人がどうかこうかして倉地に養われている今こんにち日ひのような境きょうがい界がいでは、わたしに何ができましよう。正井さんにも似合わないま的てきの違いをおつしやるのね。倉地なら御相談にもなるでしょうから面と向かってお話してください。中にはいるとわたしが困りますから」

葉子は取りつく島もないようにといや味な調子でずけずけとこういった。正井はせせら笑うようにほほえんで金口の灰を静かに灰吹きに落とした。

「もう少しぎつくばらんにいつてくださいますよきのうきょうのお交あ際さいじやなし。倉地さんとまづくなつたくらいは御承知じやあり

ませんか。……知っていらつしつてそういう口のききかたは少しひど過ぎますぜ、（ここで仮面を取ったように正井はふてくされた態度になった。しかし言葉はどこまでも穏当だった。）きらわれたつてわたしは何も倉地さんをどうしようのこうしようのと、そんな薄情な事はしないつもりです。倉地さんにけががあればわたしだって同罪以上ですからね。……しかし……一つなんとかならないもんでしょうか」

葉子の怒りに興奮した神経は正井のこの一言ひとことにすぐおびえてしまった。何もかも倉地の裏面を知り抜いてるはずの正井が、捨てばちになったら倉地の身の上になどんな災難が降りかからぬとも限らぬ。そんな事をさせては飛んだ事になるだろう。そんな事を

させては飛んだ事になる。葉子はますます弱身よわみになった自分を救い出す術すべに困こまじ果こてていた。

「それを御承知でわたしの所にいらしたって……たといわたしに都合がついたとしたところで、どうしようもありませんじやないの。なんぼわたしだって、倉地と仲たがえをなさったあなたに倉地の金を何する……」

「だから倉地さんのものをおねだりはしませんさ。木村さんからもたんまり来ているはずじゃありませんか。その中から……たん

とたあいいませんから、窮境を助けると思つてどうか」

正井は葉子を男たらしと見くびつた態度で、情夫を持つてめかける妾せまにでも逼せまるようにならずうずうしい顔色を見せた。こんな押し問答の

結果葉子はとうとう正井に三百円ほどの金をむぎむぎとせびり取られてしまった。葉子はその晩倉地が帰つて来た時もそれをいい出す気力はなかった。貯金は全部定子のほうに送つてしまつて、葉子の手もとにはいくらも残つてはいなかった。

それからというもの正井は一週間とおかずに葉子の所に来ては金をせびつた。正井はそのおりおり、絵島丸のサルンの一隅いちくうに陣取つて酒と煙草たばことにひたりながら、何か知らんひそひそ話をしていた数人の人たち——人を見ぬく目の鋭い葉子にもどうしてもその人たちの職業を推察し得なかつた数人の人たちの仲間に倉地がはいつて始め出した秘密な仕事の巨細こさいをもらした。正井が葉子を脅かすために、その話には誇張が加えられている、そう思つ

て聞いてみても、葉子の胸をひやつとさせる事ばかりだった。倉地が日清戦争にも参加した事務長で、海軍の人たちにも航海業者にも割合に広い交際がある所から、材料の蒐集者としてその仲間の牛耳を取るようになり、露国や米国に向かつてもらした祖国の軍事上の秘密はなかなか容易ならざるものらしかった。倉地の気分がすさんで行くのももつともだと思われるような事柄を数々葉子は聞かされた。葉子はしまいには自分自身を護るためにも正井のきげんを取りはずしてはならないと思うようになって。そして正井の言葉が一語一語思い出されて、夜なぞになると眠らせぬほどに葉子を苦しめた。葉子はまた一つの重い秘密を背負わなければならぬ自分を見いだした。このつらい意識はすぐに

また倉地に響くようだった。倉地はともすると敵の間かんちよう 諜しやではないかと疑うような険しい目で葉子をにらむようになった。そして二人の間にはまた一つの溝みぞがふえた。

そればかりではなかった。正井に秘密な金を融通するためには倉地からのあてがいだけではとても足りなかった。葉子はありませんない事を誠まことしやかに書き連ねて木村のほうから送金させねばならなかった。倉地のためならともかくにも、倉地と自分の妹たちとが豊かな生活を導くためならともかくにも、葉子に一種の癡どうあく悪な誇りをもつてそれをして、男のためなら何事でもという捨てばちな満足を買得ないではなかったが、その金がない正井のふところに吸収されてしまうのだと思うと、いくら間

接には倉地のためだとはいえ葉子の胸は痛かった。木村からは送金のたびごとに相変わらず長い消息が添えられて来た。木村の葉子に対する愛着は日を追うてまさるとも衰える様子は見えなかった。仕事のほうにも手違いや誤算があつて始めの見込みどおりには成功とはいえないが、葉子のほうに送るくらいの金はどうしてでも都合がつくくらいの信用は得ているから構わずいつてよこせとも書いてあつた。こんな信実な愛情と熱意を絶えず示されるこのごろは葉子もさすがに自分のしている事が苦しくなつて、思ひきつて木村にすべてを打ちあけて、関係を絶たとうかと思ひ悩むよくな事が時々あつた。その矢先なので、葉子は胸にことさら痛みを覚えた。それがますます葉子の神経をいらだたせて、その病氣

にも影響した。そして花の五月が過ぎて、青葉の六月になろうとするころには、葉子は痛ましくやせ細った、目ばかりどぎつい純然たるヒステリー症の女になっていた。

### 三九

巡査の制服は一気に夏服になったけれども、その年の気候はひどく不順で、その白服がうらやましいほど暑い時と、気の毒なほど悪冷えわるびのする日が入れ代わり立ち代わり続いた。したがって晴雨も定めがたかった。それがどれほど葉子の健康にさし響いたかしれなかった。葉子は絶えず腰部の不愉快な鈍痛を覚ゆるにつけ、

暑くて苦しい頭痛に悩まされるにつけ、何一つからだに申し分  
なかつた十代の昔を思い忍んだ。晴雨寒暑というようなものがこ  
れほど気分に影響するものとは思ひもよらなかつた葉子は、寝起  
きの天気を何よりも気にするようになった。きようこそは一日気  
がはればれするだろうと思うような日は一日もなかつた。きよう  
もまたつらい一日を過ごさねばならぬというそのいまわしい予想  
だけでも葉子の気分をそこなうには充分すぎた。

五月の始めごろから葉子の家に通う倉地の足はだんだん遠のい  
て、時々どこへとも知れぬ旅に出るようになった。それは倉地が  
葉子のしつっこい挑いどみと、激しい嫉妬しつとと、理不尽な疝癰かんぺきの発作  
とを避けるばかりだとは葉子自身にさえ思えない節ふしがあつた。倉

地のいわゆる事業には何かかなり致命的な内場破れうちばわが起こつて、倉地の力でそれをどうする事もできないらしい事はおぼろげながらも葉子にもわかつていた。債権者であるか、商売仲間であるか、とにかくそういう者を避けるために不意に倉地が姿を隠さねばならぬらしい事は確かだつた。それにしても倉地の疎遠はひたすら一向に葉子には憎かつた。

ある時葉子は激しく倉地に迫つてその仕事の内容をすつかり打ち明けさせようとした。倉地の情人である葉子が倉地の身に大事が降りかかろうとして知っているのを知りながら、それに助力もし得ないという法はない、そういった葉子はせがみにせがんだ。

「こればかりは女の知つた事じゃないわい。おれが喰くらい込んでも

お前にはとぼつちりが行くようにはしたくないで、打ち明けないのだ。どこに行っても知らない知らないで一点張りに通すがいいぜ。……二度と聞きたいとせがんでみる、おれはうそほんなしにお前とは手を切つて見せるから」

その最後の言葉は倉地の平生へいせいに似合わない重苦しい響きを持っていた。葉子が息いき気をつめてそれ以上をどうしても迫る事ができないと断念するほど重苦しいものだった。正井の言葉から判じても、それは女手などでは実際どうする事もできないものらしいので葉子はこれだけは断念して口をつぐむよりしかたがなかつた。

墮落といわれようと、不貞といわれようと、他人手ひとでを待っていないとはとても自分の思うような道は開けないと見切りをつけた本能

的の衝動から、知らず知らず自分で選び取った道の行く手に目もくらむような未来が見えたうちようてんと有頂天になつた絵島丸の上の出来事以来一年もたたないうちに、葉子が命も名もささげてかかった新しい生活は見る見る土台から腐り出して、もう今は一陣の風さえ吹けば、さしもの高樓ももんどり打って地上にくずれてしまうと思ひやると、葉子はしばしば真剣に自殺を考えた。倉地が旅に出た留守に倉地の下宿に行つて「急用ありすぐ帰れ」という電報をその行く先に打つてやる。そして自分は心静かに倉地の寢床の上で刃やいばに伏していよう。それは自分の一生の幕切れとしては、いちばんふさわしい行為らしい。倉地の心にもまだ自分に対する愛情は燃えかすれながらも残っている。それがこの最後によつてい

つとき  
時なりとも美しく燃え上がるだろう。それでいい、それで自分は満足だ。そう心から涙ぐみながら思う事もあつた。

実際倉地が留守のはずのある夜、葉子はふらふらとふだん空想していたその心持ちにきびしく捕えられて前後も知らず家を飛び出した事があつた。葉子の心は緊張しきつて天気なのやら曇つているのやら、暑いものやら寒いものやらさらに差別がつかかなかつた。盛んに羽虫はむしが飛びかわして往来の邪魔になるのをかすかに意識しながら、家を出てから小半町裏坂こはんちちようをおりて行つたが、ふと自分のからだがよごれていて、この三四日湯にはいらぬ事を思い出すと、死んだあとの醜さを恐れてそのまま家に取つて返した。そして妹たちだけがはいつたままになっている湯殿ゆどのに忍んで行つて、

さめかけた風呂風呂につかつた。妹たちはとうに寝入っていた。手ぬぐい掛けの竹竿たけざおにぬれた手ぬぐいが二筋だけかかっているのを見ると、寝入っている二人の妹ふたりの事がひしひしと心に逼せまるようだった。葉子の決心はしかしそのくらいの事では動かなかつた。簡単に身じまいをしてまた家を出た。

倉地の下宿近くなつた時、その下宿から急ぎ足で出て来る背たけの低い丸鬚まるまげの女がいた。夜の事ではあり、そのへんは街灯の光も暗いので、葉子にはさだかにそれとわからなかつたが、どうも双鶴館そうかくかんの女将おかみらしくもあつた。葉子はかつとなつて足早にそのあとをつけた。二人の間は半町とは離れていなかつた。だんだん二人の間に距離がちぢまつて行つて、その女が街灯の下を通る

時などに気を付けて見るとどうしても思ったとおりの女らしかった。さては今まであの女を真正直まに信じていた自分はまんまと詐いつわられていたのだったか。倉地の妻に対しても義理が立たないから、今夜以後葉子とも倉地の妻とも関係を絶たつ。悪く思わないでくれと確かにそういった、その義ぎぎよう侠やくらしい口くちぐるま車まにまんまと乗せられて、今まで殊勝な女だとばかり思っていた自分の愚かさはどうだ。葉子はそう思うと目が回ってその場に倒れてしまいそうなくやしき恐ろしさを感じた。そして女の形を目がけてよろよるとなりながら駆け出した。その時女はそのへんに辻待つしまちをしている車に乗ろうとする所だった。取りにがしてなるものかと、葉子はひた走りに走ろうとした。しかし足は思うようにはかどらなかつ

た。さすがにその静けさを破つて声を立てる事もはばかられた。もう十間けんというくらいじやりみちの所まで来た時車はがらがらと音を立てて砂利道を動きはじめた。葉子は息気いきせき切つてそれに追いつこうとあせつたが、見る見るその距離は遠ざかつて、葉子は杉森すぎもりで囲まれたさびしい暗闇くらやみの中にただ一人取り残されていた。葉子はなんとという事なくその辻つじぐるま車のいた所まで行つて見た。一台よりいなかつたので飛び乗つてあとを追うべき車もなかつた。葉子はぼんやりそこに立つて、そこに字でも書き残してあるかのように、暗い地面じめんをじつと見つめていた。確かにあの女に違ちがひなかつた。背格好せいといい、鬚まげの形といい、小刻みな歩きぶりといい、……あの女に違ちがひなかつた。旅行に出るといった倉地は疑ういもな

くうそを使つて下宿にくすぶつてゐるに違ひない。そしてあの女を仲ちゆうにん人に立てて先妻とのよりを戻もとそうとしているに決まつてゐる。それに何の不思議があろう。長年連れ添つた妻ではないか。かわいい三人の娘の母ではないか。葉子というものに一日一日疎うとくならうとする倉地ではないか。それに何の不思議があろう。：それにしてもあまりといえばあまりな仕打ちだ。なぜそれならそうと明らかにいつてはくれないのだ。いつてさえくれれば自分にだつて恋する男に対しての女らしい覚悟はある。別れるとならばきれいさっぱりと別れても見せる。：：：なんという踏みつけかただ。なんという恥さらしだ。倉地の妻はおおそれた貞女ぶつた顔を震わして、涙を流しながら、「それではお葉さんという方かたに

お気の毒だから、わたしはもう亡ないものと思つてくださいまし：  
 ……見ていられぬ、聞いていられぬ。……葉子という女はど  
 んな女だか、今夜こそは倉地にしつかり思い知らせてやる……。

葉子は酔つたもののようにふらふらした足どりでそこから引き  
 返した。そして下宿屋に來着きいた時には、息氣いき苦しきのために声  
 も出ないくらいになっていた。下宿の女たちは葉子を見ると「ま  
 たあの氣狂きちがいが來た」といわんばかりの顔をして、その夜の葉子  
 のことさらに取りつめた顔色には注意を払う暇もなく、その場を  
 はずして姿を隠した。葉子はそんな事には氣もかけずに物すごい  
 笑顔えがおでことさららしく帳場にいる男にちよつと頭を下げて見せて、  
 そのままふらふらと階はしご子段をのぼつて行つた。ここが倉地の部へ

屋だやというその襖ふすまの前に立った時には、葉子は泣き声に気がついて驚いたほど、われ知らずすすり上げて泣いていた。身の破滅、恋の破滅は今夜の今、そう思つて荒々しく襖ふすまを開いた。

部屋の中には案外にも倉地はいなかった。すみからすみまで片づいていて、倉地のあの強烈な膚におの香いもさらに残つてはいなかった。葉子は思わずふらふらとよろけて、泣きやんで、部屋の中に倒れこみながらあたりを見回した。いるに違いないとひとり決ぎめをした自分の妄想もうそが破れたという気は少しも起こらないで、確かにいたものが突然溶けてしまいかどうかしたような気味の悪い不思議さに襲われた。葉子はすっかり気抜けがして、髪えもんも衣紋えもんも取り乱したまま横よこずわりにすわったきりでぼんやりしていた。

あたりは深山のようにしーんとしていた。ただ葉子の目の前をうるさく行ったり来たりする黒い影のようなものがあつた。葉子は何物という分別ぶんべつもなく始めはただうるさいとのみ思っていたが、しまいにはこらえかねて手をあげてしきりにそれを追い払つてみた。追い払つても追い払つてもそのうるさい黒い影は目の前を立ち去ろうとはしなかつた。……しばらくそうしているうちに葉子は寒気さむけがするほどぞつとおそろしくなつて気がはつきりした。急に周囲あたりには騒がしい下宿屋らしい雑音が聞こえ出した。葉子をうるさからしたその黒い影は見る見る小さく遠ざかつて、電燈の周囲をきりきりと舞い始めた。よく見るとそれは大きな黒い夜よ蛾がだつた。葉子は神がかりが離れたようにきよとなつて、不

思議そうに居ずまいを正ただしてみた。

どこまでが真実で、どこまでが夢なんだろう……。

自分の家を出た、それに間違いはない。途中から取って返して風呂ふろをつかった、……なんのために？ そんなばかな事をするはずがない。でも妹たちの手ぬぐいが二筋ぬれて手ぬぐいかけの竹た竿げざおにかかっていた、（葉子はそう思いながら自分の顔をなでたり、手の甲を調べて見たりした。そして確かに湯にはいった事を知った。）それならそれでいい。それから双鶴館おかみの女将おかみのあとをつけたのだつたが、……あのへんから夢になったのかしらん。あすこにいる蛾がをもやもやした黒い影のように思ったりしていた事から考えてみると、いまいましきから自分は思わず背たけの低い

女の幻影を見ていたのかもしれない。それにしてもいるはずの倉地がいけないという法はないが……葉子はどうしても自分のして来た事にはつきり連絡をつけて考える事ができなかつた。

葉子は……自分の頭ではどう考えてみようもなくなつて、ベルを押しして番頭に来てもらつた。

「あのう、あとでこの蛾がを追い出しておいてくださいな……それからね、さつき……といったところがどれほど前だかわたしにもはつきりしませんかね、ここに三十格好の丸まる鬚まげを結つた女の人が見えましたか」

「こちら様にはどなたもお見えにはなりません……」  
番頭は怪訝けげんな顔をしてこう答えた。

「こちら様だろうがなんだろうが、そんな事を聞くんじゃないの。この下宿屋からそんな女の人が出て行きましたか」

「さよう……へ、一時間ばかり前ならお一人お帰りになりました」

「双鶴館のお内儀かみさんでしょう」

「ずぼし凶星をさされたろうといわんばかりに葉子はわざと鷹揚おうような態度

を見せてこう聞いてみた。

「いゝえそうじゃございません」

番頭は案外にもそうきっぱりといい切ってしまった。

「それじゃだれ」

「とにかく他のお部屋へやにおいでなされたお客様で、手前どもの商

売上お名前までは申し上げ兼ねますが」

葉子もこの上の問答の無益なのを知ってそのまま番頭を返してしまつた。

葉子はもう何者も信用する事ができなかつた。ほんとうに双鶴館の女将おかみが来たのではないらしくもあり、番頭までが倉地とぐるになつていてしらじらしい虚言うそをついたようにもあつた。

何事も当てにはならない。何事もうそから出た誠だ。……葉子はほんとうに生きている事がいやになつた。

……そこまで来て葉子は始めて自分が家を出て来たほんとうの目的がなんであるかに気づいた。すべてにつまずいて、すべてに見限られて、すべてを見限ろうとする、苦しみぬいた一つの魂が、虚無の世界の幻の中から消えて行くのだ。そこには何の未練も執

着もない。うれしかつた事も、悲しかつた事も、悲しんだ事も、苦しんだ事も、ひつきよう畢 竟は水の上に浮いた泡あわがまたはじけて水に帰るようなものだ。倉地が、死骸しがいになつた葉子を見て嘆こうが嘆くまいが、その倉地さえ幻の影ではないか。双鶴館の女将おかみだと思つた人が、他人であつたように、他人だと思つたその人が、案外双鶴館の女将であるかもしれないように、生きるという事がそれ自身幻影でなくつてなんであろう。葉子は覚めさきつたような、眠りほうけているような意識の中でこう思つた。しんしんと底も知らず澄み透とおつた心がただ一つぎりぎりとして死のほうに働いて行つた。葉子の目には一しずくの涙も宿つてはいなかつた。妙にさえて落ち付き払つたひとみを静かに働かして、部屋の中を静かに見回し

ていたが、やがて夢遊病者のように立ち上がって、戸棚とだなの中から

倉地の寝具を引き出して来て、それを部屋のまん中に敷いた。そうしてしばらくの間その上に静かにすわって目をつぶってみた。

それからまた立ち上がって全く無感情な顔つきをしながら、もう一度戸棚とだなに行つて、倉地が始終身近に備えているピストルをあち

こちと尋ね求めた。しまいにそれが本箱の引き出しの中の幾通かの手紙と、書きそこねの書類と、四五枚の写真とがごつちやにしまい込んであるその中から現われ出た。葉子は妙に無関心な心持ちでそれを手に取った。そして恐ろしいものを取り扱うようにそれをからだから離して右手にぶら下げて寢床に帰った。そのくせ葉子は露ほどもその凶器におそれをいだいているわけではなかつ

た。寢床のまん中にすわってからピストルを膝ひざの上に置いて手をかいたまましばらくながめていたが、やがてそれを取り上げると胸の所に持って来て鶏頭けいとうを引き上げた。

きりっ

と歯切れのいい音を立てて弾筒が少し回転した。同時に葉子の全身は電気を感じたようにびりっとおののいた。しかし葉子の心は水が澄んだように揺ゆるがなかった。葉子はそうしたまま短銃をまた膝ひざの上に置いてじつとながめていた。

ふと葉子はただ一つし残した事のあるのに気が付いた。それがなんであるかを自分でもはつきりとは知らずに、いわば何物かの余儀ない命令に服従するように、また寢床から立ち上がって戸棚とだな

の中の本箱の前に行つて引き出しをあけた。そしてそこにあつた写真を丁寧一枚ずつ取り上げて静かにながめるのだった。葉子は心ひそかに何をしているんだろうと自分の動作を怪しんでいた。

葉子はやがて一人の女の写真を見つめている自分を見いだした。

長く長く見つめていた。……そのうちに、白痴がどうかしてだんだん真人間にかえる時はそうもあろうかと思われるように、葉子の心は静かに静かに自分で働くようになって行つた。女の写真を見てどうするのだろうと思つた。早く死ななければいけないのだがと思つた。いったいその女はだれだろうと思つた。……それは倉地の妻の写真だった。そうだ倉地の妻の若い時の写真だ。なるほど美しい女だ。倉地は今でもこの女に未練を持っているだろう

か。この妻には三人のかわいい娘があるのだ。「今でも時々思い出す」そう倉地のいった事がある。こんな写真がいつたいこの部屋やなんぞにあつてはならないのだが。それはほんとうにならないのだ。倉地はまだこんなものを大事にしている。この女はいつまでも倉地に帰つて来ようと待ち構えているのだ。そしてまだこの女は生きているのだ。それが幻なものか。生きているのだ、生きているのだ。……死なれるか、それで死なれるか。何が幻だ、何が虚無だ。このとおりこの女は生きているではないか……危うく……危うく自分は倉地を安堵あんどさせる所だった。そしてこの女を……このまだ生しょうのあるこの女を喜ばせるところだった。

葉子は一刹いっせつ那なの違いで死さかの界かいから救い出された人のように、

驚喜に近い表情を顔いちめんみなぎらして裂けるほど目を見張つて、写真を持ったまま飛び上がらんばかりに突つ立つたが、急に襲いかかるやるせない嫉妬しつとの情と憤怒とにおそろしい形相ぎようそうになつて、齒がみをしながら、写真の一端をくわえて、「いゝゝゝ……」といいながら、総身そうしんの力をこめてまつ二つに裂くと、いきなり寢床の上にどうと倒れて、物すごい叫び声を立てながら、涙も流さずに叫びに叫んだ。

店のものがあわてて部屋にはいつて来た時には、葉子はしおらしい様子をして、短銃を床の下に隠してしまつて、しくしくとほんとうに泣いていた。

番頭はやむを得ず、てれ隠しに、

「夢でも御覧になりましたか、たいそうなお声だったものですか  
ら、つい御案内もいたさず飛び込んでしまいました」

と聞いた。葉子は、

「え、夢を見ました。あの黒い蛾がが悪いんです。早く追い出して  
ください」

そんなわけのわからない事をいって、ようやく涙を押しぬぐつ  
た。

こういう発作ほっさを繰り返すたびごとに、葉子の顔は暗くばかりな  
って行った。葉子には、今まで自分が考えていた生活のほかに、  
もう一つ不可思議な世界があるように思われて来た。そうしてや  
やともすればその両方の世界に出たりはいたりする自分を見い

だすのだった。二人の妹たちはたゞはらはらして姉の狂暴な振る舞いを見守るほかはなかつた。倉地は愛子に刃物はものなどに注意しろといったりした。

岡の来た時だけは、葉子のきげんは沈むような事はあつても狂暴になる事は絶えてなかつたので、岡は妹たちの言葉にさして重きを置いていないように見えた。

## 四〇

六月のある夕方だった。もうたそがれ時で、電灯がともつて、その周囲におびただしく杉すぎもり森の中から小さな羽虫はむしが集まつてう

るさく飛び回り、やぶ蚊がすさまじく鳴きたてて軒先に蚊柱を立てているころだった。しばらく目で来た倉地が、張り出しの葉子の部屋へやで酒を飲んでいた。葉子はやせ細った肩を単衣物ひとえものの下にとがらして、神経的に襟えりをぐつとかき合わせて、きちんと膳ぜんのそばにすわって、華車きやしゃな団扇うちわで酒の香かに寄りたかつて来る蚊を追い払っていた。二人の間にはもう元のように滾こん々と泉のごとくわき出る話題はなかった。たまに話が少しはずんだと思うと、どちらかに差しさわるような言葉が飛び出して、ぷつんと会話を杜と絶だやしてしまった。

「貞さあちゃんやっぱり駄だ々だをこねるか」

一口酒を飲んで、ため息をつくように庭のほうに向いて気を吐

いた倉地は、自分で気分を引き立てながら思い出したように葉子のほうを向いてこう尋ねた。

「えゝ、しようがなくなつちまいました。この四五日つたらことさらひどいんですから」

「そうした時期もあるんだろう。まあたんといびらないで置くがいいよ」

「わたし時々ほんとうに死にたくなつちまいります」

葉子は途轍とてつもなく貞世のうわさとは縁もゆかりもないこんなひよんな事をいった。

「そうだおれもそう思う事があるて……。落ち目になつたら最後、人間は浮き上がるがめんどろになる。船でもが浸水し始めたら埒らち

はあかんからな。……したが、おれはまだもう一ひと反り反そつてみてくれる。死んだ気になって、やれん事は一つもないからな」

「ほんとうですわ」

そういつた葉子の目はいらいらと輝いて、にらむように倉地を見た。

「正井のやつが来るそうじやないか」

倉地はまた話題を転ずるようにこういつた。葉子がそうだとさえいえば、倉地は割合に平気で受けて「困ったやつに見込まれたものだが、見込まれた以上はしかたがないから、空腹ひもじがらないだけの仕向けをしてやるがいい」というに違いない事は、葉子によくわかつてはいたけれども、今まで秘密にしていた事をなんとか

いわれやしないかとの気づかいのためか、それとも倉地が秘密を持つのならこつちも秘密を持つて見せるぞという腹になりたいためか、自分にもはつきりとはわからない衝動に駆られて、何という事なしに、

「いゝえ」

と答えてしまった。

「来ない？……そりやお前いかげんじやろう」

と倉地はたしなめるような調子になった。

「いゝえ」

葉子は頑固がんこにいい張つてそつぽを向いてしまった。

「おいその団扇うちわを貸してくれ、あおがずには蚊でたまらん……」

…来ない事があるものか」

「だれからそんなばかな事お聞きになつて？」

「だれからでもいいわさ」

葉子は倉地がまた齒に衣着きぬせた物の言いかたをすると思うとかつと腹が立つて返辞もしなかつた。

「葉ちゃん。おれは女のきげんを取るために生まれて来はせんぞ。いいかげんをいって甘く見くびるとよくはないぜ」

葉子はそれでも返事をしなかつた。倉地は葉子の拗すねかたに不快を催したらしかつた。

「おい葉子！ 正井は来くるのか来こんのか」

正井の来る来ないは大事ではないが、葉子の虚言を訂正させず

には置かないというように、倉地は詰め寄せてきびしく問い迫つた。葉子は庭のほうにやっていた目を返して不思議そうに倉地を見た。

「いゝえといったらいいゝえとよりいいようはありませんわ。あなたの『いゝえ』とわたしの『いゝえ』は『いゝえ』が違いでもしますかしら」

「酒も何も飲めるか……おれが暇を無理に作ってゆつくりくつろごとく思うて来れば、いらん事に角かどを立てて……何の薬になるかいそれが」

葉子はもう胸いっぱい悲しくなっていた。ほんとうは倉地の前に突つ伏して、自分は病気で始終からだか自由にならないのが倉

地に気の毒だ。けれどもどうか捨てないで愛し続けてくれ。からだだめになつても心の続く限りは自分は倉地の情人でいたい。そうよりできない。そこをあわれんでせめては心の誠をささげさせてくれ。もし倉地が明々地あからさまにいつてくれさえすれば、元の細さいく君くんを呼び迎えてくれても構わない。そしてせめては自分をあわれんでなり愛してくれ。そう嘆願がしたかつたのだ。倉地はそれに感激してくれるかもしれない。おれはお前も愛するが去つた妻も捨てるには忍びない。よくいつてくれた。それならお前の言葉に甘えて哀れな妻を呼び迎えよう。妻もさぞお前の黄金のような心には感ずるだろう。おれは妻とは家庭を持つとう。しかしお前とは恋を持つとう。そういつて涙ぐんでくれるかもしれない。もしそ

んな場面が起こり得たら葉子はどれほどうれしうだろう。葉子はその瞬間に、生まれ代わって、正しい生活が開けてくるのにと思つた。それを考えただけで胸の中からは美しい涙がにじみ出すのだつた。けれども、そんなばかをいうものではない、おれの愛しているのはお前一人だ。元の妻などにおれが未練を持つていて思うのが間違いだ。病気があるのならさっそく病院にはいるがい、費用はいくらでも出してやるから。こう倉地がいわないとも限らない。それはありそうな事だ。その時葉子は自分の心を立ち割つて誠を見せた言葉が、情けも容赦も思いやりもなく、踏みこじられけがされてしまうのを見なければならぬのだ。それは地獄の苛責よりも葉子には堪えがたい事だ。たとい倉地が前の態

度に出てくれる可能性が九十九あって、あとの態度を採りそのような可能性が一つしかないとしても、葉子には思いきって嘆願をしてみよう。勇気が出ないのだ。倉地も倉地で同じような事を思って苦しんでいるらしい。なんとかして元のようなかかけ隔てのない葉子を見いだして、だんだんと陥って行く生活の窮境の中にも、せめてはしばらくなりとも人間らしい心になりたいと思つて、葉子に近づいて来ているのだ。それをどこまでも知り抜きながら、そして身につまされて深い同情を感じながら、どうしても面と向かうと殺したいほど憎まないではいられない葉子の心は自分ながら悲しかった。

葉子は倉地の最後の ひとこと 一言でその急所に触れられたのだった。

葉子は倉地の目の前で見る見るしおれてしまった。泣くまいと氣張りながら幾度も雄々しく涙を飲んだ。倉地は明らかに葉子の心を感じたらしく見えた。

「葉子！ お前はなんでこのごろそう他所他所しくしていなければならんのだ。え？」

といいながら葉子の手を取ろうとした。その瞬間に葉子の心は火のように怒っていた。

「他所所しいのはあなたじゃありませんか」

そう知らず知らずいつてしまつて、葉子は没義道に手を引つ込めた。倉地をにらみつける目からは熱い大粒の涙がぼろぼろとこぼれた。そして、

「あゝ……あ、地獄だ地獄だ」

と心の中で絶望的に切なく叫んだ。

二人の間にはまたもやいまわしい沈黙が繰り返された。

その時玄関に案内の声が聞こえた。葉子はその声を聞いて古藤が来たのを知った。そして大急ぎで涙を押しぬぐった。二階から降りて来て取り次ぎに立った愛子がやがて六畳の間にはいつて来て、古藤が来たと告げた。

「二階にお通ししてお茶でも上げてお置き、なんだって今ごろ……御飯時も構わないで……」

とめんどろくさそうにいったが、あれ以来来た事のない古藤にあうのは、今のこの苦しい圧迫からのがれるだけでも都合がよか

った。このまま続いたらまた例の発作で倉地に愛想あいそを尽かさせるような事をしでかすにきまつていたから。

「わたしちよつと会つてみますからね、あなた構わないでいらつしやい。木村の事も探つておきたいから」

そういつて葉子はその座をはずした。倉地は返事一つせず杯を取り上げていた。

二階に行つて見ると、古藤は例の軍服に上等兵の肩章を付けて、あぐらをかきながら貞世と何か話をしていた。葉子は今まで泣き苦しんでいたとは思えぬほど美しいきげんになっていた。簡単な挨拶あいさつを済ますと古藤は例のいうべき事から先にいい始めた。

「ごめんどうですがね、あす定期検閲な所が今度は室内の整頓せいとん

なんです。ところが僕はぼく整頓風呂敷せいとんふうろしきを洗濯せんたくしておくのをすっかり忘れてしまつてね。今特別に外出をごちよう伍長ごちようにそつと頼んで許してもらつて、これだけ布を買つて来たんですが、縁ふちを縫つてくれる人がないんで弱つて駆けつけたんです。大急ぎでやっていただけないでしょうか」

「おやすい御用ですともね。愛さん！」

大きく呼ぶと階下にいた愛子が平生へいせいに似合わず、あたふたと階は子段しごだんをのぼつて来た。葉子はふとまた倉地を念頭に浮かべていやな気持ちになつた。しかしそのころ貞世から愛子に愛が移つたかと思われるほど葉子は愛子を大事に取り扱っていた。それは前にも書いたとおり、しいても他人に対する愛情を殺す事によつて、

倉地との愛がより緊かたく結ばれるという迷信のような心の働きから起こった事だった。愛しても愛し足りないような貞世につらく当たって、どうしても気の合わない愛子を虫を殺して大事にしてみたら、あるいは倉地の心が変わって来るかもしれないとそう葉子は何がなしに思うのだった。で、倉地と愛子との間にどんな奇怪な徴候を見つけ出そうとも、念にかけても葉子は愛子を責めまいと覚悟をしていた。

「愛さん古藤さんがね、大急ぎでこの縁ふちを縫ぬいってもらいたいとおっしゃるんだから、あなたして上げてちょうだいな。古藤さん、今下には倉地さんが来ていらつしやるんですが、あなたはおきらいねおあいなさるの……そう、じゃこちらでお話でもしますか

らどうぞ」

そういつて古藤を妹たちの部屋へやの隣に案内した。古藤は時計を見い見いせわしそうにしていた。

「木村からたよりがありますか」

木村は葉子の良人おととではなく自分の親友だといったようなふうで、古藤はもう木村君とはいわなかつた。葉子はこの前古藤が来た時からそれと気づいていたが、きようはことさらその心持ちが目立つて聞こえた。葉子はたびたび来ると答えた。

「困っているようですね」

「えゝ、少しはね」

「少しどころじゃないようですよ僕ぼくの所に来る手紙によると。な

んでも来年に開かれるはずだった博覧会が来々年さらいねんに延びたので、木村はまたこの前以上の窮境に陥つたらしいのです。若いうちだからいいようなもののおんな不運な男もすくない。金も送つては来ないでしょう」

なんというぶしつけな事をいう男だろうと葉子は思ったが、あまりいう事にわだかまりがないので皮肉でもいってやる気にはなれなかった。

「いゝえ相変わらず送つてくれますことよ」

「木村っていうのはそうした男なんだ」

古藤は半ばは自分にいうように感激した調子でこういったが、平気で仕送りを受けているらしく物をいう葉子にはひどく反感を

催したらしく、

「木村からの送金を受け取った時、その金があなたの手を焼きただらかすようには思いませんか」

と激しく葉子をまともに見つめながらいった。そして油でよごれたような赤い手で、せわしなく胸の真しんちゆう 鋤うぼたんをはめたりはずしたりした。

「なぜですの」

「木村は困りきってるんですよ。……ほんとうにあなた考えてごらんなさい……」

勢い込んでなおいい募ろうとした古藤は、襖ふすまを明け開いたままの隣の部屋に愛子たちがいるのに気づいたらしく、

「あなたはこの前お目にかかった時からすると、またひどくやせましたねえ」

と言葉をそらした。

「愛さんもうできて？」

と葉子も調子をかえて愛子に遠くからこう尋ね「いゝえまだ少し」と愛子がいうのをしおに葉子はそちらに立った。貞世はひどくつまらなそうな顔をして、机ひじに両肘を持たせたまま、ぼんやりと庭のほうを見やって、三人の挙動などには目もくれないふうだった。垣根かきねぞ添いの木の間からは、種々な色の薔薇ばらの花が夕ゆうやみ闇の中にもちらほらと見えていた。葉子はこのごろの貞世はほんとうに変だと思ひながら、愛子の縫いかけの布を取り上げて見た。そ

れはまだ半分も縫い上げられてはいなかった。葉子の瘡癩かんしゃくはぎりぎり募つて来たけれども、しいて心を押ししずめながら、

「これっぽち……愛子さんどうしたというんだらう。どれねえさんにお貸し、そしてあなたは……貞ちゃんも古藤さんの所に行つてお相手をしておいで……」

「僕は倉地さんにあつて来ます」

突然後ろ向きの古藤は畳に片手をついて肩越しに向き返りながらこういった。そして葉子が返事をする暇もなく立ち上がつて階は子段しごだんを降りて行こうとした。葉子はすばやく愛子に目くばせして、下に案内して二人の用を足してやるようにといった。愛子は急いで立つて行つた。

葉子は縫い物をしながら多少の不安を感じた。あのなんの技巧もない古藤と、疝癰かんぺきが募り出して自分ながら始末をしあぐねているような倉地とがまともにぶつかり合ったら、どんな事をしでかすかもしれない。木村を手の中に丸めておく事もきよう二人の会見の結果でだめになるかもわからないと思つた。しかし木村といえ、古藤のいう事などを聞いていると葉子もさすがにその心こころ根を思いやらずにはいられなかつた。葉子がこのごろ倉地に対して持つているような気持ちからは、木村の立場や心持ちがあからさま過ぎるくらい想像ができた。木村は恋するものの本能からとうに倉地と葉子との関係は了解しているに違いないのだ。了解して一人ひとりぽつちで苦しめるだけ苦しんでいるに違いないのだ。そ

れにも係わらずその善良な心からどこまでも葉子の言葉に信用を置いて、いつかは自分の誠意が葉子の心に徹するのを、ありうべき事のように思つて、苦しい一日一日を暮らしているに違いない。そしてまた落ち込もうとする窮境の中から血の出るような金を欠かさずに送つてよこす。それを思うと、古藤がいうようにその金  
が葉子の手を焼かないのは不思議といつていいほどだった。もつとも葉子であつてみれば、木村に醜いエゴイズムを見いださないほどのんきではなかつた。木村がどこまでも葉子の言葉を信用してかかっている点にも、血の出るような金を送つてよこす点にも、葉子が倉地に対して持つているよりはもっと冷静な功利的な打算が行なわれていると決める事ができるほど木村の心の裏を察して

いないではなかった。葉子の倉地に対する心持ちから考えると木村の葉子に対する心持ちにはまだすきがあると葉子は思った。葉子がもし木村であつたら、どうしておめおめ米国さんがい三界さんがいに続けて、遠くから葉子の心を翻す手段を講ずるようなのんきなまねがして済ましていられよう。葉子が木村の立場にいたら、事業を捨てても、乞食こじきになつても、すぐ米国から帰つて来ないじやいられないはずだ。米国から葉子と一緒に日本に引き返した岡の心のほうがどれだけ素直すなおで誠しやかだかしれやしない。そこには生活という問題もある。事業という事もある。岡は生活に対して懸念けねんなどする必要はないし、事業というようなものはてんで持つてはいない。木村とはなんといいつても立場が違つてはいる。といったと

ここで、木村の持つ生活問題なり事業なりが、葉子と一緒に  
てから後の事を顧慮してされている事だとしてみても、そんな気  
持ちでいる木村には、なんといいっても余裕があり過ぎると思わな  
いではいられない物足りなさがあつた。よし真ま裸ばだかになるほど、  
職業から放れて無一文もんになつていてもいい、葉子の乗つて歸つて  
来た船に木村も乗つて一緒に歸つて来たら、葉子はあるいは木村  
を船の中で人知れず殺して海の中に投げ込んでいようと、木村  
の記憶は哀かなしくなつかしいものとして死ぬまで葉子の胸に刻みつ  
けられていたろうものを。……それはそうに相違ない。それにし  
ても木村は気の毒な男だ。自分の愛しようとする人が他人に心を  
ひかれている……それを発見する事だけで悲惨は充分だ。葉子は

ほんとうは、倉地は葉子以外の人に心をひかれているとは思ってはいないのだ。ただ少し葉子から離れて来たらしいと疑い始めただけだ。それだけでも葉子はすでに熱鉄をのまされたような焦躁と嫉妬しつととを感じるのだから、木村の立場はさぞ苦しいだろう。：

：そう推察すると葉子は自分のあまりといえばあまりに残虐な心に胸の中がちくちくと刺されるようになった。「金が手を焼くように思いはしませんか」との古藤のいった言葉が妙に耳に残った。

そう思い思い布の一方を手早く縫い終わって、縫い目を器用にしごきながら目をあげると、そこには貞世がさつきのまま机に両肘ひじをついて、たかつて来る蚊も追わずにぼんやりと庭の向こうを見続けていた。切り下げにした厚い黒漆こくしつの髪かみの毛の下にのぞき

出した耳たぶは霜焼けでもしたように赤くなつて、それを見ただけでも、貞世は何か興奮して向こうを向きながら泣いているに違ひなく思われた。覚えがないではない。葉子も貞世ほどの齡としの時には何か知らず急に世の中が悲しく見える事があつた。何事もただ明るく快く頼もしくのみ見えるその底からふつと悲しいものが胸をえぐつてわき出る事があつた。取り分けて快活ではあつたが、葉子は幼い時から妙な事に臆おくびよう病びょうがる子だつた。ある時家族じゆうで北国のさびしい田舎いなかのほうに避暑に出かけた事があつたが、ある晩がらんと客の空すいた大きな旅籠屋はたごやに宿とまつた時、枕まくらを並べて寝た人たちの中で葉子は床の間に近いいちばん端はしに寝かさされたが、どうしたかげんでか気味が悪くてたまらなくなり出した。暗い床

の間の軸物の中からか、置き物の陰からか、得えたい体のわからないものが現われ出て来そうなような気がして、そう思い出すとぞくぞくと総身に震えが来て、とても頭を枕につけてはいられなかつた。で、眠りかかった父や母にせがんで、その二人の中ふたりに割りこましてもらおうと思つたけれども、父や母もそんなに大きくなつて何をばかをいうのだといつて少しも葉子のいう事を取り上げてはくれなかつた。葉子はしばらく両親と争っているうちにいつのまにか寝入つたと見えて、翌日目をさまして見ると、やはり自分が気味の悪いと思つた所に寝ていた自分を見いだした。その夕方、同じ旅籠屋はたごやの二階の手摺てすりから少し荒れたような庭を何の気なしにじつと見入っていると、急に昨夜の事を思い出して葉子は悲しくな

り出した。父にも母にも世の中のすべてのものにも自分はどうかして見放されてしまったのだ。親切らしくいつてくれる人はみんな自分に虚事うそをしているのだ。いかげんの所で自分はどんとみんなから突き放されるような悲しい事になるに違いない。どうしてそれを今まで気づかず<sub>に</sub>いたのだろう。そう<sub>な</sub>った暁あかつきに一人<sub>ひとり</sub>でこの庭をこうして見守つたらどんなに悲しいだろう。小さいながらもそんな事を一人で思いふけているともうとめどなく悲しくなつて来て父がなんと<sub>い</sub>つても母がなんと<sub>い</sub>つても、自分の心を自分の涙にひたしきつて泣いた事を覚えて<sub>い</sub>る。

葉子は貞世の後ろ姿を見るにつけてふとその時の自分を思い出した。妙な心の働きから、その時の葉子が貞世になつてそこに幻

のように現われたのではないかとさえ疑った。これは葉子には始終ある癖だった。始めて起こった事が、どうしてもいつかの過去にそのまま起こった事のように思われてならない事がよくあった。

貞世の姿は貞世ではなかった。苔香園たいこうえんは苔香園ではなかった。

美人屋敷は美人屋敷ではなかった。周囲だけが妙にもやもやして心のほうしんだけが澄みきった水のようににはつきりしたその頭の中には、貞世のとも、幼い時の自分のとも区別のつかないはかなさ悲しさがこみ上げるようにわいていた。葉子はしばらくは針の運びも忘れてしまつて、電灯の光を背に負つて夕闇ゆうやみに埋もれて行く木立ちにながめ入った貞世の姿を、恐ろしさを感じずるまでにながら見続けた。

「貞ちゃん」

とうとう黙っているのが無気味ぶきみになつて葉子は沈黙を破りたいばかりにこう呼んでみた。貞世は返事一つしなかつた。……葉子はぞつとした。貞世はああしたままで通り魔にでも魅いられて死んでいるのではないか。それとももう一度名前を呼んだら、線香の上にたまった灰が少しの風でくずれ落ちるように、声の響きでほろほろとかき消すようにあのいたいけな姿はなくなってしまうのではないだろうか。そしてそのあとには夕闇に包まれた苔香園の木立ちと、二階の縁側と、小さな机だけが残るのではないだろうか。……ふだんの葉子ならばなんと**う**ばかだろうと思うような事をおどおどしながらまじめに考えていた。

その時階下で倉地のひどく激昂げきこうした声が聞こえた。葉子ははつとして長い悪夢からでもさめたようにわれに帰った。そこにいるのは姿は元のままだが、やはりまごうかたなき貞世だった。葉子はあわてていつのまにか膝ひざからずり落としてあつた白布を取り上げて、階下のほうにきつと聞き耳を立てた。事態はだいぶ大事らしかつた。

「貞さあちゃん。……貞ちゃん……」

葉子は素晴らしいながら立ち上がって行って、貞世を後ろから羽はがいに抱きしめてやろうとした。しかしその瞬間に自分の胸の中に自然に出来上がらしていた結願けちがんを思い出して、心を鬼にしなから、

「貞ちゃんといったらお返事をなさいな。なんの事です拗ねたまねをして。台所に行つてあとのすすぎ返しでもしておいで、勉強もしないでぼんやりしていると毒ですよ」

「だつておねえ様わたし苦しいんですもの」

「うそをお言い。このごろはあなたほんとうにいけなくなつた事。わがままばかりしているとねえさんはききませんよ」

貞世はさびしそうな恨めしそうな顔をまっ赤かにして葉子のほうを振り向いた。それを見ただけで葉子はすっかり打ちくだかれていた。水みぞ落おちのあたりをすつと氷の棒でも通るような心持ちがすると、喉のどの所はもう泣きかけていた。なんという心に自分はなつてしまつたのだらう……葉子はその上その場にはいたたまれない

で、急いで階下のほうへ降りて行つた。

倉地の声にまじつて古藤の声も激して聞こえた。

## 四一

階子段はしごだんの上がり口には愛子が姉を呼びに行こうか行くまいかと思案するらしく立っていた。そこを通り抜けて自分の部屋へやに来て見ると、胸毛むなげをあらわに襟えりをひろげて、セルの両袖そでを高々とまくり上げた倉地が、あぐらをかいたまま、電灯の灯ひの下に熟柿じゆくしのように赤くなつてこつちを向いて威丈高いたけだかになつていた。古藤こととうは軍服の膝ひざをきちんと折つてまつすぐに固くすわつて、葉子には

後ろを向けていた。それを見るともう葉子の神経はびりびりと逆<sup>さ</sup>立つて自分ながらどうしようもないほど荒れすさんで来ていた。

「何もかもいやだ、どうしても勝手になるがいい。」するとすぐ頭が重くかぶさって来て、腹部の鈍痛が鉛の大きな球<sup>たま</sup>のように腰をしいたげた。それは二重に葉子をいらいらさせた。

「あなた方は<sup>がた</sup>いったい何をそんなにいい合っついていらつしやるの」

もうそこには葉子はタクトを用いる余裕さえ持っていなかった。始終腹の底に冷静さを失わないで、あらん限りの表情を勝手に操縦してどんな難関でも、葉子に特有なしかたで切り開いて行くそんな余裕はその場にはとても出て来なかった。

「何をといつてこの古藤という青年はあまり礼儀をわきまえんか

らよ。木村さんの親友親友とふたこと二言目には鼻にかけたような事を  
 いわるるが、わしもわしで木村さんから頼まれとるんだから、一ひ  
とり人よがりの事はいうてもらわんでもがいのだ。それをつべこべ  
 ろくろくあなたの世話も見ずにおきながら、いい立てなさるので、  
 筋が違つていようといつて聞かせて上げたところだ。古藤さん、  
 あなた失礼だがいったいいくつです」

葉子にいつて聞かせるでもなくそういつて、倉地はまた古藤の  
 ほうに向き直つた。古藤はこの侮辱に対して口答えの言葉も出な  
 いようにげきこう激昂して黙っていた。

「答えるが恥ずかしければしいても聞くまい。が、いずれはたち二十は  
 過ぎていられるのだろう。二十過ぎた男があなたのように礼儀を

わきまえずに他人ひとの生活の内輪にまで立ち入って物をいうはばかの証拠ですよ。男が物をいうなら考えてからいうがいい」

そういつて倉地は言葉の激げき昂こうしている割合に、また見かけのいかにも威丈いたけ高たかな割合に、充分の余裕を見せて、空うそぶくように打ち水をした庭のほうを見ながら団扇うちわをつかった。

古藤はしばらく黙っていてから後ろを振り仰いで葉子を見やりつつ、

「葉子さん……まあ、す、すわってください」

と少しどもるようにしいて穏やかにいった。葉子はその時始めて、われにもなくそれまでそこに突つ立ったままぼんやりしていたのを知って、自分にかつてないようなとんきよな事をしていた

のに気が付いた。そして自分ながらこのごろはほんとうに変だと思ひながら二人の間に、<sup>ふたり</sup>できるだけ気を落ち着けて座についた。古藤の顔を見るとやや青ざめて、こめかみの所に太い筋を立てていた。葉子はその時分になつて始めて少しずつ自分を回復していた。

「古藤さん、倉地さんは少しお酒を召し上がった所だからこんな時むずかしいお話をなさるのはよくありませんでしたわ。なんですか知りませんが、今夜はもうそのお話はきれいにやめましょう。いかが？……またゆっくりね……あ、愛さん、あなたお二階に行つて縫いかけを大急ぎで仕上げ置いてちようだい、ねえさんがあらかたしてしまつてあるけれども……」

そういつて先刻から逐一ふたり二人の争論をきいていたらしい愛子を階上に追い上げた。しばらくして古藤はようやく落ち着いて自分の言葉を見いだしたように、

「倉地さんに物をいったのは僕ぼくが間違っていたかもしれません。じゃ倉地さんを前に置いてあなたにいわしてください。お世辞でもなんでもなく、僕は始めからあなたには倉地さんなんかにはない誠実な所が、どこかに隠れているように思っていたんです。僕という事をその誠実な所で判断してください」

「まあきようはもういいじゃありませんか、ね。わたし、あなたのおっしやろうとする事はよつくわかっていますわ。わたし決して仇あだやおろそかには思っていないませんほんとうに。わたしだって考

えてはいますわ。そのうちとつくりわたしのほうから伺っていた  
だきたいと思つていたくらいですからそれまで……」

「きよう聞いてください。軍隊生活をしていると三人でこうして  
お話しする機会はそうありそうにはありません。もう帰營の時間  
が逼せまつていますから、長くお話しはできないけれども……それだか  
ら我慢して聞いてください」

それならなんでも勝手にいってみるがいい、仕儀によつては黙  
つてはいないからという腹を、かすかに皮肉に開いた口びるに見  
せて葉子は古藤に耳をかす態度を見せた。倉地は知らんふりをし  
て庭のほうを見続けていた。古藤は倉地を全く度外視したように  
葉子のほうに向き直つて、葉子の目に自分の目を定めた。卒直な

明らさまなその目にはその場合にすら子供じみた羞恥しゆうちの色をたたえていた。例のごとく古藤は胸の金きんぼたんをはめたりはずしたりしながら、

「僕は今まで自分の因循からあなたに対しても木村に対してもほんとうに友情らしい友情を現わさなかつたのを恥ずかしく思います。僕はとうにもつとどうかしなればいけなかつたんですけれども……木村、木村って木村の事ばかりいうようですよけれども、木村の事をいうのはあなたの事をいうのも同じだと僕は思うんですが、あなたは今でも木村と結婚する気が確かにあるんですか。いんですか、倉地さんの前でそれをはつきり僕に聞かせてください。何事もそこから出発して行かなければこの話はひつきよう畢ひ 寛まわ

りばかり回る事になりますから。僕はあなたが木村と結婚する気はないといわれても決してそれをどうというんじやありません。

木村は気の毒です。あの男は表面はあんなに楽天的に見えていて、意志が強<sup>つよ</sup>そうだけれども、ずいぶん涙<sup>なみだ</sup>つぽいほうだから、その失望は思いやられます。けれどもそれだつてしかたがない。第一始めから無理だつたから……あなたのお話のようなら……。しかし事情が事情だつたとはいえ、あなたはなぜいやならいやと……そんな過去をいったところが始まらないからやめましょう。……葉子さん、あなたはほんとうに自分を考えてみて、どこか間違つていると思つた事はありませんか。誤解しては困りますよ、僕はあなたの間違つているというつもりじやないんですから。他人の事

を他人が判断する事なんかはできない事だけれども、僕はあなたがどこか不自然に見えていけないんです。よく世の中では人生の事はそう単純に行くもんじゃないといいますが、そうしてあなたの生活なんぞを見ていると、それはごく外面的に見ているからそう見えるのかもしれないけれども、実際ずいぶん複雑らしく思われますが、そうあるべき事なんでしょうか。もつともつとclear

にsun-clearに自分の力だけの事、徳だけの事をして暮らせそうなものだと僕自身は思<sup>ほく</sup>うんですがね……僕にもそうでなくなる時代が来るかもしれないけれども、今の僕としてはそうより考えられないんです。一時は混雑も来<sup>き</sup>、不和も来、けんかも来<sup>く</sup>るかは知れないが、結局はそうするよりしかたがないと思いますよ。あな

たの事についても僕は前からそういうふうにはつきり片づけして  
まいたいと思つていたんですけれど、姑息こそくな心からそれまでに行  
かずともいい結果が生まれて来はしないかと思つたりしてきよう  
までどつちつかずで過こして来たんです。しかしもうこの以上僕  
には我慢ができなくなりました。

倉地さんとあなたと結婚なさるならなさるで木村もあきらめ  
よりほかに道はありません。木村に取つては苦しい事だろうが、  
僕から考えるとどつちつかずで煩悶はんもんしているのよりどれだけ  
いかわかりません。だから倉地さんに意向を伺おうとすれば、倉  
地さんは頭から僕をばかにして話を真身しんみに受けてはくださらない  
んです」

「ばかにされるほうが悪いのよ」

倉地は庭のほうから顔を返して、「どこまでばかに出来上がった男だろう」というように苦笑にがわらいをしながら古藤を見やって、また知らぬ顔に庭のほうを向いてしまった。

「そりやそうだ。ばかにされる僕はばかだろう。しかしあなたには……あなたには僕らが持つてる良心というものがないんだ。それだけはばかでも僕にはわかる。あなたがばかといわれるのと、僕が自分をばかと思っているそれとは、意味が違いますよ」

「そのとおり、あなたはばかだと思いつつながら、どこか心のすみで『何ばかなものか』と思ひよるし、わたしはあなたを嘘うそほん本なしにばかというだけの相違があるよ」

「あなたは気の毒な人です」

古藤の目には怒りというよりも、ある激しい感情の涙が薄く宿つていた。古藤の心の中のいちばん奥深い所が汚けがされないうままで、ふと目からのぞき出したかと思われるほど、その涙をためた目は一種の力と清さとを持っていた。さすがの倉地もその一ひとこと言には言葉を返す事なく、不思議そうに古藤の顔を見た。葉子も思わず一種改まった気分になった。そこにはこれまで見慣れていた古藤はいなくなつて、その代わりにごまかしのきかない強い力を持つた一人の純潔な青年がひよひとりつこり現われ出たように見えた。何をいうか、またいつものようなありきたりの道徳論を振り回すと思いながら、一種の軽侮をもつて黙つて聞いていた葉子は、この一

言で、いわば古藤を壁ぎわに思い存分押し付けていた倉地が手もなくはじき返されたのを見た。言葉の上や仕打ちの上やでいかに高圧的に出てみても、どうする事もできないような真実さが古藤からあふれ出ていた。それに歯向かうには真実で歯向かうほかはない。倉地はそれを持ち合わせているかどうか葉子には想像がつかなかった。その場合倉地はしばらく古藤の顔を不思議そうに見やっした後、平気な顔をして膳ぜんから杯を取り上げて、飲み残して冷えた酒をてれかくしのようにあおりつけた。葉子はこの時古藤とこんな調子で向かい合っているのが恐ろしくつてならなくなつた。古藤の目の前でひよつとすると今まで築いて来た生活がくずれてしまいきぐそんな危惧をさえ感じた。で、そのまま黙つて倉地のまね

をするようだが、平氣を装いつつ煙管きせるを取り上げた。その場の仕打ちとしては拙つたないやりかたであるのを齒がゆくは思いながら。

古藤はしばらく言葉を途切らしていたが、また改まって葉子のほうに話しかけた。

「そう改まらないでください。その代わり思っただけの事をいいかげんにしておかずに話し合わせてみてください。いいですか。

あなたと倉地さんのこれまでの生活は、僕ぼくみたいな無経験なものにも、疑問として片づけておく事のできないような事実感を感じさせるんです。それに対するあなたの弁解は詭弁きべんとより僕には響かなくなりまして。僕の鈍い直覚ですらがそう考えるのです。だからこの際あなたと倉地さんの関係を明らかにして、あなたか

ら木村に偽りのない告白をしていただきたいんです。木村が一人ひとりで生活に苦しみながらたとえようのない疑惑の中にもがいているのを少しでも想像してみたら……今のあなたにはそれを要求するのは無理かもしれないけれども……。第一こんな不安定な状態からあなたは愛子さんや貞世さんを救う義務があると思いますよ僕は。あなただけに限られずに、四方八方の人の心に響くというのは恐ろしい事だとはほんとうにあなたには思えませんかねえ。僕にはそばで見ているだけでも恐ろしいがなあ。人にはいつか総勘定をしなければならぬ時が来るんだ。いくら借りになつていてもびくともしないという自信もなくつて、ずるずるべつたりに無反省に借りばかり作っているのは考えてみると不安じゃないでし

ようか。葉子さん、あなたには美しい誠実があるんだ。僕はそれを知っています。木村にだけはどうしたわけか別だけれども、あなたはびた一文<sup>もん</sup>でも借りをしていると思うと寝心地<sup>ねごこち</sup>が悪いというような気象を持っていているじゃありませんか。それに心の借金ならいくら借金をしていても平気でいられるわけではないと思いますよ。なぜあなたは好んでそれを踏みにじろうとばかりしているんです。そんな情けない事ばかりしてはだめじゃありませんか。……僕ははつきり思うとおりをいい現わし得ないけれども……いおうとしてゐる事はわかつてくださるでしょう」

古藤は思い入ったふうで、油でよごれた手を幾度もまつ黒に日に焼けた目がしらの所に持つて行った。蚊がぶんぶんと攻めかけ

て来るのも忘れたようだった。葉子は古藤の言葉をもうそれ以上は聞いていられなかった。せつかくそつとして置いた心のよどみがかきまわされて、見まいとしていたきたないものがぬらぬらと目の前に浮き出て来るようでもあった。塗りつぶし塗りつぶししていた心の壁にひびが入って、そこから面も向けられない白い光がちらとさすようにも思った。もうしかしそれはすべてあまりおそい。葉子はそんな物を無視してかかるほかに道がないと思った。ごまかしてはいけないと古藤のいった言葉はその瞬間にもすぐ葉子にきびしく答えなければ、葉子は押し切ってそんな言葉をかなぐり捨てないではいられないと自分からあきらめた。

「よくわかりました。あなたのおっしゃる事はいつでもわたしに

はよくわかりますわ。そのうちわたしきつと木村のほうに手紙を出すから安心してくださいまし。このごろはあなたのほうが木村以上に神経質になっていらつしやるようだけれども、御親切はよくわたしにもわかりますわ。倉地さんだつてあなたのお心持ちは通じているに違いないんですけれども、あなたが……なんといつたらいいでしょうねえ……あなたがあまり真正面からおつしやるもんだから、つい向むかつ腹はらをお立てなすつたんでしよう。そうでしょう、ね、倉地さん。……こないやなお話はこれだけにしておきましょう」

「僕がもつと偉えらいと、いう事がもつと深く皆さんの心にはいるんですが、僕のいう事はほんとうの事だと思っただけでもしかた

がありません。それじゃきつと木村に書いてやってください。僕自身は何も物数ものずき寄らしくその内容を知りたいとは思ってるわけじゃないんですから……」

古藤がまだ何かいおうとしている時に愛子が整頓風呂敷せいとんぶろしきの出来上がったのを持って、二階から降りて来た。古藤は愛子からそれを受け取ると思ひ出したようにあわてて時計を見た。葉子はそれには頓着とんじやくしないように、

「愛さんあれを古藤さんにお目にかけてよう。古藤さんちよつと待っていていらしてね。今おもしろいものをお目にかけるから。貞ちさあやんは二階？ いないの？ どこに行ったんだらう……貞ちゃん

！」

こういつて葉子が呼ぶと台所のほうから貞世が打ち沈んだ顔を  
 して泣いたあとのように頬ほおを赤くしてはいつて来た。やはり自分  
 のいった言葉に従って一人ひとりぼっちで台所に行つてすすぎ物をして  
 いたのかと思うと、葉子はもう胸むねが逼せまつて目の中が熱くなるのだ  
 った。

「さあ二人ふたりでこの間学校で習つて来たダンスをして古藤さんと倉  
 地さんにお目におかけ。ちよつとコティロンのようでもた変わ  
 っていますの。さ」

二人は十畳の座敷のほうに立つて行つた。倉地はこれをきつか  
 けにからつと快活になつて、今までの事は忘れたように、古藤に  
 も微笑を与えながら「それはおもしろかろう」といいつつあとに

続いた。愛子の姿を見ると古藤も釣<sup>つ</sup>り込まれるふうに見えた。葉子は決してそれを見のがさなかつた。

可憐<sup>かれん</sup>な姿をした姉と妹とは十畳の電燈の下に向かい合つて立つた。愛子はいつでもそうなようにこんな場合でもいかにも冷静だつた。普通ならばその年ごろの少女としては、やり所もない羞<sup>しゆう</sup>恥<sup>ち</sup>を感ずるはずであるのに、愛子は少し目を伏せているほかに、はしらじらとしていた。きやつきやつとうれしがつたり恥<sup>ち</sup>ずかしがつたりする貞世はその夜はどうしたものかただ物憂<sup>ものう</sup>げにそこにしよんぼりと立つた。その夜の二人は妙に無感情な一<sup>いっ</sup>対<sup>たい</sup>の美しい踊り手だつた。葉子が「一二三」と相図をすると、二人は両手を腰骨の所に置き添えて静かに回旋しながら舞い始めた。兵營の

中ばかりにいて美しいものを全く見なかつたらしい古藤は、しばらくは何事も忘れたように恍惚こうこつとして二人の描く曲線のさまざまに見とれていた。

と突然貞世が両袖そでを顔にあてたと思うと、急に舞いの輪からそれて、一散に玄関わきの六畳に駆け込んだ。六畳に達しないうちに痛ましくすすり泣く声が聞こえ出した。古藤ははつとあわててそつちに行こうとしたが、愛子が一人になつても、顔色も動かさずに踊り続けているのを見るとそのまま立ち止まった。愛子は自分のし遂おおすべき務めをし遂おおせる事に心を集める様子で舞いつづけた。

「愛さんちよつとお待ち」

といった葉子の声は低いながら帛きぬを裂くように疖癬かんぺきらしい調子になっていた。別室に妹の駆け込んだのを見向きもしない愛子の不人情さを憤る怒りと、命ぜられた事を中途半端はんぱでやめてしまった貞世を憤る怒りとで葉子は自制ができないほどふるえていた。愛子は静かにそこに両手を腰からおろして立ち止まった。

「貞さあちゃんなんですその失礼は。出ておいでなさい」

葉子は激しく隣室に向かつてこう叫んだ。隣室から貞世のすすり泣く声が哀れにもまざまざと聞こえて来るだけだった。抱きしめても抱きしめても飽き足らないほどの愛着をそのまま裏返したような憎しみが、葉子の心を火のようにした。葉子は愛子にきびしくいつけて貞世を六畳から呼び返さした。

やがてその六畳から出て来た愛子は、さすがに不安な面持ちおもてをしていた。苦しくつてたまらないというから額ひたいに手をあてて見たら火のように熱いというのだ。

葉子は思わずぎよつとした。生まれ落ちるとから病氣一つせずに育つて来た貞世は前から発熱していたのを自分で知らずにいたに違いない。氣むずかしくなつてから一週間ぐらいになるから、何かの熱病にかかったとすれば病氣はかなり進んでいたはずだ。ひよつとすると貞世はもう死ぬ……それを葉子は直覺したように思った。目の前で世界が急に暗くなった。電灯の光も見えないほどに頭の中が暗い渦巻きうずまでいっぱいになった。え、いつその事死んでくれ。この血祭りで倉地が自分にはつきりつながれてしま

わなないとだれがいえよう。人身御供ひとみごくうにしてしまおう。そう葉子は恐怖の絶頂にありながら妙にしんとした心持ちで思いめぐらした。そしてそこにぼんやりしたまま突っ立っていた。

いつのまに行つたのか、倉地と古藤とが六畳の間まから首を出した。

「お葉さん……ありや泣いたためばかりの熱じゃない。早く来てごらん」

倉地のあわてるような声が聞こえた。

それを聞くと葉子は始めて事の真相がわかつたように、夢から目ざめたように、急に頭がはつきりして六畳の間まに走り込んだ。

貞世はひとときわ背だけが縮まったように小さく丸まって、座ぶと

んに顔を埋めていた。膝をついてそばによつて後頸の所にさわつてみると、気味の悪いほどの熱が葉子の手に伝わつて来た。

その瞬間に葉子の心はでんぐり返しを打った。いとしい貞世につらく当たつたら、そしてもし貞世がそのために命を落とすような事でもあつたら、倉地を大丈夫つかむ事ができると何がなしに思い込んで、しかもそれを実行した迷信とも妄想ともたとえようのない、狂氣じみた結願がなんの苦もなくばらばらにくずれてしまつて、その跡にはどうかして貞世を活かしたいという素直な涙ぐましい願いばかりがしみじみと働いていた。自分の愛するものが死ぬか活きるかの境目に來たと思つと、生への執着と死への恐怖とが、今まで想像も及ばなかつた強さでひしひしと感ぜ

られた。自分を八つ裂きぎにしても貞世の命は取りとめなくてはならぬ。もし貞世が死ねばそれは自分が殺したんだ。何も知らない、神のような少女を……葉子はあらぬことまで勝手に想像して勝手に苦しむ自分をたしなめるつもりでいても、それ以上に種々な予想が激しく頭の中で働いた。

葉子は貞世の背をさすりながら、嘆願するように哀あい恕じよを乞こうように古藤や倉地や愛子までを見まわした。それらの人々はいずれも心こころ痛いたげな顔色を見せていないではなかった。しかし葉子から見るとそれはみんな贗にせもの物ものだった。

やがて古藤は兵營への帰途医者ひとを頼むといって帰って行った。

葉子は、一人ひとりでも、どんな人でも貞世の身ぢかから離れて行くの

をつらく思った。そんな人たちは多少でも貞世の生命と一緒に持つて行つてしまふように思われてならなかつた。

日はとつぷり暮れてしまったけれどもこの戸締まりもしないこの家に、古藤がいつてよこした医者がやつて来た。そして貞世は明らかに腸チブスにかかっていると診断されてしまった。

## 四二

「おねえ様……行つちやいやあ……」

まるで四つか五つの幼児のように頑<sup>がんぜ</sup>是なくわがままになつてしまつた貞世の声を聞き残しながら葉子は病室を出た。おりからじ

めじめめと降りつづいている五月雨さみだれに、廊下には夜明けからの薄暗さがそのまま残っていた。白衣を着た看護婦が暗いだだびろっ広い廊下を、上草履うわぞうりの大きな音をさせながら案内に立った。十日の余も、夜よる昼ひるの見さかきもなく、帯も解かずに看護の手を尽くした葉子は、どうかするとふらふらとなつて、頭だけが五体から離れてどこともなく漂つて行くかとも思うような不思議な錯覚を感じながら、それでも緊張しきつた心持ちになっていた。すべての音響、すべての色彩が極度に誇張されてその感覚に触れて来た。貞世が腸チブスと診断されたその晩、葉子は担架に乗せられたそのあわれな小さな妹に付き添つてこの大学病院の隔離室に来てしまったのであるが、その時別れたなりで、倉地は一度も病院を尋ね

ては来こなかつたのだ。葉子は愛子ひとり一人が留守する山内さんないの家のほうに、少し不安心ではあるけれどもいつか暇をやったつやを呼び寄せておこうと思つて、宿もとにいつてやると、つやはあれから看護婦を志願して京きょう橋ばしのほうのある病院にいるという事が知れたので、やむを得ず倉地の下宿から年を取った女中を一人頼んでいてもらう事にした。病院に来てからの十日——それはきのうからきょうにかけての事のように短く思われもし、一日が一年に相当するかと疑われるほど長くも感じられた。

その長く感じられるほうの期間には、倉地と愛子との姿が不安と嫉妬しつととの対照となつて葉子の心の目に立ち現われた。葉子の家を預かっているものは倉地の下宿から来た女だとすると、それは

倉地の犬といつてもよかつた。そこに一人残された愛子……長い時間の間にあいだどんな事でも起こり得ずにいるものか。そう氣を回し出すと葉子は貞世の寝台のかたわらにいて、熱のために口びるがかさかさになって、半分目をあけたまま昏睡こんすいしているその小さな顔を見つめている時でも、思わずかつとなつてそこを飛び出そうとするような衝動に駆り立てられるのだった。

しかしまた短く感じられるほうの期間にはただ貞世ばかりがいた。末子として両親からなめるほど溺愛できあいもされ、葉子の唯一の寵児ちようじともされ、健康で、快活で、無邪気で、わがままで、病氣という事などはついぞ知らなかつたその子は、引き続いて父を失い、母を失い、葉子の病的な呪詛じゆその犠牲となり、突然死病に取り

つかれて、夢にもうつつにも思いもかけなかつた死と向かい合つて、ひたすらに恐れおののいている、その姿は、千丈の谷底に続くがけのきわに両手だけでぶら下がった人が、その土がぼろぼろとくずれ落ちるたびごとに、懸命になつて助けを求めて泣き叫びながら、少しでも手がかりのある物にしがみつこうとするのを見るのと異ならなかつた。しかもそんなはめに貞世をおとしいれてしまつたのは結局自分に責任の大部分があると思うと、葉子はいとしさ悲しさで胸も腸も裂けるようになった。貞世が死ぬにしても、せめては自分だけは貞世を愛し抜いて死なせたかつた。貞世をかりにもいじめるとは……まるで天使のような心で自分を信じきり愛し抜いてくれた貞世をかりにも没もぎどう義道に取り扱つたとは……

：葉子は自分ながら葉子の心の埒らちなさ恐ろしさに悔いても悔いても及ばない悔いを感じた。そこまで詮せんじつめて来ると、葉子には倉地もなかった。ただ命にかけても貞世を病気から救つて、貞世が元通りにつやつやつやしい健康に帰った時、貞世を大事に大事に自分の胸にかき抱いだいてやって、

「貞さあちゃんお前はよくこそなおってくれたね。ねえさんを恨まないでおくれ。ねえさんはもう今までの事をみんな後悔して、これからはあなたをいつまでもいつまでも後ご生しょう大事にしてあげますからね」

としみじみと泣きながらいつてやりたかった。ただそれだけの願いに固まってしまった。そうした心持ちになると、時間

はただ矢のように飛んで過ぎた。死のほうへ貞世を連れて行く時間にはただ矢のように飛んで過ぎると思えた。

この奇怪な心の葛藤かつとうに加えて、葉子の健康はこの十日ほどの激しい興奮と活動とでみじめにもそこない傷つけられているらしかった。緊張の極点にいるような今の葉子にはさほどと思われないうようにもあつたが、貞世が死ぬかなおるかして一息つく時が来たら、どうして肉体をささえる事ができようかと危ぶまないではいられない予感がきびしく葉子を襲う瞬間は幾度もあつた。

そうした苦しみの最中に珍しく倉地が尋ねて来たのだった。ちようど何もかも忘れて貞世の事ばかり気にしていた葉子は、この案内を聞くと、まるで生まれかわつたようにその心は倉地でいつ

ぱいになってしまった。

病室の中から叫びに叫ぶ貞世の声が廊下まで響いて聞こえたけれども、葉子はそれには頓とんじやく着やくしていられないほどむきになつて看護婦のあとを追つた。歩きながら衣紋えもんを整えて、例の左手をあげて鬢びんの毛を器用にかき上げながら、応接室の所まで来ると、そこはさすがにいくぶんか明るくなつていて、開き戸のそばのガラス窓の向こうに頑がんじよう丈ちやうな倉地と、思いもかけず岡の華車きやしゃな姿とがながめられた。

葉子は看護婦のいるのも岡のいるのも忘れたようにいきなり倉地に近づいて、その胸に自分の顔を埋うづめてしまった。何よりもかによりも長い長い間あい得うずずにいた倉地の胸は、数限りもない連

想に飾られて、すべての疑惑や不快を一掃するに足るほどなつかしかった。倉地の胸から触れ慣れた衣きぬざわりと、強烈な膚のおいとが、葉子の病的に嵩こそうじた感覚を乱酔さすほどに伝わって来た。

「どうだ、ちつとはいいか」

「おゝこの声だ、この声だ」……葉子はかく思いながら悲しくなつた。それは長い間闇やみの中に閉じこめられていたものが偶然灯ひの光を見た時に胸を突いてわき出て来るような悲しさだった。葉子は自分の立場をことさらあわれに描いてみたい衝動を感じた。

「だめです。貞世は、かわいそうに死にます」

「ばかな……あなたにも似合わん、そう早はやう落胆する法があるものかい。どれ一つ見舞ってやろう」

そういいながら倉地は先刻からそこにいた看護婦のほうに振り向いた様子だった。そこに看護婦も岡もいるという事はちやんと知っていたながら、葉子はだれもないもののような心持ちで振る舞っていたのを思うと、自分ながらこのごろは心が狂っているのではないかとさえ疑った。看護婦は倉地と葉子との対話ぶり、この美しい婦人の素性をのみ込んだというような顔をしていた。岡はさすがにつつましやかに心痛の色を顔に現わして椅子の背に手をかけたまま立っていた。

「あゝ、岡さんあなたもわざわざお見舞いくださってありがとうございます  
ございました」

葉子は少し挨拶あいさつの機会をおくらしだと思いいながらもやさしく

こういった。岡は頬ほおを紅あからめたまま黙つてうなずいた。

「ちようど今見えたもんだで御一緒したが、岡さんはここでお歸りを願つたがいいと思うが……（そういつて倉地は岡のほうを見た）何しろ病気が病気ですから……」

「わたし、貞世さんにぜひお会いしたいと思ひますからどうかお許してください」

岡は思い入つたようにこういつて、ちようどそこに看護婦が持つて来た二枚の白い上うわつ張ばりのうち少し古く見える一枚を取つて倉地よりも先に着始めた。葉子は岡を見るともう一つのたくらみを心の中で案じ出していた。岡をできるだけたびたび山さん内ないの家のほうに遊びに行かせてやろう。それは倉地と愛子とが接触する

機会をいくらかでも妨げる結果になるに違いない。岡と愛子とが互いに愛し合うようになったら……なつたとしてもそれは悪い結果という事はできない。岡は病身ではあるけれども地位もあれば金もある。それは愛子のみならず、自分の将来に取つても役に立つに相違ない。……とそう思うすぐその下から、どうしても虫の好かない愛子が、葉子の意志の下にすつかりつなぎつけられていような岡をぬすんで行くのを見なければならぬのが面憎くも妬ましくもあつた。

葉子は二人の男を案内しながら先に立つた。暗い長い廊下の両側に立ちならんだ病室の中からは、呼吸困難の中からかすれたよな声でディフテリヤらしい幼児の泣き叫ぶのが聞こえたりした。

貞世の病室からは一人の看護婦が半ば身を乗り出して、部屋の中に向いて何かいいながら、しきりとこつちをながめていた。貞世の何かいい募る言葉さえが葉子の耳に届いて来た。その瞬間にも葉子はそこに倉地のいる事なども忘れて、急ぎ足でそのほうに走り近づいた。

「そろもう帰っていらつしやいましたよ」

といいながら顔を引つ込めた看護婦に続いて、飛び込むように病室にはいつて見ると、貞世は乱暴にも寝台の上に起き上がって、膝ひざ小僧もあらわになるほど取り乱した姿で、手を顔にあてたままおいおいと泣いていた。葉子は驚いて寝台に近寄った。

「なんといいあなたは聞きわけのない……貞さあちゃんその病気で、

あなた、寢台から起き上がったたりするといつまでもなおりはしませんよ。あなたの好きな倉地のおじさんと岡さんがお見舞いに来てくださったのですよ。はつきりわかりますか、そら、そこを御覧、横になつてから」

そう言い言い葉子はいかにも愛情に満ちた器用な手つきで軽く貞世をかかえて床の上に臥ねかした。貞世の顔は今まで盛んな運動でもしていたように美しく活いきいき々あかみと紅味がさして、ふさふさした髪の毛は少しもつれて汗ばんで額ぎわに粘りついていた。それは病気を思わせるよりも過剰の健康とでもいうべきものを思わせた。ただその両眼と口びるだけは明らかに尋常でなかつた。すっかり充血したその目はふだんよりも大きくなって、二重ふたえまぶた

になつていた。そのひとみは熱のために燃えて、おどおどと何者かを見つめてゐるようにも、何かを見いだそうとして尋ねあぐんでゐるようにも見えた。その様子はたとえば葉子を見入つてゐる時でも、葉子を貫いて葉子の後ろの方かたはるかの所にあるあ或る者を見きわめようとあらん限りの力を尽くしてゐるようだった。口びるは上下ともからからになつてうちむらさき内紫というかんるい柑類の実をむいて天日てんびに干したようにかわいてゐた。それは見るもいたいたしかった。その口びるの中から高熱のために一種の臭氣が呼吸のたびごとに吐き出される、その臭氣が口びるの著しいゆがめかたのため、目に見えるようだった。貞世は葉子に注意されて物もの憎げに少し目をそらして倉地と岡とのゐるほうを見たが、それがどうし

たんだというように、少しの興味も見せずにもまた葉子を見入りながらせつせと肩をゆすつて苦しげな呼吸をつづけた。

「おねえさま……水……氷……もういつちやいや……」

これだけかすかにいうともう苦しそうに目をつぶってほろほろと大粒の涙をこぼすのだった。

倉地は陰鬱いんうつな雨脚あまあしで灰色になったガラス窓を背景にして突

つ立ちながら、黙ったまま不安らしく首をかしげた。岡は日ごろのめつたに泣かない性質に似ず、倉地の後ろにそつと引きそつて涙ぐんでいた。葉子には後ろを振り向いて見ないでもそれが目に見るようにはつきりわかった。貞世の事は自分一人ひとりで背負って立つ。よけいなあわれみはかけてもらいたくない。そんないら

しい反抗的な心持ちさえその場合起こらずにはいかなかった。過ぐる十日というもの一度も見舞う事をせずについて、今さらその由々しげな顔つきはなんだ。そう倉地にでも岡にでもいつてやりたいほど葉子の心はとげとげしくなっていた。で、葉子は後ろを振り向きもせず、箸はしの先につけた脱脂綿だっしめんを氷水の中に浸しては、貞世の口をぬぐっていた。

こうやってもののやや二十分が過ぎた。飾りけも何もない板張りの病室にはだんだん夕暮れの色が催して来た。五月雨はじめじめと小休おやみなく戸外では降りつづいていた。「おねえ様なおしてちようだいよう」とか「苦しい……苦しいからお薬をください」とか「もう熱を計るのはいや」とか時々囁うわごと言のように言つては、

葉子の手にかじりつく貞世の姿はいつ息氣いきを引き取るかもしれな  
いと葉子に思わせた。

「ではもう帰りましようか」

倉地が岡を促すようにこういった。岡は倉地に対し葉子に対し  
て少しの間返事あいだをあえてするのはばかっている様子だったが、  
とうとう思いきつて、倉地に向かって言っていながら少し葉子に  
対して嘆願するような調子で、

「わたし、きょうはなんにも用がありませんから、こちらに残ら  
していただいて、葉子さんのお手伝いをしたいと思えますから、  
お先にお帰りください」

といった。岡はひどく意志が弱そうに見えながら一度思い入っ

ていい出した事は、とうとう仕畢しおおせずにはおかない事を、葉子も倉地も今までの経験から知っていた。葉子は結局それを許すほかはないと思つた。

「じやわしはお先するがお葉さんちよつと……」

といつて倉地は入り口のほうにしぎつて行つた。おりから貞世はすやすやと昏睡こんすいに陥つていたので、葉子はそつと自分の袖そでを捕えている貞世の手をほどいて、倉地のあとから病室を出た。病室を出るとすぐ葉子はもう貞世を看護している葉子ではなかつた。葉子はすぐに倉地に引き添つて肩をならべながら廊下を応接室のほうに伝つて行つた。

「お前はすいぶんと疲れとるよ。用心せんといかんぜ」

「大丈夫……こっちは大丈夫です。それにしてもあなたは……お忙しかつたんでしようね」

たとえば自分の言葉は稜かどぼり針で、それを倉地の心臓に揉もみ込むというような鋭い語気になってそういった。

「全く忙しかった。あれからわしはお前の家には一度もよう行かずにいるんだ」

そういつた倉地の返事にはいかにもわだかまりがなかった。葉子の鋭い言葉にも少しも引けめを感じているふうは見えなかった。葉子でさえが危うくそれを信じようとするほどだった。しかしその瞬間に葉子は燕つばめ返がえしに自分に帰った。何をいいかげんな……それは白しら々じらしさが少し過ぎている。この十日の間に、倉地に

とつてはこの上もない機会の与えられた十日の間に、杉森すぎもりの中  
 のさびしい家にその足跡しるの印されなかつたわけがあるものか。：  
 ；さらぬだに、病み果て疲れ果てた頭脳に、極度の緊張を加えた  
 葉子は、ぐらぐらとよろけた足もとが廊下の板に着いていないよ  
 うな憤怒ふんぬに襲うわれた。

応接室まで来て上うわつ張ばりを脱ぐと、看護婦が噴霧器ふんむきを持って来  
 て倉地の身のまわりに消毒薬を振りかけた。そのかすかなにおい  
 がようやく葉子をはつきりした意識に返らした。葉子の健康が一  
 日一日といわず、一時間ごとにもどんどん弱って行くのが身にし  
 みて知れるにつけて、倉地のどこにも批点のないような頑がん丈じょう  
 な五体にも心にも、葉子はやりどころのないひがみと憎しみを感

じた。倉地にとっては葉子はだんだんと用のないものになって行きつつある。絶えず何か目新しい冒険を求めているような倉地にとつては、葉子はもう散りぎわの花に過ぎない。

看護婦がその室へやを出ると、倉地は窓の所に寄つて行つて、衣囊かぶしの中から大きな鰐わにがわ皮のポケットブックを取り出して、拾円札のかなりの束を引き出した。葉子はそのポケットブックにもいろいろの記憶を持っていた。竹柴館たけしばかんで一夜を過ごしたその朝にも、その後のたびたびのあいびきのあとの支払いにも、葉子は倉地からそのポケットブックを受け取つて、ぜいたくな支払いを心持ちよくしたのだった。そしてそんな記憶はもう二度とは繰り返せそうもなく、なんとなく葉子には思えた。そんな事をさせてなるも

のかと思ひながらも、葉子の心は妙に弱くなつていた。

「また足らなくなつたらいつでもいいから……おれの方の仕事はどうもおもしろくなくなつて来きおつた。正井のやつ何か容易ならぬ悪戯わるさをしおつた様子もあるし、油断がならん。たびたびおれがここに来るのも考え物だて」

紙幣を渡しながらかういつて倉地は応接室を出た。かなりぬれてゐるらしい靴くつをはいて、雨水で重そうになつた洋傘こうもりをばさばさいわせながら開いて、倉地は軽い挨拶あいさつを残したまま夕闇ゆうやみの中に消えて行こうとした。間を置いて道わきにともされた電灯の灯ひが、ぬれた青葉をすべり落ちてぬかるみの中に燐りんのような光を漂わしていた。その中をだんだん南門のほうに遠ざかつて行く倉

地を見送っていると葉子はとてもそのままそこに居残つてはいられなくなつた。

だれの履はき物ものとも知らずそこにあつた吾妻下駄あづまげたをつつかけて葉子は雨の中を玄関から走り出て倉地のあとを追つた。そこにある広場には櫟けやきや桜の木がまばらに立っていて、大規模な増築のための材料が、煉瓦れんがや石や、ところどころに積み上げてあつた。東京の中央にこんな所があるかと思われるほど物さびしく静かで、街灯の光の届く所だけに白く光つて斜めに雨のそそぐのがほのかに見えるばかりだつた。寒いとも暑いともさらに感じなく過あぎして来た葉子は、雨が襟えり脚あしに落ちたので初めて寒いと思つた。関東に時々襲つて来る時ならぬ冷え日ひでその日もあつたらしい。葉子

は軽く身ぶるいしながら、いちずに倉地のあとを追った。やや十四五間も先にいた倉地は足音を聞きつけたと見えて立ちどまつて振り返った。葉子が追いついた時には、肩はいいかげんぬれて、雨のしずくが前髪を伝つて額に流れかかるまでになつていた。葉子はかすかな光にすかして、倉地が迷惑そうな顔つきで立つてゐるのを知った。葉子はわれにもなく倉地が傘を持つために水平に曲げたその腕にすがり付いた。

「さっきのお金はお返しします。義理ずくで他人からしていただくんでは胸がつかえますから……」

倉地の腕の所で葉子のすがり付いた手はぶるぶると震えた。傘からはしたたりがことさら繁く落ちて、単衣をぬけて葉子の肌には

にじみ通った。葉子は、熱病患者が冷たいものに触れた時のような不快な悪寒おかんを感じた。

「お前の神経は全く少しどうかしとるぜ。おれの事を少しは思つてみてくれてもよからうが……疑うにもひがむにもほどがあつていいはずだ。おれはこれまでにどんな不貞腐れふてくさをした。いえるならいつてみる」

さすがに倉地も気にさえているらしく見えた。

「いえないように上じょうず手に不貞腐れふてくさをなさるのじゃ、いおうつたつていえやしませんわね。なぜあなたはつきり葉子にはあきた、もう用がないとおいいになれないの。男らしくもない。さ、取つてくださいましこれを」

葉子は紙幣の束をわなわなする手先で倉地の胸の所に押しつけた。

「そしてちゃんと奥さんをお呼び戻しなさいまし。それで何もかも元通りになるんだから。はばかりながら……」

「愛子は」と口もとまでいいかけて、葉子は恐ろしさに息気を引いてしまった。倉地の細君さいくんの事までいったのはその夜が始めた。これほど露骨ろこつな嫉妬しつとの言葉は、男の心を葉子から遠ざからすばかりだと知り抜いて慎んでいたくせに、葉子はわれにもなく、がみがみと妹の事までいつてのけようとする自分にあきれてしまった。

葉子がそこまで走り出て来たのは、別れる前にもう一度倉地の

強い腕でその暖かく広い胸に抱かれました。倉地に悪たれ口をきいた瞬間でも葉子の願いはそこにあつた。それにもかかわらず口の上では全く反対に、倉地を自分からどんどん離れさすような事をいつてのけているのだ。

葉子の言葉が募るにつれて、倉地は人目をはばかりにあらうようにあたりを見回した。互い互いに殺し合いたいほどの執着を感じながら、それを言い現わす事も信ずる事もできず、要もない猜疑さいぎと不満とにさえぎられて、見る見る路傍の人のように遠ざかつて行かねばならぬ、——そのおそろしい運命を葉子はことさら痛切に感じた。倉地があたりを見回した——それだけの挙動が、機を見計らつていきなりそこを逃げ出そうとするもののようにも思いなされた。

葉子は倉地に対する憎悪ぞうおの心を切せつないまでに募らしながら、ますます相手の腕に堅く寄り添った。

しばらくの沈黙の後、倉地はいきなり洋傘こうもりをそこになぐり捨てて、葉子の頭を右腕で巻きすくめようとした。葉子は本能的に激しくそれにさからった。そして紙幣の束をぬかるみの中にたたきつけた。そして二人ふたりは野獣のように争った。

「勝手にせい……ばかつ」

やがてそう激しくい捨てると思うと、倉地は腕の力を急にゆるめて、洋傘こうもりを拾い上げるなり、あとをも向かずに南門のほうに向いてずんずんと歩き出した。憤怒と嫉妬しつととに興奮しきった葉子は躍起やつきとなつてそのあとを追おうとしたが、足はしびれたよう

に動かなかつた。ただだんだん遠ざかつて行く後ろ姿に対して、熱い涙がとめどなく流れ落ちるばかりだった。

しめやかな音を立てて雨は降りつづけていた。隔離病室のある限りの窓にはかんかんと灯ひがともつて、白いカーテンが引いてあった。陰惨な病室にそう赤々と灯のともっているのはかえつてあたりを物すさまじくして見せた。

葉子は紙幣の束を拾い上げるほか、術すべのないのを知つて、しおしおとそれを拾い上げた。貞世の入院料はなんといつてもそれで仕払うよりしようがなかつたから。いいようのないくやし涙がさらにならにわき返つた。

## 四三

その夜おそくまで岡はほんとうに忠実まめやかに貞世の病床に付き添って世話をしてくれた。口くちずく少なにしとやかによく気をつけて、貞世の欲する事をあらかじめ知り抜いているような岡の看護ぶりには、通り一ぺんな看護婦の働きぶりとはまるでくらべものにならなかつた。葉子は看護婦を早く寝かしてしまつて、岡と二人だけで夜のふけるまで氷ひょうのう囊ふしを取りかえたり、熱を計つたりした。

高熱のために貞世の意識はだんだん不明瞭ふめいりょうになつて来ていた。退院して家に帰りたいとせがんでしようのない時は、そつと向きをかえて臥ねかしてから、「さあもうお家うちですよ」というと、うれ

しそうに笑顔えがおをもらしたりした。それを見なければならぬ葉子は  
たまらなかつた。どうかした拍子ひょうしに、葉子は飛び上がりそうに  
心が責められた。これで貞世が死んでしまったなら、どうして生  
き永ながらえていられよう。貞世をこんな苦しみにおとしいれたもの  
はみんな自分だ。自分が前どおりに貞世に優しくさえしていたら、  
こんな死病は夢にも貞世を襲つて来はしなかつたのだ。人の心の  
報いは恐ろしい……そう思つて来ると葉子はだれにわびようもな  
い苦悩いぎに息氣いきづまつた。

緑色の風呂敷ふろしきで包んだ電燈の下に、氷ひょう囊のうを幾つも頭と腹部  
とにあてがわれた貞世は、今にも絶え入るか危ぶまれるような  
荒い息氣いきづかいで夢ゆめ現うつの間をさまようらしく、聞きとれない

囁言うわごとを時々口走りながら、眠っていた。岡は部屋へやのすみのほうにつつましく突っ立ったまま、緑色をすかして来る電燈の光でこ  
とさら青白い顔色をして、じつと貞世を見守っていた。葉子は寝  
台に近く椅子いすを寄せて、貞世の顔をのぞき込むようにしながら、  
貞世のために何かし続けていなければ、貞世の病気がますます重  
るといふ迷信のような心づかいから、要もないのに絶えずひょうの氷  
囊うの位置を取りかえてやったりなどしていた。

そして短い夜はだんだんにふけて行つた。葉子の目からは絶え  
ず涙がはふり落ちた。倉地と思ひもかけない別れかたをしたその  
記憶が、ただわけもなく葉子を涙ぐました。

と、ふつと葉子は山内さんないの家のありさまを想像に浮かべた。玄

関わきの六畳でもあろうか、二階の子供の勉強部屋べやでもあろうか、この夜ふけを下宿から送られた老女が寝入ったあと、倉地と愛子とが話し続けているような事はないか。あの不思議に心の裏を決して他人に見せた事のない愛子が、倉地をどう思っているかそれはわからない。おそらくは倉地に対しては何の誘惑も感じてはいないだろう。しかし倉地はああいうしたたか者だ。愛子は骨に徹する怨えんこん恨を葉子に対して怠っている。その愛子が葉子に対して復讐ふくしゅうの機会を見いだしたとこの晩思い定めなかつたとだれが保証し得よう。そんな事はとうの昔に行なわれてしまっているのかもしれない。もしそうなら、今ごろは、このしめやかな夜を……太陽が消えてなくなつたような寒さと闇やみとが葉子の心

におおいかぶさつて来た。愛子一人ぐらいを指の間に握りつぶす事ができないと思つてゐるのか……見てゐるがいい。葉子はいらだちきつて毒蛇どくじやのような殺氣だつた心になつた。そして静かに岡のほうを顧みた。

何か遠いほうの物でも見つめてゐるように少しぼんやりした目つきで貞世を見守つてゐた岡は、葉子に振り向かれると、そのほうに素早く目を転じたが、その物すごい不気味さに脊髓せきずいまで襲われたふうで、顔色をかえて目をたじろがした。

「岡さん。わたし一生のお頼み……これからすぐ山内さんないの家まで行つてください。そして不用な荷物は今夜のうちにみんな倉地づかさんの下宿に送り返してしまつて、わたしと愛子のふだん使づかいの着

物と道具とを持って、すぐここに引越して来るように愛子にいつけてください。もし倉地さんが家に来ていたら、わたしから確かに返したといつてこれを渡してください（そういつて葉子はふところふところがみ）。  
懐紙懐紙に拾円紙幣の束を包んで渡した。いつまでかかっても構わないから今夜のうちにね。お頼みを聞いてくださつて？」

なんでも葉子のいう事なら口返答をしない岡だけれどもこの常識をはずれた葉子の言葉には当惑して見えた。岡は窓ぎわに行つてカーテンの陰から戸外をすかして見て、ポケットから巧緻こうちな浮き彫りを施した金時計を取り出して時間を読んだりした。そして少し躊躇ちゆうちよするうちに、

「それは少し無理だとわたし、思います……あれだけの荷物を

片づけるのは……」

「無理だからこそあなたを見込んでお願いするんですわ。そうねえ、入り用のない荷物を倉地さんの下宿に届けるのは何かもしれませんわね。じゃ構わないから置き手紙を婆ばあやというのに渡しておいてくださいまし。そして婆やにいつけてあすでも倉地さんの所に運ばしてくださいまし。それなら何もいさくさはないでしょう。それでもおいや？ いかが？……ようございます。それじやもうようございます。あなたをこんなにおそくまでお引きとめしておいて、又また候ぞろめんどうなお願いをしようとするなんてわたしもどうかしていましたわ。……貞さあちゃんなんでもないのよ。わたし今岡さんとお話ししていたんですよ。汽車の音でもなんでも

ないんだから、心配せずにお休み……どうして貞世はこんなに怖  
い事ばかりいうようになってしまったんでしょう。夜中などに一  
人で起きていて囁言うわごとを聞くとぞーっとするほど気味が悪くなり  
ますのよ。あなたはどうぞもうお引き取りくださいまし。わたし  
車屋をやりますから……」

「車屋をおやりになるくらいならわたし行きます」

「でもあなたが倉地さんに何とか思われなさるようじゃお気の毒  
ですもの」

「わたし、倉地さんなんぞをはばかっていつているのではありま  
せん」

「それはよくわかっていますわ。でもわたしとしてはそんな結果

も考えてみてからお頼みするんでしたのに……」

こういう押し問答の末に岡はどうとう愛子の迎えに行く事になつてしまった。倉地がその夜はきつと愛子の所にいるに違いないと思つた葉子は、病院に泊まるものと高たかをくくつていた岡が突然まよなか真夜中に訪れて来たので倉地もさすがにあわてずにはいられまい。それだけの狼ろうばい狽ばいをさせるにしても快い事だと思つていた。葉子は宿直部屋べやに行つて、しだらなく睡ね入つた当番の看護婦を呼び起こして人力車じんりきしゃを頼ました。

岡は思い入つた様子でそつと貞世の病室を出た。出る時に岡は持つて来たパラフィン紙に包んである包みを開くと美しい花束だつた。岡はそれをそつと貞世の枕まくらもとにおいて出て行つた。

しばらくすると、しとしとと降る雨の中を、岡を乗せた人力車が走り去る音がかすかに聞こえて、やがて遠くに消えてしまった。看護婦が激しく玄関の戸締まりする音が響いて、そのあとはひっそりと夜がふけた。遠くの部屋でデイフテリヤにかかっている子供の泣く声が間遠まとおに聞こえるほかには、音という音は絶え果てていた。

葉子はただ一人ひとりいたずらに興奮して狂うような自分を見いだした。不眠で過ごした夜が三日も四日も続いているのにかかわらず、睡気ねむけというものは少しも襲って来なかった。重石おもしをつり下げたような腰部の鈍痛ばかりでなく、脚部は抜けるようにだるく冷え、肩は動かすたびごとにめりめり音がするかと思うほど固く凝り、

頭の心は絶え間なくぎりぎりと痛んで、そこからやりどころのない悲哀と、疖癩かんしゃくとがこんこんとわいて出た。もう鏡は見まいと思うほど顔はげっそりと肉がこけて、目のまわりの青黒い暈かさは、さらぬだに大きい目をことさらにぎらぎらと大きく見せた。鏡を見まいと思ひながら、葉子はおりにあるごとに帯の間から懐中鏡を出して自分の顔を見つめないではいられなかつた。

葉子は貞世の寢息をうかがつていつものように鏡を取り出した。そして顔を少し電灯のほうに振り向けてじつと自分を映して見た。おびただしい毎日の抜け毛で額ぎわの著しく透いてしまったのが第一に気になつた。少し振り仰いで顔を映すと頬ほおのこけたのがさほどに目立たないけれども、顎あごを引いて下したうつむ俯うつむきになると、口

と耳との間には縦に大きな溝みぞのような凹くぼみができて、下顎骨かがくこつが目立っていかめしく現われ出ていた。長く見つめているうちにはだんだん慣れて来て、自分の意識でしいて矯きようせい正せいするために、やせた顔もさほどとは思われなくなり出すが、ふと鏡に向かった瞬間には、これが葉子葉子と人々の目をそばだたした自分かと思うほど醜みにくかった。そうして鏡に向かっているうちに、葉子はその投影を自分以外のある他人の顔ではないかと疑い出した。自分の顔より映るはずがない。それなのにそこに映っているのは確かにだれか見も知らぬ人の顔だ。苦痛にしいたげられ、悪意にゆがめられ、煩ぼん悩のうのために支離滅裂しりめつれつになった亡もうじや者の顔……葉子は背筋に一時に氷をあてられたようになって、身ぶるいしながら思わ

ず鏡を手から落とした。

金属の床に触れる音が雷のように響いた。葉子はあわてて貞世を見やった。貞世はまっ赤かに充血して熱のこもった目をまんじりと開いて、さも不思議そうに中ちゆうう有を見やっていた。

「愛ねえさん……遠くでピストルの音がしたようよ」

はつきりした声でこうだったので、葉子が顔を近寄せて何かいおうとすると昏こん々としてたわいもなくまた眠りにおちいるのだった。貞世の眠るのと共に、なんともいえない無気味な死の脅かしが卒然として葉子を襲った。部屋へやの中にはそこらじゅうに死の影が満ち満ちていた。目の前の氷水を入れたコップ一つも次の瞬間にはひとりでに倒れてこわれてしまいそうに見えた。物の影に

なつて薄暗い部分は見る見る部屋じゆうに広がつて、すべてを冷たく暗く包み終わるかとも疑われた。死の影は最も濃く貞世の目と口のまわりに集まつていた。そこには死が蛆うじのようによろによろとうごめいているのが見えた。それよりも……それよりもその影はそろそろと葉子を目がけて四方の壁から集まり近づこうとひしめいているのだ。葉子はほとんどその死の姿を見るように思った。頭の中がシーンと冷え通つて冴さえきつた寒さがぞくぞくと四肢しを震わした。

その時宿直室の掛け時計が遠くのほうで一時を打った。

もしこの音を聞かなかつたら、葉子は恐ろしさのあまり自分のほうから宿直室へ駆け込んで行ったかもしれない。葉子はお

びえながら耳をそばだてた。宿直室のほうから看護婦が草履ぞうりをばたばたと引きずって来る音が聞こえた。葉子はほつと息氣いきをついた。そしてあわてるように身を動かして、貞世の頭の氷ひょう囊のうの溶け具合をしらべて見たり、搔か卷いまきを整えてやったりした。海の底に一つ沈んでぎらつと光る貝かい殻がらのように、床の上で影の中に物すごく横たわっている鏡を取り上げてふところに入れた。そうして一室一室と近づいて来る看護婦の足音に耳を澄ましながらまた考え続けた。

今度は山内さんないの家のありさまがさながらまざまざと目に見るように想像された。岡が夜ふけにそこを訪れた時には倉地が確かにいたに違いない。そしていつものとおり一種の粘り強さをもつて

葉子の言伝ことづてを取り次ぐ岡に対して、激しい言葉でその理不尽な  
狂気じみた葉子の出来心をののしつたに違いない。倉地と岡との  
間には暗々裡あんあんりに愛子に対する心の争闘が行なわれたろう。岡の差  
し出す紙幣の束を怒りに任せて畳の上にたたきつける倉地の威いたけ  
丈だけ高な様子、少女にはあり得ないほどの冷静さで他人事ひとごとのよう  
に二人ふたりの間のいきさつを伏し目ながらに見守る愛子の一種の毒々  
しい妖艶ようえんさ。そういう姿がさながら目の前に浮かんで見えた。  
ふだんの葉子だったらその想像は葉子をその場にいるように興奮  
させていたであろう。けれども死の恐怖に激しく襲われた葉子は  
なんともいえない嫌悪けんおの情をもつてのほかにはその場面を想像す  
る事ができなかつた。なんとというあさましい人の心だろう。結局

は何もかも滅びて行くのに、永遠な灰色の沈黙の中にくずれ込んでしまうのに、目前の貪婪どんらんに心火の限りを燃やして、餓鬼がき同様に命をかみ合うとはなんといいあさましい心だろう。しかもその醜い争いの種子たねをまいたのは葉子自身なのだ。そう思うと葉子は自分の心と肉体とがさながら蛆虫うじむしのようにきたなく見えた。：

：何のために今まであつてないような妄もうしゆう執しゆうに苦しみ抜いてそれを生命そのもののように大事に考え抜いていた事か。それはまるで貞世が始終見ているらしい悪夢の一つよりもさらにはかないものではないか。……こうなると倉地さえが縁もゆかりもないもののように遠く考えられ出した。葉子はすべてのもののむなしさにあきれたような目をあげて今さららしく部屋へやの中をながめ回し

た。なんの飾りもない、修道院の内部のような裸な室内がかえつてすがすがしく見えた。岡の残した貞世の枕まくらもとの花束だけが、そしておそらくは（自分では見えないけれども）これほどの忙しさの間にも自分を粉飾するのを忘れずにいる葉子自身がいかにも浮薄なたよりないものだった。葉子はこうした心になると、熱に浮かされながら一步一步なんの心のわだかまりもなく死に近づいて行く貞世の顔が神こうごう々しいものにさえ見えた。葉子は祈るようになわびるような心でしみじみと貞世を見入った。

やがて看護婦が貞世の部屋へやにはいつて来た。形式一ぺんのお辞儀を睡ねむそうにして、寝台のそばに近寄ると、無頓着むとんじやくなふうふうに葉子を入れておいた検温器を出して灯ひにすかして見てから、胸の氷ひ

ようのう

囊ひとりを取りかえにかかった。葉子は自分一人の手でそんな事を  
してやりたいような愛着と神聖さとを貞世に感じながら看護婦を  
手伝った。

「貞ちゃん……さ、氷囊さあを取りかえますからね……」

とやさしくいうと、嚙うわごと言をいい続けているながらやはり貞世は  
それまで眠っていたらしく、痛いたいた々しいまで大きくなつた目を開  
いて、まじまじと意外な人でも見るように葉子を見るのだつた。

「おねえ様なの……いつ帰つて来たの。おかあ様がさつきいらし  
つてよ……いやおねえ様、病院いや帰る帰る……おかあ様おかあ  
様（そういつてきよろきよろとあたりを見回しながら）帰らして  
ちようだいよう。お家うちに早く、おかあ様のいるお家うちに早く……」

葉子は思わず毛孔けあなが一本一本逆立さかだつほどの寒気さむけを感じた。かつて母という言葉もいわなかった貞世の口から思いもかけずこんな事を聞くと、その部屋のどこかにぼんやり立っている母が感ぜられるように思えた。その母の所に貞世は行きたがってあせっている。なんとという深いあさましい骨こつにく肉の執着だろう。

看護婦が行つてしまふとまた病室の中はしんとなつてしまった。なんともいえず可憐かれんな澄んだ音を立てて水たまりに落ちる雨だれの音はなお絶え間なく聞こえ続けていた。葉子は泣くにも泣かれないような心になつて、苦しい呼吸をしながらもうつらうつらと生死の間を知らぬげに眠る貞世の顔をのぞき込んでいた。

と、雨だれの音にまじつて遠くのほうに車の轍わだちの音を聞いたよ

うに思った。もう目をさまして用事をする人もあるかと、なんだか違つた世界の出来事のようにそれを聞いていると、その音はだんだん病室のほうに近寄つて来た。……愛子ではないか……葉子は愕然がくぜんとして夢からさめた人のようにきつとなつてさらに耳をそばだてた。

もうそこには死生を冥想めいそうして自分の妄執もうしゆうのはかなさをしみじみと思いやつた葉子はいなかつた。我執のために緊張しきつたその目は怪しく輝いた。そして大急ぎで髪かみのほつれをかき上げ、鏡に顔を映しながら、あちこちと指先で容子ようすを整えた。衣紋えもんもなおした。そしてまたじつと玄関のほうに聞き耳を立てた。

はたして玄関の戸のあく音が聞こえた。しばらく廊下がごたご

たする様子だったが、やがて二三人の足音が聞こえて、貞世の病室の戸がしめやかに開かれた。葉子はそのしめやかさでそれは岡が開いたに違いない事を知った。やがて開かれた戸口から岡にちよつと挨拶あいさつしながら愛子の顔が静かに現われた。葉子の目は知らず知らずそのどこまでも従順らしく伏し目になった愛子の面おもてに激しく注がれて、そこに書かれたすべてを一時に読み取ろうとした。小羊のようにまつ毛の長いやさしい愛子の目はしかし不思議にも葉子の鋭い眼光にさえ何物をも見せようとはしなかった。葉子はすぐいらいらして、何事もあばかないではおくものかと心の中で自分自身に誓せいごん言を立てながら、

「倉地さんは」

と突然真正面から愛子にこう尋ねた。愛子は多恨な目をはじめてまともに葉子のほうに向けて、貞世のほうにそれをそらしながら、また葉子をぬすみ見るようにした。そして倉地さんがどうしたというのか意味が読み取れないというふうを見せながら返事をしなかった。生意気なまいきをしてみるがいい……葉子はいらだっていた。「おじさんも一緒にいらしたかいというんだよ」

「いゝえ」

愛子は無愛想ぶあいそなほど無表情に一人ひとごと言そう答えた。二人ふたりの間にはむずかしい沈黙が続いた。葉子はすわれとさえいつてやらなかった。一日一日と美しくなつて行くような愛子は小肥りこぶとなからだをつつましく整えて静かに立っていた。

そこに岡が小道具を両手に下げて玄関のほうから帰って来た。外套がいとうをびっしり雨にぬらしているのから見ても、この真夜中に岡がどれほど働いてくれたかがわかっていた。葉子はしかしそれには一言の挨拶あいさつもせず、岡が道具を部屋へやのすみにおくや否や、

「倉地くらぢさんは何かいっていまして？」

と剣けんを言葉に持たせながら尋ねた。

「倉地さんはおいですがありませんでした。で婆ばあやに言伝ことづてをしておいて、お入り用の荷物だけ造って持って来ました。これはお返ししておきます」

そういつて衣囊かぶしの中から例の紙幣の束を取り出して葉子に渡そ

うとした。

愛子だけならまだしも、岡までがとうとう自分を裏切ってしまった。二人が二人ながら見えすいた虚言うそをよくもあしらじらしくいえたものだ。おおそれた弱虫どもめ。葉子は世の中が手ぐすね引いて自分一人ひとりを敵に回しているように思った。

「へえ、そうですか。どうも御苦労さま。……愛さんお前はここにそうぼんやり立っているためにここに呼ばれたと思っっているの？

岡さんのそのぬれた外套がいとうでも取ってお上げなさいな。そして宿直室に行つて看護婦にそういつてお茶でも持つておいで。あなたの大事な岡さんがこんなにおそくまで働いてくださったのに……さあ岡さんどうぞこの椅子いすに（といつて自分は立ち上がった）

……わたしが行って来るわ、愛さんも働いてさぞ疲れたろうから……よござんす、よござんすつたら愛さん……」

自分のあとを追おうとする愛子を刺し貫くほど睨めつけておい  
て葉子は部屋を出た。そうして火をかけられたようにかつと逆上  
しながら、ほろほろとくやし涙を流して暗い廊下を夢中で宿直室  
のほうへ急いで行った。

#### 四四

たたきつけるようにして倉地に返してしまおうとした金は、や  
はり手に持っているうちを使い始めてしまった。葉子の性癖とし

ていつでもできるだけ豊かな快い夜<sup>よる</sup>昼<sup>ひる</sup>を送るようのみ傾いていたので、貞世の病院生活にも、だれに見せてもひけを取らないだけの事を上<sup>うわ</sup>べばかりでもしていたかった。夜具でも調度でも家にあるものの中でいちばん優<sup>すぐ</sup>れたものを選んで来てみると、すべての事までそれにふさわしいものを使わなければならなかった。葉子が専用の看護婦を二<sup>ふたり</sup>人も頼まなかったのは不思議なようだが、どういふものか貞世の看護をどこまでも自分一人<sup>ひとり</sup>でしてのけたかつたのだ。その代わり年とつた女を二人<sup>やと</sup>傭<sup>やと</sup>つて交代に病院に来<sup>こ</sup>させて、洗い物から食事の事までを賄<sup>まかな</sup>わした。葉子はとても病院の食事では済ましていられなかった。材料のいい悪いはとにかく、味はとにかく、何よりもきたならしい感じがして箸<sup>はし</sup>もつける気に

なれなかつたので、本郷ほんごう通りにある或ある料理屋から日々入れさせる事にした。こんなあんばいで、費用は知れない所に思いのほかかかった。葉子が倉地が持つて来てくれた紙幣の束から仕払おうとした時は、いずれそのうち木村から送金があるだろうから、あり次第それから埋め合わせをして、すぐそのまま返そうと思つていたのだった。しかし木村からは、六月になつて以来一度も送金の通知は来なかつた。葉子はそれだからなおさらの事もう来そうなものだと心待ちをしたのだった。それがいくら待つても来ないとなるとやむを得ず持ち合わせた分から使つて行かなければならなかつた。まだまだと思つているうちに束の厚みはどんどん減つて行つた。それが半分ほど減ると、葉子は全く返済の事などは

忘れてしまったようになって、あるに任せて惜しげもなく仕払いをした。

七月にはいつてから気候はめつきり暑くなつた。椎しいの木の古葉もすっかり散り尽くして、松も新しい緑にかわつて、草も木も青い焰ほのおのようになつた。長く寒く続いた五月雨さみだれのなごりで、水蒸気が空气中に気味わるく飽和されて、さらぬだに急に堪たえ難がたく暑くなつた気候をますます堪え難いものにした。葉子は自身の五体が、貞世の回復をも待たずにずんずんくずれて行くのを感じないわけには行かなかつた。それと共に勃発ほつぱつてき的に起こつて来るヒステリーはいよいよ募るばかりで、その発作ほつきに襲われたが最後、自分ながら気が違つたと思うような事がたびたびになつた。葉子は心ひ

そかに自分を恐れながら、日々の自分を見守る事を余儀なくされた。

葉子のヒステリーはだれかれの見さかひなく破裂するようになったがことに愛子に屈強の逃げ場を見いだした。なんといわれてもののしられても、打ち据<sup>す</sup>えられさえしても、屠所<sup>としよ</sup>の羊のように柔順に黙ったまま、葉子にはまどろしく見えるくらいゆつくり落ち着いて働く愛子を見せつけられると、葉子の疖<sup>かんしゃく</sup>癩<sup>こう</sup>は嵩<sup>こう</sup>じるばかりだった。あんな素直<sup>すなお</sup>な殊勝<sup>しゆせう</sup>げなふうをしていながらしらじらしくも姉を欺<sup>あざむ</sup>いている。それが倉地との関係においてであれ、岡との関係においてであれ、ひよつとすると古藤との関係においてであれ、愛子は葉子に打ち明けない秘密を持ち始めているはず

だ。そう思うと葉子は無理にも平地に波瀾はらんが起こしてみたかった。ほとんど毎日——それは愛子が病院に寝泊まりするようになったためだと葉子は自分決ぎめに決めていた——幾時間かの間、見舞いに来てくれる岡に対しても、葉子はもう元のような葉子ではなかった。どうかすると思ひもかけない時に明白な皮肉が矢のように葉子の口びるから岡に向かつて飛ばされた。岡は自分が恥じるように顔を紅あからめながらも、上品な態度でそれをこらえた。それがまたなおさら葉子をいらつかす種たねになった。

もう来こられそうもないといいながら倉地も三日に一度ぐらいは病院を見舞うようになった。葉子はそれをも愛子ゆえと考えずにはいられなかった。そう激しい妄もうそう想に駆り立てられて来ると、

どういう関係で倉地と自分とをつないでおけばいいのか、どうした態度で倉地をもちあつかえばいいのか、葉子にはほとほと見当がつかなくなってしまった。親身しんみに持ちかけてみたり、よそよそしく取りなしてみたり、その時の気分気分で勝手な無技巧な事をしていたながらも、どうしてもものがれ出る事のできないのは倉地に對するこちんと固まった深い執着だった。それは情けなくも激しく強くなり増さるばかりだった。もう自分で自分の心根こころねを憫びんぜ然んに思つてそぞろに涙を流して、自らを慰めるといふ余裕すらなくなつてしまった。かわききつた火のようなものが息氣いき苦しいまでに胸の中にぎつしりつまっているだけだった。

ただ一人貞世ひとりだけは……死ぬか生きるかわからない貞世だけは、

この姉を信じきつてくれている……そう思うと葉子は前にも増した愛着をこの病児にだけは感じないでいられなかつた。「貞世がいるばかりで自分は人殺しもしないでこうしていられるのだ」と葉子は心の中で独ひとりご語ちた。

けれどももある朝そのかすかな希望さえ破れねばならぬような事件がまくし上がった。

その朝は暁から水がしたたりそうに空が晴れて、珍しくすがすがしい涼風が木の間から来て窓の白いカーテンをそつとなでて通るさわやかな天気だったので、夜通し貞世の寝台のわきに付き添つて、睡ねむくなるとそうしたままどうとうと居いねむ睡りしながら過ぐして来た葉子も、思いのほか頭の中が軽くなっていた。貞世もそ

の晩はひどく熱に浮かされもせずに寝続けて、四時ごろの体温は七度八分まで下がっていた。緑色の風呂敷ふろしきを通して来る光でそれを発見した葉子は飛び立つような喜びを感じた。入院してから七度台に熱の下がったのはこの朝が始めてだったので、もう熱の剥は離期くりきが来たのかと思うと、とうとう貞世の命は取り留めたという喜きえつ悦の情で涙ぐましいまでに胸はいっぱいになった。ようやく一心が届いた。自分のために病気になった貞世は、自分の力でなおった。そこから自分の運命はまた新しく開けて行くかもしれない。きつと開けて行く。もう一度心置きなくこの世に生きる時が来たら、それはどのくらいいい事だろう。今度こそは考え直して生きてみよう。もう自分も二十六だ。今までのような態度で暮らして

はいられない。倉地にもすまなかつた。倉地があれほどある限りのものを犠牲にして、しかもその事業といっている仕事はどう考えてみても思わしく行っていないらしいのに、自分たちの暮らし向きはまるでそんな事も考えないような寛濶かんかつなものだった。自分には決心さえすればどんな境遇にでも自分をはめ込む事ぐらいできる女だ。もし今度家を持つようになったらすべてを妹たちにいつて聞かして、倉地と一緒になろう。そして木村とはつきり縁を切ろう。木村といえは……：：：そうして葉子は倉地と古藤とが合いをしたその晩の事を考え出した。古藤にあんな約束をしながら、貞世の病気に紛れていたというほかに、てんで真相を告白する気がなかつたので今まではなんの消息もしないでいた自分かと

がめられた。ほんとうに木村にもすまなかつた。今になつてようやく長い間の木村の心の苦しさが想像される。もし貞世が退院するようになったら——そして退院するに決まっているが——自分は何をおいても木村に手紙を書く。そうしたらどれほど心が安くそして軽くなるかしれない。……葉子はもうそんな境<sup>きよう</sup>界<sup>がい</sup>が来てしまつたように考えて、だれとでもその喜びをわかちたく思つた。で、椅子<sup>いす</sup>にかけたまま右後ろを向いて見ると、床板の上に三畳<sup>たたみ</sup>畳を敷いた部屋<sup>へや</sup>の一隅<sup>ぐう</sup>に愛子がたわいもなくすやすやと眠つていた。うるさがるので貞世には蚊帳<sup>かや</sup>をつつてなかつたが、愛子の所には小さな白い西洋蚊帳がつつてあつた。その細かい目を通して見る愛子の顔は人形のように整つて美しかった。その愛子をこ

れまで憎み通しに憎み、疑い通しに疑っていたのが、不思議を通り越して、奇怪な事にさえ思われた。葉子はにこにこしながら立つて行って蚊帳のそばによつて、

「愛さん……愛さん」

そうかなり大きな声で呼びかけた。ゆうべおそく枕まくらについた愛子はやがてようやくねむ睡そうに大きな目を静かに開いて、姉が枕もとににいるのに気がつく、寝すごしでもしたと思つたのか、あわてるように半身を起こして、そつと葉子をぬすみ見るようにした。日ごろならばそんな挙動をすぐ疖かんしやく癩たねの種にする葉子も、その朝ばかりはかわいそうなくらいに思つていた。

「愛さんお喜び、貞さあちゃんの熱がとうとう七度台に下がつてよ。

ちよつと起きて来てごらん、それはいい顔をして寝ているから：  
：静かにね」

「静かにね」といいながら葉子の声は妙にはずんで高かった。愛子は柔順に起き上がってそつと蚊帳をくぐつて出て、前を合わせながら寝台のそばに来た。

「ね？」

葉子は笑みかまけて愛子にこう呼びかけた。

「でもなんだか、だいぶに蒼あおしろ白く見えますわね」

と愛子が静かにいうのを葉子はせわしく引つたくつて、

「それは電燈の風呂敷ふろしきのせいだわ……それに熱が取れば病人はみんな一度はかえつて悪くなったように見えるものなのよ。ほん

とうによかった。あなたも親身しんみに世話してやったからよ」

そういつて葉子は右手で愛子の肩をやさしく抱いた。そんな事を愛子にしたのは葉子としては始めてだった。愛子は恐れをなしたように身をすぼめた。

葉子はなんとなくじつとしてはいられなかった。子供らしく、早く貞世が目をさませばいいと思った。そうしたら熱の下がったのを知らせて喜ばせてやるのと思った。しかしさすがにその小さな眠りを揺ゆりさます事はし得ないで、しきりと部屋へやの中を片づけ始めた。愛子が注意の上に注意をしてこそとの音もさせまいと気をつかっているのに、葉子がわざとするかとも思われるほど騒そ々うぞうしく働くさまは、日ごろとはまるで反対だった。愛子は時々

不思議そうな目つきをしてそつと葉子の挙動を注意した。

そのうちに夜がどんどん明け離れて、電灯の消えた瞬間はちよつと部屋の中が暗くなつたが、夏の朝らしく見る見るうちに白い光が窓から容赦なく流れ込んだ。昼になつてからの暑さを予想させるような涼しさが青葉の軽いにおいと共に部屋の中にみちあふれた。愛子の着かえたおおがら大柄な白の飛白かすりも、赤いメリンスの帯も、葉子の目を清すがすが々しく刺激した。

葉子は自分で貞世の食事を作つてやるために宿直室のそばにある小さな庖ほうちゆう厨ちゆうに行つて、洋食店から届けて来たソツプを温あたためて塩で味をつけている間も、だんだん起き出て来る看護婦たちに貞世の昨夜の経過を誇りがに話して聞かせた。病室に帰つて見る

と、愛子がすでに目ざめた貞世に朝じまいをさせていた。熱が下がったのできげんよかるべき貞世はいつそうふきげんになって見えた。愛子のする事一つ一つに故障をいい立てて、なかなかいふ事を聞こうとはしなかった。熱の下がったのに連れて始めて貞世の意志が人間らしく働き出したのだと葉子は気がついて、それも許さなければならぬ事だと、自分の事のように心で弁疏べんそした。ようやく洗面が済んで、それから寝台の周囲を整頓せいとんするともう全く朝になっていた。けさこそは貞世がきつと賞美しながら食事を取るだろうと葉子はいそいそとたけの高い食卓を寝台の所に持って行つた。

その時思いがけなくも朝がけに倉地が見舞いに来た。倉地も涼

しげな単衣ひとえに紹ろの羽織はおりを羽織はおりつたままだった。その強健な、物を  
物ともしない姿は夏の朝の気分としっくりそぐって見えたばかり  
でなく、その日に限って葉子は絵島丸の中で語り合つた倉地を見  
いだしたように思つて、その寛かんかつ潤つな様子がなつかしくのみなが  
められた。倉地もつとめて葉子の立ち直つた気分どこうに同じどこうているら  
しかつた。それが葉子をいつそう快活にした。葉子は久しぶりで  
その銀の鈴のような澄みとおつた声で高調子に物をいいながら二ふ  
たこと  
言目には涼しく笑つた。

「さ、貞ちゃんさあ、ねえさんが上手じょうずに味をつけて来て上げたから  
ソップを召し上がれ。けさはきつとおいしく食べられますよ。今  
までは熱で味も何もなかつたわね、かわいそうに」

そういつて貞世の身ぢかに椅子いすを占めながら、糊のりの強いナフキンを枕まくらから喉のどにかけてあてがつてやると、貞世の顔は愛子のいうようにひどく青味がかつて見えた。小さな不安が葉子の頭をつきぬけた。葉子は清潔な銀の匙さじに少しばかりソツプをしゃくい上げて貞世の口もとにあてがった。

「まずい」

貞世はちらつと姉をにらむように盗み見て、口にあるだけのソツプをしいて飲みこんだ。

「おやどうして」

「甘つたらしくつて」

「そんなはずはないがねえ。どれそれじやも少し塩を入れてあげ

ますわ」

葉子は塩をたしてみた。けれども貞世はうまいとはいわなかった。また一口飲み込むともういやだといった。

「そういわずとも少し召し上がれ、ね、せつかくねえさんが加減したんだから。第一食べないでいては弱ってしまいますよ」

そう促してみても貞世は金輪際こんりんざいあとを食べようとはしなかった。

突然自分でも思いもよらない憤怒が葉子に襲いかかった。自分がこれほど骨を折ってしてやったのに、義理にももう少しは食べてよさそうなものだ。なんとというわがままな子だろう（葉子は貞世が味覚を回復していて、流動食では満足しなくなつたのを少し

も考えに入れなかつた)。

そうなるともう葉子は自分を統御とうぎよする力を失つてしまつて  
 いた。血管の中の血が一時にかつと燃え立つて、それが心臓に、そ  
 して心臓から頭に衝つき進んで、頭蓋骨ずがいこつはばりばりと音を立てて  
 破われそうだつた。日ごろあれほどかわいがつてやつてゐるのに、  
 ……憎さは一倍だつた。貞世を見つめているうちに、そのやせき  
 つた細首に鋏形くわがたにした両手をかけて、一思いにしめつけて、苦  
 しみがく様子を見て、「そら見るがいい」といい捨ててやりた  
 い衝動がむずむずとわいて来た。その頭のまわりにあてがわるべ  
 き両手の指は思わず知らず熊手くまでのように折れ曲がつて、はげしい  
 力のために細かく震えた。葉子は凶器に変わったようなその手を

人に見られるのが恐ろしかったので、茶わんと匙さじとを食卓にかえて、前だれの下に隠してしまった。上まぶたうわの一字になつた目をきりつと据えてはたと貞世をにらみつけた。葉子の目には貞世のほかにもその部屋へやのものは倉地から愛子に至るまですっかり見えなくなつてしまつていた。

「食べないかい」

「食べないかい。食べなければ云々うんぬん」と小言こごとをいつて貞世を責めるはずだったが、初句を出しただけで、自分の声のあまりに激しい震えのように言葉を切つてしまった。

「食べない……食べない……御飯でなくつてはいやあだあ」

葉子の声の下からすぐこうしたわがままな貞世のすねにすねた

声が聞こえたと葉子は思った。まっ黒な血潮がどつと心臓を破つて脳天に衝き進んだと思つた。目の前で貞世の顔が三つにも四つにもなつて泳いだ。そのあとには色も声もしびれ果ててしまったような暗黒の忘我が来た。

「おねえ様……おねえ様ひどい……いやあ……」

「葉ちゃん……あぶない……」

貞世と倉地の声とがもつれ合つて、遠い所からのように聞こえて来るのを、葉子はだれかが何か貞世に乱暴をしているのだなと思つたり、この勢いで行かなければ貞世は殺せやしないと思つたりしていた。いつのまにか葉子はただ一筋に貞世を殺そうとばかりあせていたのだ。葉子は闇黒あんこくの中で何か自分に逆らう力と

根<sup>こん</sup>限りあらそいながら、物すごいほどの力をふりしぼってたたかっているらしかった。何がなんだかわからなかった。その混乱の中に、あるいは今自分は倉地の喉<sup>のど</sup>笛<sup>ふえ</sup>に針のようになった自分の十本の爪<sup>つめ</sup>を立てて、ねじりもがきながら争っているのではないかとも思った。それもやがて夢のようだった。遠ざかりながら人の声とも獣<sup>けもの</sup>の声とも知れぬ音響がかすかに耳に残って、胸の所にさし込んで来る痛みを吐き気のように感じた次の瞬間には、葉子は昏<sup>こん</sup>々として熱も光も声もない物すさまじい暗黒の中にまっさかさまに浸って行った。

ふと葉子は擦<sup>くす</sup>むるようなものを耳の所に感じた。それが音響だとわかるまでにはどのくらいの時間が経過したかしれない。とに

かく葉子はがやがやという声をだんだんとはつきり聞くようになった。そしてぽっかり視力を回復した。見ると葉子は依然として貞世の病室にいたのだった。愛子が後ろ向きになって寝台の上にいる貞世を介抱していた。自分は……自分はと葉子は始めて自分を見回そうとしたが、からだは自由を失っていた。そこには倉地がいて葉子の首根っこに腕を回して、膝ひざの上に一方の足を乗せて、しっかりと抱きすくめていた。その足の重さが痛いほど感じられ出した。やっぱり自分は倉地を死に神のもとへ追いかくろうとしていたのだなと思った。そこには白衣を着た医者も看護婦も見え出した。

葉子はそれだけの事を見ると急に気のゆるむのを覚えた。そし

て涙がぼろぼろと出てしかたがなくなつた。おかしな……どうしてこう涙が出るのだらうと怪しむうちに、やる瀬ない悲哀がどつとこみ上げて来た。底のないようなさびしい悲哀……そのうちに葉子は悲哀とも睡<sup>ねむ</sup>さも区別のできない重い力に圧せられてまた知覚から物のない世界に落ち込んで行つた。

ほんとうに葉子が目をさました時には、まつさおに晴天の後の夕暮れが催しているころだつた。葉子は部屋<sup>へや</sup>のすみの三畳に蚊帳<sup>かや</sup>の中に横になつて寝ていたのだつた。そこには愛子のほかに岡も来合せて貞世の世話をしていた。倉地はもういなくなつた。

愛子のいう所によると、葉子は貞世にソップを飲まそうとしていろいろにいったが、熱が下がって急に食欲のついた貞世は飯で

なければどうしても食べないといつてきかなかつたのを、葉子は涙を流さんばかりになつて執しゅうね念くソツプを飲ませようとした結果、貞世はそこにあつたソツプ皿ざらを臥ねていながらひっくり返してしまつたのだつた。そうすると葉子はいきなり立ち上がつて貞世の胸むなもとをつかむなり寝台から引きずりおろしてこづき回した。

幸いにい合あわした倉地が大事にならないうちに葉子から貞世を取り放しはしたが、今度は葉子は倉地に死に物狂いに食つてかかつて、そのうちに激しやくしい癩しやくを起こしてしまつたのだとの事だつた。

葉子の心はむなしく痛んだ。どこにとて取りつくものもないよ  
うなむなしさが心には残っているばかりだつた。貞世の熱はすつ  
かり元通りにのぼつてしまつて、ひどくおびえるらしい囁うわごと言を

絶え間なしに口走った。節々ふしぶしはひどく痛みを覚えながら、発作ほつきの過ぎ去った葉子は、ふだんどおりになつて起き上がる事もできるのだつた。しかし葉子は愛子や岡への手前すぐ起き上がるのも変だつたのでその日はそのまま寝続けた。

貞世は今度こそは死ぬ。とうとう自分の末路も来てしまつた。そう思うと葉子はやるかたなく悲しかつた。たとい貞世と自分が幸いに生き残つたとしても、貞世はきつと永劫えいごう自分を命いのちの敵かたきと怨むうらに違いない。

「死ぬに限る」

葉子は窓を通して青から藍あゐに変わつて行きつつある初夏の夜の景色をながめた。神秘的な穏やかさと深さとは脳心にしみ通るよ

うだった。貞世の枕まくらもとはは若い岡と愛子とがむつまじげに居たり立ったりして貞世の看護に余念なく見えた。その時の葉子にはそれは美しくさえ見えた。親切な岡、柔順な愛子……二人ふたりが愛し合うのは当然でいい事らしい。

「どうせすべては過ぎ去るのだ」

葉子は美しい不思議な幻影でも見るように、電気灯の緑の光の中に立つ二人の姿を、無常を見ぬいた隠いんじや者のような心になって打ちながめた。

## 四五

この事があつた日から五日たったけれども倉地はぱったり来なくなつた。たよりもよこさなかつた。金も送つては来なかつた。

あまりに変なので岡に頼んで下宿のほうを調べてもらうと三日前に荷物の大部分を持って旅行に出るといつて姿を隠してしまつたのだそうだ。倉地がいなくなると刑事だという男が二度か三度いろいゝるな事を尋ねに来たともいつているそうだ。岡は倉地からの一通の手紙を持って帰つて来た。葉子はすぐに封を開いて見た。

「事重大こととなり姿を隠す。郵便では累るいを及ぼさん事を恐れ、これを主人に託しておく。金も当分は送れぬ。困つたら家財道具を売れ。そのうちにはなんとかする。読後火中」

とだけしたためて葉子へのあて名も自分の名も書いてはなかつ

た。倉地の手跡には間違いない。しかしあの発作ほつき以後ますますヒステリックに根こんじょう性のひねくれてしまった葉子は、手紙を読んだ瞬間にこれは造り事だと思ひ込まないではいられなかった。とうとう倉地も自分の手からのがれてしまった。やる瀬ない恨みと憤りが目もくらむほどに頭の中を攪かき乱した。

岡と愛子とがすっかり打ち解けたようになって、岡がほとんど入りびたりに病院に来て貞世の介抱をするのが葉子には見ていらなくなつて来た。

「岡さん、もうあなたこれからここにはいらつしやらないでくださいまし。こんな事になると御迷惑があなたにかからないとも限りませんから。わたしたちの事はわたしたちがしますから。わた

しはもう他人にたよりたくはなくなりました」

「そうおっしやらずにどうかわたしをあなたのおそばに置かしてください。わたし、決して伝染なぞを恐れはしません」

岡は倉地の手紙を読んではいないのに葉子は気がついた。迷惑といったのを病気の伝染と思い込んでいるらしい。そうじゃない。岡が倉地の犬でないとどうしていえよう。倉地が岡を通して愛子と慇懃いんぎんを通かよわし合っていないとだれが断言できる。愛子は岡をたらし込むぐらいは平気でする娘だ。葉子は自分の愛子ぐらいの年ごろの時の自分の経験の一人が生き返ってその猜疑心さいぎしんをおおりに立てるのに自分から苦しまねばならなかった。あの年ごろの時、思いさえすれば自分にはそれほど事は手もなくしてのける事が

できた。そして自分は愛子よりももつと無邪気な、おまけに快活な少女であり得た。寄つてたかつて自分をだましにかかるのなら、自分にだつてして見せる事がある。

「そんなにお考えならおいでくださるのはお勝手ですが、愛子あなたにさし上げる事はできないんですからそれは御承知くださいましよ。ちゃんと申し上げておかないとあとになつていさくさが起こるのはいやですから……愛さんお前も聞いているだろうね」

そういつて葉子は畳の上で貞世の胸にあてる湿布しっぷを縫ぬっている愛子のほうにも振り向いた。うなだれた愛子は顔も上げず返事もしなかつたから、どんな様子を顔に見せたかを知る由はなかつたが、岡は羞恥しゅうちのために葉子を見かえる事もできないくらいになつ

ていた。それはしかし岡が葉子のあまりといえは露骨ろこつな言葉を恥じたのか、自分の心持ちをあばかれたのを恥じたのか葉子の迷いやすくなつた心にはしつかりと見窮められなかつた。

これにつけかれにつけもどかしい事ばかりだつた。葉子は自分の目で二人ふたりを看視して同時に倉地を間接に看視するよりほかはないと思つた。こんな事を思うすぐそばから葉子は倉地の細君さいくんの事も思つた。今ごろは彼らはのうのうとして邪魔者がいなくなつたのを喜びながら一つ家に住んでいないとも限らないのだ。それとも倉地の事だ、第二第三の葉子が葉子の不幸をいい事にして倉地のそばに現われているのかもしれない。……しかし今の場合倉地の行くえを尋ねあてる事はちよつとむずかしい。

それからというもの葉子の心は一秒の間も休まらなかつた。もちろん今まででも葉子は人一倍心の働く女だったけれども、そのころのような激しさはかつてなかつた。しかもそれがいつも表から裏に行く働きかただった。それは自分ながら全く地獄じごくの苛責かしゃくだった。

そのころから葉子はしばしば自殺という事を深く考えるようになった。それは自分でも恐ろしいほどだった。肉体の生命を絶たつ事のできるような物さえ目に触れれば、葉子の心はおびえながらもはつと高鳴った。薬局の前を通るとずらつとならんだ薬びんが誘惑のように目を射た。看護婦が帽子を髪にとめるための長い帽子ピン、天井の張つてない湯殿ゆどのの梁はり、看護婦室に薄赤い色をして

金かなだらいにたたえられた昇しょう汞こう水すい、腐敗した牛乳、剃かみ刀そり、鋏はさみ、  
 夜ふけなどに上野うえののほうから聞こえて来る汽車の音、病室からな  
 がめられる生理学教室の三階の窓、密閉された部屋へや、しごき帯、  
 ……なんでもかでもが自分の肉を喰はむ毒どく蛇じゃのごとく鎌かま首くびを立  
 てて自分を待ち伏せしているように思えた。ある時はそれらをこ  
 の上なく恐ろしく、ある時はまたこの上なく親しみ深くながめや  
 った。一匹の蚊にさされた時さえそれがマラリヤを伝える種類で  
 あるかないかを疑ったりした。

「もう自分はこの世の中に何の用があるろう。死にさえすればそれ  
 で事は済むのだ。この上自身も苦しみたくない。他人も苦しめた  
 くない。いやだいやだと思ひながら自分と他人とを苦しめている

のが堪えられない。眠りだ。長い眠りだ。それだけのものだ」

と貞世の寝息をうかがいながらしつかり思い込むような時もあったが、同時に倉地がどこかで生きているのを考えると、たちまちつばめがえ燕返しに死から生のほうへ、苦しいほんのう煩惱の生のほうへ激しく執着して行つた。倉地の生きてる間に死んでなるものか……それは死よりも強い誘惑だつた。意地いじにかけても、肉体のすべての機関がめちやめちやになつても、それでも生きていて見せる。……葉子はそしてそのどちらにもほんとうの決心のつかない自分にまた苦しまねばならなかつた。

すべてのものを愛しているのか憎んでいるのかわからなかつた。貞世に対してですらそうだつた。葉子はどうかすると、熱に浮か

されて見さかいのなくなっている貞世を、ままはは継母がまま子をいびり抜くように没義道もぎどうに取り扱った。そして次の瞬間には後悔しきつて、愛子の前でも看護婦の前でも構わずにおいおいと泣きくずおれた。

貞世の病状は悪くなるばかりだった。

ある時伝染病室の医長が来て、葉子が今のままでいてはとても健康が続かないから、思いきって手術をしたらどうだと勧告した。黙って聞いていた葉子は、すぐ岡の差し入れ口だと邪推して取った。その後ろには愛子がいるに違いない。葉子が付いていたのは貞世の病気はなおるどころか悪くなるばかりだ（それは葉子もそう思っていた。葉子は貞世を全快させてやりたいのだ。けれど

もどうしてもいびらなければいけないのだ。それはよく葉子自身が知っていると思つていた。それには葉子をなんとかして貞世から離しておくのが第一だ。そんな相談を医長としたものがないはずがない。ふむ、……うまい事を考えたものだ。その復讐ふくしはきつとしてやる。根本的に病気をなおしてからしてやるから見ていくがいい。葉子は医長との対話の中に早くもこう決心した。そうして思いのほか手っ取り早く手術を受けようと進んで返答した。

婦人科の室は伝染病室とはずつと離れた所に近ごろ新築された建て物の中にあつた。七月のなかばに葉子はそこに入院する事になったが、その前に岡と古藤とに依頼して、自分の身ぢかにある

貴重品から、倉地の下宿に運んである衣類までを処分してもらわなければならなかった。金の出所は全くとだえてしまっていたから。岡がしきりと融通ゆうずうしようとして申し出たのもすげなく断わった。弟同様の少年から金まで融通してもらうのはどうしても葉子のプライドが承知しなかった。

葉子は特等を選んで日当たりのいい広々とした部屋へやにはいった。そこは伝染病室とは比べものにもならないくらい新式の設備の整った居心地いごこちのいい所だった。窓の前の庭はまだ掘りくり返したままで赤土の上に草も生はえていなかったけれども、広い廊下の冷ややかな空気は涼しく病室に通りぬけた。葉子は六月の末以来始めて寢床の上に安々とからだを横たえた。疲労が回復するまでしば

らくの間手術は見合わせるといふので葉子は毎日一度ずつ内診をあいだしてもらうだけである事もなく日を過ごした。

しかし葉子の精神は興奮するばかりだった。一人ひとりになつて暇になつてみると、自分の心身がどれほど破壊されているかが自分ながら恐ろしいくらい感ぜられた。よくこんなありさまで今まで通して来たと驚くばかりだった。寝台の上にね臥てみると二度と起きて歩く勇氣もなく、また實際できもしなかった。ただ鈍痛とのみ思つていた痛みは、どつちに臥返ねつてみても我慢のできないほどの激痛になつていて、気が狂うように頭は重くうずいた。我慢にも貞世を見舞うなどという事はできなかつた。

こうして臥ねながらにも葉子は断片的にいろいろな事を考えた。

自分の手もとにある金の事をまず思案してみた。倉地から受け取った金の残りど、調度類を売り払ってもらつてできたまとまった金とが何もかにもこれから姉妹三人を養つて行くただ一つの資本だった。その金を使い尽くされた後には今のところ、何をどうするといふ<sup>あて</sup>用途は露ほどもなかつた。葉子はふだんの葉子に似合わずそれが気になり出してしかたがなかつた。特等室なぞにはいり込んだ事が後悔されるばかりだった。といつて今になつて等級の下がつた病室に移してもらふなどとは葉子としては思いもよらなかつた。

葉子はぜいたくな寝台の上に横になつて、羽根枕<sup>まくら</sup>に深々<sup>ふかぶか</sup>と頭を沈めて、氷<sup>ひょうのう</sup>嚢<sup>う</sup>を額にあてがいながら、かんかんと赤土にさ

している真夏の日の光を、広々と取った窓を通してながめやった。そうして物心ついてからの自分の過去を針で揉み込むような頭の中ですつと見渡すように考えたどつてみた。そんな過去が自分のものなのか、そう疑つて見ねばならぬほどにそれははるかにもかけ隔たつた事だつた。父母——ことに父のなめるような寵愛ちようあいの下もとに何一つ苦勞を知らずに清い美しい童女としてすらすらと育つたあの時分がやはり自分の過去なのだろうか。木部との恋に酔いふけて、国分寺こくぶんじの櫟くぬぎの林の中で、その胸に自分の頭を託して、木部のいう一語一語を美酒のように飲みほしたあの少女はやはり自分なのだろうか。女の誇りという誇りを一身に集めたような美貌びぼうと才能の持ち主として、女たちからは羨望せんぼうの的まととなり、

男たちからは嘆美の祭壇とされたあの青春の女性はやはりこの自分なのだろうか。誤解の中にも攻撃の中にも昂然こうぜんと首をもたげて、自分は今の日本に生まれて来くべき女ではなかったのだ。不幸にも時と所とを間違えて天上から送られた王女であるとまで自分に対する矜誇ほこりに満ちていた、あの妖婉ようえんな女性はまごうかたなく自分なのだろうか。絵島丸の中で味わい尽くしなめ尽くした歓楽と陶酔との限りは、始めて世に生まれ出た生きがいをしみじみと感じた誇りがなしばらくは今の自分と結びつけていい過去の一つなのだろうか……日はかかんかと赤土の上に照りつけていた。油あふらぜみ

蝉せみの声は御殿の池をめぐる鬱蒼うつそうたる木立ちのほうからしみ

入るように聞こえていた。近い病室では軽病の患者が集まって、

何かみだららしい雑談に笑い興じている声が聞こえて来た。それは実際なのか夢なのか。それらのすべては腹立たしい事なのか、<sup>かな</sup>哀しい事なのか、笑い捨つべき事なのか、嘆き恨まねばならぬ事なのか。……喜怒哀楽のどれか一つだけでは表わし得ない、不思議に交錯した感情が、葉子の目からとめどなく涙を誘い出した。あんな世界がこんな世界に変わってしまった。そうだ貞世が生死の境にさまよっているのはまちがいようのない事実だ。自分の健康が衰え果てたのも間違いない出来事だ。もし毎日貞世を見舞う事ができるのならはこのままここにいるのもいい。しかし自分のからだの自由さえ今はきかなくなつた。手術を受ければどうせ当分は身動きもできないのだ。岡や愛子……そこまで来ると葉子

は夢の中にいる女ではなかった。まざまざとした煩悩ほんのうが勃然ぼつぜんとしてその齒がみした物すごい鎌首かまくびをきつともたげるのだった。それもよし。近くいても看視のきかないのを利用したくば思うさま利用するがいい。倉地と三人で勝手な陰謀を企てるがいい。どうせ看視のきかないものなら、自分は貞世のためにどこか第二流か第三流の病院に移ろう。そしていくらでも貞世のほうを安樂にしてやろう。葉子は貞世から離れるといちずにそのあわれさが身にしみてこう思った。

葉子はふとつやの事を思い出した。つやは看護婦になつて京橋あたりの病院にいと双鶴館そうかくかんからいつて来たのを思い出した。愛子を呼び寄せて電話でさがさせようと決心した。

## 四六

まつ暗な廊下が古ぼけた縁側になったり、縁側の突き当たりに階子段はしごだんがあつたり、日当たりのいい中二階ちゅううのような部屋へやがあつたり、納戸なんどと思われる暗い部屋に屋根を打ち抜いてガラスをはめて光線が引いてあつたりするような、いわばその界隈かいわいにたくさんある待合まちあいの建て物に手を入れて使っているような病院だつた。つやは加治木病院かじきというその病院の看護婦になつていた。

長く天氣が続いて、そのあとに激しい南風が吹いて、東京の市街はほこりまぶれになつて、空も、家屋も、樹木も、黄粉きなこでまぶ

したようになってあげく、気持ち悪く蒸し蒸しと膚を汗ばませるような雨に変わったある日の朝、葉子はわずかばかりな荷物を持って人力車で加治木病院に送られた。後ろの車には愛子が荷物の一部分を持って乗っていた。須田町すだちように出た時、愛子の車は日本橋の通りをまっすぐに一足ひとあし先に病院に行かして、葉子は外濠そとほりに沿うた道を日本銀行からしばらく行く釘店くぎだなの横よこちよう丁ちように曲がらせた。自分の住んでいた家を他所よそながら見て通りたい心持ちになつていたからだった。前幌まえほろのすきまからのぞくのだったけれども、一年の後にもそこにはさして変わった様子は見えなかつた。自分のいた家の前でちよつと車を止まらして中をのぞいて見た。門札には叔父おじの名はなくなつて、知らない他人の姓名が掲げられ

ていた。それでもその人は医者だと見えて、父の時分からの永えいじ寿堂ゆうどう病院という看板は相変わらず玄関えんげしの楣なげしに見えていた。長ちよう三さんしゆう洲しゆうと署名してあるその字も葉子には親しみの深いものだった。葉子がアメリカに出発した朝も九月ではあったがやはりその日のようにじめじめと雨の降る日だったのを思い出した。愛子が櫛くしを折つて急に泣き出したのも、貞世おこが怒つたような顔をして目に涙をいっばいためたまま見送っていたのもその玄関を見ると描くように思い出された。

「もういい早くやつておくれ」

そう葉子は車の上から涙声でいった。車は梶かじ棒ぼうを向け換えられて、また雨の中を小さく揺れながら日本橋のほうに走り出した。

葉子は不思議にそこに一緒に住んでいた叔父おじ叔母おばの事を泣きながら思いやった。あの人たちは今どこにどうしているだろう。あの白痴の子ももうずいぶん大きくなったろう。でも渡米を企ててからまだ一年とはたっていないんだ。へえ、そんな短い間にこれほどの変化が……葉子は自分で自分にあきれるようにそれを思いやった。それではあの白痴の子も思ったほど大きくなっていくわけではあるまい。葉子はその子の事を思うとどうしたわけか定子の事を胸が痛むほどきびしくおもい出してしまった。鎌倉かまくらに行つた時以来、自分のふところからもぎ放してしまつて、金輪際こんりんざい忘れてしまおうと堅く心に契つていたその定子が……それはその場合葉子を全く惨めみじにしてしまった。

病院に着いた時も葉子は泣き続けていた。そしてその病院のすぐ手前まで来て、そこに入院しようとした事を心から後悔してしまつた。こんな落魄らくはくしたような姿をつやに見せるのが堪たえがたい事のように思われ出したのだ。

暗い二階の部屋へやに案内されて、愛子が準備しておいた床に横になると葉子はだれに挨拶あいさつもせずにとだ泣き続けた。そこは運河の水のにおいが泥臭どろく通かよつて来るような所だつた。愛子は煤すすけた障しょうじ子の陰で手回りの荷物を取り出して案配あんばいした。口くちずく少なそうぞうの愛子は姉を慰めるような言葉も出さなかつた。外部が騒そうぞう々しいだけに部屋の中はなおさらひっそりと思われた。

葉子はやがて静かに顔をあげて部屋の中を見た。愛子の顔色が

黄色く見えるほどその日の空も部屋の中も寂さびれていた。少し黴かびを持もつたようにほこりつぽくぶくぶくする畳の上には丸盆の上に大  
学病院から持つて来た葉びんが乗せてあつた。障子ぎわには小さ  
な鏡台が、違ちがい棚だなには手文庫と硯すずりばこ箱ばこが飾かられたけれども、床  
の間には幅物ふくもの一つ、花活はなひけ一つ置いてなかつた。その代わりに  
草色の風呂敷ふろしきに包み込んだ衣類と黒い柄えの parasol とが置いてあ  
つた。葉びんの乗せてある丸盆が、出入りの商人から到来のもの  
で、縁ふちの所に剥はげた所ができて、表には赤い短冊たんざくのついた矢が  
的まとに命中ましている画えが安やすっぽい金で描えいてあつた。葉子はそれを  
見ると盆もあるうにと思つた。それだけでもう葉子は腹はらが立つた  
り情なさけけなくなつたりした。

「愛さんあなた御苦労でも毎日ちよつとずつは来てくれないじゃ困りますよ。貞ちゃんさあの様子も聞きたいしね。……貞ちゃんも頼んだよ。熱が下がって物事がわかるようになる時にはわたしもなおつて帰るだろうから……愛さん」

いつものとおりはきはきとした手答えがないので、もうぎりぎりして来た葉子は剣けんを持った声で、「愛さん」と語気強く呼びかけた。言葉をかけるとそれでも片づけものの手を置いて葉子のほうに向き直った愛子は、この時ようやく顔を上げておとなしく「はい」と返事をした。葉子の目はすかさずその顔を発矢はっしとむちうった。そして寢床の上に半身を肘ひじにささえて起き上がった。車で揺られたために腹部は痛みを増して声をあげたいほどうずいて

いた。

「あなたにきょうははつきり聞いておきたい事があるの……あなたはや岡さんとひよんな約束なんぞしてはいますまいね」

「いゝえ」

愛子は手もなく素直すなおにこう答えて目を伏せてしまった。

「古藤さんとも？」

「いゝえ」

今度は顔を上げて不思議な事を問いただすというようにじつと葉子を見つめながらこう答えた。そのタクトがあるような、ないような愛子の態度が葉子をいやが上にいらだたした。岡の場合にはどこか後ろめたくて首をたれたとも見える。古藤の場合にはわ

ざとしらを切るために大胆に顔を上げたとも取れる。またそんな意味ではなく、あまり不思議な詰問が二度まで続いたので、二度目には怪訝けげんに思つて顔を上げたのかとも考えられる。葉子は畳みかけて倉地の事まで問い正そうとしたが、その気分はくだかれてしまった。そんな事を聞いたのが第一愚かだった。隠し立てをしようとした以上は、女は男よりもはるかに巧妙で大胆なのを葉子は自分で存分に知り抜いているのだ。自分から進んで内うちかぶ兜とを見透かされたようなもどかしさはいっそう葉子の心を憤らした。

「あなたは二人ふたりから何かそんな事をいわれた覚えがあるでしょう。その時あなたはなんと御返事したの」

愛子は下を向いたまま黙っていた。葉子は凶星ずほしをさしたと思つて嵩かさにかかつて行つた。

「わたしは考えがあるからあなたの口からもその事を聞いておきたいんだよ。おつしやいな」

「お二人ともなんにもそんな事はおつしやりはしませんわ」

「おつしやらない事があるもんかね」

憤怒ふんぬに伴つてさしこんで来る痛みを憤怒と共にぐつと押えつけながら葉子はわざと声を和らげた。そうして愛子の挙動を爪つめの先ほども見のがすまいとした。愛子は黙ってしまった。この沈黙は愛子の隠れ家がだった。そうなるやさすがの葉子もこの妹をどう取り扱う術すべもなかった。岡なり古藤なりが告白をしているのなら、

葉子がこの次にいい出す言葉で様子は知れる。この場合うつかり葉子の口車には乗られないと愛子は思つて沈黙を守つているのかもしれない。岡なり古藤なりから何か聞いているのなら、葉子はそれを十倍も二十倍もの強さにして使いこなす術を知つて<sup>すべ</sup>いるのだけれども、あいにくその備えはしていなかつた。愛子は確かに自分をあなどり出していると葉子は思わないではいられなかつた。寄つてたかつて大きな詐偽の網を造つて、その中に自分を押しこめて、周囲からながめながらおもしろそうに笑つている。岡だろ<sup>いのし</sup>うが古藤だろうが何があてになるものか。……葉子は手傷を負つた猪のように一直線に荒れて行くよりしかたがなくなつた。

「さあお言い愛さん、お前さんが黙つてしまうのは悪い癖ですよ。

ねえさんを甘くお見でないよ。……お前さんほんとうに黙ってるつもりかい……そうじゃないでしょう、あればあるなければないで、はつきりわかるように話をしてくれるんだらうね……愛さん……あなたは心からわたしを見くびってかかるんだね」

「そうじゃありません」

あまり葉子の言葉が激して来るので、愛子は少しおそれを感じたらしくあわててこういって言葉でささえようとした。

「もつとこつちにおいで」

愛子は動かなかつた。葉子の愛子に対する憎悪ぞうおは極点に達した。葉子は腹部の痛みも忘れて、寝床から跳おどり上がった。そうしていきなり愛子のたぶさをつかもうとした。

愛子はふだんの冷静に似ず、葉子の発作ほっさを見て取ると、びんしよ敏

捷うに葉子の手もとをすり抜けて身をかわした。葉子はふらふら

とよろけて一方の手を障子紙に突っ込みながら、それでも倒れる

はずみに愛子の袖そで先をつかんだ。葉子は倒れながらそれをたぐ

り寄せた。醜い姉妹の争闘が、泣き、わめき、叫び立てる声の中

に演ぜられた。愛子は顔や手に搔かき傷を受け、髪をおどろに乱し

ながらも、ようやく葉子の手を振り放して廊下に飛び出した。葉

子はよろよろとした足取りでそのあとを追ったが、とても愛子の

敏びんしよ捷しょうさにはかなわなかった。そして階はしご子段の降り口の所で

つやに食い止められてしまった。葉子はつやの肩に身を投げかけ

ながらおいおいと声を立てて子供のよう泣き沈んでしまった。

幾時間かの人事不省の後に意識がはつきりしてみると、葉子は愛子とのいきさつをただ悪夢のように思い出すばかりだった。しかもそれは事實に違いない。枕まくらもとの障子には葉子の手のさし込まれた孔あなが、大きく破れたまま残っている。入院のその日から、葉子の名は口さがない婦人患者の口の端はにうるさくのぼっているに違いない。それを思うと一時でもそこにじつとしているのが、堪たえられない事だった。葉子はすぐほかの病院に移ろうと思つてつやにいいつけた。しかしつやはどうしてもそれを承知しなかつた。自分が身に引き受けて看護するから、ぜひともこの病院で手術を受けてもらいたいとつやはいい張つた。葉子から暇を出されながら、妙に葉子に心を引きつけられているらしい姿を見ると、

この場合葉子はずやにしみじみとした愛を感じた。清潔な血が細いしなやかな血管を滞りなく流れ回っているような、すべすべと健康らしい、浅黒いつやの皮膚は何よりも葉子には愛らしかった。始終吹き出物でもしそうな、うみ膿っぽい女を葉子は何よりも呪わのろしいものに思っていた。葉子はずやのまめやかな心と言葉に引かされてそこに残る事にした。

これだけ貞世から隔たると葉子は始めて少し気のゆるむのを覚えて、腹部の痛みで突然目をさますほかにはたわいなく眠るような事もあった。しかしなんといつてもいちばん心にかかるものは貞世だった。ささくれて、赤くかわいた口びるからもれ出るあのうわごと囁言……それがどうかすると近ちかぢか々と耳に聞こえたり、ぼんや

りと目を開いたりするその顔が浮き出して見えたりした。そればかりではない、葉子の五官は非常に敏捷びんしょうになつて、おまけにイリュウジョンやハルシネーションを絶えず見たり聞いたりするようになつてしまつた。倉地なんぞはすぐそばにすわっているなと思つて、苦しさに目をつぶりながら手を延ばして畳の上を探つてみる事などもあつた。そんなにはつきり見えたり聞こえたりするものが、すべて虚構であるのを見いだすさびしさはたとえようがなかつた。

愛子は葉子が入院の日以来感心に毎日訪れて貞世の容体を話して行つた。もう始めの日のような狼藉ろうぜきはしなかつたけれども、その顔を見たばかりで、葉子は病氣が重おもるように思つた。ことに

貞世の病状が軽くなって行くという報告は激しく葉子を怒らした。自分があれほどの愛着をこめて看護してもよくならなかつたものが、愛子なんぞの通り一ぺんの世話でなおるはずがない。また愛子はいいかげんな気休めに虚言うそをついているのだ。貞世はもうひよつとすると死んでいるかもしれない。そう思つて岡が尋ねて来た時に根掘り葉掘り聞いてみるが、二人の言葉があまりに符合するので、貞世のだんだんよくなつて行きつつあるのを疑う余地はなかつた。葉子には運命が狂い出したようにしか思われなかつた。愛情というものなしに病気がなおせるなら、人の生命は機械でも造り上げる事ができるわけだ。そんなはずはない。それなのに貞世はだんだんよくなつて行つてゐる。人ばかりではない、神まで

が、自分を自然法の他の法則でもてあそばうとしているのだ。

葉子は齒がみをしながら貞世が死ねかしと祈るような瞬間を持った。

日はたつけれども倉地からはほんとうになんの消息もなかった。病的に感覚の興奮した葉子は、時々肉体的に倉地を慕う衝動に駆り立てられた。葉子の心の目には、倉地の肉体のすべての部分は触れる事ができると思うほど具体的に想像された。葉子は自分で造り出した不思議な迷宮の中にあつて、意識のしびれきるような陶酔にひたつた。しかしその酔いがさめたあとの苦痛は、精神の疲弊と一緒に働いて、葉子を半死半生の堺さかいに打ちのめした。葉子は自分の妄想もうそうに嘔吐おうとを催しながら、倉地といわずすべての男を

呪いの  
呪いに呪った。

いよいよ葉子が手術を受けるべき前の日が来た。葉子はそれ  
さほど恐ろしい事とは思わなかった。子宮後屈症と診断された時、  
買つて帰つて読んだ浩澣こうかんな医書によつて見ても、その手術は割  
合に簡単なものであるのを知り抜いていたから、その事について  
は割合に安々やすやすとした心持ちでいる事ができた。ただ名状し難いがた  
焦躁と悲哀とはどう片づけようもなかった。毎日来ていた愛子の  
足は二日おきになり三日おきになりだんだん遠ざかった。岡など  
は全く姿を見せなくなつてしまつた。葉子は今さらに自分のまわ  
りをさびしく見回してみた。出あうかぎりの男と女とが何がなし  
にひき着けられて、離れる事ができなくなる、そんな磁力のよう

な力を持っているという自負に氣負つて、自分の周囲には知ると知らざるとを問わず、いつでも無数の人々の心が待っているように思っていた葉子は、今はすべての人から忘れ果てて、大事な定子からも倉地からも見放し見放されて、荷物のない物置き部屋ベヤのような貧しい一室のすみっこに、夜具にくるまって暑氣に蒸されながらくずれかけた五体をたよりなく横たえねばならぬのだ。それは葉子に取つてはあるべき事とは思われぬまでだった。しかしそれが確かな事実であることをどうしよう。

それでも葉子はまだ立ち上がろうとした。自分の病氣が癒えいきつたその時を見ているがいい。どうして倉地をもう一度自分のものに仕遂しおせるか、それを見ているがいい。

葉子は脳心にたぐり込まれるような痛みを感じずる両眼から熱い涙を流しながら、徒然つれづれなままに火のような一心を倉地の身の上に集めた。葉子の顔にはいつでもハンケチがあてがわれていた。それが十分もたたないうちに熱くぬれ通つて、つやに新しいのと代えさせねばならなかつた。

## 四七

その夜六時すぎ、つやが来て障子しょうじを開いてだんだん満ちて行くこうとする月が瓦屋根かわらの重なりの上にぽっかりのぼったのをのぞかせてくれている時、見知らぬ看護婦が美しい花束と大きな西洋

封筒に入れた手紙とを持ってはいつて来てつやに渡した。つやはそれを葉子の枕もとまくらに持って来た。葉子はもう花も何も見る気にはなれなかった。電気もまだ来ていないのでつやにその手紙を読ませてみた。つやは薄明りにすかしすかし読みにくそうに文字を拾った。

「あなたが手術のために入院なさった事を岡君から聞かされて驚きました。で、きょうが外出日であるのを幸いにお見舞いします。

「僕ぼくはあなたにお目にかかる気にはなりません。僕はそれほど偏狭に出来上がった人間です。けれども僕はほんとうにあなたをお気の毒に思います。倉地という人間が日本の軍事上の秘密

を外国にもらす商売に関係した事が知れるとともに、姿を隠したという報道を新聞で見た時、僕はそんなに驚きませんでした。しかし倉地には二人ほどの外ふたり 妾がいしやうがあると思ひ付け加えて書いてあるのを見て、ほんとうにあなたをお気の毒に思いました。この手紙を皮肉に取らないでください。僕には皮肉はいえませんが、

「僕はあなたが失望なさないように祈ります。僕は来週の月曜日から習志野ならしののほうに演習に行きます。木村からのたよりでは、彼は窮迫の絶頂にいるようです。けれども木村はそこを突き抜けるでしょう。」

「花を持って来てみました。お大事に。」

古藤生」

つやはつかえつかえそれだけを読み終わった。始終古藤をはるか年下な子供のように思っている葉子は、一種侮蔑ぶべつするような無感情をもつてそれを聞いた。倉地が外がいしやう妾ふたりを二人持つてるといいうわさは初耳ではあるけれども、それは新聞の記事であつてみればあてにはならない。その外妾二人というのが、美人屋敷と評判のあつたそこに住む自分と愛子ぐらいの事を想像して、記者ならばいいそんな事だ。ただそう軽くばかり思つてしまった。

つやがその花束をガラスびんにいけて、なんにも飾つてない床の上に置いて行つたあと、葉子は前同様にハンケチを顔にあてて、機械的に働く心の影と戦おうとしていた。

その時突然死が——死の問題ではなく——死がはつきりと葉子

の心に立ち現われた。もし手術の結果、子宮底に穿孔せんこうができるようになつて腹膜炎を起こしたら、命の助かるべき見込みはないのだ。そんな事をふと思ひ起こした。部屋へやの姿も自分の心もどこと云つて特別に変わったわけではなかつたけれども、どことなく葉子の周囲には確かに死の影がさまよつてゐるのをしつかりと感じないではいられなくなつた。それは葉子が生まれてから夢にも経験しない事だつた。これまで葉子が死の問題を考えた時には、どうして死を招き寄せようかという事ばかりだつた。しかし今は死のほうこそそろそろと近寄つて来ているのだ。

月はだんだん光を増して行つて、電灯に灯ひもともつていた。目の先に見える屋根の間からは、炊煙かやだか、蚊遣かやり火びだかがうつつ

らと水のように澄みわたった空に消えて行く。履はき物もの、車馬の類、汽笛の音、うるさいほどの人々の話し声、そういうものは葉子の部屋をいつものとおり取り巻きながら、そして部屋の中はとにかく整頓せいとんして灯ひがともっていて、少しの不思議もないのに、どことも知れずそこには死がはい寄って来ていた。

葉子はぎよつとして、血の代わりに心臓の中に氷の水を瀉そぎこまれたように思った。死のうとする時はとうとう葉子には来ないで、思いもかけず死ぬ時が来たんだ。今までとめどなく流していた涙は、近づくあらしの前のそよ風のようにどこともなく姿をひそめてしまっていた。葉子にあわてふためいて、大きく目を見開き、鋭く耳をそびやかして、そこにある物、そこにある響きを捕

えて、それにすがり付きたいと思つたが、目にも耳にも何か感ぜられながら、何が何やら少しもわからなかつた。ただ感ぜられるのは、心の中がわけもなくただわくわくとして、すがりつくものがあれば何にでもすがりつきたいと無性<sup>むしよう</sup>にあせっている、その目まぐるしい欲求だけだつた。葉子は震える手で枕<sup>まくら</sup>をなで回したり、シーツをつまみ上げてじつと握り締めてみたりした。冷たい油汗が手のひらににじみ出るばかりで、握つたものは何の力にもならない事を知つた。その失望は形容のできないほど大きなものだつた。葉子は一つの努力ごとにかっかりして、また懸命にたよりになるもの、根のあるようなものを追ひ求めてみた。しかしどこをさがしてみてもすべての努力が全くむだなのを心では本能的

に知っていた。

周囲の世界は少しのこだわりもなくずると平気で日常の営みをしていた。看護婦が草履ぞうりで廊下を歩いて行く、その音一つを考えてみても、そこには明らかに生命が見いだされた。その足は確かに廊下を踏み、廊下は礎いしずえに続き、礎は大地に据すえられていた。患者と看護婦との間に取りかわされる言葉一つにも、それを与える人と受ける人とがちゃんと大地の上に存在していた。しかしそれらは奇妙にも葉子とは全く無関係で没交渉だった。葉子のいる所にはどこにも底がない事を知らねばならなかった。深い谷に誤って落ち込んだ人が落ちた瞬間に感ずるあの焦躁……それが連続してやむ時なく葉子を襲うのだった。深さのわからないような暗

い闇やみが、葉子をただ一人ひとりまん中に据えておいて、果てしなくそのまわりを包もうと静かに静かに近づきつつある。葉子は少しもそんな事を欲しないのに、葉子の心持ちには頓とん着じやくなく、休む事なくとどまる事なく、悠ゆう々ゆう閑々として近づいて来る。葉子は恐ろしさにおびえて声も得え上げなかつた。そしてただそこからのがれ出たい一心に心ばかりがあせりにあせつた。

もうだめだ、力が尽き切つたと、観念しようとした時、しかし、その奇怪な死は、すうつと朝霧が晴れるように、葉子の周囲から消えうせてしまった。見た所、そこには何一つ変わった事もなければ変わった物もない。ただ夏の夕ゆうべが涼しく夜につながろうとしているばかりだった。葉子はきよとんとして底ひさしの下に水々しく漂

う月を見やつた。

ただ不思議な変化の起こつたのは心ばかりだつた。荒磯あらいそに波

また波が千変万化して追いかぶさつて来ては激しく打ちくだけて、  
まっ白な飛沫ひまつを空高く突き上げるように、これといつて取り留め

のない執着や、憤りや、悲しみや、恨みやが蛛手くもてによれ合つて、

それが自分の周囲の人たちと結び付いて、わけもなく葉子の心をかきむしつていたのに、その夕方の不思議な経験のあとでは、一筋の透明なさびしさだけが秋の水のように果てしもなく流れてい  
るばかりだつた。不思議な事には寝入つても忘れきれないほどの  
頭脳あつの激痛も痕あとなくなつていた。

神がかりにあつた人が神から見放された時のように、葉子は深

い肉体の疲労を感じて、寢床の上に打ち伏さってしまった。そうやってしていると自分の過去や現在が手に取るようにはつきり考えられ出した。そして冷ややかな悔恨が泉のようにわき出した。

「間違っていた……こう世の中を歩いて来るんじゃない。しかしそれはだれの罪だ。わからない。しかしとにかく自分には後悔がある。できるだけ、生きてるうちにそれを償っておかなければならない」

内田の顔がふと葉子には思い出された。あの厳格なキリストの教師ははたして葉子の所に尋ねて来てくれるかどうかわからない。そう思いながらも葉子はもう一度内田にあつて話をしたい心持ちを止める事ができなかった。

葉子は枕<sup>まくら</sup>もとのベルを押してつやを呼び寄せた。そして手文庫の中から洋紙でとじた手帳を取り出さして、それに毛筆で葉子のいう事を書き取らした。

「木村さんに。」

「わたしはあなたを詐<sup>いつわ</sup>つておりました。わたしはこれから他の男に嫁入ります。あなたはわたしを忘れてくださいまし。わたしはあなたの所に行ける女ではないのです。あなたのお思い違いを充分御自分で調べてみてくださいまし。」

「倉地さんに。」

「わたしはあなたを死ぬまで。けれども二人<sup>ふたり</sup>とも間違っていた事を今はつきり知りました。死を見てから知りました。あなた

にはおわかりになりますまい。わたしは何もかも恨みはしませ  
 ん。あなたの奥さんはどうなさっておいでです。……わたしは  
 一緒に泣く事ができる。

「内田のおじさんに。」

「わたしは今夜になっておじさんを思い出しました。おば様に  
 よろしく。」

「木部きべさんに。」

「一人ひとりの老女があなたの所に女の子を連れて参るでしょう。そ  
 の子の顔を見てやってくださいまし。」

「愛子と貞世に。」

「愛さん、貞さあちゃん、もう一度そう呼ばしておくれ。それでた

くさん。

「岡さんに。」

「わたしはあなたをも怒おこつてはいません。

「古藤さんに。」

「お花とお手紙とをありがとう。あれからわたしは死を見ました。」

七月二十一日 葉子」

つやはこんなぼつりぼつりと短い葉子の言葉を書き取りながら、時々怪訝けげんな顔をして葉子を見た。葉子の口びるはさびしく震えて、目にはこぼれない程度に涙がにじみ出していた。

「もうそれでいいありがとうよ。あなただけね、こんなになつて

しまったわたしのそばにいてくれるのは。……それなのに、わたしはこんなに零落した姿をあなたに見られるのがつらくって、来た日は途中からほかの病院に行つてしまおうかと思つたのよ。ばかだつたわね」

葉子は口ではなつかしそうに笑いながら、ほろほろと涙をこぼしてしまつた。

「それをこの枕まくらの下に入れておいておくれ。今夜こそはわたし久しぶりで安々とした心持ちで寝られるだろうよ、あすの手術に疲れないようによく寝ておかないといけないわね。でもこんなに弱つていても手術はできるのかしらん……もう蚊帳かやをつつておくれ。そしてついでに寢床をもつとそつちに引っぱつて行つて、月の光

が顔にあたるようにしてちようだいな。戸は寝入ったら引いておくれ。……それからちよつとあなたの手をお貸し。……あなたの手は温あたたかい手ね。この手はいい手だわ」

葉子は人の手というものをこんなになつかしいものに思った事はなかつた。力をこめた手でそつと抱いて、いつまでもやさしくそれをなでていたかつた。つやもいつか葉子の気分に取り入れられて、鼻をすするまでに涙ぐんでいた。

葉子はやがて打ち開いた障子から蚊帳かや越しにうつとりと月をながめながら考えていた。葉子の心は月の光で清められたかと思えた。倉地けんぎが自分を捨てて逃げ出すために書いた狂言が計らずその筋の嫌疑けんぎを受けたのか、それとも恐ろしい売国の罪で金をすら葉

子に送れぬようになったのか、それはどうでもよかつた。よしんば妾めかけが幾人あつてもそれもどうでもよかつた。ただすべてがむなしく見える中に倉地だけがただ一人ひとりほんとうに生きた人のように葉子の心に住んでいた。互いを墮落させ合うような愛しかたをした、それも今はなつかしい思い出だつた。木村は思えば思うほど涙ぐましい不幸な男だつた。その思い入つた心持ちは何事もわだかまりのなくなつた葉子の胸の中を清水しみずのように流れて通つた。多年の迫害に復讐ふくしゅうする時機が来たというように、岡までをそのかして、葉子を見捨ててしまつたと思われる愛子の心持ちにも葉子は同情ができた。愛子の情けに引かされて葉子を裏切つた岡の気持ちはなおさらよくわかつた。泣いても泣いても泣き足り

ないようにかわいそうなのは貞世だった。愛子はいまにきつと自分以上に恐ろしい道に踏み迷う女だと葉子は思った。その愛子のただ一人の妹として……もしも自分の命がなくなってしまった後は……そう思うにつけて葉子は内田を考えた。すべての人は何かの力で流れて行くべき先に流れて行くだろう。そしてしまいにはだれでも自分と同様に一人ぼっちになってしまふんだ。……どの人を見てもあわれまれる……葉子はそう思いふけりながら静かに静かに西に回って行く月を見入っていた。その月の輪郭がだんだんぼやけて来て、空の中に浮き漂うようになる、葉子のまつ毛の一つ一つにも月の光が宿った。涙が目じりからあふれて両方のこめかみの所をくすぐるようになるすると流れ下った。口の中は

粘液で粘った。許すべき何なんびと人もない。許さるべき何事もない。ただあるがまま……ただ一いちまつ抹の清い悲しい静けさ。葉子の目はひとりでに閉じて行つた。整つた呼吸が軽く小鼻を震わして流れた。

つやが戸をたてにそーつとその部屋へやにはいつた時には、葉子は病気を忘れ果てたもののように、がたぴしと戸を締める音にも目ざめずに安らげく寝入っていた。

## 四八

その翌朝手術台にのぼろうとした葉子は昨夜の葉子とは別人の

ようだった。激しい呼鈴よびりんの音で呼ばれてつやが病室に来た時には、葉子は寢床から起き上がって、したため終わった手紙の状袋を封じている所だったが、それをつやに渡そうとする瞬間にいきなりいやになって、口びるをぶるぶる震わせながらつやの見ている前でそれをずたずたに裂いてしまった。それは愛子にあてた手紙だったのだ。きようは手術を受けるから九時までにせひとも立ち会いに来るようにとしたためたのだった。いくら気丈夫でも腹を立ち割る恐ろしい手術を年若い少女が見ていられないくらいは知っていたいながら、葉子は何がなしに愛子にそれを見せつけてやりたくなつたのだ。自分の美しい肉体がむごたらしく傷つけられて、そこから静脈じょうみやくを流れているどす黒い血が流れ出る、それを愛

子が見ているうちに気が遠くなつて、そのままそこに打ち倒れる、そんな事になつたらどれほど快いだろうと葉子は思った。幾度来てくれると電話をかけても、なんとか口実をつけてこのごろ見も返らなくなつた愛子に、これだけの復讐ふくしゅうをしてやるのでも少しは胸がすく、そう葉子は思ったのだ。しかしその手紙をつやに渡そうとする段になると、葉子には思いもかけぬ躊躇ちゆうちよが来た。もし手術中にはしたくない囁言うわごとでもいってそれを愛子に聞かれたら。あの冷刻れいこくな愛子が面もそむけずにじつと姉の肉体が切りさいなまれるのを見続けながら、心の中で存分に復讐ふくしゅう心を満足するような事があつたら。こんな手紙を受け取つてもてんで相手にしないで愛子が来なかつたら……そんな事を予想すると葉子は

手紙を書いた自分に愛想が尽きてしまった。

つやは恐ろしいまでに激げきこ昂うした葉子の顔を見やりもし得ないで、おずおずと立ちもやらずにそこにかしこまっていた。葉子はそれがたまらないほど癩しやくにさわった。自分に対してすべての人が普通の人間として交わろうとはしない。狂人にでも接するような仕打ちを見せる。だれも彼もそうだ。医者までがそうだ。

「もう用はないのよ。早くあつちにおいで。お前はわたしを氣狂きちがいとも思っているんだらうね。……早く手術をしてくださいってそういっておいで。わたしはちゃんと死ぬ覚悟をしていますからってね」

ゆうべなつかしく握ってやったつやの手の事を思い出すと、葉

子は嘔吐おうとを催すような不快を感じてこういった。きたないきたない何もかもきたない。つやは所在なげにそつとそこを立つて行った。葉子は目でかみつくようにその後ろ姿を見送った。

その日天気は上々で東向きの壁はさわってみたら内部からでもほんのりと暖かみを感じずるだろうと思われるほど暑くなっていた。葉子はきのうまでの疲労と衰弱とに似ず、その日は起きるとから黙ねって臥ねてはいられないくらい、からだは動かしたかった。動かすたびごとに襲ねつて来る腹部の鈍痛や頭の混乱をいやが上にも募らして、思い存分の苦痛を味わってみたいような捨すてばちな気分になつていた。そしてふらふらと少しよろけながら、衣紋えもんも乱みだりたまま部屋へやの中を片づけようとして床の間の所に行った。懸かけ軸

もない床の間の片すみにはきのう古藤が持つて来た花が、暑さのために蒸むれたようにしぼみかけて、甘ったるい香を放つてうなだれていた。葉子はガラスびんごとそれを持って縁側の所に出た。そしてその花のかたまりの中にむずと熱した手を突っ込んだ。死し屍しから来るような冷たさが葉子の手に伝わった。葉子の指先は知らず知らず縮まって没もぎ義道どうにそれを爪つめも立たんばかり握りつぶした。握りつぶしてはびんから引き抜いて手欄てすりから戸外に投げ出した。薔薇ばら、ダリア、小田巻おだまき、などの色とりどりの花がばらばらに乱れて二階から部屋の下に当たるきたない路頭に落ちて行つた。葉子はほとんど無意識に一つかみずつそうやって投げ捨てた。そして最後にガラスびんを力任せにたたきつけた。びんは目の下で

激しくこわれた。そこからあふれ出た水がかわききつた縁側板に丸い斑紋はんもんをいくつとなく散らかして。

ふと見ると向こうの屋根の物干し台に浴衣ゆかたの類を持つて干しに上がって来たらしい女中風の女が、じつと不思議そうにこつちを見つめているのに気がついた。葉子とは何の関係もないその女まだが、葉子のする事を怪しむらしい様子をしているのを見ると、葉子の狂暴な気分はますます募った。葉子は手欄てすりに両手をついてぶるぶると震えながら、その女をいつまでもいつまでもにらみつけた。女のほうでも葉子の仕打ちに気づいて、しばらくは意趣いしゆに見返すふうだったが、やがて一種の恐怖に襲われたらしく、干し物を竿さおに通しもせずにあたふたとあわてて干し物台の急な階子はしごを

駆けおりてしまった。あとには燃えるような青空の中に不規則な屋根の波ばかりが目をちかちかさせて残っていた。葉子はなぜにも知れぬため息を深くついてまんじりとそのあからさまな景色けしきを夢かなぞのようにながめ続けていた。

やがて葉子はまたわれに返って、ふくよかな髪の中に指を突っ込んで激しく頭の地じをかきながら部屋もとに戻った。

そこには寢床のそばに洋服を着た一人ひとりの男が立っていた。激しい外光から暗い部屋へやのほうに目を向けた葉子には、ただまっ黒な立ち姿が見えるばかりでだれとも見分けがつかなかった。しかし手術のために医員の一人が迎えに来たのだと思われた。それにしても障子しょうじのあく音さえしなかったのは不思議な事だ。はいって

来ながら声一つかけないのも不思議だ。と、思うと得えたい体のわから  
ないその姿は、そのまわりの物がだんだん明らかになつて行く間  
に、たった一つだけまつ黒なままでいつまでも輪郭を見せないよ  
うだった。いわば人の形をしたまつ暗な洞ほらあな穴が空気の中に出  
上がったようだった。始めの間あいだ好奇心をもつてそれをながめてい  
た葉子は見つめれば見つめるほど、その形に実質がなくなつて、ま  
つ暗な空虚ばかりであるように思い出すと、ぞーつと水を浴びせ  
られたように怖毛おぞけをふるつた。「木村が来た」……何という事な  
しに葉子はそう思い込んでしまった。爪つめの一枚一枚までが肉に吸  
い寄せられて、毛という毛が強きょうちよく直して逆立さかだつような薄気味わ  
るさが総身そうみに伝わつて、思わず声を立てようとしながら、声は出

ずに、口びるばかりがかすかに開いてぶるぶると震えた。そして胸の所に何か突きつけるような具合に手をあげたまま、ぴったりと立ち止まってしまった。

その時その黒い人の影のようなものが始めて動き出した。動いてみるとなんでもない、それはやはり人間だった。見る見るその姿の輪郭がはつきりわかって来て、暗さに慣れて来た葉子の目にはそれが岡である事が知れた。

「まあ岡さん」

葉子はその瞬間のなつかしさに引き入れられて、今まで出なかつた声をどもるような調子で出した。岡はかすかに頬ほおを紅あからめたようだった。そしていつものとおりに上品に、ちよつと畳の上に膝ひざ

をついて挨拶あいさつした。まるで一年も牢獄ろうごくにいて、人間らしい人間にあわないでいた人のように葉子には岡がなつかしかった。葉子とはなんの関係もない広い世間から、一人の人が好意をこめて葉子を見舞うためにそこに天降あまくだったとも思われた。走り寄ってしっかりとその手を取りたい衝動を抑おさえる事ができないほどに葉子の心は感激していた。葉子は目に涙をためながら思うままの振る舞いをした。自分でも知らぬ間に、葉子は、岡のそば近くすわって、右手をその肩に、左手を畳に突いて、しげしげと相手の顔を見やる自分を見いだした。

「ごぶさたしていました」

「よくいらしってくださいね」

どつちからいい出すともなく二人の言葉は親しげにからみ合った。葉子は岡の声を聞くと、急に今まで自分から逃げていた力が回復して来たのを感じた。逆境にいる女に対して、どんな男であれ、男の力がどれほど強いものであるかを思い知った。男性の頼もしさがしみじみと胸に逼った。<sup>せま</sup>葉子はわれ知らずすがり付くように、岡の肩にかけていた右手をすべらして、<sup>ひざ</sup>膝の上に乗せている岡の右手の甲の上からしつかりと捕えた。岡の手は葉子の触覚に妙に冷たく響いて来た。

「長く長くおあいしませんでしたわね。わたしあなたを幽霊じゃないかと思ひましてよ。変な顔つきをしたでしょう。貞世は……あなたけさ病院のほうからいらしたの？」

岡はちよつと返事をためらつたようだった。

「いゝえ家から来ました。ですからわたし、きよ様の御様子は知りませんが、きのうまでのところではだんだんおよろしいようです。目さえさめていらつしやると『おねえ様おねえ様』とお泣きなさるのがほんとうにおかわいそうです」

葉子はそれだけ聞くともう感情がもろくなつていて胸が張り裂けるようだった。岡は目ざとくもそれを見て取つて、悪い事をいふたと思つたらしかつた。そして少しあわてたように笑ひ足たしながら、

「そうかと思うと、たいへんお元気な事もあります。熱の下がついていらつしやる時なんかは、愛子さんにおもしろい本を読んでお

もらいになって、喜んで聞いておいでです」

と付け足した。葉子は直覺的に岡がその場の間に合わせをいつているのだと知った。それは葉子を安心させるための好意であるとはいえ、岡の言葉は決して信用する事ができない。毎日一度ずつ大学病院まで見舞いに行ってもらうつやの言葉に安心ができないでいて、だれか目に見たとおりを知らせてくれる人はないかとあせっていた矢先、この人ならばと思つた岡も、つや以上にいいかげんをいおうとしているのだ。この調子では、とうに貞世が死んでしまつていても、人たちは岡がいつて聞かせるような事をいつまでも自分にいうのだろう。自分にはだれ一人として胸を開いて交際しようという人はいなくなつてしまつたのだ。そう思うと

さびしいよりも、苦しいよりも、かっと取りのぼせるほど貞世の身の上が気づかわれてならなくなった。

「かわいそうに貞世は……さぞやせてしまったでしょうね？」  
葉子は口裏をひくようにこう尋ねてみた。

「始終見つけているせいですか、そんなにも見えません」

岡はハンカチで首のまわりをぬぐって、ダブル・カラーの合わせを左の手でくつろげながら少し息<sup>いき</sup>苦しそうにこう答えた。

「なんにもいたただけないんでしょうね」

「ソップと重湯<sup>おもゆ</sup>だけですが両方ともよく食べなさいます」

「ひもじがっておりますか」

「いゝえそんなでも」

もう許せないと葉子は思い入って腹を立てた。腸チブスの予後にあるものが、食欲がない……そんなしらじらしい虚構があるものか。みんな虚構だ。岡のいう事もみんな虚構だ。昨夜は病院に泊まらなかつたという、それも虚構でなくてなんだろう。愛子の熱情に燃えた手を握り慣れた岡の手が、葉子に握られて冷えるのももつともだ。昨夜はこの手は……葉子はひとみを定めて自分の美しい指にからまれた岡の美しい右手を見た。それは女の手のように白くなめらかだった。しかしこの手が昨夜は、……葉子は顔をあげて岡を見た。ことさらにあざやかに紅いその口びる……この口びるが昨夜は……眩暈がするほど一度に押し寄せて来た憤怒と嫉妬とのために、葉子は危うくその場にあり合わせたものにか

みつこうとしたが、からくそれをささえると、もう熱い涙が目をこがすように痛めて流れ出した。

「あなたはよくうそをおつきなさるのね」

葉子はもう肩で息いき気をしていた。頭が激しい動悸どうきのたびごとに震えるので、髪の毛は小刻みに生き物のようにおののいた。そして岡の手から自分の手を離して、袂たもとから取り出したハンケチでそれを押しぬぐった。目に入る限りのもの、手に触れる限りのものがまたけがらわしく見え始めたのだ。岡の返事も待たずに葉子は畳みかけて吐き出すようにいった。

「貞世はもう死んでいるんです。それを知らないとでもあなたは思っていらっしやるの。あなたや愛子に看護してもらえばだれで

もありがたい 往おうじよう 生せいができましたようよ。ほんとうに貞世は仕合  
わせな子でした。……おゝおゝ貞世！ お前はほんとに仕合わせ  
な子だねえ。……岡さんいつて聞かせてください、貞世はどんな  
死にかたをしたか。飲みたい死に水も飲まずに死にましたか。あ  
なたと愛子がお庭を歩き回っているうちに死んでいましたか。そ  
れとも……それとも愛子の目が憎々しく笑っているその前で眠る  
ように息いき気を引き取りましたか。どんなお葬式が出たんです。早はや  
桶やおけはどこで注文なさったんです。わたしの早桶のより少し大き  
くしないとはいりませんよ。……わたしはなんというばかだろう  
早く丈夫になって思いきり貞世を介抱してやりたいと思つたのに  
……もう死んでしまったのですものねえ。うそです……それから

なぜあなたも愛子ももつとしげしげわたしの見舞いには来てくだ  
 さらないの。あなたはきようわたしを苦しめに……なぶりにいら  
 したのね……」

「そんな飛んでもない！」

岡がせきこんで葉子の言葉の切れ目にいい出そうとするのを、  
 葉子は激しい笑いでさえぎった。

「飛んでもない……そのとおり。あゝ頭が痛い。わたしは存分に  
 のろ呪いを受けました。御安心なさいましとも。決してお邪魔はしま  
 せんから。わたしはさんざん踊りました。今度はあなた方が踊つ  
 ていい番ですものね。……ふむ、踊れるものならみごとに踊つて  
 ござんなさいまし。……踊れるものなら、はゝゝ」

葉子は狂女のように高々<sup>たかだか</sup>と笑った。岡は葉子の物狂おしく笑うのを見ると、それを恥じるようにまっ紅<sup>か</sup>になって下を向いてしまった。

「聞いてください」

やがて岡はこういつてきつとなった。

「伺いましょう」

葉子もきつとなつて岡を見やったが、すぐ口じりにむごたらしい皮肉な微笑をたたえた。それは岡の氣先<sup>きさき</sup>をさえ折るに充分なほどの皮肉さだった。

「お疑いなさつてもしかたがありません。わたし、愛子さんには深い親しみを感じております……」

「そんな事なら何うまでもありませんわ。わたしをどんな女だと思つていらつしやるの。愛子さんに深い親しみを感じていらつしやればこそ、けさはわざわざ何日いつごろ死ぬだろうと見に来てくださったのね。なんとお礼を申していいか、そこはお察しくださいまし。きようは手術を受けますから、死骸しがいになつて手術室から出て来る所をよつく御覧なさつてあなたの愛子に知らせて喜ばしてやつてくださいましよ。死に行く前に篤とくとお礼を申します。絵島丸ではいろいろ御親切をありがとうございます。お陰様でわたしはさびしい世の中から救い出されました。あなたをおにいさんともお慕いしていましたが、愛子に対しても気恥ずかしくありませんでしたから、もうあなたとは御縁を断ちます。というまでもない

事ですわね。もう時間が来ますからお立ちくださいまし」

「わたし、ちつとも知りませんでした。ほんとうにそのおからだで手術をお受けになるのですか」

岡はあきれたような顔をした。

「毎日大学に行くつやはほかですから何も申し上げなかつたんでしようよ。申し上げてもお聞こえにならなかつたかもしれないわね」

と葉子はほほえんで、まつさおになつた顔にふりかかる髪の毛を左の手で器用にかき上げた。その小指はやせ細つて骨ばかりのようになりながらも、美しい線を描いて折れ曲がつていた。

「それはぜひお延ばしく下さいお願いしますから……お医者さん

もお医者さんだと思ひます」

「わたしがわたしだもんですからね」

葉子はしげしげと岡を見やった。その目からは涙がすっかりかわいて、額の所には油汗がにじみ出ていた。触れてみたら氷のようだろうと思われるような青白い冷たさが生えぎわかけて漂っていた。

「ではせめてわたしに立ち会わしてください」

「それほどまでにあなたはわたしがお憎いの？……麻酔中ますいにわたしのいう嚙うわごと口くちでも聞いておいて笑い話の種になさろうというのね。え、ようございますいらつしやいまし、御覽に入れますかのろら。呪いのろのためにやせ細ってお婆ばあさんのようになってしまったこ

のからだを頭から足の爪つまさき先まで御覽に入れますから……今さら  
 おあきれになる余地もありますまいけれど」

そういつて葉子はやせ細った顔にあらん限りの媚こびを集めて、  
 流ながしめ眊めに岡を見やった。岡は思わず顔をそむけた。

そこに若い医員がつやをつれてはいつて来た。葉子は手術のし  
 たくができた事を見て取った。葉子は黙つて医員にちよつと挨あいさ  
 拶つしたまま衣紋えもんをつくろつてすぐ座を立った。それに続いて部  
 屋やを出て来た岡などは全く無視した態度で、怪しげな薄暗い階はしご  
 子段だんを降りて、これも暗い廊下を四五間けんたどつて手術室の前ま  
 で来た。つやが戸のハンドルを回してそれをあけると、手術室か  
 らはさすがにまぶしい豊かな光線が廊下のほうに流れて来た。そ

こで葉子は岡のほうに始めて振り返った。

「遠方をわざわざ御苦労さま。わたしはまだあなたに肌はだを御覽に入れるほどの莫連者ぼくれんものにはなっていないませんから……」

そう小さな声でいって悠々ゆうゆうと手術室にはいって行つた。岡はもちろん押し切つてあとについては来なかつた。

着物を脱ぐ間に、世話に立つたつやに葉子はこうようやくにしていった。

「岡さんはいりたいとおっしゃつても入れてはいけないよ。それから……それから（こで葉子は何がなしに涙ぐましくなつた）もしわたしが嚙うわごと言のような事でもいいかけたら、お前に一生のお願いだからね、わたしの口を……口を抑おさえて殺してしまつてお

くれ。頼むよ。きつと！」

婦人科病院の事とて女の裸体は毎日幾人となく扱いつけているくせに、やはり好奇心な目を向けて葉子を見守っているらしい助手たちに、葉子はやせさらばえた自分をさらけ出して見せるのが死ぬよりつらかった。ふとした出来心から岡に対していった言葉が、葉子の頭にはいつまでもこびり付いて、貞世はもうほんとうに死んでしまったもののように思えてしかたがなかった。貞世が死んでしまったのに何を苦しんで手術を受ける事があるろう。そう思わないでもなかった。しかし場合が場合でこうなるよりしかたがなかった。

まっ白な手術衣を着た医員や看護婦に囲まれて、やはりまっ白

な手術台は墓場のように葉子を待っていた。そこに近づくと葉子はわれにもなく急におびえが出た。思いきり鋭利なメスで手ぎわよく切り取ってしまったたらさぞさっぱりするだろうと思っていた腰部の鈍痛も、急に痛みが止まってしまつて、からだ全体がしびれるようにしやちこばつて冷や汗が額にも手にもしとどに流れた。葉子はただ一つの慰藉いしやのようにつやを顧みた。そのつやの励ますような顔をただ一つのたよりにして、細かく震えながら仰向けに冷やつとする手術台に横たわつた。

医員の一人がひとり白布の口あてを口から鼻の上にあてがつた。それだけで葉子はもう息気いきがつかまるほどの思いをした。そのくせ目は妙にさえて目の前に見る天井板の細かい木理もくめまでが動いて走るよ

うにながめられた。神経の末梢まつしやうが大風にあつたようにざわざわと小気味わるく騒ぎ立った。心臓が息苦しいいきほど時々働きを止めた。

やがて芳芬ほうふんの激しい薬滴が布の上にたらされた。葉子は両手の脈みやくどころ所を医員に取られながら、その香においを薄気味わるくかいだ。

「ひとつ」

執刀者が鈍い声でこういった。

「ひとつ」

葉子のそれに応ずる声は激しく震えていた。

「ふたーつ」

葉子は生命の尊とうとさをしみじみと思い知った。死もしくは死の隣へまでの不思議な冒険……そう思うと血は凍るかと思われた。

「ふたーつ」

葉子の声はますます震えた。こうして数を読んで行くうちに、頭の中がしんしんと冴さえるようになって行つたと思うと、世の中がひとりでに遠のくように思えた。葉子は我慢ができなかつた。いきなり右手を振りほどいて力任せに口の所を搔かい払つた。しかし医員の力はすぐ葉子の自由を奪つてしまった。葉子は確かにそれにあらがっているつもりだった。

「倉地が生きている間——死ぬものか、……どうしてももう一度その胸に……やめてください。狂気で死ぬとも殺されたくはない。

やめて……人殺し」

そう思ったのか、自分ながらどつちとも定めかねながら葉子はもだえた。

「生きる生きる……死ぬのはいやだ……人殺し！……」

葉子は力のあらん限り戦った、医者とも薬とも……運命とも……葉子は永久に戦った。しかし葉子は二十も数を読まないうちに、死んだ者同様に意識なく医員らの目の前に横たわっていたのだ。

## 四九

手術を受けてから三日を過ぎていた。その間非常に望ましい経

過を取っているらしく見えた容態は三日目の夕方から突然激変した。突然の高熱、突然の腹痛、突然の煩悶はんもん、それは激しい驟しゅう雨うが西風に伴われてあらしがかった天気模様になったその夕方の事だった。

その日の朝からなんとなく頭の重かった葉子は、それが天候のためだとばかり思つて、しいてそういうふうに分を説服して、憂慮おきを抑えつけていると、三時ごろからどんどん熱が上がり出して、それと共に下腹部の疼痛とうつうが襲つて来た。子宮底穿孔せんこうなまじつか医書を読みかじった葉子はすぐそつちに氣を回した。氣を回してはしいてそれを否定して、一時延ばしいっときに容態の回復を待ちこがれた。それはしかしむだだった。つやがあわてて当直

医を呼んで来た時には、葉子はもう生死を忘れて床の上に身を縮み上がらしておいおいと泣いていた。

医員の報告で院長も時を移さずそこに駆けつけた。応急の手あてとして四個の氷ひょうのう囊ふくろが下腹部にあてがわれた。葉子は寝衣ねまきがちよつと肌にさわるだけの事にも、生命をひっぱたかれるような痛みを覚えて思わずきやつと絹を裂くような叫び声をたてた。見る見る葉子は一いっすん寸の身動きもできないくらい疼痛とうつうに痛めつけられていた。

激しい音を立てて戸外では雨の脚あしが瓦屋根をたたいた。むしむしする昼間ひるまの暑さは急に冷え冷えとなつて、にわかひに暗くなつた部屋へやの中に、雨から逃げ延びて来たらしい蚊がぶーんと長く引い

た声を立てて飛び回った。青白い薄闇やみに包まれて葉子の顔は見る見るくずれて行つた。やせ細つていた頬ほおはことさらげつそりとこけて、高々とそびえた鼻筋の両側には、落ちくぼんだ両眼が、中ちゆう有ゆうの中を所きらわずおどおどと何物かをさがし求めるように輝いた。美しい弧を描いて延びていた眉まゆは、めちやくちやにゆがんで、眉間みけんの八の字の所に近々と寄り集まつた。かさかさにかわききつた口びるからは吐く息いきばかりが強く押し出された。そこにはもう女の姿はなかつた。得体えたいのわからない動物がもだえもがいているだけだつた。

間まを置いてはさし込んで来る痛み……鉄の棒をまつ赤かに焼いて、それで下腹の中を所きらわずえぐり回すような痛みが来ると、葉

子は目も口もできるだけ堅く結んで、息いき気もつけなくなってしまう。何人そこに人がいるのか、それを見回すだけの気力もなかった。天気なのかあらしなのか、それもわからなかった。稲妻が空を縫って走る時には、それが自分の痛みが形になって現われたように見えた。少し痛みが退くとほつと吐息といきをして、助けを求めるようにそこに付いている医員に目ですがつた。痛みさえなおしてくれれば殺されてもいいという心と、とうとう自分に致命的な傷を負わしたと恨む心とが入り乱れて、旋風のようにからだじゅうを通り抜けた。倉地がいてくれたら……木村がいてくれたら……あの親切な木村がいてくれたら……そりやだめだ。もうだめだ。……だめだ。貞世だつて苦しんでいるんだ、こんな事で……痛い

痛い痛い……つやはいるのか（葉子は思いきつて目を開いた。目の中が痛かった）いる。心配そうな顔をして、……うそだあの顔が何が心配そうな顔なものか……みんな他人だ……なんの縁故もない人たちだ……みんなのんきな顔をして何事もせずただ見ているんだ……この悩みの百分の一でも知ったら……あ、痛い痛い痛い！ 定子……お前はまだどこかに生きているのか、貞世は死んでしまったのだよ、定子……わたしも死ぬんだ死ぬよりも苦しい、この苦しみは……ひどい、これで死なれるものか……こんなにされて死なれるものか……何か……どこか……だれか……助けてくれそうなものだのに……神様！ あんまりです……

葉子は身もだえもできない激痛の中で、シートまでぬれとおる

ほどな油汗をからだじゆうにかきながら、こんな事をつぎつぎに口走るのだったが、それはもとより言葉にはならなかった。ただ時々痛いというのがむごたらしく聞こえるばかりで、傷ついた牛のように叫ぶほかはなかった。

ひどい吹き降りの中に夜が来た。しかし葉子の容態は険悪になつて行くばかりだった。電灯が故障のため来こないので、室内には二本の蠟ろうそく燭が風にあおられながら、薄暗くともっていた。熱度を計った医員は一度一度そのそばまで行つて、目をそばめながら度ども盛りを見た。

その夜苦しみ通した葉子は明けがた近く少し痛みからのがれる事ができた。シーツを思いきりつかんでいた手を放して、弱々と

額の所をなでると、たびたび看護婦がぬぐってくれたのにも係わらず、ぬるぬるするほど手も額も油汗でしとどになつていた。

「とても助からない」と葉子は他人事ひとごとのように思った。そうなつてみると、いちばん強い望みはもう一度倉地に会つてただ一目その顔を見たいという事だった。それはしかし望んでもかなえられない事でないのに気づいた。葉子の前には暗いものがあるばかりだった。葉子はほつとため息をついた。二十六年間の胸の中の思いを一時に吐き出してしまおうとするように。

やがて葉子はふと思ひ付いて目でつやを求めた。夜通し看護に余念のなかつたつやは目ざとくそれを見て寢床に近づいた。葉子は半分目つきに物をいわせながら、

「枕まくらの下枕の下」

といった。つやが枕の下をさがすとそこから、手術の前の晩につやが書き取った書き物が出て来た。葉子は一生懸命な努力でつやにそれを焼いて捨てる、今見ている前で焼いて捨てる命じた。葉子の命令はわかっていながら、つやが躡ちゆうちよ躡ちゆうちよしていると見ると、葉子はかっ腹が立って、その怒りに前後を忘れて起き上がろうとした。そのためになごんでいた下腹部の痛みが一時に押し寄せて来た。葉子は思わず気を失いそうになって声をあげながら、足を縮めてしまった。けれども一生懸命だった。もう死んだあとにはなんにも残しておきたくない。なんにもいわないで死のう。そういう気持ちばかりが激しく働いていた。

「焼いて」

悶絶もんぜつするような苦しみの中から、葉子はただ一言ひとことこれだけ

を夢中になつて叫んだ。つやは医員に促されているらしかったが、やがて一台の蠟燭ろうそくを葉子の身近に運んで来て、葉子の見ている前でそれを焼き始めた。めらめらと紫色の焰ほのおが立ち上がるのを葉子は確かに見た。

それを見ると葉子は心からがっかりしてしまった。これで自分の一生はなんにもなくなつたと思つた。もういい……誤解ごかいされたままで、女王は今死んで行く……そう思うとさすがに一抹いちまつの哀愁がしみじみと胸をこそいで通つた。葉子は涙を感じた。しかし涙は流れて出ないで、目の中が火のように熱くなつたばかりだつ

た。

またもひどい疼痛とうつうが襲い始めた、葉子は神の締め木ぎにかけられて、自分のからだが見る見るやせて行くのを自分ながら感じた。人々が薄気味わるげに見守っているのにも気がついた。

それでもとうとうその夜も明け離れた。

葉子は精せいも根こんも尽き果てようとしているのを感じた。身を切るような痛みさえが時々は遠い事のように感じられ出したのを知った。もう仕残していた事はなかったかと働きの鈍った頭を懸命に働かして考えてみた。その時ふと定子の事が頭に浮かんだ。あの紙を焼いてしまつては木部と定子とがあう機会はないかもしれない。だれかに定子を頼んで……葉子はあわてふためきながらその

人を考えた。

内田……：そうだ内田に頼もう。葉子はその時不思議ななつかしさをもつて内田の生しょうがい涯がいを思いやった。あの偏頗へんぱで頑固がんこで意地いじっぱりな内田の心の奥の奥に小さく潜んでいる澄みとおつた魂が始めて見えるような心持ちがした。

葉子はずつやに古藤を呼び寄せるように命じた。古藤の兵營にいるのはつやも知っているはずだ。古藤から内田にいつてもらつたら内田が来てくれないはずはあるまい、内田は古藤を愛しているから。

それから一時間苦しみ続けた後に、古藤の例の軍服姿は葉子の病室に現われた。葉子の依頼をようやく飲みこむと、古藤はいち

ずな顔に思い入った表情をたたえて、急いで座を立った。

葉子はだれにとも何にともなく息気いきを引き取る前に内田の来るのを祈った。

しかし小石川こいしかわに住んでいる内田はなかなかやって来る様子も見せなかつた。

「痛い痛い痛い……痛い」

葉子が前後を忘れわれを忘れて、魂をしぼり出すようにこううめく悲しげな叫び声は、大雨のあとの晴れやかな夏の朝の空気をかき乱して、惨いたましく聞こえ続けた。

(後編 了)



# 青空文庫情報

底本：「或る女 後編」岩波文庫、岩波書店

1950（昭和25）年9月5日第1刷発行

1968（昭和43）年8月16日第23刷改版発行

1998（平成10）年11月16日第37刷発行

入力：真先芳秋

校正：地田尚

2000年3月1日公開

2013年1月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 或る女

(後編)

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫  
著者 有島武郎  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>